

木綿以前の事

柳田国男

青空文庫

自序

女と俳諧はいかい、この二つは何の関係も無いもののように、今まで
は考えられておりました。しかし古くから日本に伝わっている文
学の中で、是これほど自由にまたさまざまの女性を、観察し描写し且
つ同情したものは他にありません。女を問題とせぬ物語というも
のは昔も今も、捜して見出すほどしか無いといわれておりますが、
それはみな一流の佳人かじんと才子、または少なくとも選拔せられた或
る男女の仲らいを叙のべたものであります。これに反して俳諧は、

なんでもない只ただの人、極度に平凡に生きている家刀自いえとじ、もつと進すすんでは乞食こじき、盗人ぬすつとの妻までを、俳諧であるが故に考えてみようとしていたのであります。歴史には尼將軍あましやうぐん、淀の方よどかたという類の婦人が、稀まれまれ々には出て働いておりまして、国の幸福がこれによつて左右せられたこともありますが、こういう人たちをわが仲間のうちと考えて、歴史に興味を抱くようになった女性の、少なかったのはまことに已やむを得ません。振り回ふりかえつて後姿を眺めようとするような心持が、女と歴史とのすれちがいには起こらなかつたのであります。有りとあらゆる前代の人の身の上は、小説の中にすらも皆は伝わっておりません。それを俳諧だけが残りなく、見渡し採とり上げて咏えい歎たんしようとしていたのであります。女は通

例自分たちの事を噂せられるのを、知らずに過ぎるといふことはないものですが、奇妙に俳諧だけは冷淡視していました。その原因は御承知のごとく、俳諧というものが連歌れんがの法式を受け継いで、初めの表おもての六句ではなるべく女性を問題とせず、特に恋愛は取扱わぬことにしています。そうして今日俳諧として鑑賞せられていゝるのが、そのまた第一の句だけであつたからであります。店先にはまじめくさつた年輩の男たちばかり出入でいりしているのを見て、これは女などには用の無いところと、奥には何があるのかを覗のぞいて見ようとせず、素通りした人の多かつたのも無理はありませんが、実はその暖簾のれんの陰にこそ、紅紫こうしとりどりの女の歴史が、画かれてあつたのであります。歴史にこの無数無名の二千年間の

母や姉妹が、黙って参与していたことを信ずる者は、これを説くためにも俳諧を引用しなければなりません。そうして私がこの意外なる知識を掲げて、人を新たなる好奇心へ誘いこむ計略も、白状をすればまた俳諧からこれを学びました。

『七部集』は三十何年来の私の愛読書であります。これを道案内に頼んでこの時代の俳諧の、近頃活字になったものも追々に読んでみました。その折々の心覚えを書き留めておいたのを、近頃取出して並べて見ますと、大部分は女性の問題であつたことが、自分にも興味を感じられます。それで二三の関係ある文章を取添えて、一冊の本にすることにしたのであります。大抵は人に語りまたは何かの集まりに話をしたものてびかの手控えのままなので、聴手の

種類や年齢に応じて、表現の形が少しずつかわり、文章も大分不揃いであります。それがこの書を「女性読本」と題しなかつた一つの理由であります。

或いは男のくせにという批判を、誰かから受けそうな気もしますが、実は私には女の子が四人あり、孫も四人あつて四人とも女です。彼らとともに、またはその立場から、次の時代を考えてみなければならぬ必要が、前にもあり今もしばしばあるのであります。是がこれもしも一身一家にしか用の無い問題であるならば、そういう研究は学問ということができぬのですが、幸いなことには私たちの境遇は、かなり多くの同時代人を代表しているらしいのであります。此方こちらで望ましいことが彼方あちらでは害になり、一方のため

には智慧ちえであり啓発であつても、他の一方では疑い惑まどう人々を、誤りに導くかも知れぬというような懸念けねんは、お互いの足元を比べ合わせてみれば、まず少しも無いと信じられるのであります。こういう経験こそは頷わかたなければなりません。それ故に私たちは、自分自分の疑惑から出発する研究を、些すこしも手前勝手とは考えておらぬのみか、むしろ手前には何の用も無いことを、人だけに説いて聴かせようとする職業を軽蔑しているのであります。現在の日本に自国の学問が無ければならぬということを、私などはこういう風に解しております。俳諧に残っているのは小さな人生かも知れませんが、とにかく今までは顧みられないものであります。事は過去に属しつつも、依然として新しい知識であります。そう

してまた現在の疑惑の種子たねであります。是からの日本に活いきて行こうとする人々に、おふるでないものをさし上げたいと、私だけは思っているのであります。

昭和十四年四月

木綿以前の事

一

『七部集』の附つけあい合あひの中には、木綿もめんの風情ふぜいを句くにしたものが三方
 処ところある。それから木綿とは言いつてないが、次の『炭すみ俵だわら』の一
 節せつもやはりそれだろうと私は思おもっている。

分ぶんにならるるよめ姫よめの仕し合あわせ

はんなりと細工さいくに染べまる紅べにうこん

利り牛ぎゆう

桃とう隣りん

鍮持ちばかり戻る夕月ゆうづき

野坡やば

まことに艶麗な句柄くがらである。近いうちに分家をするはずの二番息子の処むすこところへ、初々ういういしい花嫁さんが来た。紅をぼかしたうこん染めの、袷あわせか何かをきようは着ているというので、もう日数も経たつているらしいから、これは不断着ふだんぎの新しい木綿着物であろう。次の附句つけくは是これを例の俳諧はいかいに変化させて、晴れた或る日の入日いりひの頃に、月も出ていて空がまだ赤く、向こうから来る鍮やりと鍮持ちとが、その空を背景にくつきりと浮き出したような場面を描いて、「細工に染まる紅うこん」を受けてみたのである。またこれとは正に反対に、同じ恋の句でも寂しい扱い方をしたものが、『比佐古ひさご』の亀かめの甲の章にはある。

薄曇る日はどんみりと霜をれて

おとくに
乙州

鉢いひ習ふ声の出かぬる

ちんせき
珍碩

染めてうき木綿裕のねずみ色

りとう
里東

撰りあまされて寒き明ほの

たんし
探志

この一聯の前の二句は、初心の新発意が冬の日に町に出て托

鉢くはつをするのに、まだ馴なれないので「はちく」の声がい切つ

て出ない。何か仔細しさいの有りそうな、もとは良家の青年らしく、折せ

角染つかくめた木綿の初はつあわせ裕ねずみいろを、色もあろうに鼠ねずみいろ色ねずみいろに染めたと、

若い身空みそらで仏門に入ったあじきなさを歎たんじていると、後あとの附句で

はすぐにこれをあの時代の、歌比丘尼うたびくにの身すぎの哀れさに引移し

たのである。木綿が我邦わがくにに行われ始めてから、もう大分の年月

を経てへいるのだが、それでもまだ芭蕉翁ばしやうの元禄の初めには、江戸の人までが木綿といえ、すぐにこのような優雅な境涯を、聯れ想んそうする習わしであつたのである。

二

木綿が我々の生活に与えた影響が、毛糸のスエーターやその一つ前のいわゆるメリンスなどよりも、遥はるかに偉大なものであつたことはよく想像することができる。現代はもう衣類の変化が無限であつて、とくに一つの品目に拘泥する必要もなく、次から次へ好みを移して行くのが普通であるが、単純なる昔の日本人は、木

綿を用いぬとすれば麻^{あさぬの}布より他に、肌につけるものは持ち合
せていかなかったのである。木綿の若い人たちに好ましかつた点は、
新たに流行して来たものというほかに、なお少なくとも二つはあ
つた。第一には肌ざわり、野山に働く男女にとっては、絹は物^{ものど}
遠^おく且つあまりにも滑らかでややつめたい。柔かさと摩擦の快
さは、むしろ木綿の方が優^{まさ}っていた。第二には色々の染めが容易
なこと、是は今までは絹階級の特典かと思つていたのに、木綿も
我々の好み次第に、どんな派手な色模様にも染まつた。そうし
ていよいよ棉^{わただね}種の第二回の輸入が、十分に普及の効を奏したと
なると、作業はかえつて麻よりも遥かに簡単で、僅^{わず}かの変更をも
つてこれを家々の手機^{てばた}で織り出すことができた。そのために政府

が欲すると否とに頓とんちやく着なく、伊勢いせでも大和やまと・河内かわちでも、瀬戸
 内海の沿岸でも、広々とした平地が棉田になり、棉の実の桃が吹
 く頃には、急に月夜が美しくなったような気がした。麻糸に関係
 ある二千年来の色々の家具が不用になって、後のちにはその名前まで
 が忘れられ、そうして村里には染屋そめやが増加し、家々には縞しまちよう帳
 と名づけて、競うて珍しい縞しまがら柄の見本を集め、機はたに携わる人た
 ちの趣味と技芸とが、僅かな間に著しく進んで来たのだが、しか
 もその縞木綿の発達する以前に、無地を色々に染めて悦よろこんで着た
 時代が、こうしてやや久しくつづいていたらしいのである。

色ばかりかこれを着る人の姿も、全体に著しく変つたことと思われる。木綿の衣服が作り出す女たちの輪廓は、絹とも麻ともまたちがった特徴があつた。そのうえに袷かさの重ね着が追々と無くなつて、中綿がたつぷりと入れられるようになれば、また別べつ様の肩腰の丸味ができてくる。全体に伸び縮みが自由になり、身のこなしが以前よりは明らかに外に現われた。ただ夏ばかりは単衣ひとえの糊のりを強くし、或いは打盤うちばんで打りならして、僅かに昔の麻の着物のこの心持ちを遺していたのだが、それもこの頃は次第におろそかになつて行くようである。我々の保守主義などは、いわば只ただ五十年前の趣味の模倣にすぎなかつた。そんな事をしていく間に、以

前の麻のすくな突張った外線はことごとく消えてなくなり、いわゆる撫なで肩と柳やなぎ腰こしとが、今では至つて普通のものになつてしまつたのである。それよりも更に隠れた変動が、我々の内側にも起こつてゐる。すなわち軽くふくよかなる衣料の快い圧迫は、常人の肌膚はだを多感にした。胸毛や背の毛の発育を不必要ならしめ、身と衣類との親しみを大きくした。すなわち我々には裸らぎ形の不安が強くなつた。一方には今まで眼で見るだけのものと思つてゐた紅や緑や紫が、天然から近よつて来て各人の身に属するものとなつた。心の動きはすぐに形にあらわれて、歌うても泣いても人は昔より一段と美しくなつた。つまりは木綿の採用によつて、生活の味わいが知らず知らずの間に濃こまかになつて来たことは、かつ

て荒袴あらたえを着ていた我々にも、毛皮を被かぶっていた西洋の人たちにも、一様であつたのである。

ただし日本では今一つ、同じ変化を助け促した瀬戸物せとものというものの力があつた。白木しらぎの椀わんはひずみゆがみ、使い初めた日からもう汚れていて、水で滌すすぐのも気休めにすぎなかつた。小家の侘わびしい物の香かも、源たどを辿ればこの木の御器ごきのなげきであつた。その中へ米ならば二合ごうか三合ほどの価あたいをもつて、白くして静かなる光あつる物が入つて来た。前には宗教の領分うちに属していた真実の円相を、茶碗というものによつて朝夕手の裡うちに取つて見ることができたのである。是これが平民の文化に貢献せずして止やむ道理はない。昔の貴人公子が佩はいぎよく玉たまの音ねを楽たのんだように、かちりと前歯に当る陶器

の幽かすかな響には、鶴や若松を画いた美しい塗ぬり 盃さかずき の飲よろこびも、忘れしめるものがあつた。それが貧しい煤すすけた家の奥までも、ほとんど何の代償も無しに、容易に配給せられる新たな幸福となつたのも時勢であつて、この点においては木綿のために麻布を見棄みすてたよりも、もつと無条件な利益を我々は得ている。しかも是が何なんびと人の恩恵でもなかつたが故に、我々はもうその嬉しさを記憶していない。偶然とは言いなながらも是ほど確乎かっこたる基礎のある今日の新文明を、或いは提てい督とくペルリが提ひげつてでも来たもののように、考える人さえあつたのである。

四

木綿の威力の抵抗し難^{がた}かつたことは、或る意味においては薩^{さつ}摩^ま芋^{いも}の恩沢とよく似ている。この藪^{いも}なかりせば国内の食物は夙^{つと}に尽きて、今のごとく人口の充^みち溢^{あふ}れる前に、外へ出て生活のたつきを求めずにはいられなかつたろう。必要な農民を勇敢にし、海で死に或いは海で栄える者が、今よりも遥かに多かつたはずである。しかし藪^{いも}が来た以上は作って食い、食えば一旦は満腹して是でも住めると思い、貧の辛抱がしやすくなって、結局子孫の艱^か難^{なん}を長引かせたとも見られるが、さればとて遠い未来の全体の幸不幸を勘定して、この目前に甘く且つ柔かなる食物の誘惑^{しりぞ}を却けることは、人が神であつてもできないことである。木綿の幸福

には、是ほど大きな割引は無かつたが、仮に有つたとしてもなお我々は悦よろこんでこれに就ついたであらう。それがまた個々別々の生存をもつ者の、至つて自然なる選択である。久しい年月を隔てて後に、或いは忍び難い悪結果を見いだしたとしても、これに由よつて祖先の軽慮は責めることはできぬ。ただ彼らの経験によつて学び得る一事は、かように色々の偶然に支配せらるる人間世界では、進歩の途が常みちに善に向かつているものと、安心してはおられぬと
いうことである。万人の滔とうとう々として赴おもむく所、何物も遮さえぎり得ぬよ
うな力強い流行でも、木が成長し水が流れて下るように、すらすらと現われた国の変化でも、静かに考えてみると損もあり得もある。その損を気づかぬ故に後悔せず、悔いても詮せんがないからそつ

としておくと、その糸筋いとすじの長い端はしは、すなわち目前の現実であつて、やっぱり我々の身に纏まつわつて来る。どうしても独ひとりの力では始末のできぬように、この世の中はなつているのである。

五

茶碗や皿さらしぼち小鉢が暗い台所に光を与え、清潔が白色であることを教えた功労は大きいが、それでも一方には、物の容易に碎けることを学ばしめた難は有る。木綿の罪責に至つては或いはそれよりもいささか重かつた。第一に彼はこの世の塵を多くしている。おかしいことには木綿以前の日本人が、何かと言うと人世の塵の苦

しみを訴え、遁のがれて嬉しいという多くの歌を残しているのと反対に、そんな泣なきごと言はもう流行しなくなつてから、かえつて怖おそろしく塵が我々を攻め出した。震災がこの大都をバラツクにした以前から、形ばかりの大通りは只ただ吹き通しの用を勤めるのみで、これを薬研やげんにして轍わだちが土と馬糞とを粉に砕く。外の埃ほこりはこれのみでも十分であるのに、家の中ではさらに綿密すきまに、隙間隙間を木綿の塵が占領し、掃き出せばやがてよその友だちと一緒に戻つてくる。雨水が洗い流して海川へ送ると言つても、日々積るものの幾分の一にすぎぬであろう。いかに馴なれてしまつても是が身や心を累わづらわさぬはずはない。越前の西ノ谷は男たちは遠くの鉾山いに往つてしまい、女は徒つれづれ然のあまりに若い同土さそ誘い合つて、大阪の紡績工

場に出て働く習いであつたが、もう十年も昔に自分が通つて見た頃は、ほとんど三戸に一人ぐらい、蒼あおざめた娘が歸つて来てぶらぶらしていた。塵は直接に害をせぬまでも、肺を弱らせて病気にかか罹りやすくさせることは疑いが無い。しかも山村から工場へというように、変化が急なればこそ心づくが、こうして只いては五百年千年の昔から、この世は今の通りに埃だらけであつたものと考えて、辛しんぼう抱する者も多いことであろう。毛布やモスリンの新しい塵が加わつても、やはり普通りに畳たたみを敷きつめて、その上で綿ぼろや襪はきぎれをばたばたとさせている。

六

しかし埃はもう今になんとか処分せずにはおられぬことになる
と思う。それよりも一層始末の悪いことは、熱の放散の障しょうがい碍
である。是は必ずしももう馴なれてしまったとも言われぬのは、近
い頃までも夏だけはなお麻を用い、木綿といつても多くは太物
であり、織目おりめも手織で締まらなかつたから、まだ外気との交通が
容易であつたが、これから後はどうなつて行くであらうか。汗は
元来乾いて涼しさを与えるために、出るようなくみになつてい
るものに相違ない。湿気が多い島国の暑中は、裸でいてすらも蒸
発はむつかしいのに、目の細かい綾織あやおりなどでびたりと体を包み、
水分を含ませておく風習などを、どうして我々が真ま似ねる氣になつ

たのであろうか。これから南の方へ追々と出て行くと、いずれの島でも日本のような夏で、乾いた北歐の大陸に成長した人々は、大抵は閉口して働けなくなる。その間にあって我々ばかり、以前ならばどうにか活かっぱつ澆せうな生活を続け得たものだが、今のようないの子の服装が癖になつてしまつては、折せつかく角永い年月ゆかしがつていた常とこなつ夏の国へ行きながら、常とこしえの夏まけをしなければならぬ結果を見るかも知らぬ。

七

政府大臣が推奨する質実剛健の気風とかは、いかなる修養をも

つて得らるるものか知らぬが、もしそれが条件なしに、木綿以前の日本人の生活に立ち還かえることを意味するならば、その説は少なくともこの久しい歴史を忘れてゐる。東京の町などでは三十年余り前に、裸体はもとよりはだしまでも禁制した。しかもその当座は草鞋わづしがなお用いられて、禁令は単に踏抜きふみぬきを予防するにすぎなかつたが、もう今日ではことごとくゴム靴だ。そうでなければゴム底の足袋たびをはいている。足袋は全国に数十の工場が立つて、年に何千万足を作つて売つてゐる。にえかえる水田の中に膝ひざ頭がしらまで入つて、田の草を取る足がだんだんに減少する。たまたま犬の一枚革いちまいがわを背に引かけて車を輓ひき、或いは越後えちごからくる菓売の娘のごとく、腰裳こしもを高くかかけて都大路みやこおおじを闊歩かつぽする者があつて

も、是を前後左右から打眺めて、讚歎する者の無いかぎりは、畢ひつきよう
竟なごりは過ぎ去った世の珍しい名残なごりというに止とどまっている。次の
時代の幸福なる新風潮のためには、やはり国民の心理に基づいて、
別に新しい考え方をして見ねばならぬ。もつと我々に相応した生
活の仕方が、まだ発見せられずに残っているように、思っている
者は私たちばかりであろうか。

何を着ていたか

一

公家・武家の生活はしばしば政治の表面に顕われ、歴史として後世に伝わっていることが多いが、それでもまだ幾つもの想像し難い部分がある。多数無名の我々の先祖の、当時としては最も有りふれた毎日の慣習が、ゆかしいとは思ってもほとんどその一端

をも知ることができないのは誠に致し方がない。そういう中でも衣と住とは、偶然に絵巻画本の隅すみに写生かと思うようなものが見えるが、筆つきが簡素であるために材料までは確かめることがむつかしく、ただまず形の著しく今日と異なっていることに驚くのみである。百年は必ずしも長い月日ではないが、文化文政の頃の風俗画などの町まち風ふうを見ても、もう今日との著しい違いが見られる。まして職人づく尽しの歌うた合あわせなどの絵になると、よくも是これだけ変った外形の中に、古今を一貫した考え方や物の見方を、保ちつづけたものだと感じずにはおられない。物を心で支配する力が、もとは今日よりも強かつたのであるか。ただしはまた前代の選択、もしくは自然に供与せられたものが、測はからずも特に幸いなもので

あつたのか。それを明らかにするためには形や製式よりも、どうかして資料の変化を知らなければならぬと思つている。住居は食物と同じに古くから資料は同一で、変化したのはただその利用法だけのように考えられているが、是これとてもその取合わせは随分とちがうらしい。殊に衣服の方では我々の眼前でも、次々に物が新しくなつているのである。十代十五代前の我々の同胞が、何を着て働きましたは休息していたかということとは、まだわからぬというのみで、今あるものでなかつたことは何なんびと人も疑つていない。是を果して知る途みちがまつたく無いかどうか。そういうことを自分は考へている。勿もちろん論直接に是を書いて伝えようとしたものは少ない。しかし日本は地方の事情は区まちまち々で、或る土地で夙つとに改めて

しまったものを、まだ他の土地では暫く残していたという例が幸いに多い。それを集めてぽつぽつと整理してみたら、いわゆる改良の順序はやや明らかになり、それをまた幽かに伝わっている上世の記録と比較し照し合わせて、やや確かめることができはしないだろうか。こういった方法を少しずつ勧説してみたいと私は思っている。是は衣料がこの頃のように、短い期間で變つて行く場合にはできない仕事だが、幸いなことには前代の変遷は遅々としており、国人にもまた親々の仕来りを、守ろうという念がずつと強かった。そのためにいわゆる開けない世の姿が、なお片端には残っていた。それが今ちようど消え尽そうとしているのである。

二

衣服の嗜好しこうはこの二三十年の間に、我々の目前においても著しく変つた。普通人の生活で言えば、手織物と称する不細工ぶさいくでしかも丈夫な織物は、都会ではほとんど影を斂おさめて、いわゆる紡績の糸で織つたつやのある木綿ばかりが、田舎いなかへまでも行き渡つてゐる。是は国内の各地方に棉の栽培が衰えたために、糸紡ぎいとつむや綿わ繰たくりが、もう尋常農家の手業でなくなつた結果である。

しかもこのもめん綿というものそれ自身、我邦における歴史は短いのである。千年の昔、崑崙こんろん崙人こんろんの船が三河みかわの海岸に漂着した

時に、その船の中には棉の種子があつたということが、歴史の上には見えているけれども、その時の棉はまだ広く全国には普及しなかつたようで、実際に各地で栽培が始まつたのは三百年、南蛮との交通よりも早いとは考えられない。そうしてこの頃すでに日本の人口は二千万近くもあつたらしいのである。その中の一少部分は資力があつた、真綿まわたを入れた絹の小袖こそでも着たことであろうが、この絹もまた古くから我邦にあつたとはいいいながら、その生産高は今日の輸出時代に比べくらると知れたもので、多分は百分の一にも届かなかつたと思う。現に江戸初期の長崎貿易は、主として支那シナからの絹糸の買入れを目あてとしていたくらいで、かの土井大炊頭かみの糸屑いとくずの逸話えいごが、読本よみほんにも載のつていて女たちもよく知

っている。その上にまた絹のいずれの点から見ても、決して働く人々の着物の料りようとするには適しなかつたのである。

然しからば多くの日本人は何を着たかといえ、勿論もちろん主たる材料

は麻であつた。麻は明治の初年までは、それでもまだ広く栽うえられていた。その作付さくづけ反別たんべつが追々と縮小の一途を辿たどっていたこ

とを、世人は木綿ほどに注意していなかつたのである。都会の住民は夏も木綿の単衣を着て、年中まったく麻を用いない者が増加するのであるが、それでも地方には未だ相応にこれを着ていたのだつたということが、気をつけているとやや判わかつてくる。

先頃さきごろ熊本県の九州製紙会社を見に行つたときに、私は紙の原料の供給地を尋ね試みたことがある。藁わらだけは勿論この附近の農

村一帯から集めてくるが、古檻褌ふるぼろの多量は大阪を經由し、殊に古ふる麻布あさぬのを主として東北の寒い地方から、仰あおいでいるというのが意外であった。奥羽でこれほどまで麻布の消費があるとは思っていなかつたのであるが、だんだん聴いてみるとこの方面では、一般に冬でも麻の着物を着ていたのである。寒国には木綿は作れないから、一方には多量の木綿もめん古着ふるぎを関西から輸入して、不断ふだん着ぎにも用いているが、冬はかえつてその上へ麻の半てんを引掛ひっかける風ふうがあるということ、私は九州に行つて学んだのである。麻布は肌はだ着ぎに冷たく当つて、防寒の用には適せぬように思われるが、細かい雪の降る土地では、水気の浸しみやすい木綿を着るのはなお不便だから、いわば我々の雨外套のかわりに、麻布を着て雪を払つ

ているのであった。

三

けれども近頃は次第にその麻布が少なくなり、したがって得にくくまた高くなつたといふことである。そのかわりに木綿布の古^{ふる}切れを何枚も合^あわせて、それを雑^{ぞうきん}巾よりも細かく堅く刺^さして、麻布のかわりに上^{うわ}覆^{おほ}いに着ていると見えて、私も羽^{うご}後の由^{ゆり}利郡の山村をあるいた時に、小学校の生徒がみなこの木綿のアツシを着ているのを見たことがある。もとはこの上着の原料が、着古した麻布を刺したものであつたのであろう。

我々は麻布といえいったん一反二十円もするような上布じょうふのことをしか思い浮かべないが、貢物みつぎものや商品になつたのはそういう上布であつても、東北などの冬の不断着ふだんぎは始めから、そのような華き奢やしやなものではなかつた。精巧な少量のものは専ら売るために織り、めいめいの着ているのは太い重い、蚊帳かやだの畳へりの縁へりだのに使うのと近い、至つて頑丈がんじょうなもので、是これが普通こつぱんにいうヌノであつた。木綿は織つたものもモメン、糸いとも此方こちうはカナと謂いつて、是をイトとは謂いわなかつた。つまり麻だけが普通の布でありまた糸であつたのである。かの『万葉』の、

あさ衣ころもきればなつかし紀きの国くにの妹いもせの山やまに麻あしまく吾妹わがも

という歌なども、旅の空にいる人がこの布を着るにつけて、故郷

の山里で麻を作っている家の者を想い出したという感動が咏歎せられたもので、一方には麻の工作が一般に、播種はしゆの時からすでに女の労働であったことを意味するとともに、麻衣という所から推測してまだこの以外に、別に何らかの衣服原料が存在していたということをも、この一首の歌からも考えさせられるのである。

かつて土佐とさから阿波あわへの山村を旅行していた際に、私はこの地方で麩麻布あらかさぬのの着用が東国よりも遥かに盛んであることに注意して、人にこの茶色に染めた布を何と謂うかを尋ねてみたが、一般に今は是をタフというようであった。肥後ひごの五箇庄ごかのしようと並んで、山中の隠れ里として有名であった阿波あわの祖谷山いやはまなどは、小民の家はみな竹の簀すの子こで、あの頃はまだ夏冬を通して、このタフを着

て住んでいるという話であつた。タフは「太布」と書く人もあるが、実は今日まだ正確に宛^あつべき漢字が知られていない。だが自分だけはおそらく^{たくぶすま}栲^{たぐすま} 袷^あの栲であろうと思つている。タクは昔の言葉では麻でない別の衣料であつた。植物の皮の繊維から作ることは麻と同じでも、栲は他の一つの木の種類であつたと思う。弘化^{こうか}年間に出来た『駿河^{するが}国新風土記』には、府中すなわち今の静岡市の物産の中に栲布というものがあつて、是は「安倍^{あべ}山中にて織^こ出し、楮^{こうぞ}の皮を以て糸^{もつ}として織るものなり、又藤^{ふじ}を以て織るものもあり」と書いてある。右の栲布が果してタクと訓^よんだか、または爰^{こゝ}でもタフと謂つていたかは確かでないが、少なくとも木綿および麻の以外に、繊維をもつて衣服を織る例が、この頃この辺

にもあつたことだけは是で明らかである。

四

藤ふじづる蔓の皮で布を織つて常服とすることは、山村一般の生活技術であつた。その二三の例を挙げるならば、同じ駿河国の志太郡しだ東川根村大字梅地あたりでは、藤布を織つて木綿古着の上に着るといふことが、『駿河志料しりょう』にも見えている。その外安倍川あべかわや藁科川わらしながわの上流の村々では、一般にこの藤布が用いられていた。また大和やまとの十津川とつがわでも、麻を作ることが困難で、藤で織つたあらしい布を着ていたと、吉田桃樹とうじゆの天明八年の紀行、『槃はんゆ

遊余録』には見えている。山口県の玖珂郡秋中村大字秋掛な
 どでも、「藤を打碎いて糸の如く紡ぎ布に織り、股引等に相
 用ゐ候事」と、『周防風土記』には記している。また『伯
 耆志』には西伯郡東長田村その他の山村の産物に、藤布とい
 うのを掲げている。文化四年に成った『北遊記』には、今の福島
 県の平と湯本との中間でも、藤布を織つて産業にしている者がい
 たとある。是は衣服の原料としてではなく、おもに畳の縁にする
 ために供給していたものであった。春中の女の仕事で、その製法
 は藤の皮を剥ぎ、水に浸すこと四五日の後、堅木の灰を加えて暫
 く煮て、川に出して晒し且つ扱くことは、麻の通りであるとも述
 べてある。

フヂは元來葛かずらるい類全体の総称であつて、必ずしも紫の花を垂れて咲く藤一種には限つていなかつた。人も知るごとく河内の葛井寺はフヂキデラと読んでゐる。昔の藤布の中には紫の藤でなく、たとえば貴人の喪服もふくにも用いられたという藤衣ふじごろもなどは、或いはまた別種の葛の纖維をもつて織つたものだつたかも知れない。

『北越雜記』を見ると、北蒲原郡きたかんばらの加地庄かじのしょうの辺で藤布というのはすべてクス、すなわち秋になつて深紅しんくの花を開く葛くずの皮で製したもので、主として袴はかまかみしもなどの用に製して販売してゐた。蹴鞠けまりの遊びの時にはく袴は必ずこの葛布くすふの袴で、その供給地として昔から有名だつたのは、遠州の掛川かけがわ地方であつた。今でもから紙かみ、障子しょうじや屏風びょうぶの裝飾には、是を使ったものが幾らも見ら

れるけれども、衣服の材料としては次第に用いなくなつて来たのである。

五

自分は植物の事には至つて疎うといが、シナという木の皮でもまた布を作ることがあるのを知っている。シナは東北では普通にマダの木と謂いひ、是で織つた粗布をマダヌノと呼んでいる。『蝦夷産業図説』には、アイヌがオヒヨウまたはアツという木の皮で、アツトシというものを作つて着るのは、奥州の民家でこのシナの木の皮を採つてシナタフを織り、農業その他の力わざをするときに

着用するのと同じく、彼はすなわちこの風を伝えたものだろうと謂っている。信州の山村で穀物を入れる袋に、葛布のような太く麁い布を織つて、棕櫚のような赤黒い色をした袋を製して用いているのは、原料はこのシナの木の皮であり、他国には例の無いことだと、『舳艫訓』という書に記したのはまだ心もとないが、米を入れる袋は他の土地でもシナ袋と謂う者があり、名の起こりはその材料にする木の名からで、『延喜式』の貢物中に名に見える信濃布なども、やはりこの布であつたろうという同書の説は傾聴する値がある。「楯」とも「級」とも漢字には書いているが、シナは要するにこの樹皮が強韌で且つしなやかであるがための名で、信濃という国名もまた是に基づいているという説も

古くからあった。その信州ではもはや是を衣服には供しなかつたようにいうが、近年まで木曾きその福島に問屋があつて、盛んに関西地方に送り出していたタフなるものも、たとえ今日ではいわゆる木曾の麻衣だけに限られているとしても、少なくとも名の起りはかつてそれ以外の植物繊維を織つたものがあつたため、是もまた袋や風呂敷ふろしき類ばかりに限られていなかつた時代があることを、推測せしむるに足るかと思う。

現に同じ地方でイラというものの糸を、衣服の材料に供していることが、文化年間に出た『信濃奇勝録』には述べられている。イラは「いぬからむし」、「蓐麻」とも書いて、山野に野生する植物であつた。この頃人のよく言うラミーとは同属である。秋の

彼岸の後に刈り取つて、麻と同じように皮を剥ぎ糸に引くので、木曾では秋しゅうぶん分前には山の神の祟たたりがあるからと謂つて採りに行かなかつた。同じ草が木曾の山村のみならず、信州の北隅えちごぎ越後境かいの、非常な山奥の秋山という村でも、もとはやはり唯一の衣料であつた。秋山ではイラというかわりにオ口と謂つていて、主として袖そでなし半てんのようなものをこのオ口で拵こしらえ、冬は古着の上に、夏は裸にもこれを着たということである。『北越ほくえつせつぷ雪譜』

の秋山の条を見ると、この山村には夜具を持つてゐる家はただの二軒であつた。その夜具というのもオ口をもつて織つた布で、綿にもオ口の屑くずを入れ、しかも客人にばかり出して着せる。家の人々は藁わらの吠かますの中に入つて炉ろの傍かたわらに寝るのだと謂つて、ちやんとそ

の様子が絵にかいて載せてある。

六

タフが決して麻布だけの名でないことは、以上の事実だけでも
 ほぼ明らかであるが、まだ別方面の証拠も幾つかある。阿波の三
 好・美馬・海部等の諸郡では、山村到る処にタフを生産する。是
 は穀かじの木の皮または葛や藤の皮を織つた麁布あらぬのであると、『阿波
 志』という書には記している。

あらたへの藤江の浦にいさりする海人あまとか見らん旅行く我
 を

という古い歌があるのを見れば、上古の言葉で「和布」「麁布」と書いたニギタへ・アラタへの麁布も、フヂで作ったものだつたということが判る。わか或いはまた「たくぶすま栲 衾しらぎ新羅の国」なども謂つて、白いというまくら枕 詞にこのタクの衾を用いていたのを見ると、是はおそらくは染めずに着たもので、今日謂うところの生麻きあさなどと同じく、繊維の性質がもと染物とするには適しなかつたものと思われる。

或いはまた「神代卷」のすせりひめのみこと須勢理姫命の御歌にも、「むしぶすにこま柔やが下に、たくぶすまさやぐが下に」ともあつて、ムシの衾が肌に柔かに当る寝具であるに對して、このタクの衾の方はがさがさとした、今で言えば糊のりのこわい木綿夜具、またはさらに以上

のものであつたらしい。しかしこれと比べて柔かいと言われたムシブスマとても、蓐いらくさ麻で製したとすれば相応にこわ張つたものであつた。それよりももう一層粗いというのだから、いかに上古の上じょうろう 藤とうの生活が、柔弱ということの反対であつたかもわかる。是でこそ我々の遠祖の肌膚はだが丈夫で、風邪かぜなどいうものを知らなかつた原因も突き止められるのである。

七

昔の人が寒暑につけて、天然に対する抵抗力の強かつたことは、とうてい今こんじん人の想像の及ばぬところであるから、素肌すはだに麻を着

て厳冬を過したとしても不思議はないが、これ以外に多分は獣皮
 なども取り添えられたことと思う。また麻衣や藤衣を何枚も重ね
 て着たでもあろう。いわゆる布子ぬのことしては信州秋山の例のように、
 これらの繊維の屑くずを綿のようにほごして中に入れてろうと思うこ
 とは、今でも麻の屑をラグソと謂つて、それに使つているのから
 も想像せられる。秋田県などでユブシマすなわち夜よぶすま衾あしというも
 のが稀にまだ残つているが、是には表を藤布として、中の綿を麻
 の屑にしたものがあつた。或いは支那シナで閔子びんしけん騫せんが、継母まははに憎
 まれて着せられたというような、葦あしの穂綿ほわたなども使われていたろ
 うかと思うが、少なくとも木綿の綿はまるで無く、筑紫綿つくしわたとも
 言われる絹の真綿まわたは、常じょうじん人の家では企て望み難いものであつ

た。

藤葛または「いぬからむし」などのほかに、なお衣服の原料であつたかと思われるのは楮こうぞである。『阿波志』にタフの原料として穀かじの皮を用いたというカヂも、今のヒメカウゾか、そうでなくともこの属の一種であつたろうと思う。是は我々の最も注意すべき点で、阿波という国は関東地方に向かつて、穀の木の普及はかを図りたまうと伝えられる天あめの日ひ鷲わし命のみことの本国であつて、現に千葉県あめの安房もその阿波の古代植民地であつたが故に、国の名を同じうするのであるという説があり、また『古語拾遺こことしゆうい』によれば、その天日鷲命が東国経営の際に、穀の木を栽うえられた地方が今の下しも総うさの結城ゆうぎであつたとも言われている。結城のユフは一種麻以

外の纖維料で、それは穀のことだということが古く認められていたのである。楮はカゾともまたカミソとも謂う地方があつて、現在には紙の原料としてのみ知られているが、以前は少なくともその一種に、是を糸に紡いで布に織り用いたものがあつたのである。ユフの使用は今日は神祭に限られ、それも代品ばかりで何が本当のユフだとも知れぬようになってゐるが、我々の祖先の思想としては、神に供えるのは各人常用の必需品の中でも優等なものを選ばなければならぬのであつたから、すなわちまたユフと訓よまれた昔の木綿が、今のモメンの木綿と同様に、衣服の資料であつたこともほぼ明らかなのである。

楮は今日でも林りんぼく木と畠はたさくもつ作物との中間の、いわば半栽培品の

状態にあるが、以前も苑地えんちに栽うえるまでの必要はなくても、やはり自由に採取のできるほど山野に充満してはいなかったために、その生産地は多少これを注意し且つ保護していたらしく思われる。下総の結城を筆頭にして、ユフの産地を意味する地名は、国の東西に分布している。たとえば大分県の別府温泉の西に聳そびえ立った由布岳ゆふだけは、『豊後風土記』ぶんごふどきの逸文にも、ユフの採取地である故にこの名が付いたと記している。今日の村の名または大字おおあざの名に、湯本ゆもと・由ゆノ木き等の非常に多いのも、以前はユフの採取地として保護していた山野が、後に麻の畠作が進むとともに不用になり、開いて普通の村落田園としたことを意味するので、近くは武蔵むさしの一国だけでも、自分はその十数カ所を列挙することができる。しか

も是が東北の方へ行くほど少なくなるのは、やはりまた氣候の制限があつて、はや夙くからフヂやマダやイラ草の類を、是に代用した結果ではないかと考える。

おやまだともきよ

小山田与清まつのやひつきは近代の博学であるが、その著『松屋筆記』の

中には、武蔵みなみたま南多摩郡ゆぎの由木村の地名を解釈して、弓削ゆげ氏の植

民地であつたかと謂つてゐるのは、なお西国の山村にゆのき柚木・ゆや油谷

・柚園等の地名が無数に有ることを気づかなかつた誤りである。

柚園の園はもとは屋敷附属のほじょう圃場のことだが、九州南部ではソ

ンまたはソと謂つて、単なる独立の山やまはた畠をもそう呼んでゐる。

とにかくに是だけは自然のものを採取するのでなく、土地を拓ひらいて

特に穀の木を栽培していた例である。『千載集せんざいしゅう』の神祇部じんぎぶ

に、きゆうじゆ久寿二年のだいじようえ大嘗会の風俗歌に、ゆきがた悠紀方として詠進した歌は、おうみ近江のゆふぞの木綿園を地名として詠じている。是などもまたこの時代以前に、あの地方にもユフを園に作っていた生活があつたことを示すもので、麻が唯一の平民衣料となつたのは、中央部においてもそう古くからのことではないのである。

昔風と当世風

一

この話題はそれ自身がいかにも昔風だ。平凡に話そうとすれば
 幾らでも平凡に話される題目である。聴かぬ前から欠伸あくびをしても
 いいお話である。人間に嫁だしゅうとの姑だとというものの無かつた時代
 から、または御隠居ごいんきよ・若旦那わかだんななどという国語の発生しなかつ

た頃から、既に二つの生活趣味は両々相対立し、互いに相手を許さなかつたのである。先年日本に來られた英国のセイヌ老教授から自分は聴いた。かつて埃エジプト及の古跡発掘において、中期王朝の一書役の手録が出てきた。今からざつと四千年前とかのものである。その一節を訳してみると、こんな意味のことが書いてあつた。曰くこの頃の若い者は才智にまかせて、けいちよう輕なげ 桃よろこの風を悦び、古人の質実剛健なる流儀を、ないがしろにするのは歎なげかわしいことだ云々と、是これと全然同じ事を四千年後の先輩もまだ言っているのである。

日本などにも世道せどうぎようき澆季を説く人は昔からあつた。正法しょうぼうまつ末つれ世せという歎きの声は、数百年間の文芸に繰返されている。『徒つれ

然草^{づれぐさ}』の著者の見た京都は、すでに荒々しく下品な退化であつた。『古今集』の序文にも「今の世の中、色につき、人の心花になりにはけるより云々」と書いてある。『古語拾遺^{こごしゆうい}』の著者などはそれよりまたずっと昔において、既に平安京初期の文化を悪評しているのである。老人が静かに追憶の中に老い去ろうとする際に、殊に周囲の社会生活の変化が目につくというだけのこと、彼らの知っている昔は、取り返すことのできぬ大切なものである故にさらに美しく思われ、たった一つしか無いものである故に一段と貴重に考えられるということとは同情してよいが、変らなかつた世の中というものはかつて無く、新と旧とは常に対立して比較せられるのである。故に今頃またそんな例を陳列して見たところが、

おかしくもないことは知れている。私は忙しい人間だから頼まれてもそういう話はしない。

我々が爰で語り且つ考えてみようとするのは、当世にいわゆる生活改善、すなわち生活方法の計画ある変更にはたしてどのくらいまで新し味があり、またこの時代の尚古趣味、ないしはあらゆる改革に対して不安を抱こうとする階級の批判に拮抗して、はたしてどの程度にまで現代日本の文化を価値づけることができるといふ問題である。是は確かに今日のような集会において、皆さまのような団体の考えてみてもよい題目であり、また新聞に携わっている私らのような者の口から、一度はとくと聴いておかれてもよい話であると思う。

二

いつの世においても、新たに起こった風習に対する反動派の批評は、大体において二種類に別つ^{わか}ことができるようである。その一つは自分らが名づけて三^{さん}省^{せい}録^{ろく}型^{がた}と謂^いおうとするもの、すなわち江戸期に最も有力であつた節儉という社会道徳律に基づいたものである。現在もまだこれを承認する者はなかなか多いが、しかもその尺度はいつの間にか非常に違つてゐる。例えば絹布使用の禁制のごときは、かつては罪として罰せられた時代もあつた。それはまだよいとして、米の消費の制限のごときさえ、或る場合

には法令をもつて強制したことがあつたが、それは最早もはやみな昔の歴史であつて、今日はこれを甘あまなう者がようやく少なくなつた。すなわち知らぬ間にこの規制は、新旧の妥協をもつて改訂しているのである。

第二は一言にして申せば審美的ともいふべきもの、すなわち趣味の低下を慨歎する観察であつて、むしろ前者とは正反対の側に立とうとするものである。この両面からの攻撃はかなり痛くまた強いものであるが、しかも今日の生活改善論者のごときは、かえつて勇敢且つ積極的に、右二種の武器を逆に利用して、昔風の必ず変更せざるべからざる理由を主張しようとするのである。これいわゆる追風おいてに帆ほを懸かけ、流を下るにモーターを使うがごとき

もので、是ではもはや相手方に口をきかせる余地もなく、その功を収むるの易々たるは当然のように思われる。趣味からいっても今の方がいい。経済から見ても此方が有利とすれば、この上に昔風論者の反対する根拠は無いわけだからである。

ところで実際の成績はどうかというと、それが必ずしも理論通りではないのであつた。諸種の考案は競い進み、甲乙流行の変化ばかりが烈しく、都市生活は是がために最も乱雑となつた。例えば衣服一つだけについて見ても、汽車や電車の乗合、その他若干の人の集りに行けば、髪から履物から帯から上衣まで、ほとんど目録を作ることにも不可能なる種類がある。勿論是も面白い世の中といえは言える。いわゆる二重三重生活は我々の単調なる

存在から、退屈という畏ろしい悪魔を追い攘う効力はある。しかしながら少なくともこの無定見は、同朋多数の国民を平和静穩の世界に導いて行く道ではない。全体において今日の生活改善運動は、その志の概して真面目まじめなるにかかわらず、単に物ずきだ、勝手気ままの空想だという、冷酷なる批評を外部から受けている。是はどういうわけであるか。この批評がはたして不当不親切なものであるか否か。まずもって爰こゝにはそれを判決するだけの資格のある者が入用なので、そうして私は深く本日の聴衆に期待するのである。

今もし世のいわゆる有識階級、すなわち智徳の若干に加うるに、新たな考案方法を試みるだけの機会なり資力なりをもつてした人

々が、自分たちの生活を標準として何か目新しい衣食住の模様替もようがえを工夫し、それが他の一万人中の九千九百人に、適用し得るかどうかを測量することを怠おこたっていたとしたら如何いかがであろうか。仮に朝晩口に任せて、逢あう人ごとと同じ能書きのうがを繰返してまわつたとしても、結局それは時代の変遷とは何の交渉も無しに終るかも知れぬ。それというのが一番肝かん要ような一点において、流通性を欠いているからである。支那シナの歴史の中で、東晋とうしんの恵帝けいていは古今独歩あんくんの闇君あんくんと認められているが、或る年天下大いに飢え、万民穀乏こくぼしと侍臣じしんが奏上した時に、そうか米が無いか、そんならシチユウでも食うことにすればよいのに（何ぞ肉糜にくびを食くらはざる）と謂いつたそうである。がいずれの時代にも、失礼ながら婦人には常に

少しずつ、右申す晋の恵帝流があつた様子である。

善人ではあるが世の中のこととは考えないという人がある。元はもとそれでもよかつた。それでも良い奥さんであつた。また外からもこれを当り前と認めていた。しかし今日のごとく、男子の多くがおおよけうれまだ公を患うるの余裕なく、純然たる個人生活に没頭して生きねばならぬという世の中になると、我々はどうしても天下万人のためにも、ひろ弘く考え得る良妻賢母を要求せねばなくなる。最近数十年間の新しい改良意見には、いかにも女性でなくてはと思うようなやさしい考案も多かつた。しかもその大部分は狭いわが家庭内の苦い経験、或いは痛切な観察に基づいている故に、一言にして言えば貧乏人には役に立たなかつた。それでいて我々がまず

どうかせねばならぬのは、少数篤志とくしの家の愉快よりも、他の大
変な多数の者の幸福ということである。西洋でもかつて慈善心に
富んだ奥方といった者は、二頭立ての馬車に乗って一週に一度ぐ
らい、小銀貨を配つてあるいた人のことであつたが、日本の旧式
節約にもそんな例が多かつた。たとえば廃物利用といつて古葉書
を編んで夏座蒲団なつぎふとんを作り、女中を洩屋しづやに遣わして洩を塗らせる。
しかもそのために費ついやした自分たちの労力は無代と評価してあるか
ら安いのである。内職に生活している裏店うらだなの女房などにこれを
教えようとしたら、「馬鹿にしているよ」の一言をもつて拒絶せ
られること受合うけあいのものである。もうそんな生活改善もあるまい
とは思ふが、稀にはまだややこれに近い松下禪尼式まつしたぜんに、ないしは

青砥藤綱あおとふじつな式ともいうべき心掛が賞讃せられるために、道は行われず、社会改良には信用が無く、細心柔情の人がこの世に充ちておりながら、国はなおいつまでも悩まなければならぬのである。

三

わかりきったことだが、道を行わんとすればまず大いに学問をせねばならぬ。未来のために画策しようとする者は、殊に今までの経過を考えてみる必要があるのである。我々が女性を煩わづらわして、学び且つ考えてもらわねばならぬことは、時とともにますます多くなつて来ている。男たちはつい近い頃まで、僅わずかな同部落の者

のみを友とし、多数の異部落と闘わなければならなかった。いわゆる「人を見たら泥棒」と思わなければならなかった。彼らの同情なるものは、よほどの勉強をもつてようやく修養し得べき道德であつた。これに反して女は生まれながらにして多量にこれを持つてゐる。今より後のちは大いにそれを取り出して、独り郷きやうとうち党ち知己きの間のみならず、弘く世の中のために利用してもらふ必要がある。すでに家と家との目の見えぬ垣かきね根は取れた。里と里とは勿論のこと、国でさえも互いに平和の交際を始めようとしている時節になつて、婦人の用意ばかりが以前のままでよろしいという道理は有り得ないのであるが、しからばどういふ態度を持つておればよいのか。今日のお話には主としてその点を説いてみたいと思う。

私などは沢山の娘があるので、幾度となく考えてみたことである。もし幸いにして彼らに些^{すこ}しの天分と、少しの志^{こころざし}があつた場合、同胞国民のためにかなる種類の学問をしてくれることが、一番有効でありまた親としての本意であろうかという、やはり一言でいえば人間の幸福、それをどうして得ようか、また何故に今までは得られなかつたか。この二つの大切なる問題を、読書でなりと観照でなりと、また実験でなりと学ばせてみたいと思う。と同時に単にこれを各自の家庭の問題として取扱うことを戒めたと思う。自分でいうのもおかしいが、我々お互いはもう大分覚醒している。なるほど現在の生活にはいろんな拘束もあるが、これを振り切つて前進することも必ずしも難事ではない。問題はこ

の多数の道連れ、歩みののろい人々をどうしようかである。まさに落伍らくごせんとする人々を、いかにして導いて行くかである。

勿論自分自分の幸福は、考えまいとしてもいつの間にか考えている。ただしそれは学問ではない。古人も繰返して説いたごとく、学問は必ず人の道でなくてはならぬ。万人の歩んで行く道でなくてはならぬ。多くの生活改善論者が相戒めなければならなかつたのはこの点であつた。改良服の寸法裁たち方を論ずる前に、古着も襪ぼろ褌ぼろをささずには着られない生活の多いことを、折畳み式寝台を説く前に、世の中に藁わらの中に寝なければならぬ者が、まだ幾らもいるということを考えてかかるべきであつた。人が聞いても藁わらの中に寝るといふな。蒲団ふとんをかけて寝ていると言えと堅く子どもに

教えておいたところが、「おとうさん、背中に蒲団の屑くずがくつつ
いているよ」と謂いつたという昔話などは、ちつとも昔の話ではな
いのであつた。シドニー・ウエツブがかつて日本の小作農生活を
見に来たときに、越後えちごの或る篤農家は彼を案内して、いわゆる埴は
生にゆうの小屋の奥に、金色の阿弥陀あみださま様の光美しく立つ光景を見せ、
また百年勤続の小作人の表彰せられた話などをしてきかせた。し
かし相手がこれを聴いて、百年という声に驚いたのは、是がはた
して百年も忍耐し得べき状態であつたかということであつた。蒲か
原んばら低地の周辺の村々には、自分の知る限りにおいても簀すの子こを
かかぬ小家がつい近頃まであつた。村の衛生係員が床の下を清潔
にといつて遣やつて来て、どうしようもない土床の家が方々にあ

った。独り東北の一隅でなくとも、また小作農でなくとも、多くの小農の経済はカテ飯めしの上に立っている。節儉は道徳といわんよりもむしろ法則であつた。この人々の生活は、下肥しもごえをきたないという点にまで感覚が進んでは、続けにくい労働でありまた消費でもあつたが、これに基づいていわゆる生活の飢餓点は測定せられ、その境目の所に生活を支えしめる限度において、人口は増加したのである。医術が大分進んで赤子あかごが死ななくなつたかも知れぬが、永く生きない人が多くなつた。急性の飢餓はなくなつた代りに、慢性の凶作は常にあるようになった。四百四病の一つに算かぞえるのは当然で、貧の病で死ぬ者は実はなかなか多いのである。全体の生存に対する全体の食料は、どう計算してみても決して豊

かでないのに、そのまた分配法が大変によくない。独り金持が勝手に奢るおごのみならず、同じ一軒の家でも亭主が多く食いまた酒に使い、外ほかの食物に使う生計費が権衡けんこうを失している。消費の方法も当を得ていない。家は平均二十年に一度ずつ、焼けて新しいものを要することは、まるで御遷宮ごせんぐうの通りである。腐敗して不用となる養分、無価値にしてから使用するというようなものが幾らあるか知れぬ。

これらの弊害はいずれも国民経済学の問題であるが、男子は多くこれを考究しようとしめない。日本の男子には妙な習癖しやくへきがあつて、不景気な考え方だ引込思案ひっこみじあんだと言われると、随分もつと尤もな意見を持っていてもすぐへこたれ、明らかに無謀な積極政策を提案して

も、大抵は威勢がいいの進取的だのと言つて誉められる。全体に日本は消費機関ばかり無暗むやみに発達した国である。昔から由良千軒ゆらせんげんとか福良千軒ふくらとか謂いつて、千軒の人家があれば友食ともぐいで立つて行けると言つていたが、そんな道理のあるべきものでない。故に千軒あつたという昔の湊みなとなどは、今は多くは荒浜の砂の中である。つまり小商人こあきんどの利害から割出される繁栄である故に、正しかろうが誤つておろうが、消費さえ盛んなら好景気と言われたのである。しかし実際は不必要の消費、少なくて済めば済ませたい消費は、独り酒煙草たばこばかりではないのである。ところがそういうむだに近い物に限つて、消費を刺戟しげきするために文化だの改良だのという文字を冠かんしている。人が警戒する方が当り前で、広告が信用の

無いのにも理由があるのである。

四

小売商人のいわゆる近世の改良は、大抵は名ばかりであった。まがい物や掛け流し物、一時的の体裁模倣の軽薄を極めた商品が、すべて改良の名をもって世に行われている。この氣風と戦うのが、実は真の生活改良であつた。すなわち我々が名づけて消費経済学というものと、その基礎をなすべき国民の生活技術誌の研究が、まだまだ親切なる何人かによつて、遠く深く進められなければならぬ所以である。

ゆえん

しかるに世にはこのような一國特有の問題まで、いわゆる先進文明国の学者の著述によつて、容易に指導啓発せらるべしと信ずる者がある。沢山の論拠を並べるまでもなく明瞭にそれは誤りである。現在の生活改善事業に対する一つの大きな反感は、何だかそれが甚だ西洋臭いことである。この連中の日本の昔風を攻撃する動機を疑い、多分これが彼らの感心している西洋風と違う故に、是も非もなく反対するのだろうという邪推であつて、それが随分有力に行き渡つてゐる。その邪推の当不当は別として、こんな有様ではよし結構な計画でも、到底感化は行われず、恩恵は弘く及ばない。親切なる志の人々にとつては、是は誠に引合わぬ且つ馬鹿げた反感には相違ないが、しかも多くの場合には異なる境遇に

いる者に対して思い遣りやが無く、もしくは彼らを説きつける方法と論拠よろとが宜しきを得ないために、世間からさもさもハイカラ女の物ずき仕事のような、冷評を浴びせられて物別れになるのである。

ところが我々の同胞国民は、その癖随分真似まねのすきな人種であった。人のモダン振りなどは笑われた義理ではないのである。今日固守しているところの昔風のごときも、実に遠からぬ昔に支シ那ナから朝鮮から採用したものが多く、食物を始めとし住宅などにも大なる中世以来の変化がある（ただしこれを輸入し来きたった僧侶などには、当世のいわゆる先覚者の持たぬような親切と根気と感化力とはあった）。また必ずしも外国から模倣したのではなくと

も、近代に入ってから変更せられなかつた生活方法というものは、探しても見つからぬほどしか残っていない。よく老人たちが古い仕来りだ改めるわけには行かぬと力んでいるものの中にも、文化文政の百年以後、甚だしきは新たに明治の初年頃から始まつたものが幾らもある。少なくとも古く行われているから保守しなければならぬというものなどは、決してそう沢山には無いのである。

おかしい話は話しきれぬほど色々ある。例えば皆さん御存じの女の内足うちあしの風ふうである。前年日本に遊びにきた某仏国人のごときは、私に向かつて頻しきりにこれをほめ、あれ一つ見ても日本婦人の優美なる心性うかがが窺うかがわれるとまで激賞した。ところが桃山時代の屏風びょうぶ絵、岩佐又平いわさまたへいなどの写生画は勿論もちろんのこと、西川・菱にしかわ ひしか

川の早い頃の作を見ても、女はみな外そとあし足でサツサと歩いてい

る。多分二重に腰巻をして上の方が長く、且つ麻などのようなさ

らりとした材料を使わなくなった結果、足にからまって裾すそがうま

く捌さばけなかつた故に、こんなあるき方を発明して、それが美女の

嬌態と認められることになったのかと思う。腹式呼吸法を始めた

岡田虎次郎さんは、生前久しく私の家へも来て、老人や女たちを

集めてよく静坐の講釈をせられた。その説の一つには、柳田さん、

日本魂やまとだましと日本人の坐り方とには、深い関係があると私は思う

がどうか。もし畳というものが無かつたら、日本人の勇氣氣力は

今日のごとく修鍊せられていなかったらうと考えるがどうかと尋

ねられる。是には誠に柳田なる者も返答に困つた。と申すわけは、

我々が今のようなペチャンコの坐りかたを始めたのは、どうも三四百年より古くはないらしいからである。「すわる」は「ひざまずく」の次の改良であつて、ひざまず跪くのは身分の低い者が、長者の前に奉仕する礼儀であり、同時に外敵警戒と臨時活動の準備であつた。これがいわゆるサムラフ形である。サムラヒの階級が一世に充満してこの方法が上下に行き渡り、それが太平に入つて平和の閑暇を味わうべく、今日のように爪つま立てていた足の尖さきを伸べて、巾シキの下に敷くに至つて、ついに今一つ以前の坐礼を忘れてしまい、オラクニエルことをもつて欠礼と感ずるようになったのである。日本魂の方が確かにそれよりも古くからの記憶である。

また牀ゆかの上に畳を敷きつめることも、勿論神武天皇以来の風で

はない。たたみは文字通り畳むもの、すなわち今日のゴザまたはザブトンに該当する。八重やえだたみというか高だたみと謂いうか、百人一首の「天てんじん神さま」の乗っている畳も、古くから有ったことは有ったが、座敷と称してこれを室一杯に敷きつめることは、御殿においてもほんの近世からの出来事である。現在のようにあの畳の上を摺すり足あしして、堪たえず足の垢あかをこすりつけ、その上へ板のごとき脚あしなし膳ぜんをすえ並べて、なるだけ塵ちりの多く載のりつかった物を食おうとする流行などは、まったく最々近の発明にかかる改良である。それから座敷の正面とこの床まの間、これなども少しも固有ふうの風ではない。多分は帳台の一変形であろうと私は思っている。以前の民家の建築においては、帳台すなわち寢床の地位である。家の

者の夜は上がって寝る場所に、今日は臍へそを出した布袋ほていさんなどを安置して悦よろこんでいるのだ。またその床の間の前へ、迷惑がる客人を押し上げて坐らせる風がこの頃はできたが、以前はそんな辞儀をせずとも、主客の坐位はちやんときまつていたことは、囲いろり炉裏の四方の名称を聞いてもわかる。是は一つには建築の進歩で、客殿と住居とを一つ棟むねの下に作ることできた結果であり、また一つには足利あしかが時代の社会相として、主人が頻繁に臣下の家に客に來ることになって、我家を主人よりももっとえらい人に使わせることになったためでもあって、つまりは坐り方の変遷と関係の深いものであると思つてゐる。

五

是に限らず、全体に近代の当世風の中には、愚劣なる生活改善が多かった。それを後生大事に守つて、変革を敵視する保守派などは、嘲笑以外の何物にも値しない。ついこの頃までの世間並、殊に婦人の方面の生活様式のごときは、よくいえば御殿風だろうが、悪くいえば後こうきゆう宮式である。まず運動にも作業にも不便なような趣味ばかりを、上品として模倣したのであつて、結局こんな行きがかりを打破するためには、西洋寝間着ねまきの細紐ほそひもすがた姿でも礼讃したくなるのが尤もつともだといえる。しかもこれをもつて「日本はだめだ」という理由にしようとするのはまた大誤謬である。歴

史に由よつて論ずれば、是はつまり我々の近い祖先の、当世風の選
 択の誤りであつた。軽率無思慮の生活改良の災いと謂いつてよいも
 のである。本来の日本の些すこしでも与あずり知らぬことである。

知つたか振りをしてお聞き苦しいであろうが、少しばかりその
 实例を述べると、まず第一には我々の衣服である。羽織はおりなどとい
 う引掛かつて仕方のないものを流行はやらせ、帯などという大袈裟おおげさな
 ものを腰にまとい、奥様が帯をしているのやら帯が奥様をしてい
 るのやら、分らぬような恰かっこう好こうをしてあるき、或いは年中作り物
 のような複雑な頭をして、笠かさも手拭てぬぐいもかぶれなくしてしまつた
 のは、歌麿うたまろ式か豊国とよくに式か、とにかくこの頃からの世の
 好みであつた。いわばほんの一時の心得ちがいであつた。深窓の

佳人ならばそれもよかろうが、中以下の家庭の女がそんな様子をして生きて行かれるはずがない。だから女の働く風は、いずれの国でも大体昔から定^きまつて変らなかつたのである。それが芝居を見ると十二単衣^{ひとえ}を着て薙^{なぎ}刀^{なた}を使つてみたり、花櫛^{はなぐし}を挿して道^{みち}行き^{ちゆ}をしたり、夏でもぼてぼてとした襟^{えり}裾^{すそ}を重ねた上^{じやうろう}、臍^{へら}が出て来るが、それはまったく芝居だからである。現実の生活は今少しく簡素にして且つ自由なものであつた。この夏の暑い湿気が多い国で、そんな事をして生きて働かれよう道理が無い。国土の自然と調和すればこそ、永い歳月を経て定^いまつた衣^いと裳^{しよう}との形があることをも考えず、何でも見れば真^ま似^ねをして、上から上からと色々の余分のものを取り重ね、羽織だコートだ合^か羽^はだ塵^{ちり}よけだと、

だんだんに包みに包んで今のような複雑きわまる衣裳国にしてしまった。一度はその反動からでも裸に近い洋服になつてみようという運動の、起こるのはまったく止むを得ない。だから今日の様になつて来た心理過程にも、十分の同情を払つて見なければならぬが、それよりもなお一つ前に、まずこの国の女性の本の姿もとというものを、見いだしておくことが必要である。そんなことまでも男の人に任せておいてはいけない。

六

食物の変遷などにも、かえり省みられなかつた大切な見落しがある。

この方面では殊に色々の新しい材料が入つてくるとともに、多くの昔からの食物が全然我々の食卓の外に消えてしまった。そうしたその痕跡は必ずしも書物を探さずとも、正月の喰くいつみ積つみや婚礼の島しまだ台だいの上に、まだ幽かすかに残つている。これを見渡して第一に感ずることは、昔に比べると甘味の増加したこと、次には柔かいものの多くなつたことである。昆布こんぶは今でも関西地方の嗜好品として行われているが、生なまでかや榧かちぐり・搗かちぐり栗を食う人はもうなくなつた。のしあわび熨のしあわび鮑あわびのごときは、子供はもう食う物なりや否やをさえ知らぬ。多くの人は見たことも無いであろう。これを進物そに副そえる習慣は、昔は嚴重に守られていたが、次第に型ばかりとなつてノシは画紙ばかり大きく、その中に幅いちぶ一分ばかりの本物をはさみ、或いはそ

れをも黄色の絵具で画に描いたり、甚だしきはその形を忘れて

「いも」と書いたり「のし」と書いたりしているのは、今はもう

熨斗のしをもらつても食料にする人がなくなつて無用の長物だからで

ある。それほどまでも堅い物を食うことを控えながら、不思議な

のは齒の悪い人の年々に増えて行くことである。多分は食料摂取

法の理学的影響、例えば暖かいものの食い方とか、醜はっこう醇順序と

かいうことに関係があるのであろう。誰か今に考えてみてくれる

ことになつてゐるのか知らぬが、汽車に乗つたりこういう集會に

出てみたりすると、右も左もキンキンと金齒だらけで、人をして

黄金国の黄金時代の眩げんわく惑を感じしめる。美しくて結構は結構だ

が、こうまでしないと齒が役に立たぬように、してしまつた原因

には不審がある。

独り副食物のみではない。日本人とは切つても切れぬ因縁いんねんのある米の飯、是すらも夙つとに変化してしまつてゐる。今我々の食うのは、昔の日本人のいう飯いひではなく、粥かゆすなわちカタカユというものである。イヒは甑こしきでふかすこと今日の赤飯のごとくであつたが、そんな方法をもつて飯を製することは節供せつくの日ばかりになつた。是もハガマすなわち鏝つばのある釜かまや、竈かまどの作り方の変化と関係のあることは確かで、軍陣その他の労力の供給法にも由よるであろうが、主たる原因は趣味の移動であり、おそらくはまた白く柔かなるものを愛するの情であつた。シャモジなども我々の眼前において、どしどし形を改めて行くのである。現在では飯をよそうの

はシャモジ、汁を掬くむものはシャクシと區別するに至つたが、勿もちろん論もとは一つである。杓しやく子し顔がと謂いつて、人は花か王おう石せつ鱈げんの広告のごとき顔をそう形容するが、今日の板いた杓びやく子しは平面なるヘラである。是これはまこつたれくメシの炊すい法ほうの變化に伴なうもので、近頃それが次第に柔かくなつた故に、何かこういう鋭利のもので切り取る必要を生じたのだが、これが今少し硬くてもまた柔かくても、とてもこんな杓子では間に合わなかつたはずである。自分などは昔風であるのか、この舌した切きり雀すずめの話はなしを思い出すような米のジャムには感心せぬので、毎度かの有名なる蜀山しよくさん人じんの、

三度たく飯さへこはし柔らかかし心のまゝにならぬ世の中
の歌を思い出し、全体いつ頃からこんな不ふ如に意よが始まつたものか

と考へてみるのであるが、そのまた三度の食事ということさえ、やはりある時代の当世風であつて、本来は朝け夕けの二度を本則とし、日中の食事は田植の日、または改まつた力仕事の日に限つて、幾返りも供与したばかりであつた。それを自分らごとき朝寝坊までが、必ず三度食うべしとなると、誠に食うのに忙せわしくてこまる。もし復古をして再び朝夕の二度になつたら、学校なども九時から二時というようになって、残りの時間がもつと有意義に使われるかも知れぬ。生活改良家もまだ活躍の余地は多いわけである。強いて反抗の多い方面をつついて、苦勞をするがものは無いのである。

七

例を述べていると際限も無い話だが、要するに我々の生活方法は、昔も今も絶えず変つていたもので、また我々の力で変えられぬものはほとんど一つも無いと言つてよい。老人の頻りに愛惜する昔風は、いわば彼ら自身の当世風であつて、真正の昔風すなわち千年に亘つてなお保たるべきものは、むしろ生活の合理化単純化を説くところの、今後の人々の提案の中に含まれているのかも知れぬ。またこの民族の永久の栄えのために、自分はしかあらんことを望むのである。勿論美を愛する人の情、ないしは少々のムダをすることに因つて、味わうことのできる心の安さなども、個

人の幸福のためには決して無視することを得ないが、それよりも大切なのは一の群としての国民の進歩である。今の智慮あり趣味ありまた感化力ある人たちの、きまま気儘な傾向のみに任せておいて、はたして常に世の中が善くなるとはきまつておらぬ。それには前に申した分配方法の不当である。消費方法の拙劣である。選択の失敗である。これらがすでに**よほど**大きな損害を国民に与えている。体質の衰退は独り金齒よに由つて知るのみではない。かつて或る時代の各人が一かどひとの改良なりと信じて世に行つた変革の結果が、その実我々に災いした場合は一にして止とどまらぬ。例えば米を精白にして食う風は年を追うて進み、しかも脚か気の原因をビタミンBの欠乏に発見したのはつい近頃の事であつた。木綿もめんや毛織物

の濫用、綾織あやおり木綿はこの国の湿暑に適しなかつたと思うが、それをまだ肯定も否定もできぬ程度の、日本の生理学の進歩である。すなわちこれらの諸事情を考慮することなくして、独りぎめの生活改善を説くのは、仮に偶然に成績良好であつたとしても、悪口ずきの我々はなおこれを盲動と評せんとしている。いわんや是がために多くの無邪気なる同胞を誤る場合のごときは、決して名譽とか面目めんぼくとかいうがごとき、小さな個人の問題ではないのである。故に爰こゝでふたたび繰返して、女性の向かうべき学問の、冷静なる生活観照にあることを言っておきたい。もし幸いにして多くの婦人方に、この親切なる向学心さえあれば、短い年月の間に日本の女学校における、家政科の教え方は一変することと信ずる。

多くの家の子女は追々に人生幸福の真の意味を理解するであろうと思う。願うところは生活技術の今後の攻究に由つて、国の病の在り処あがよくわかり、従つて皆さまのやさしい心配が、結局政治の上に顕あらわれてくることである。是が私らの考えている婦人参政の本旨である。

働く人の着物

一

我々の着物は、昔から三つの種類に分かれていた。今でも多数の働く人々は、ちゃんとこの区別を守っている。その三つというのは、一つは晴着。関西ではヨソ行キとも謂うが、おもにお祭や節供せつくの日に着るからこれをマツリゴ（紀州および小豆島しょうどしま）、ま

たはセツゴ（東北処々）などと謂うている。セツとは節供や盆正
 月のことで、だからまたボニゴ（岡山県）という土地もある。生
 まれ児ごがお宮参りに着るのをミヤマキリゴ（美作みまさか）、女がお歯
 黒ぐろを始めてつける日に着るのがカネツケゴ（北美濃きたみの）、年寄が厄
 年くどしの祝に着るのをヤクゴ（讃岐さぬき）というのを見ると、ゴは着物
 のことと思われる。仙台では前にはこの晴着をモチクヒシヤウ
 と謂っていた。是これを着る日が大抵餅もちを食う日だから、意味はよく
 わかる。

第二には働く時の着物。是を仕事着というのは普通だが、土地
 によつてノラギまたはヤマギモノ（越後えちご）、海で働く者は沖ギモ
 ノ・沖アハセとも謂う。佐賀県ではハマリギモン、ハマルという

のは仕事にかかることである。大分県にはまたカネトリギモンという名もある。是を着ていると収入があり金が取れるから、是も意味はよくわかる。

第三には仕事から帰って、うちにいる時に着ている着物。それだからバンギ(ひぜんひらしま)と謂ったり、ヨサイギモン(しもこし)（下甌島きしま）と謂ったり、ヨウマアサマ(いずにいじま)（伊豆新島）と謂ったりする。東京近くではアヒダキモノ、またアヒノキモノ（富士郡）、信州越後ではマンバとも謂う。マンバもアヒダも同じことで、働かぬ時という意味だ。九州の島々、壱岐いぎ・対馬つしま・天草あまくさなどではケギという。ケギのケは不断着のフダンも同じで、晴着のハレに対する古い言葉である。だからたった一枚しか無い着物を、「ケに

もハレにも是これつきり」というのである。

二

今晩は時間が少ないから、この三つのうちの、働く着物の話だけをする。仕事着を東北地方や北陸地方では、デタチまたはデダチという。腹掛はらがけだけをヅタツと謂つたり（北飛驒きたひだから能登のと）、袴はかまだけをデンタツという処ところもあるが（秋田県）、元来は「出立でたち」だから、仕事着の全体を一括してというのが正しいのである。我々のデタチすなわち仕事着は、この頃の洋服も同じように、上と下との二つに分かれている。ただ洋服とちがうのは、上衣うわぎをさき

着て、下の袴を後からその上へはくだけで、その上衣はできるだけ短くした。それ故に九州の南の方、鹿児島県や宮崎県ではこれをコシギンと謂っている。中国地方から東ではコシキリ、東北へ行くとコシピリまたはコスピリ、或いはもつと解りやすく、ミヂカと謂っている処もある。ハンテンという名前も、もとは長さか不断の着物の、半分しかないからそう謂ったので、これをまたハンチャという村も多いが、古い言葉ではコギヌと謂ったようである。キヌはもと着物のことで、それを小さいのだからコギヌだ。今でも働く時にしか着ない麻の短い上衣を、コギノ、コイノ・コギンという処は、東北から九州の山の中までである。

この腰きりの短い上衣は、袂たもとがぶらぶらしていると邪魔だから、

やはり洋服と同じに筒袖つつそでになっている。昔から小さかった袖を、さらに一段と細くし、腕にぴたりと附くようになったのを、気が利きいているとしていた時代もあつたらしい。テボソという名前が福井県にはある。徳島県ではツメコと謂い、北九州ではテグリまたはテグリジバン、またヘウヘウソデという村もあつて、働かない旦那衆だんなしゅうを羽織組はおりぐみというに對して、多数の働く人々をヘウヘウ組などとも謂っている。東京の近く、房州の漁師りょうしたちは、是をウデヌキともトウロクともいい、信州のアルプス地方には、山に近いだけにエンコウ袖という言葉もあるが、昔の日本語はテナシまたはタナシであつたように思う。九州の南の方には今でもその言葉が残り、その中でも特に短いのをコダナシと謂っている。

島根県ではそれをコデナシというから、タナシも昔のテナシと同じで、テというのが今いう袂のことらしい。

三

日本語のソデとタモトとは、今は昔と意味が逆になっている。

ソデは「袖そでふる」と謂つて、ぶらぶらしている部分のことであつたのを後にタモトといい、衣服の手を蔽おほう部分全体をソデというようになつて、袖なしという言葉ができた。仕事着のハンチャがあまり手細てほそになると、寒い時でももう一枚重ね着するのが窮屈だから、そこで脱いだり着たり便利なように、いわゆるソデナシが

盛んに用いられたのである。東京では年寄か小さな児こだけが袖なしを着るが、他の地方では若い働く人たちが、男も女も是をよく着ている。九州ではカタギン、東北地方ではツンヌキ、その他色々さまざまの名と形とがあるが、いずれも働く人たちの手を軽く、背中を暖かくするためのもので、これは近世になってだんだんと発達したように思われる。

便利な着物が次から次へと出来てきた。その中でも働く人の恰かつつ好こうをかえたのは、ネヂ袖というものの流行であつた。これは一方から見るとアヒダノキモノ、すなわち夜とか雨の日とかの仕事の無い時だけに着る物が、今いう不断着になつて頻繁に用いられたためで、それはまた晴着が麻布のように長持ちせず、直すぐに古

くなる木綿で造られるようになって、いくらもおろして家にいる時
 に着るものになった結果かと思う。殊に朝早くからデタチの支度したく
 をして、野良のらや山に出るのでなく、家にいて時々ちからわざ力業ちからわざをする
 という町の労働者などは、仕事着にわざわざ着換えるのも手数だ
 から、下着は不断のまま、その上へ一枚の働く着物を着ること
 になった。そうすると袂が邪魔になって、手細つつそでの筒袖つつそでは着られ
 ない。それで今度は手元だけ細く、袖つけの所の広くなつた巻まき
 袖でがはやり出したのである。この袖はひとはば一幅ひとはばの袖を斜めに折つ
 てこしらえた。それ故にネヂソデまたはネヂツコとも謂うのであ
 る。中国地方から東では是をモチリまたはムヂリ、ムジルという
 のも捻ねじることであつた。その形が鯉こいの頭に似ているからコヒグ

チと東京では謂い、ひがしかずさ東上総ではブタグチとも謂っている。千葉県も南の方へ行くところをカモヤソデ、是もそういう意味の言葉らしいが、まだ私にはよく判わからない。女たちになるとただ不断着たすきを纏たすきでくくり上げて、ちよつとした仕事をした。それではよく働けないので、やはり袖をブタグチにしたウワツパリというものを着た。これがこの頃の白いカツポウギというもののもので、つまり不断着を脱がずに、仕事着の役をさせようとした便法である。

四

仕事着の下の方の部分にも、やはりまた同じような変化があつ

たが、これは女と男とでは少しのちがひがある。女も男のように
 短い腰までのハンテンを着たけれども、袴は西の方では始はじめから腰
 に巻くものであつたらしい。それでは働くのに不便なので、裾すそを
 少しばかり割り裂いて、足の働きの自由なようにしたのを前掛まえかけ
 まはた前垂まえだれと謂つた。前垂ももとは四幅三幅の広いものであつ
 たのが、不断着のまままで働くようになって、うしろはいらぬから、
 それが一ふたはば幅になりまた一ひとはば幅にもなつた。それでも甲斐かひが
 い仕事ができないので、襷たすき掛かけでもする時には、裾をたくり上
 げたり端折はしよつたりしたのだが、やはりずるずるとしてよくは働け
 ない。男の方の袴は元来スソボソと謂つてほつそりとしたもので
 あつた。是も袖がテグリジバンのように細いものになるとともに、

一旦は非常に細く、ぴたりと足にくつつくようなものになった。それが今日のモモヒキで、今では誰も是が袴だとは思っていないが、関東や東北でモツペまたはモンペという袴と、もとは一つのもの一つの言葉だったのである。ところが不断着のまま働こうという人が多くなって、その長い裾をたくし込むだけに、ゆるりとした袴が入用になった。山形県・秋田県でダフラモツペ・ガフラモツペ、もしくはモクラモツペと謂っているのがそれで、ダフラ・ガフラはだぶだぶとしてゐることである。栃木県あたりでモクタリ・ムクタリ・モクズレ、信州の南の方でモツクラというのも、やはり腰から下がむくむくとしてゐるからの名らしく、フングミというのも、長い着物の裾を袴の中に踏込むからの名と思わ

れる。そういう名は無くとも近い頃の田舎いなかの袴はみな下がふくれて来て、その中には膝から下だけはまだ股引ももひきのように細くなっているものと、下まで広くなって足首の所だけが細いものとあるが、どちらにしても町で職人などはくモモヒキとまったくちがつた形のものになり、おまけに一方は上衣の下に隠すようになって、いよいよズボン下のごときものになったが、元来をいえばモヒキはすなわちズボンなのである。そうしてまたハカマの一種なのである。

今日では晴着の、儀式の時にしかはかぬもののように、多くの人は考えているようだが、ハカマはもと労働のために、最も欠くべからざる衣類の一つであって、またそういう意味に今でもこの

言葉を用いている土地は全国に多い。衣類の名前は僅わずかずつ製し方が変わるたびに、必ず新しい言葉ができた。それは多分以前のまものものもお用いられているので、それと区別するために何か新しい名が入用になって来たのであろう。だからズボンと謂いヨウフクと謂つても、それが日本の言葉であると同じように、その名を持つ着物もやはり日本のきものであつて、我々はそれを自分の労働に都合のよいように、自由にかえて使つている。決して西洋人の真似まねをしているのでないのである。一ばん都合の悪いのは靴くつであつた。靴は日本のような夏暑くてむれる国、毎度水の中へ入つて働かなければならぬ国では、特別のものが無くではならぬ。そうして是これだけは古いものが既にややすたれて、新しいものがま

だ發明せられていないのである。諸君は是からの研究問題として、是非とも仕事に都合のよい日本の靴を、考え出さなければならぬのである。

国民服の問題

一

国民服の制定は、予言の試験としても面白い問題だと思う。僅^{わず}か十年か十五年のうちに、すぐ一つの提案の夢か夢でなかつたかが判定せられるからである。現に今までの多くの改良意見なるものは、ほとんどみな世間から忘れられている。大切な事業の、他

にいくらも手がつけられずにいる今日だ。我々はなるだけ無駄な
ことのために、心力を銷磨しようませぬようにしなければならない。

法令をもつて強制しようという腹なら、無論どのようなおかし
な着物だつて通用するだろう。そのかわりには余計な違犯者をこ
しらえなければならぬ。ほんの時とき折おり着る式服なればこそ、服痛
などとしやれて逃げてもおられたのだが、それですら今はあらゆる
便法が開かれて、事實は決して統一の効果が挙あがっていない。
ましてや毎日着てあるく着物を、揃そろいにさせようなどというのは
大変な話だ。三人で一いったん反の儉約になるから、七千万人では幾ら
などと、小学生の算術のようなことを考える前に、どうしたらた
つた一部分の都合のつく人々の間にでも、採択してもらふことが

できるだろうかを、討究してみることがまず必要である。消費は各人経済の苦しい問題であるだけでなく、別に自分の手に合わぬ外部の力が、色々とまた干渉し指導している。国民はかなり統制に従順な素質をもつていても、こう八方から小突かれては迷わざるを得ない。その筋路すじみちをおおよそは見分けてやって、少しでも判別取捨のしやすいようにするのが、先覚と言われる人の役目ではないかと私は思う。

何故に今日日本人の着物が、世界中を捜しても他には見られぬような、乱雑至極なものになってしまったのであろうか。この疑問に答え得る人でないと、おそらくは実現の可能なる改良意見は出せまい。以前は決してこのようなことはなかったのである。百

姓は百姓、山子やまごは山子と、誰に勸説かんせつせられなくともみな一様の材料・形式のものを、つい近頃までは着て働いていたのである。身分や階級の束縛は少しも無かつたにもかかわらず、なおしばらくの間は定きまつた服装を守り続けていた。それがたちまちに思いの姿になつたのは、つまりは原因が外にあつたからである。最も大きな理由かと思うのは、家に古着というものが幾らでもできることで、もとは一枚の晴着を一生涯、大事に着ていればかたみ分けにさえできたものが、現在はじきに古くなってしまつて、不斷着にもならぬものが溜たまるから、それを何とかして仕事着に着ようとするのである。私などの住む附近の田舎いなかでは、この頃は祭礼の紅あかく染抜いた半てんを着ることが、野らで働く青年の一つ

の好みになつてゐる。浜^{はま}方^{かた}ではまた遠目^{とよめ}には紳士とも見えるよ
うな、洋服人が網^ひを曳^ひいてゐる。是^{これ}が一番に安上りの、また有合
せの材料でもあるが故に、我々の仕事着の統一はまず壞れて行く
のである。以前は国民服は制定しなくてもきまつていた。現在は
是だけ大きな流行の力があるにもかかわらず、見ているうちに人
が思い思いの姿をして、あるきまわるようになってしまふ。主た
る原因は廢物の利用、すなわちその廢物を際限もなく、作り出す
ような品だけが売^{うり}弘^{ひろ}められるからである。スフは買^{かい}木綿^{もめん}と比
べてまた一段と持ちが悪いかよいか、試してみないのだから何と
も言えぬが、とにかくそのようなものが勧められている御時世に、
別になお一枚の揃いの衣裳を作っておかせるといふことは、まず

よつぽどむつかしい相談であろうと思う。

二

どうしてまた日本の着物が、このように改良の止むべからざるものになったかということ、是が一つの大切な問題である。それを徹底的に究明しておかないと、程なくまた自分が改良せられるにきまつている。いわゆる洋服の普及を見てもわかるように、今まで町の人などの着ていたものは、一言でいうならば労働に不向ふむぎであったのである。階段の上り降りに裾すそがよごれるとか、ドアの把手とってに袖そでぐち口が引掛かるとかの、新しい建築との折合いが悪いと

いうだけではない。少しでも仕事と名のつくものをしようとするば、こんなものを着ていてはあがきが取れない。元来が働く着物ではなかつたからである。一体日本人ほどよく働いて来た国民が、昔からこういう不自由なものに、朝晩くるまって大きくなつたように、思っていたことが歴史の無視である。儀式に列する少数の男女以外、あんなぶらぶらとした袖を垂れて、あるいていた者は一人だつて有りはしない。上衣と袴とはちやんと二つに分かれて、手首にも足首にも、まつわるものは何も無かつた。つまり今日ヨウフクなどと謂つて有難がつている衣服と、ほぼ同型のもを最初から着ていたのである。今見る不断着などは式服の下着、というよりも式服を極度に簡略にしただけのもので、是で働けないの

は眼をつぶつて物が見えないのと同じことである。

都市の生活が始まつて、国民に晴の日が多くなり、一方には不
断にこういう着物を着ていられる者が、だんだんと増加して来た
ということもあるが、それよりもさらに経済的な原因としては、
労働の様式の以前のように、単純でなくなつたことを挙げなければ
ならぬ。私は仮に、是を奉公人式作業と呼んでいるが、その奉
公人も数多く抱えられて、同じ一家の中でも分業が行われた間は、
それぞれの仕事着で働かせたろうが、後々のちのち家が小さく世帯が切
詰められて、たつた一人か二人の若い者を、表の取次から客の給
仕、水汲み・庭掃除、箱葛籠はこつづらの出し入れ、たまには土ほじりも
遣らせようとなると、どうしても着物は中途半端にならざるを得

ない。女房や娘にそんな役をさせようとなるとなのおさらのことである。是が旅館の番頭などなら、メリヤスの肌衣はだぎ一つでまっぴら御免下さいと、夜具の上げ卸おろしまでもするか知らぬが、普通の人情ではそれは忍べない。だから襷たすきがけだの御尻おしりまくりだの、その他色々の殺風景な変形をして、急場の用に間に合わせようとするのである。モヂリ・鯉こいぐち口・上うわつ張り、或いはこの頃はやる割かっぼ烹着うぎの類まで、この作業の頻ひんぴん々たる変更に、適用せしめようとした発明は数多いが、もともと働かないための着物を、いつも着ていようというのだから無理ができるのである。

是これには今一つ中古以来の習わしとして、晴着は町で買い調べ、毎日の入用には家で造つたものを、着ることにしていた事実も考

えてみなければならぬ。それが一朝にして全部工場の供給に移り、衣類は洗濯と僅わずかなつくりを除いて、すべて女性の管轄を離れ、亭主の財布の問題となつてしまつたのである。こんな気楽なまた自由なことは無いようなものだが、そのかわりには溜たまるのは古臭い古着ばかりで、仕事着にでも着るよりほかに利用の途みちの無いもので、小さな女房などは埋うずまつてしまわなければならぬ。国民服をきめたいという志こころざしはよいが、それにはよつぽど長持のする飽きない材料を選ばないと、揃そろいの快さを味わうのは一年にたった二度か三度で、常の日の人のなりふりは、それだけまた乱雑さを加えることに帰着するだろう。

三

我々が晴着を着なければならぬ機会は、現代に入つて勿論非常に増している。しかし以前とても正月とか祝儀とかの、きちんと坐つていればよい場合のほかに、別に活動する晴着というものすわが幾らもあつたのである。たとえば祭礼の日にも宿老たちだけは、羽織袴はおはかまで扇子せんすをもつてあるくが、神輿みこしをかつ昇ぐ若い衆は派手な襦袢じゆばに新しい手拭鉢巻てぬぐいはちまき、それが定まつた晴着であつた。近年制定せられた礼服なるものには、こういう晴衣はまったく認められていない。燕尾服えんびふくないしは袴かみしもという式作法は、最初から多数の参加断念者を予期していたのである。是が無益の垣根となり、

また忍び難い拘束と感ぜられるのは結構なことである。だから将来の国民服を考えている人たちは、仮に式服礼服に重きをおこうとも、または日常の衣裳を主としようとも、いずれにしても双方をできるだけ近いものにすることを企てなければならぬ。そうして一方はたまたまの用であり、他の一方は毎日の利不利に関するので、いかに工夫をしてみたところが、今のような礼服のおふるでは山にも行けず、また甲斐々々かいがいしく田植かをすることもできない。是にはやはり古風な村方むらかたで、今でも稀には見られるように、数ある仕事着の中の最も新しい一つを、着て出ることを許すのがよいかと思うが、そうするとあらゆる職業別を超越した、統一といふことが望めなくなるかも知れぬ。実際にまたそれまでの統一は、

強いて行おうとすればきつと誰かが迷惑をする。

衣服の好みは是からもなお一層分化することであろう。そういう余力のある者の間に、勝手な形や思いつきが流行することまでは制止し難い。ただ多数の働く人々に心よく働ける着物と、大小のおおやけの公の会合へ自由に着て出られる礼服とを、見立てて勧めることは、誰かがその任に当って遣らなければならぬ。今日の苦笑すべき紛乱は、むしろその要求の非常に急迫していることと、これに対する幾つかの提案の、まだどこかに楔くさびの抜けた所があることを談かたっているように私らには感じられる。だから採用せぬからとてやたらに相手の無知を責めてはいけない。無知が責むべきものならばそれはお互いさまである。全体洋服などと称して西洋から

の借物でもあるように、なさけながつてゐるのが悪い。自由に働こうと思えば筒袖つつそでに細袴ほそばかま、昔からはより以外の服制が有ろうはずはない。真似まねだと思えばこそ小倉地こくらじの詰襟つめえりなんかで、汗の放散を妨げてふうふうと苦しがらせたり、または寒くて乾燥した大陸でもないのに、あんな窮屈な靴くつを穿はかせたり脱はがせたり、泥どろぼつかいの中をあるかせたり、手も洗わずに餅菓子もちがしを食べさせたりするのである。そのような指導は誰がしたか。一言でいうならば麻の一千年間の便利なる経験を、まるまる省かえりみなかつた先覺とやらの誤謬ではないか。

都市の格別働かない人たちのいい加減な嗜好を、消費の標準にさせて気づかずにおけば、まずはこういう結果になつて行くのが

順当であろう。一ばん悩んでいるのはおそらくは女の髪である。僅か百年ばかりも頭をむき出しで、あるきまわるのをよいとしていたら、今ではなんとも頬がえしのつかぬことになってしまった。被り物の作法は衰頹の一途をたどっている。折角単純な公私両用の服装を考え出したところで、はき物・被り物を自然の変化に放任しておいたら、頭は埃を怖れ足は泥を怖れて、働こうという男女の職業は茶屋か店屋か、行く先はおおよそきまつている。こういう細かな利害得失は、もう自分で考えるだけの能力は具えている人が多い。実は我々は余計な指図をするかわりに、もう少し詳しく今までの変遷を、彼らに知らせるようにした方がよかつたのである。

団子と昔話

一

穀物を粉にしてから調製した食物を、飛騨^{ひだ}ではモチと謂^いう場合が幾つかある。是^{これ}はどういうわけか、他にもあることだろうか、江馬^{えま}夫人は疑^えつておられる。こういう自然の疑いは、時としては答えよりも尊い。同じ事実は随分と多くの地方にあるのだが、今

までそれに気をつけた人は無いからである。

是は何故に団子だんごとは言わぬだろうかという問題に、結局は帰着するのでないかと思う。そうでなければ何故にシトギという語を、我々が使わなくなつたらうかという問題になるのかも知れぬ。そうしてこの二つの変遷こそは、日本の食物史においてかなり重要な、しかもまだ真白な数頁なのである。是を明白にする手段は書かれたる書物の中には無い。この変遷があまりにも公々然と、何らの情実も秘密も無しに、ただ少しばかり緩ゆるゆる々と、凡俗大衆の前に于行われたために、甲から乙に話して聴かせるような必要が、少しも無かつたからである。こういう無意識の歴史だけは、痕跡の方から溯さかのぼつて尋ねて行くよりほかに方法がない。江馬さん

が飛騨で得られた事実も史料の一つであるが、是を有力にするにはなお多くの状態を、比べ合わせて見なければならぬ点が、少しばかり厄やっかい介なのである。粉をまとめた餅もちを団子とは言わぬ処ところは実はそちこちにある。そういう土地でもモチとはもう謂わなくなつて、何か第三の語を用いているのが多い。それを集めて行くと今日の団子になつて来た経歴がわかるかも知れぬ。今は細かな列記はできないが、東北はやや弘ひろく、ダンスまたはダンシと謂つており、或いは率直にオマルという所もある。団だんが外来語なることはよくわかるが、その意味が形の丸いところから来ていることはもうダンゴという人たちも忘れたらしいのである。しかし現在でも「団子のような」といえば円まるい物を意味するから、元は円い

に限ってそう呼んだことが察せられる。誰がこういう面倒な名を、常民に教えたろうかは次の問題になるが、この点は真言宗しんごんしゅうの僧にでもきけばわかる。彼らの行相の書には支那シナ以来、団だんという名をもつてこの形の供物くもつに充あてているからである。ダンゴは始めは「壇だん供」とでも書くものかと私も思っていたが、その方はかえって書物には見えない。団子は捜したら出典があるかも知らぬが、是をもし知っていたらかえって重箱読みはできないだろう。むしろ文字無しに耳で学んだ故に、ゴの字を附けることも気が咎とがめなかつたのであろうと思う。

いつ頃から然しからばこのダンゴという語が始まったかというところ、それだけは湛たんねん念ねんに記録を見るよりほかはないが、そんな手数をかけるがものはあるまい。近頃見た本では文禄頃の『鹿苑ろくおん日録』の中にはあつた。京都では大抵あの頃くらいが始めで、地方はもつと後と見ておいてそう大きな誤りもあるまい。昔話の中では団子を題材にしたものが少なくとも二つはある。一つはおろかむこ賀かの話を、嫁の里に行つてそれを御馳走ごちそうになり、名を教へてもらつて還かえる途みちすがら、溝を飛び越えた拍子ひょうしにその掛声と取ちがえ、ピョイトコサ（等々）を拵こしらえろと嫁に命じ、それを知らぬというので怒つて火吹竹ひふきだけで打つ。まア団子のような瘤こぶができた。おうそ

のダンゴよというのが落ち。いくら馬鹿智でも今なら暗記にも苦しむまいし、また自宅では食ったことがないとも言えまい。おおよその名称が数奇としてもてはやされた時代の、作り話だということは察せられる。それからもう一つ、爺じいが団子を食べようとして取落すと、ころころと転ころがって鼠ねずみ穴あなへ入ったのを、後あとから追掛けて尋ねて行くという話で、団子待て待てどこへ行く、地蔵様のそばまで、などという問答さえあるからふざけている。ただしこの話の輪りんかく廓かくは古い形で、鼠ねずみに蕎麦餅そばもちを御馳走した御礼に、招かれて鼠の国へ行くというのと、穴へ握飯を落したのを追掛けて入ると、中には地藏様がいてわしが御馳走になった。そのかわりに御礼をすると謂いって鬼の博奕ぼくちの金をさらえさせる話とがある。

前者を鼠の浄土というから、我々は後の方を地藏浄土、その序についで団子の転がって行く話を、団子浄土と呼ぶことにしている。鼠浄土の方は「猫さえいなけりや云々」の餅搗歌もちつきうたなどがあるために、子どもにはわかりやすくまたもてはやされているが、古くあつたかと思う動物報恩譚ほうおんたんから見ると、かなり著しい誇張があり笑話化がある。地藏浄土も東北と九州とに伝わるものは、地下仙郷譚のなつかしい原型がやや窺うかがわれるが、他の多くの例はみな法外な改造を受けている。しかるにもかかわらず、半分以上はまだ蕎麦餅とか握飯とかで、団子がその以後になってようやくころころと転がり出したものであることは確かである。つまりこの食物の名前と形とが、一つの新しい興味であつた時代の、産物であつただ

けは疑いがないので、しかもその二つの説話のできたのがいつと言えないかぎりには、何だか鴉からすの黒雲みたような証拠物だが、此方こちらは実はあらまし見当がつくのである。

三

そこで第二の問題としては、団とか団子とかいう外来の新語が、尋常家庭の小さな供物にまで、またそれからさらに転じて只ただの慰みの食物にまで、適用せられるようになった以前には、米や他の穀粉をこねて製したこの特殊の食物を、何と呼んでいたろうかが考えられるのだが、実は私などはそれがやはりモチであったと思

うのである。「粢」もしくは「」の字を宛てたシトギという古語は、明らかに粉製のものの名であつて、これを今日謂うところの餅と区別するにはちようど似つかわしく、何故是これが不用に歸したかを恠あやしむばかりであるが、元来この語の成立には一つの約束があり、一方にはまた餅の製し方に、かなり著しい古今の変遷があつたのである。この変遷の眼目は、横杵よこぎねの發明にあつたことは明らかだと思ふ。『和漢三才図会』わかんさんさいずえに搗杵つきぎね、カチキネなどと呼んでいる現在の杵は、そう昔からあつたものでなく、多分はカラウスと前後して共に外から学んだかと思ふが、そうでないまでも元の用法は、米を大量に精しらげるための杵であつて、後に餅搗もちうすきにこれを転用したことは、今でも餅もち白うすが是と不釣合ふつりあいに小さ

いのを見てもわかる。横に柄えのあるこの形状の杵が生まれなかつたら、蒸した糯もちごめ米を潰つぶして餅にすることはできない。従つて現に沖繩県などでもそうしているように、モチはことごとく粉からこしらえなければならぬわけである。私たちの知るかぎりでは、東京で以前ツキヌキ団子と謂いつたものが、この一期前の餅製法を伝えているように思う。すなわち粉を練つたものをさらに蒸せい籠ろうにかけて、粘りをつけてからもう一度杵でこねるのである。モチの米という名はすでに『和名鈔わみょうしやう』にも見え、モチという言葉は鳥とり糰もちも同じに、粘ることを意味したようだが、それだからとて今と同じ餅が、古くからあつたとはかぎらない。横杵以前の餅は糯もちごめ米を用いても、やや粘るといっただけですつと齒切がよく、

むしろいわゆる団子の平たいのと、近いものであつたらうかと思
う。そうして強^{こわめし}飯でもなく萩^{はぎ}の餅よりもさらによく潰^{つぶ}された新
式の餅が、世に現われて喝^{かつさい}采せられ、始めて多くの人を餅好き
にしたのではないかと思う。

四

是は「食物と心臓」などという文章の中に、もう大分説き立て
ているところであるが、私の想像している餅の最初の効用は、味
よりもさらに形であつた。他の多くの食物では、芋や大根などの
二三の例外を除けば、これを独立させて好みの形をこしらえるこ

とができぬのに、是のみ大小方円思いのまままで、神にも捧げ人にも進めるのに、これを供するものの心持が自由に現われる。その点がこの食品の正式の供饌くせんとして、欠くべからざるものになった原因らしいのである。この目的のためにも、現代の餅は一番に苦心を要する。鏡餅かがみもちの腰を高く、あまり取粉とりこを使わずに色沢のよいものを作ろうとすれば、相応に手腕のある餅搗きを頼まなければならぬ。それに比べるといわゆる団子はやや便利であるが、さらに今一段と理想的なものとして、昔からシトギというものがあつたのである。シトギの製法は全国ほぼ共通で、一見したところいかにも古風である。洗い清めた白米を或る時間水に浸し、それが柔かくなつたのを見測みはからつて小さな臼に入れて、手杵てぎねすなわ

ち豎たての杵で搗つき砕くのである。そうして生のままですぐに折敷おしきの上を取るのだから、巧みを加えずとも自然に御鏡おかがみの形に成るのだが、今日の生活においては、それだけのものを出来上った食物と言えるかどうか、まだ少しばかりの問題にはなり得る。この点は米をなまで食う習慣の消長と大きな関係がある。日本人の歯というものは、何かよくよくの理由があつて、近世に入つて急にその働はたらきが鈍り、入歯だ金歯だという騒さわぎがえらくなつた。米嚙こめかみという名称は、まだ記憶せられていられるにもかかわらず、それを意識する機会は絶無になりかけている。色々柔かい食物が増加したためばかりでもないらしい。種蒔たねまきと苳掛かりかけの日の焼米やきこめだけは、まだ型ばかりは残つてもいるが、生米なまこめをつかんで口に入れ

るようなことは、生米噛むべからずという戒めが無くとも、もう田舎いなかでも見るのが稀になった。こうなれば生の粢しとぎを神様だけに上げるのが、むしろまた一つの疑問になろうも知れぬ。

五

シトギという語には、現在はいくつかの方言ができています。飛騨では何というか尋ねたいと思うが、信州から越後えちごの方へかけては一般にカラコまたはオカラモチといい、美濃みのから東海道一帯はシラコモチ、その附近ではまたシロモチというのが普通だから、多分この二つのいずれかだろうと思う。白餅というのは誠によく

当っている。こういう色をしたものは他の餅類には無いからである。これをこしらえるのは旧十月の神送り、冬春両度の山の神祭の時などで、家々の楽しみだけには作るということもないが、小児は好奇心が多いから決して軽蔑せず、今でも口を白くしてその供物の卸しおろを食べまわっているという話も聞いた。しかし大抵の成人はそれを持って還かえつて、焼いたり煮たりして食べる。奥羽にはシトギという語がなお行われ（アイヌ人もシツトギ）、またナマストギ・ニシトギという言葉もよく聴くから、或いは尋常の食物としてもこれを製することがあるのかも知らぬが、その他の地方では偶々たまたま同じ語があつても、それは只至ただつて限られたる意味に用いられる。たとえば普請ふしんの棟上げむねあの日に投げる餅、死人のあ

った時に直ぐすに造つて供える団子などは、その製法がすでに今風になつていても、なおこれをシトギと謂う土地が全国に亘わたつて相應に多く、或いはもう元の語音をなくして、ヒトギだのシトミダンゴだのという者もできている。手杵と小白は現在はずでにすたれて、都会の小兒などは月中の兎うさぎの絵か、そうでなければ家の紋もんに、杵と称して横に柄をつけぬものを見るくらいになつてゐるが、是は一言でいうと『和漢三才図会わかんさんさいずえ』時代以後、二百年足らずの間の変遷で、主なる原因は石臼の普及、もう少し細かく言えば、臼の目立てと称して、一種尖つて刃のついた金槌かなづちをもつて石臼に目を切る職人が、農村の隅々すみずみまで巡回するようになった結果であり、豆腐の流行などとおおよそ歩調を合わせていると思う。

六

この点も私は飛騨の山村の実際が、はたしてこの推測に合うか否かを知りたいと念じている。石臼は薬材を細末にするために、また挽ひき茶の調製にも使われ、日本には相応に古い頃から存在したろうが、それが家々の食物調製にまで、利用し得られるには条件があつた。現に離れ島や九州の外側海岸などには、今も豆腐は知つていても、家にはまだ挽ひき臼うすを備えない例が稀なりとせぬ。

『炭すみ俵だわら』の連句に、

江戸の左右さうむかひの亭主登られて

芭蕉

こちにもいれどから白を貸す

野坡やば

方々に十夜じふやのうちの鉦かねの音おと

芭蕉

という有名な一続きがあるが、前句まえくが向いの亭主、受句うけくが十夜だ

からこのから白は、粉挽こなひきうす白であることが察せられる。すなわち

まだあの時代までは中央部の都会でも、家々に一つずつの石白は無かつたのである。から白という言葉は今日の辞典を見ると、こんな石白までは含んでいない。普通に「地じがら」と呼ぶ地面へはめこんだ石の搗つきうす白、是も『続猿蓑ぞくざるみの』には、

一 石踏いっこくふみしから白うすの米

沾圃せんぼ

などという句があるから、当時すでにこの「地じがら」をもそう謂いっていたのである。次には挽木ひきぎを取附けた粃摺もみすり白、是は粃殼もみがら

を出すので殻白などと謂う説もあるが、根っから当てにはならない。いずれにもせよこの二種のから白では、前者は勿論貸借もちろんりができず、また糲摺白も町中には有ろうとも思えぬから、別にもう一つの小形の石白も、同じ名をもつて呼ばれていたもので、起こりはかえつて此方こちらにあり、廻わして引くという根本の法則が、ともに在来の搗白とはちがっている故に、大小を通して唐白からうすと謂い、「地がら」はすなわち地唐白であつて、系統は異なるが杵きねを用いぬという特徴のために、是またカラという語を冠せるにふさわしかつたのであろう。

七

搗臼で粉を造ることは、今から考えると煩わしい作業であつた。シトギのごとく湿つた粉でよければ、水に浸して柔かくしてもおける。きな粉・炒粉いりこのように火にかけたものもまた砕けやすい。蕎麦そばなどは押し潰せるから是もまだ始末がよい。生米・生小麦を粉にして貯え、入用の時に出して使うといふことは、挽臼無き時代にはほとんど望み難かつた。したがつていわゆる時々好み物の調理には、かなり女たちの長い骨折りな準備を要したのである。一たび石臼の目立ての村に入り込む時代がくると、是が彼らに調法がられ、手杵てぎねが純乎たる兔の持物になつてしまつた事情も想像するに余りがある。関東地方の粉の需要は、それでもまだ足りな

くて粉屋という商売が起こり、かの豊年万作の踊おどりうた歌にもまた村々の粉ひき歌にも、粉屋の娘が人望ある題材となつてゐる。

マコとかシンコという言葉が、通例米の粉の名となつてゐるのも、絹きぬふるい篩ふるいという目の細かな篩が流行して、書物の名とさえなつたのも、ともに近代の製粉界の改良第一を語るものであつた。

そうして同時にまた年久しきシトギ文化の、退縮を意味するものである。物固い旧家だけでは、神祭の餅ばかりは古風によつて、

生なましとぎ 粢あはれ をこしらえていたかも知らぬが、是も他の一方に練餅ねりもち

の堂々として且つうまいものが搗つきた立てられるようになったのは、此

方が感じもよく、また現実には直なおらい会かいにも便利であつた。それに

第一元のような杵と臼とが、もう家ごとには備わつておらぬよう

になつて、ところ処によつては搗すりこぎ木すなわち摺すりこぎね小杵をもつて、米を碎いてシトギを作ろうとしている。こうなつては保存の価値がいよいよ減少するのである。

八

餅と団子との今日のような明白な区別は、要するに杵と臼との二方面の改革に始まると、私などはほぼ確信している。それ以前は両者製法も近く、味もまたよく似ていたことと思われる。名称の方から言つても、モチは必ずしも糯もちこめ米で製したものに限らず、またシトギを焼いたりうでたりして、食いやすくしたものだけが

モチだとも限らなかつたと私は思う。というわけは、生でも米の粉だけは結構食べられたからである。餅は搗いた当日は決して焼いてはならぬと謂い、或いは正月三ガ日だけは焼いて食うことを戒めたりする風もある。実際また神には生で供え、人は焼かなければ食べぬなどということは、今日の神道祭式には認められていゝるが、少なくとも民間の節せつ供思想、すなわち神と人の食しよく饌せんを同じくする習慣とは反するのである。ただしシトギはシト打ツなどという語とともに、水で湿らせる意味から出たかとも思うが、モチの語原に至つては今はまだはつきりとしていない。或いは古くはモチヒと謂つたから、モチイヒすなわち今日のお萩はぎ・牡丹餅ぼたんもちのようなものだけが、モチであつたはずだと思ふ人があるかも知

らぬが、仮にそうだったところが、しからばモチイヒのモチは何かという問題の答えにはならない。のみならず餅は中世以前でもやはり定きまった形があり、且つ個人の所属の明らかな御供えであつて、この点が飯や汁の共有状態にあるものから一步出ている。そうしてモチヒがイヒの一種だという推測もやや恠あやしいのである。是が安心してよい解説のつくまでは、我々はなお何度でもくり返して、江馬夫人のごとき率直なる疑惑を、表示しつつ進むのほかは無いのである。

餅と白と挿鉢

一

私の研究は着手が遅く、またこの問題があまりにも広汎であるために、いまだ全般の傾向を一つの文章に要約し得る状態にまでは達していない。僅かに比較的重要だと思^{わず}う若干の事実を、やや順序立てて叙述することによって、幾分でも嗣^ついで起こる学者の

労力を省くことができるとすれば、まずそれをもつて一応は満足しなければならぬ。標題のいささか奇を好んだのは、古来不当に省みられなかつた一箇の大きな生活問題のために、もう少し多くの経済史家の注意を引きつけたいからである。

食物の変遷、我々日本人の食事が前代と比べて見て、いかに改まつているかを知るには、最初にまず晴はれと褌けとの差別を明らかにしてかかる必要がある。いずれの民族においても共通に、この二つの者の次第に混同してきたことが、近世の最も主要なる特徴であつたからである。晴と褌との対立は、衣服においては殊に顯著であつたように考えられている。晴衣はれぎという語は標準語中にもなお存し、褌衣けぎという語も対馬つしま・五島ごとう・天草あまくさなど、九州の島々に

は方言として行われている。すなわち一部には今も活いきて働いて
いるのだが、しかも両者の境目は次第に忘れられようとしている。
たとえばイツチヨウラという語は、一いっち 梃ちようろう 蠟そく 燭そく という戯語から
出たもので、ケにもハレにも是これ一つということを意味したもので
あるが、何でそういい出したかを知る者が無い。「ケにもハレ
にも」という成句自身も、折々これを用いる老人などは有るが、
すでに間違えてしまつて、「テンもハリヤも」などと謂いつてい
る土地は少なくない。そうして我々の常用の褻衣には、晴衣の古く
なつたのをそのまま用いるようになってしまつた。是これに比べると
食物にはなお事実上の差異が少しは遺のこつている。我々は改まつた
節には晴の膳ぜんに坐り、常の日には今でも褻の飯を食つているので

ある。すなわち眼前の事実を観測して、その中から年久しい慣習の跡をもと見めることができるのである。

都会では今や宴会のほとんど全部が家の外の食事、もしくは主人一人の食事となつて、これより他には晴の食事をする場合が無くなつた。家々の家族は毎日のように、東京でいわゆる御惣菜おそうざいばかりで御飯を食べている。これに反して田舎いなかでは、正月と盆ぼんは申すに及ばず、大小の祭礼や休みの日には、カハリモノと称して通例でない食物を給与せられる。常の日の食物が思い切つて平凡であるだけに、家族一同婦人小児までが、これに参与することを楽しみにしている。すなわち今でも改まつた晴の食事の機会は多いのである。節供は本来はこの食事を意味する語であつた。供と

は共同食事、神や祖霊とともにすべての家族が相饗^{あい}することであり、節はすなわち折目、改まった日ということであつた。オセチという語は年越の日の食事の名に残っているが、或いはまた餅^{もち}を意味する地方もある。こういう晴の食事には、衣服もまた晴のものを着た。それ故に晴着を「餅食い衣裳」という例も有るのである。

数量回数^{かぞ}の点からいうと、褻の食事の日は一年に三百日以上、朝夕二食を算^{かぞ}えると七百回近くまでがそれであり、非常に貧乏ければ晴の食はもつと少なくなる。経済上の重要度は、むしろこの方が遥かに高いと言ひ得る。世の多くの学者の食物論が、是^{これ}ばかりを目標としているのも一応の理由は有る。しかし他の一方の重

要性はいわば宗教的であつた。我々の精神文化と深い交渉のあるのは、もっぱら晴の食物であつたのみならず、それがまた全体の生活様式に、人知れぬ刺戟しげきを与えていることも事実である。史書文献の今日に伝わっているものは、通例はこの部分に限られていゝる。料理という語は晴の食物を調製することだけを意味し、料理物語という類の記述は常の日の食事には触れていない。したがつて当世の経済史家、すなわち文書に拠よつて食物の歴史を知ろうとする人々は、自身まずこの晴の食事の慣習の影響を受けざるを得ないのである。問題の重要性は常の食物の上に認めて、是つまびらを詳かにせんとする史料は、異常食事の記録に求めていたのである。現代の学界がこの最も痛切なる消費経済の沿革に関して、いまだ多

くのを我々に教えなかつたのは、一言でいうならばこの方法の誤謬ごびゆうからである。それで私はここに改めて、現在眼前に横たわっている書外史料、すなわち我々が自身の眼と耳とをもつて、直接に観測し採録し得る社会事実をして、自らその履歴を語らしめようとするのである。

二

晴の食事の形の崩れた理由としては、いくつかの重要なものが挙げられるが、最初に気をつくことは是と常の食事との中間に、どっちつかずのものが現われてきたことである。ヒルマすなわち

昼食というものが我々にも普通となり、いわゆる三度の食事を要するに至つたのは最も大きい変遷である。以前の食事が朝夕の二度であつたことは、江戸期の学者もこれを説いている。奥羽おうとうで一般いっに一ひつパイと謂い、九州ではゴひと一つと称えたのは、ともに今日のますめ榊目の約二合五勺ごうしやくであつた。是が一人扶持いちにんぶちの五合を二つに分けて、朝夕かたけずつ食わせた痕跡であることは疑いが無い。多くの農家には関西でゲビツ、東北でケシネギツなどというろうまいびつ糧米櫃があつて、その中にはほぼその分量を盛る瓢ひさごまたは古ふるわん椀などが入れてあつた。この器をもつて家に働く者の名を思いつつ量り出せば、主婦には掛け算の胸算用をする必要が無かつた。そうして常の日の食物ごごしらは、今よりもはるかに簡略で済んだのである。

ヒルマは元來は餉しやうすなわち運搬せられる食物の名であつた。今でも是を家における昼飯と區別して、田植の日などに屋外へ持つてくるものだけを、ヒルマと呼んでいる地方は多い。おそらくは最初或る特殊の作業の日だけに、こういう食物を調べて田人たびとをねぎらうていた習慣が、追々に拡張してきたものであろう。しかも烈はげしく働く日が多くなつて、三度はいつの日でも食わずにおれぬようになつたのみならず、さらにそれ以上に春の末から夏にかけて、午前と午後ともう一度ずつのコビルというものを運び出すことにさえなつた。總計で少なくとも五度は食事をする。是などは明らかに上代からの旧慣ではなかつたのである。

小昼こひるは何処どこでも午前十時頃と、午後三時頃とに給与せられる。

関東では普通に是をコヂウハン（小昼飯）、もしくはコヂハンなどと呼ぶが、東北は秋田県のごとく、昔の通りコビリマンマという土地も多い。越中^{えっちゅう}では訛^{なま}つてコボレと謂い、またナカマとも謂っている。ナカマはすなわち中間食の意で、九州でも薩摩^{さつま}の南端でナカンマとも呼んでいるから、かなり古くからの名であったことがわかる。山陰地方は一带に、この食事をハシマと謂つて通ずる。ハシマもハサマもまた中間の食物の意であつて、村によつて是をまた小バシマとも、コバサマとも謂うのを見ると、前のコビルマと同様に、ハシマが本来は今の昼飯のことを意味したことが察せられる。すなわちハサマはもと朝夕二度の常食の中間にたべるものの名であつたが、昼飯が定例となると、さらに転じて

是と朝夕二度の飯との、中間のものを指すことになったのみならず、今日九州北部などにおいて、ハサグヒまたはハダグヒと謂うのは、ただのお八つややお十時の間食を意味するのである。近畿きんきとその周囲の諸県でケンズイという語は、『閑田耕筆かんでんこうひつ』にもすでに注意しているごとく、「間食」の呉音ごおんであつて寺家から出た言葉らしいが、是を東国の小昼飯の意味に農村では用いており、町方まちかたでは子どもに与えるナンゾと同じように解しているほかに、中国・九州では普請の日に、大工や手伝に給与する酒食にかぎつて、ケンズイまたはケンジーと謂う土地も多い。言葉は保存せられても内容はもう変化しているのである。

右の五回の食事のほかに、また夜食というものがある。夜なべ

に働く人々に食わせるだけでなく、吉きつきよう凶きつぎようさまざまの事件のために、夜遅くまで起きている人にも出す。日中の間食を或いはヒナガとも謂うに對して、是をヨナガというのは夜長であろう。肥前ひぜんの島しまばら原半島などでは是をヨナガリとも謂うそうである。妙な言葉であるがその起原は、朝食をアサガリという語にかぶれたものと思う。アガルは田畠仕事場から上あがつてくること、すなわち休息を意味する。どんなにせわしい日でも食事の時間だけは休む。それで食事をアガリとは謂い始めたのである。朝上りという語は通例の朝飯以前にすでに一働き働いていた痕跡にほかならぬ。多くの農家ではその朝仕事に就くために、別に起きぬけに簡單なる一回の間食をさせている。それと夜食とを加えると、都合七度は食

うことになるのである。この早天の間食を、陸中遠野とのおのなどでアサナガシというのは古語らしいが、今は全国ほぼ一様に是をオチャノコと呼ぶことになっている。御茶の子の材料は区まちまち々である。鍋なべに残った前夜の飯の余りを食う場合もあるが、東日本では普通そのために焼餅やきもちというものがある。稗ひえや蕎麦そばの粉こや屑米くずまいを挽いたものを水で練って、大きな団子だんごにして炉ろの火に打ち込んで焼く。それを引き出して灰を払い落したものが一個ずつ与えられる。山村では馬上にそれをかじりながら、娘や男が朝草を苳かりに出かけるのである。江戸でも以前はそういう生活があつたと見えて、楽な仕事だ小さな骨折りだという意味に、「そんな事は朝飯前だ」とも謂えば、また「そんな事はお茶の子だ」とも謂っている。す

なわち御茶の子は朝飯前の食事であつたのである。

茶は農民の最も愛用したものと見えて、ハシマ・コバサマ・コヂウハンのことを、御茶と呼んでいる地方も甚だ多く、食事と食事との間の時間を、ヒトコマンチャなどと薩摩では謂つており、単にチャドキといえは午後三時もしくは午前十時頃を意味していた。茶とはいふけれども必ず固形物を伴ない、それも漬物の塩気ぐらいでは、働く人々は承知しなかつた。オケチャもしくはウケチャという食物は、日本海側では越後えちごや出雲いずも、太平洋側では紀州くまのの熊野くまの、備中びつちゅうあたりにも分布している。或いは炒米いりごめと甘藷かんしよとを合せ炊き、または豆飯であつたり茶飯であつたりするが、とにかくにどこでも味付け飯のことをそう謂つている。こういう

一種の食物が発明せられまた弘く行われたのである。早天のいわゆる御茶の子を除いて、その他の間食はみな御茶と謂っている。東京でも職人には必ずこの御茶が給与せられる。それがさらに拡張して簡単なる客きやくよ招びをも、御茶と謂っている処は方々ところにある。東日本では主として仏事の小宴が御茶だが、九州では誕生・婚姻のごとき、吉事にも人をこの御茶に招いている。茶樹が外国の輸入だという説は誤りだが、少なくとも茶の飲用だけは中世以後に始まっている。従うてこの語の固有のものでないことは明らかだが、それが代表している頻ひんぴん々たる食事回数も、おそらくはまたそれより古くなく、両者ともにこれを促した原因が新たに起こつたものと思われる。

食事の回数増加は、もちろん栄養量の増加とは関係が無かつた。以前朝夕ただ二度に喰い尽していたものを、五度にも七度にも分けて食うという場合もあつたか知れない。人が喰い溜めをする力というものが、是についてまず考えられる。喰い溜めは睡り^{ねむ}だめとともに、以前は壮年の男の長所の一に算^{かぞ}えられ、或いは努力修養すべき美德とさえ考えられていたようである。是が無用になつたのは平和の世の恩沢であろう。次に考えられるのは趣味すなわち人が幸福になろうとする念慮、および労働する人々の希望が少しずる容れられてきたことであり、最後にはそれを支持した可能ならしめた先例と社会慣習が、この事実を透して窺^{うかが}い知られるのである。慣習は多くは古いものであるが、それとても不変

常在のものではなかつた。何か偶然の機縁で始まつたことが、次第に悦び迎^{よろこ}えられて確乎^{かつこ}たる先例を作り得たのである。いずれにもせよ食事回数^{回数}の増加は新しい現象であつて、しかもその普及によつて意外なる変化を我々の生活に及ぼしたことは確かである。ヒルマや小ビルマはもとは限られたる日の食事であり、また特別の調理に成るものであつた故に、用途は褻^けであつたけれども、人に晴^{はれ}の食物のような好い印象を与えた。それから今一つはいずれも分割と運搬とを許す食物であつたために、他の多くの雑^{ざっしやう}餉と同様に、次第に共同食事のいろいろな拘束から、独立して発達することになり、その結果はついに家々または各個人の食物選択の自由を、促進する動力ともなり得たのである。

三

元來食物の褻けと晴はれとの差別は、必ずしも材料の優劣を意味してはいなかった。晴の日の食物とても皆うまい物とは限らず、常の日以下のものさえ折々は用いられている。たとえば稲いね苳ねかり終つて後の農神祭には、土穗餅つちぼもちまたはミヨセ団子などと称して、仕事場の臼のこぼれを掃き寄せたものを食料とし、夏のかかりの水の神祭には、小麦の粉をこねてポロソ餅などを製している。ただ大いなる二者の相違は、その調製のために費さるる労力の量であつた。ケシネすなわち平日の飯米は、一度に多く搗ついて始めから粟あわ

・稗ひえの定量をまぜておき、それを毎日片端から炊たいていた。アハセもしくはオカズという副食物も、大体に手数のかからぬ物をきめて、いつも同じような献こんだて立だてをくりかえしていた。是これに反して時折と称する節の日には、必ずシナガハリを拵こしらえて食ったので、カハリモノは通例みな多分の準備を要するものであった。女が当然にその役目をつとめる。家に女性の重んぜられた理由の、最も大いなるものは晴の食物の生産と分配にあった。酒の歴史においてはこの点がすでに認められているが、餅や団子についても女の機能は同じであった。

是を説明するには一通りハタキモノの沿革、すなわち白の歴史を叙述しなければならぬ。神代の記録の中にも、すでに葬式の日

に春女つぎめが働いたことが見えているが、その風は今でも田舎いなかにはな
 お残かつてゐる。独り突如として起こつた不幸の場合のみならず、
 予かて定きまつてゐる祭典祝賀のすべての日にも、元は是に先だつて
 臼の仕事があり、その臼はすべて手杵てぎねであつた（碾てんがい磑の輸入は
 かなり古いけれども、その用途は薬品香料のごとき、微細なもの
 に限られていたようである）。吉事の支度には三本杵が用いられ
 た。すなわち三人の女性が是に参与したので、臼に伴なう古来の
 民謡はいずれもこの手杵の操作をその間ま拍子びょうしに用いてゐる。そ
 の臼には大小の種類があつて、米麦でいうならば糶あらづき搗あから精白
 を経て、是を粉にしてしまふまで、以前はことごとく搗つき臼うすの作
 業であつた。糶もみすり搗すり臼うすの普及は一般に新しいことであるが、製粉

の方だけは土地によつて、百年以上も前から石臼をまわして挽ひいていた。しかし是もまたかつては皆はたいて粉にしていたことは、炒いりこ粉をハツタイと謂うただ一つの語からでも判わかる。そうして現在もまた辺へんぐう隅の地においては、その方法が持続しているのである。

臼で穀物を粉にする方法は、昔から三通りあつたようである。その中でも最も面倒なのは、今の製粉工業のごとく生のままで粉にはたたくことであつた。他の二つは是に比べるとともに遙かに簡便なもの、すなわち炒いつて脆もろくしてこれを搗つき砕くのと、今一つは水に浸して柔らかげて押し潰つぶすものであつた。米にも東北ではシラゴメと称して、炒つてはたいて食うものがある。津軽・秋田等のシラゴメは、八月十五夜の正式の供物で、或いは女には食う

ことを許さぬ土地さえある。大豆の炒粉はキナコと謂つて今も普通であるが、豆にはご汁しるや豆腐のために今一つの水浸けの法も行われている。炒り搗きを主とするのは麦類が多かった。是は他の方法の殊に施し難いのと、今一つにはこうして食うのが最も旨うまかつたからであろう。いろいろの名称があるが、コガシという語は最も弘ひろく行われ、また夙はやく『新撰犬筑波集』にも見えている。是を訛なまつて大和やまとではコバシ、土佐とさではトガシとも謂いっている。東京附近のコウセンは、香煎こうせんとの混同だと思つている人も多いが、或いはまたコガシの転じたものかも知れぬ。以前の標準語でオチリまたはオチラシと謂つたのは、この粉のこぼれやすいところから出た名で、すなわちまた粉のまままで食う食物なることを語つて

いる。

これ以外にやや珍しい一例は、淡路^{あわじ}でワカトと称する正月八日の晴の食物で、是は米と大豆とを交ぜて炒つたものを、挽いて粉にして神にも供えている。他ではあまり聞いたことはないが、現在オイリと称して雛^{ひな}の節供などに、豆と米粒と霰^{あられもち}餅とを併せて炒つたのを食うのが是に近く、ただ一方では白のかわりの役目を、各人の白^{きゆうし}齒に委譲しただけの相違である。それから考えていくと、滋賀県北部などで麦の炒粉^{いりこ}をカミコと謂うのと、飛驒^{ひだ}で焼^{やきごめ}米をカミゴメというのと、二つの言葉の似ているのは偶然でなく、双方ともに以前は儀式の食物であつたことが推察せられる。記録の側でも焼米の出現は古い。はたいて是を粉にする風習は、

是に次いで起こったものであろう。

四

炒り粉はこしらえて直ぐに賞玩しないと味が悪くなる。是がこの食物の晴の日の用に、元は限られていた理由かと思う。是に反して生の穀物を搗ついて粉にしたものは、貯蔵にはずっと便利であった。それだから同時にまた褻けの食物としても使用せられたのである。石の挽ひき白うすが弘ひろく行われるまでは、麦類はかえつて生粉なまこには向かず、主としては屑くず米まい・碎くだけ米等の飯にはならぬもの、次には蕎麦そばなどが盛んに粉にはたかれていた。山野で採取せられる

葛^{くず}・山慈姑^{やまくわい}・蕨^{わらび}の類、甘藷^{かんしょ}・馬鈴薯^{ばれいしょ}等の栽培球根は、水分を利用して粉碎せられたけれども、のちに乾燥して貯蔵する故に、やはり常食の中に加えられている。生粉の調理法は二通りある。その一つは直接に熱湯を注ぎかけて和熟せしめるもの、三河^{みかわ}の北部でカシアゲコと謂い、越後の中蒲原^{なかかんばら}あたりでコシモチというのも是らしいが、普通にはカイモチと称して蕎麦だけをそうして食うことになっている。しかし我々の葛湯^{くずゆ}のこしらえかたのように、簡単にできるものなら何でもこうしてかいて食ったもので、カクというのは攪拌^{かくはん}することであつたらしい。関東の山村でカッコというのは蕎麦力キのことだが、岡山地方の田^{たど}処^{どころ}で、力キコと謂っているのは米の粉を湯でかきまぜ、甘藷の煮たのなどと

ともに食う、飯の不足な急場に作るものだそうである。奥羽の八ちのへ戸あたりでカツケというのも、名前の起こりは同じであろう。現今は練つてからもう一度燂ゆでるので、やや食い方のちがった蕎そ麦ばき切りに過ぎぬが、元は只ただかいて食うからカツケと名づけたものと思う。

能登のとではカイノゴは三番以下の粿もみまじりの粗米で、団子の材料にするものだと言っているが、その米の粉をもまたカイノゴというから、やはりかい餅にする粉という意味であつた。それを汁に入れて再び煮たものを、伊勢ではやはりカイノゴ汁というのは、是も奥州のカツケのごとく、のちに調理法がやや改良したのである。多くの食物史家には無視せられてしまったけれども、穀粉の

消費も古くから相應に多く、殊に小麦粉が石臼で挽かれるようになる、それだけまた農民の食品は変化を加えたのである。信州の北部でツメリ、関東でツミイレと謂つたのは、通例粗米の粉を水で練つて汁の中に投じて煮たものであつた。関西ではこれを汁団子、または単に汁ワカシとも謂つて、冬分ふゆぶん三食の一度はこれを食べぬ農家も稀であつた。ただあまりにもそれが尋常であり、また公衆の話題とするに足らぬが故に、書物にも録せられず、人もまた是をわが土地ばかりの偶然の事実のごとく考えたのである。単なる過去の貧しい生活の跡としてならば、忘れてしまうのも一つの幸福かは知らぬが、我々の新たに知り得ることが、是と伴のうてなお色々と残つていたのである。少なくともどうしてその種

の慣行が起こり、またかくまで全国に行き渡っているかを、一応は考えてみる必要が有ると思う。

大体に日本人は生活のこの部面において、甚だしく変化を好んでいたように見える。現代の多種多様な飲食品目を見ても、輸入採択の歴史の明らかなものが多く、是だけは昔から、たとえば十代の祖先の世と同じであろうと認め得るものは、有るのかも知らぬが自分などにはまだ一向に見つかからない。どうしてまた食法がこのようにひどく変つたものか。本来変化して止まらざるものであつたのか。はたまた近世に入つて急激に古風が消えたのか。もし後者だとすればその原由や如何^{いかに}。食物は人が生きていとうことの、何よりも主要な外貌である。それに是だけ多くの未解

決の問題を持ちながら、勇敢なる概括に走ることは順序が悪い。少しは面倒でもやはりこの根本から、事実を積み上げて行く必要が有るように私は考えている。

近世の一つの顕著なる事實は、石の挽臼の使用が普及して、物を粉にする作業がいと容易となり、従うて是を貯蔵して常の日の褻の食物となし得たことかと思う。是と前から有った粉製の晴の食物とは、味や形において格別の差のないものも多く、珍しくなくなれば有難くもなくなり、その結果はまた古来の二種の食事の分ぶん堺かいをぼやけさせた原因となつていようである。是について私の心づいた一つの例を挙げると、『全国方言集』には宮崎県のどこかで、食用米をデハと謂うとある。他の地方ではまだ聞いた

ことがなく、語の意味も取りにくいが、『壱岐島方言集』には
 あの島の常食の一種として、芋と穀物の粉とを釜かまで練ったものを
 デーハと謂うとあつて、少なくとも起こりは一つであるらしい。
 そうしてこの類の補食方法ならば、弘く他の地方にも行われてい
 るのである。伊豆いずの新島にいしまでネリコと謂ったのは、甘藷の粉を米
 麦飯の中に入れて攪拌したものだということであるが、是はこの
 島に薩摩芋さつまいもが入つてから後の変化と思う。山梨県東部の山村で
 は、蕎麦粉と南瓜かぼちゃとを練り合わせたものをオネリということあ
 り、同県西北隅の田舎にあつては、モロコシの粉を練つて作る食
 物がオネリだという。原料にはよらなかつたのである。秋田県河
 辺郡わべのネリガユは、糶米しいなの粉であつてこれを午食用ひるめしやうに供し、三

重県南海岸のネリゲはまた蕎麦粉であつた。この地方に行わるる
 茶揉み唄に、
ちやも

志摩しまのあねらは何食くて肥こえる

蕎麦そばのねりげに塩しお辛から添へて

うまい〜といふて肥える

と歌つたのは、もとより貧しい人々の自嘲の笑い歌であつたらう
 が、かつてはまたそんな食物をもつて米の消費を節約する必要も
 あつたことを意味する。そうして是が忙しい労働の日においても、
 なお企て得られたのは製粉法の進歩であり、同時に我々の祖先の
 才覚のすぐれた点でもある。もつと尤もこれらの材料の中には、凶年そ
 の他の極度の欠乏の中で、始めて実験したものが多かつたらうが、

製作が簡便でなかつた間は、平日にこれを利用することはできなかった。わらび蕨の根餅や葛の粉くずの類は、今でも飢饉ききんの際にはこしらえて食うだけで、かつて一般の常食の資料には編入せられたことがなく、かえつて各地の名物として改良せられている。つまり手数てすうの掛ると掛らぬとが、二通りの食事の主たる差異であつたからである。

五

いわゆる麵類めんるいはこの意味において、今なお村落では晴の日の食物である。是これが三度の食事よりも、さらに自由に得られるとい

うことは、都市においてもそう古くからの現象でなく、しかも一たびその風習が起ると、たちまちにして大いなる町の魅力となつたのは、餅もちや団子だんごも同様に、簡便なる石の挽ひき白うすの普及に助けられたので、古風な規則正しい田舎いなかの生活が、外部の影響に勝てなかつた弱味ごころも爰こゝにあつた。東北で今日ハツトウと謂いつてのは、主として蕎麦そばのかい餅をつみ入れた汁類のことであり、出来た食品が関西のハツタイとはまったく違つてゐるために、両者もとは共にハタキモノの義であつたことは忘れられてゐる。栃木県の東部では是をハツト汁と謂い、あまりに旨うまいから飢饉年には作つて食うことを禁じた、それで法度はつとじる汁と謂うのだという説明伝説まで生まれてゐる。しかしこの名称と調理法は、古いと見えて

かなり弘く分布している。たとえば信州でも下伊那方面にはハツトという語があつて、只その川上から甲州の盆地にかけて、是をホウトウと謂うのである。ホウトウは現在の細く切った蕎麦・饅頭の原形であつたろうと思う。刃物を当ててもごく太目に切るだけで、中には紐のごとく手で揉んで細長くし、食いやすくするだけのものもある。是を小豆とともに煮たものをアヅキボウトウとも謂っている。三河の渥美半島では三十年余り以前、私も是をドジョウ汁と謂つて食わされて喫驚した。珍しい名前も有るものと思つていると、佐渡島でも蕎麦切を味噌汁に入れたのを、やはりソバドジョウと謂うそうであつた。その形泥鰯に似たる為なるべしと『佐渡方言集』にはある。それもあるか知らぬがなお

ホウチヨウという語の意味不明になった結果であろう。三河の山村では是と同じものをソバボツトリと称して、山神祭の欠くべからざる供物であつた。是もホウトウをそう訛なまつたのである。九州では豊後の或る部分に、小麦粉を練つて味噌汁に落したものをホウチヨウと謂つたことが、古川古松軒の『西遊雜記』さいゆうざつきには見えている。大友氏の時代から始まつた食物で、文字は「鮑腸」と書くといふのは、やはり泥鰌同然の考え過ぎであつたと思う。いづれにしても生粉なまこの白挽うすひきが普及し、したがつて粉の貯蔵が可能になるまでは、是は相応に面倒な調理法であつた。それが家々の補食の一種となり、また飲食店の商品ともなつたのは、器械の進歩であると同時に、晴はれと褻けの食事の混乱でもあつたのである。

もし入用に臨んで新たに作る物であつたならば、特に面倒をして生の穀物をはたき、またはわざわざ炒いつて脆もろくする必要はない。最初から水に浸して柔かくして搗つけばよかつたのである。だから以前の晴の日の品がわりには、水を加えて粉末にする第三の搗きかたが、今よりもずっと多く行われていたのである。石臼いしうすが入つてから後も、大豆だいずなどはネバシビキが多く、豆腐以外にもその用途はいろいろあつた。蕎麦だけは性来生粉が作りやすく、また香気を保つたためにも水に浸さぬようであるが、その他の穀物の粉のまままで食うもの以外は、大抵はネバシビキにしている。挽臼を用いなかつた時代はなおさらのことであつたと思う。その中でも米には昔から特にネバシ搗つきの必要のあつたのは、臼に入れる水

の加減をもつて堅くまたは柔く、時にはやや液体に近い練粉までこしらえていたからで、勿論もちろん一旦粉にしてから、水で薄めることも可能ではあるが、以前はもつぱら白の中での仕事になっていた。記録の上にはまだ見当らないが、私は是が一つの正式の米食法であつたらうかと思つている。現在伝わつてゐるのは乳の不足な赤子あかごなどに、布で包んでしゃぶらせるくらいなもので、是にも地方的にいろいろの名がある。これ以外には大抵は神靈の供御くごとするだけで、もう人間は生のままの米の粉は食わないが、儀式の食品としてはかなりよく保存せられている。もう忘れかかつてゐるからその名称を採録しておかねばならぬ。岐阜県の海津郡かいづなどで、ナマコと謂つてゐるのがこの米の汁の普通の名であつたらし

い。淡路島あわじしまでシロトアゲというのもまたそれで、正月にこれを製して神棚や仏壇に、榧かしわの葉をもって注ぎかける。能登のとの穴水あなみず地方では是を人根（ニンゴン？）と謂うそうである。旧九月十五日の地藏講の日に、七寸ほどに切った藁わらを膳ぜんに載せ、是に白米を摺すつて糊のりじょう状にしたものを注いでいる。これを人根というのは珍しく、またどうしてそういう事をするのかも私に判わからぬが、考えてみなければならぬと思つている。福島県の平市たいら附近の村では、同じものをオノリと謂つている。是も九月秋収後の幣束へいそくさい祭に、こしらえて餅とともに神に供える。祭の後あとには鳥からすが来てこれを食べうことになつている。鳥に神供を投げ与える風ふうは、正月に東北一般に行われているが、処ところによつては秋にも同じ事をするのである。

色の黒い男が白足袋しろたびをはいているのを嘲つて、「烏がオノリを踏んだような足をしている」などという諺ことわざも、この事実を知っている者には格別におかしいのである。

信州川中島かわなかじま地方で二月八日に作るチウギ餅なども、餅とは謂

つても至つて柔かなものだと思えて、この日は子どもがそれを持つて行つて、道祖神どうそじんの石像の顔に塗りつける。土地により甘あまざ

酒地蔵けじぞうもしくはモロミ地蔵と謂つて、路傍の地蔵に甘酒やモロミを注ぎ掛け、臭くて鼻をつまむようだが、洗い落そうとすると罰ばちが当るなどというのも、材料はちがうが同じ信仰であつた。羽う後の神宮寺の道祖神を始とし、祭の日に神体に米の粉をふりかけるといふなども、乾いた粉の得にくかつた時代には、やはりこの

オノリを注いだものと思う。同じ習慣は東北地方、ことに旧南部領の盆ぼんの墓祭りの時にもある。やはり多くの他の食物とともに、この白色の粉を解いた液体を墓場の前と周囲にまき散らすので、土地ではこの行事をホカヒと謂っている。ホカヒはもと食物容器の名、すなわち盆（瓮）という漢字の和語であつた。中部以西の盆しやうりようの精しやうりよう 霊しやうりよう 棚だなには、この白い米の水のかわりに、鉢はちに水を入れたものを具え、ミソハギの枝をもつて供物の上にふり掛け、または墓参の往復にもこれを路上に注ぐが、その水鉢の中へは茄子なすや豇豆さやげなどの細かく刻んだもののほかに、家によつては米粒を入れておく。それを「水の実み」とも、また「水の子」とも謂っている。起こりは皆一つであろうと思う。今では何故にそういうこと

をするのか、説明し得る者は一人も無いけれども、いずれも祖靈に供養するものであるからには、本来は我々の晴の日の食物で、人だけは嗜好しこうが転じてこれを食わなくなつても、御先祖には前通りのものを進めていたわけで、すなわち日本の晴の食事にも、やはり時代の変化があつたのである。我々は容易に国固有のもの、もしくは普通りの食物というものを、知つていゝるとは言えないのである。

六

米を水に浸し柔げて後のちに、白うすで粉に搗つくといふことの第二の便

宜は、また是これをもつて色々の物の形象を作り得る点にあつた。今日
のいわゆるシンコ細工は、一旦米の粉を煮てから作るのだが、
それでは油でも用いないと手にくつついて仕方がない。生粉なまこの水
練りならば水を使うから、取扱いがずっと便利なのであつた。自
分などはそれが粢しとぎというものの最初からの特徴であつたと思つて
いる。日本人の食物の中で、最も古くから文献の上に見え、一方
にはまた北海道の原住民の中にも、採用せられているのがシトギ
という語であるから、その使用は近世まであつたと言つてよいの
だが、存外に多くの日本人はこの語の意味内容、もしくは是と餅
との關係を早く忘れてしまつてゐる。たまたまその語を用いる土
地が有つても、是を用いるのはある限られたる場合だけである故

に、それが一般的なる前代生活の残留破片であるとは心づかない。何処どこでもわが土地ばかりの方言と心得て、有りもせぬ標準語の対訳を見つけるに苦しんでいる。その事自身がすでに驚くべき変遷であつた。

シトギという語の現在も行われているのは、多くの場合には古い神社であり、祭礼の折にその語が現われてくる。たとえば越前つるが敦賀郡の東郷村の諏訪すわ社では、シトギは三合三勺の米をもつて作つた三つの丸い餅であつた。餅とはいつても水練りの粉を固めたものだつたらうと思う。熊本県の北部で棟むねあげ上式しきの日に投げる餅だけをヒトギ、是などはすでにただの餅をそう謂つていたのである。能登のとの北川村の諏訪神社九月二十七日の祭に作るヒトミダン

ゴ、是もシトギの訛音かおんらしいが、この方は今いう団子になっている。東北では宮城県北部の村々でオシトネ、九月九日の節供に新米をもつて製するもので、是は生の粉を水で固めたものであった。岩手県では一般にこれをシツトギと謂い、風の神送りの日に作つて藁苞わらづとに入れて供えそま、または山の神祭の際に、田の畔くろに立てる駒形こまがたの札に塗りつけた。青森県の八戸地方はちのへで、同じく神に供えるナラストギも是である。人は今日では煮るか焼くかして食う故に、とくにこれを生のシトギというのである。生米を嚙かんで食う風習とも関係があつて、以前は人間も生のままで食べていたのが、いつとなく嗜好しこうが改まつて、後には神仏に参らせるだけの食物のごとく考えられるに至つたのである。だから糒しとぎという古い言

葉は用いなくとも、その実物を作っている土地は今でも中々多い。現在の名称の最も弘くひろ行われているのは、シロモチ・シラモチまたはシロコモチというのが是に該当する。煮たり焼いたりしたのと比べると色がずっと白いからで、成人はめつたに是を生では食べぬが、子どもは昔どおり珍しがってもらつて食ひ、口の端はたを真白にして喜んでゐる。伊勢の松阪あたりの山神祭りの飾り人形に、白餅喰いというのがあつたことは、本居もとおり先生の日記にも見えてゐる。秋の終りの神送りの日には、是は欠くべからざる神供じんくであつた。三河の半島の或る町の祭には、小児からすが鳥の啼なきごえ声を真似てこの白餅をもらつて食う風ふうがあつた。それでこの日は彼らをカラスと呼んでいた。前に述べた岩城平いわきたいらの、鳥のオノリと同じ風習

から出ていると思う。白餅という名は東海道の諸国から紀州まで、九州でも北岸の島々ではシラモチと謂い、阿蘇あその山村ではシイラ餅と謂っているとともに、一方秋田県の鹿角地方かづのなどにもシロコダンゴという名がある。分布のこのように古いのを見ると、この名称もおそらく新たに起こったものではないと思う。

信州は南北とも、一般にこれをカラコまたはオカラコと謂っている。主として秋の感謝祭の日に今年米ことしごめを粉にして作るのだが、正月しきじつその他の式日にも用いることがある。形は主として丸い中なかかだか高かの、今謂う鏡餅かがみもちのなりに作るので、或いはまたその名をオスガタとも呼んでいる。オスガタは御姿、すなわち色々の物の形という意味かと思われる。是を湯に入れ汁に投ずれば、単純な

る我々の煮団子にだんごであり、鍋なべで焼けば普通のオヤキすなわち焼餅やきもちとなるのだが、形をこしらえるには生のままの時に限るので、それで粢しとぎを御姿おすがたと謂つたのかと思う。後代技術が進んで搗つき抜き抜きの団子を丸め、白で蒸むし米こめを餅にすることができて、始めて我々の慣習は改まり、材料も従うて変化してきたのである。滋賀県の田舎いなかなどでは、今でも餅団子もちだんごをツクネモノと謂っている。ツクネルとは捏こねあげること、現在の餅や団子だんごはつくねはしないが、本来が生粉せいこなの塑像そざうであつたために、今にその名前を継承しているのである。ダンゴが上古以来の日本語でないことは誰でも知っているが、それならその前には是を何と謂つたかという、それには答えることがむづかしいので、人によつては名称とともに、支シ

那・天竺てんじくからでも入ってきた食物かのごとくに考えているが、一方に粢が国固有の古い食物である以上、是を外国から学ぶべき必要は有り得ない。新たに採用したのは言葉だけで、それはたしかに丸いから団子と謂ったのであつた。信州の諏訪あたりでは、正月の餅花につける飾り団子をオマルと謂い、山梨でもカラコの白餅だけを、特にオダンスという村がある。団子は古くはダンスと謂っていたのである。東北へ行くと、今でもこれをダンスまたはダンスというから、その起原は想像することができ。或いは「壇供だんく」という漢字の音かとも考えられるようだが、この中間の団だんまたは団子だんすという語があるために、是がもと仏教徒の用語に出で、丸く作つた粢だけを意味していたことが判わかつてくるのである。

ところが我々の作っていたシトギは、必ずしも常に団なるものとは限らなかつた。長くも平たくも節ひらごとの旧慣によつて、色々の形が好まれていたのである。たとえば田植終りの頃のサノボリの小麦団子は、中国地方では馬のセナカと称して、鰹かつおぶし節を小さくしたような形であつた。盆の送り祭りの食物には、セナカアテと称して薄い平たいものを作り、もしくは鬼の舌などという楕円形のもの、編あみがさや笠焼きと謂つて笠の形をした焼餅を作る日もあつた。中部地方では二月涅槃ねはんの日にヤセウマという長い団子をしらえ、または同じ月にオネチと謂うものを作る日もあつたが、是も後には捻ねじり団子には限らず、蕪かぶや胡蘿蔔にんじん等の野菜類まで、色々と形を似せて美しく彩色した。香川県には有名な八朔はっさくの獅子しし

駒ごまがある。是も現在は米の粉をもつて、見事な動物の形を作り並べて見せるので、この風習は中国地方に及び、これをタノモ人形などといつて、男女の姿に似せたものさえ作つた。尾張・三河の方面では三月の雛ひなの節供の日に、やはり米の団子をもつて鯛たいや鶴つのるかめ・七福神しちふくじんまでも製作した。もうこうなると工芸と言おうよりも美術で、専門家の手腕を必要としたのであるが、しかし日本の民芸は発達している。民間にはしばしば無名の技術家があつて、たつた一日か二日で食つてしまふ物に、かような手の込んだ製作を施して、少数の見物人を感動させていたのである。

しかしそれも是も、すべて水で練つた生の穀粉の彫塑であつたからできたのである。是がもし蒸した粉や穀粒であつたら、つく

ね上げることは相応に困難であつたろう。私たちが少年の頃には、酒屋の職人たちが酒の仕込みの日に、蒸した白米を釜かまからつかみ出して、ヒネリ餅というものを拵こしらへていた。普通には扁へん平ぺい煎せ餅んのべいようなものしかできなかったが、巧者な庫くら男おとこになると是で瓢ひょう箆たんや松茸まつたけや、時としてはまた人形なども作り上げた。蒸米は冷えるとすぐに固くなるので、熱いうちに手を火ぶくれにしてこんな技術を施したのであつた。シンコに比べると餅の方は殊に細工を施し得る間が短い。故に今では丸餅まるもちや熨斗餅のしもちなどの至つて単純な物しかできなくなつたのである。是が生粉であるならばゆつくりといかなる形の物をでもつくね上げ得たのは当然である。問題はいわゆるオスガタを作る手段よりも、いかにしてそ

ういう色々の物の形を、現わさなければならぬと考えたかの、動機如何いかにという点に存在する。注意をして見ると我々の晴の日の食物は、単に是がために時と労とを費したただけでなく、その形態にも幾通りかの計画が有り意匠があつた。一つの顕著な例は三月の桃節供に、必ず菱ひしがた形の餅を飾ることである。是を榭ますがた形の餅とも称して、奥州では正月に人の家に贈る餅の、定きまつた一つの形となつていた。出羽の方の正月には、昔からヲカノモチというものが、家族一人に一つずつ作つて歳とし棚だなに飾られていた。是は楯円形で中程に指で窪くぼみを附けたものであるという。東京でも婚姻の祝に配る鳥の子または鶴つるの子こというのが、一部分是と似ている。つまりそれぞれの機会に対して特殊の形というものがあつて守ら

れたのである。その中でも特に私たちの注意しているのは、五月端午たんどこの節供に作られる色々の巻餅まきもちが、必ず上とがを尖らせた三角形に結ばれたことである。是なども最初は生粉の間に形をきめ、それを湯に入れて煮て引き上げて食ったのである。それと同じ形が年の暮の供物、御霊みたまの飯めしというものにも附いてまわっている。是は米粒であるがやはり笹ささの葉などで三角形に包み、蒸して食うようにしたのである。葉に包まぬ場合には握り飯だが、是もこしらえる手つきがきまつていて、必ず三角に結ぶことになっていた。それを盆と暮とに御霊に供えている土地も多いのである。私の一つの想像では、鏡餅まるは円いという点ばかり問題にされているが、是うえとがが上尖りにできるだけ高く重ねようとしていた点は、五月の

巻餅まきもちや粽ちまきの円錐形と、同じ動機に出ているものではないか。すなわち是を人間体内の最も主要なる一臓器と、わざわざ似せて作り上げたところに、是を儀式の日に食うという意義があつたのではなかつたか。仮にその想像が半分でも中あたつてしていると、しとぎ糝が我々の晴はれの食物として、選えらまれた理由はほほわかるのである。握り飯の三角などはただ偶然のようだが、この歴史の無い他民族に任せたら、自然にはこうは握れぬのみならず、現にわが国でも凶事の際だけには、わざと違った形の握り飯を作っているのである。要するにこれらの食物が、ぜひと一定の姿にこしらえぬと、晴の日の食物とするに適しなかつた理由こそ、まず考えてみるべきものである。

七

是はこれおそらくは我々の祖先の食物に対する觀念の、今よりもはるかに精神的であつたこと、もしくは生存というものの意義を、ずっと物質的に解していたこと、別の語で言えば体靈いちによ一如の考え方であつたことを意味するかと思うが、その点は深く入つて行く必要もまた能力も私には無い。社会経済史学の立場から言つても、この日本の餅なり団子なりが、かくも平凡きわまる毎日の食事となつてしまつたのには、いまだ究きわめられざる文化史上の大いなる動力、殊に近世における複雑なる変遷が、原因であつたとい

うことを認めるをもつて足るかと思う。糯米もちこめという一種の稻がいつから日本に存在し、またどういふ足取りをもつて普及し且つ増産したかということも、経済史の一つの題目に相違ないが、仮にその者が夙はやく我々の農村にあつたにしても、是を非常に旨うまいものだと経験した機会は、そう容易には出現しなかつたはずである。それにはまず今日のような餅の搗つき方の起こることを条件とし、しかもその搗つき方は至つて新しいものであつた。それよりも晴の日の食物の色々の形状を要求することと、ついでその方法の改良とが無かつたら、今ある餅というものは日本にはできなかつたので、つまりは粢しとぎという古来の習慣の方が元である。沖繩の島へ行ってみると、餅と団子の名はあるがその物は我々のとちがい、ま

た二者の差別もヤマトとは同じでない。蒸した穀粒を白で搗いて、餅とする風はふうまだ島には入っておらぬのである。そうして内地でも今いう餅の始めは新しい。白と杵との大いなる改良が無かつたら、今日の変化は完成しなかつたのである。

その実験もまた南の島々へ行けばできると思う。女性が日本の手杵てぎねで穀粉をはたいている間は、いかに糯米が糊のりぶん分の多い穀物であろうとも、是を搗つきつぶして今のような餅にすることはできない。それが可能になったのは横杵よこぎねの発明または輸入で、男子がこれを取扱うようになった結果である。横杵の使用は多分支那シナから入ってきた技術であろう。男の力でないと取扱えぬかわりに、餅も米の精白もこのために手早くなつた。杵は日本の古語ではキ、

おそらく木という語ともとは一つであつた。東北では手杵すなわち女の使う豎の杵を、今でもキゲまたはキギと謂っている。標準語のキネは後のちにできた語で単なる樹木のキと区別する必要からかと思うが、それを四国と中国の一部で、キノと謂っているのを見ると、元はキノヲであつたことが想像し得られる。キノヲのヲは男の意で、白を女と見立てての至つて粗野なる異名であつた。是と同じ思想は、今ではすりばち播鉢とすりこぎ播木とが承け継いでいる。スリコギのコギは小杵こぎねであるが、八重山やえやまの島などでは是をダイバノブトと謂う。ダイバはライバンのなまり訛ですなわちらいぼん播盆。ブトはラツトであるから播鉢の夫ということに帰着するのである。横杵は大きいからアヲという土地もある。すなわちオホヲ、大なる夫の義

であつた。キネという語の国語として固定したのも、多分はこの横杵の採用の時以後であろう。とにかくに是に由よつて、且つ糯米の利用によつて、桑しとぎで物の姿を作る必要は半減した。従うてまた手杵つきめと舂女つきめとはまつたく閑ひまになつたのである。

我わがくに邦の農家の主要なる什具じゆうぐは、いずれも近世に入つて色々の改良を受けたが、その中でも白の系統にはほとんど革命とも名づくべき大変化があつた。米の粃摺もみすりにも一旦は横杵の使用があつて、多くの城下町では糶町あらまちと称して、一区画をその作業の地に宛あてていたが、程なく各農家が摺白すりうすを使用することになつて、玄米納租げんまいのうそが行われ、糶町の必要はなくなつた。次に製粉器械としての石臼の普及であるが、是は石工の技芸進歩と、その数の増

加の御蔭おかげであつた。以前は薬材・絵具や茶の類に限られ、僅わずかに上流の家だけに使用せられていた石の小さな挽ひき臼うすが、どんな田舎なかでも手に入り、また目立て屋という職人まであるようになった。農家が各自の穀粉を挽ひくようになって、一旦起こりかけた粉屋こなやという専門業が早く衰えてしまい、名残なごりを粉屋の娘の民謡とどに留めて

いる。

最後に今一つの大きな改良が、前に挙げた播鉢・播木であつた。これもまた臼と杵との変化であることは、その各地の名称からでも察せられる。スリコギが摺する小杵こぎねであつたごとく、メグリギ・マハシギ等のキもまた杵であつた。在来の手杵と異なる点は、搗つくかわりにまわすことで労力をはるかに軽くなった。陶器の内側

に白の目を立てて焼くなどは、国内でも発明し得たか知らぬが支那の方が古い。いわゆる鎖国時代にこういう事までを聞き伝えて、ただちに全国に普及させた無名氏の智能は敬服すべきである。播鉢の世に行われるまでは、一切の柔かな食物はみな白で搗いていた。味噌みそは播鉢ができてからかも知れぬが、それ以前の食物であった豆のゴの汁、また多くのあえ物類は、すべて白によるのほかは無かった。それが百年か百五十年の間に、全国住民の九割九分までが、手杵なくして生活し得ることとなり、餅と団子とはまったく独立の存在を確保し、起源の最も久しい稔の白餅は、神霊以外にはこれを省みる者が無くなった。古代の食物慣習を解説せんとすれば是だけの面倒な考察を必要とし、しかも多数の人は今有

る状態をもつて昔からだと思つている。この激変が主として臼と杵と播鉢との力であつたのである。

八

晴^{はれ}の食物の調製が簡便になつたことは、是と常の日の食事との境が、不明になつてきた大なる原因では有るが、原因は勿^{もちろん}論是だけではなかつた。話が長くなり過ぎたからその分は他日を期し、ここにはただその要点のみを附加しておくが、元來食物の晴というものは、最初からまだほかにもあつたのである。今まで述べて来た節供はその一つで、是は家々の中で神靈と人との共にするも

のであるが、なおその以外に家と家との共同に成る酒盛りというものがあり、是も村限りの内で行うものと、他所よそからきた人々との間に行うものとの二種があつた。村限りの会食も時期が定きまつていて、上代には是を二へと謂つていたようである。現在も近畿以西に弘く行われているメオイという語は、その二へという語の変化かと思われる。誰が亭主ということもなく、会衆が均等に入用を分担するのを例としている。後者はこれに比べると起こりは新しいのだが、今まで親しみの無かつた他処よその人たちと、まず共同の飲食に由よつて心身の連鎖を附ける趣意で、必要はかえつてこの方が大きかつた。中世の武家移動以来、優れた異郷人の訪問が田舎にも多くなり、是について部落外の婚姻が起こつて、そのた

めの酒盛りは特に盛大とならざるを得なかつた。旅人が駅や港にきて酒を飲んだのも、やはり多くは短期の婚姻のためであつて、濫用には相違ないが是も一つの晴であつた。酒盛りには必ず肴さかなを伴のうた。歌や舞なども御肴と謂つていたが、それ以外にも特に技芸を加えた食物を肴にしたので、料理はもつぱら是に由つて発達した。簡素を生命とした茶湯ちやのゆの席でも、客は客だからその食品を精選しなればならなかつた。殊に珍しい賓客に対しては、ヒノトリモチと称して是非暖かいものを食わせなければならなかつた。吸物・あつ物を膳ぜんの上に添えることが、款待かんだいのしるしとなつたのもその結果で、他の民族でも同じことかと思ふが、日本の食物が近世に入つて、次第に温かいものまたは汁氣しるけのものを多

くしたのも、誘因はこういう接客法にあつた。家に火ひどころ処どころがたつた一つであつた時代には、是は決して容易わやせの業でなかつた。それ故に火の取持ちが優遇を意味し、一方には又次第に私たちの謂う火の分裂を引き起こしたのである。建築技術の進歩もまたこれを促している。住居の変化の主要なるものは、一つには客来が頻繁になつて、そのために毎回かりや飯屋を建てることができず、できるだけ主屋おもやと合併しようとしたことである。いわゆる出居でいは拡張せられて客座敷というものができた。それから紙の利用が自由になつて、明り障あか子しょうじや唐紙からかみの間仕切まじきりができ、家の中の区画が立つて食物はようやく統一を失つた。すなわち常の日の共同の飲食が、次第に主人子女のみの居間の食事となり、小鍋立こなべたての風ふうを誘うに

至つた。晴の日の食事の比較的簡単なものを、いつでも食いたい時に製して食えるように、小鍋とか火鉢ひばちとかいうものが普及したのである。白河楽翁しらかわらくおうの『女教訓書』おんなきょうくんしよを見ると、まだあの頃までは小鍋好みは悪徳であつた。留守ごとと称して主人の不在中に、珍しい食物をこしらへることは不貞であつた。それが久しからずして公然と是を褻けに混じてしまつたのである。この点は男でいうならば酒や歌舞の楽しみ、女でいうと紅白粉べにおしろいの飾りも同じことで、本来はいずれも年に一度か二度の、晴の日のみに許されることであつたのを、自由に任せて毎日のごとくこれを受用し、結局は節日せちにちや祭の期日の印象を微弱ならしめたのである。しかもこの自由を富や権力の乏しい常民にまで附与したのは、

まったく外部社会の力であつた。煮売屋にうりやすなわち飲食店の出現はその一つである。いわゆる店屋物てんやものの主たるものは餅と団子、一方にはまた粗末ながら酒の肴さかなであつた。いずれも起こりは道中の茶屋からで、是は旅からきた異郷人の、接待だからすなわち晴であつたのが、漸次に附近村落の平常生活に持ち込まれたのである。その傾向の慨がいたん歎すべきものであるか否かを、判定するまでは我々の任務でない。我々はただ現在の日常生活が、こうした急激の変遷の結果であることを知ればすなわち足るのである。家が日本人の生活の単位であつた時代は過ぎ去つた。そうしてこの食物の個人主義を、促したものは雑ざつしやう餉すなわち弁当であつた。村の労働者がヒルマ・コビルマを食う習慣は相応に古いと思うが、そ

の頃からすでに今日の変革は萌^{きざ}していたのである。

家の光

改めて家の光ということ、考えてみる必要が起こつた。いかなる理由から、家庭には新しい光明が求められなければならないか。つたか。

雪や螢ほたるを集めたという昔話がある。もとは普通の人の家には、書物を読むだけの光が備わっていないなかつたのである。

今でも多くの山村には、ヒデ鉢ぼちという物が残っている。円まるくほ

り凹^{くぼ}めた石の皿、または破損した古鍋^{ふるなべ}などを用いて、その中で松の小割^{こわりぎ}木を燃したのが、以前の世の灯火であつた。

或いは僅^{わず}かな板切れに粘土を塗り附けてひでの鉢^あに充てたものもあつた。そんな質素な道具がまだ保存せられてあるのに、人ならば一代の間に行灯^{あんどん}となりカンテラとなり、石油ランプも三^{さんぶ}分^{しん}芯^{しん}から丸ボヤに進んで、ついに電灯の今日となつたのである。

家の明るくなるのは愉快なものである。独り夜分ばかりではない。紙の障子^{しょうじ}が自由に用いられるようになってから、窓も高く小さくしておくに及ばず、戸をたてておく必要がなくなつた。さらに硝子^{ガラス}の恩恵までが、今は農村にも及ぼうとしているのである。家は是^{これ}がために、単純なる休息の隠れがではなくなつた。明る

い家では隅々の物を片付けずにはおられぬように、外で労働をせぬ人々の余った時間を、自然に整理し利用して、それぞれに意味のあるものにしたのは、まったくこの家の光の力であった。

殊にうれしいのは少年や若い女性の、学問が自由になったことである。当人たちの考え次第に、どんな目的にでも時間を用立てることができるようになったことである。

昔は学問のことを勉強と謂^いっていた。何か一つの目的のために、強^{つと}いて勉^がめて我慢^{まん}をして学問をしたのであった。多くは新たなる職業のためであった。家々の灯火が明るくなってから、そんな必要の無い人も、楽に世の中のためにまたは愛する者のために、静かな時間を読書に費すことができるのである。

人が自分に入用なだけの学問を、勉強して修めている間は、まだ人間社会の全体を、これに由よつて改良する見込みは立たぬ。少しでも余裕の有る者が、他を助ける心持で、本を読みまた考えるようにならなければ、次の代は今よりも幸福にはならぬのである。大抵の家の主人は、生活の仕事が非常に忙しくなった。世の中もすでに行詰まって、棄てておいても自然に繁栄するほどに有望でない。正しい学問ばかりが国を済すくうことを得るのであるが、現在まではまだ誰が出てその任務に当るといふ者も無かった。そうして人は個々の奮闘に疲れようとしている。

幸いにして彼らの家庭には余った力があり時間があり、親切と愛情とがある。またこれを照すところの明るく美しい家の光があ

る。どうしても今後の学問は、家庭に入らなければならぬ。

或いは家々の事情に由よつて、その余裕のないという場合がある。文明を誇る国々の中流でも、家内の労作にはむだが無いかわりに、はや収入の補足のために、女も出て働くべき必要を生じている。そうなつてからでは致し方がない。日本のごとく家族が多く家において、何をしようかと思つていゝような国でないと、仮に必要があつても力をこの方面に用いる機会が無いのである。

また勿もちろん論最初から、大きい事業を望むことはできぬ。残念ながら今日の教育には、まだその十分な準備が無い。しかも働いて暇ひまの無い人々にかわつて、知識を搜索しまた新しい感動を求めて行くだけの、内助の力ならば与えられる。今日の学問には受売が

多く、是これぞとまとまつた指導の書物は無いのだが、時間を費し選
択に注意をすれば、家々の入用ぐらいのものはその中からでも見
いだし得る。

それよりもさらに大切なのは、この世この時代との連絡である。
生活に没頭する活動家には、往々この方面に意外の手抜かりが多
く、同情深い傍観者から、欠点を注意せられる必要は昔からあつ
た。しかも単なる婦女子の常識以上に、道理と説き方かねとに人を動
かすだけの力を持たせようとすれば、やはり予てから学び且つ考
えておらねばならなかつた。

我わがくに邦古来の貞淑の美德が、女の学問のためにただちに覆くつがえさ
れるもののごとく、もし憂える者があつたらそれは誤りである。

稀まれには小面こづらの憎い才女という者もあるか知らぬが、それは正しい
学問をしなかつたため、多くのやかましい女房は、勿もちろん論愚痴
無識の産物である。家門の紛争を増長せしめる類の弁舌や屁理窟へりくつ
は、仮に読書に由つてこれを学んだにしても、我々の名づけて学
問と謂うものではないのである。

故に学問とはどんなものか、人は何のために学問に向わねばな
らぬかという問題は、迂遠うえんなようだがやはり最初に知っておく必
要がある。何か一つの職業を目あてにして、進んで行こうとする
なら一定の方法もあり、またいわゆる女子教育振興の議論につい
て行つてもよいのであるが、今日の家庭のような自由な時間、自
由な教育のもとで一步を誤ると、或いは多くの小賢こせいかしい人が踏

み迷うたように、何でもかでも文字の排列してある紙さえ見ておれば、それで学問になると安心してしまわぬとも限らぬ。

全体に女性に読ませようとする印刷物が、現在は少し多過ぎる。馬鹿げた雑誌類が少し売れ過ぎる。読む前から分りきったような物ばかりに、潰^{つぶ}している時が惜しいと思う。その時間を集積してみたら、おそらくはいかなる難事業でもできるはずである。目前のためにもまた次の代のためにも、是ほど家々の学問の入用な時に、我も人もまた正しい選択と指導とを考えていないようでは、事によると折角^{せつかく}の家の光も、無用の裝飾に帰するばかりか、かえって今までは隠されていた内部の醜さを、暴露することになるかも知れぬ。

くり返して言うが日本の今日のごとく、家庭の学問のために都合のよい場合は稀である。この好機会が濫用せられていることは、何と考えても惜しいものである。

囲炉俵談

一

炉を中ロリという今日の語はどうして始まったか。こういうことを一つ問題にしてみたい。近世の文学はもとよりのこと、古くは『庭訓往来』ていきんおうらいなどにも「囲炉裏」の文字は用いられ、従うて中ロリと発音するのが正しいので、これと異なる語はみな「か

たこと」だと、学問のある人は誰でも考えているようだが、甚だ心もとない話である。なるほど漢語には「困炉」という熟字はある。しかしそれは動詞であつて物の名ではないうえに、これに

「裏」の字を附けて意味をなすわけもなく、またそれをこちらで配合して、音で呼ぶべき理由も無い。むやみに外国文物の外形ばかりを伝習した国の、一つの特産物たる「宛あて字」というものは、^{これ}是があることは明らかだから、その点を私は論じようとするのではない。問題はその「宛て字」の必要を促したもとの言葉が、いつから我^{わがくに}邦にありまたどうして発生したかということ、文字を離れて推究してみたいのである。久しく打棄ててあつた故に、これが存外に容易な仕事ではないのである。

二

「炉」という漢語が日本に入つて来たのは、囲炉裏の文字の出現よりはずっと古い。我々の先祖は太古から火を焚たいていたはずだから、その火焚き場を意味する名詞は、これに先だつて必ず有つたのであるが、少なくとも中央においてははや夙はやくこれを忘れていた。そうして偶然に中ロリという語にも口の音があつたために、それに基づいてこのような宛て字を發明したらしいが、はたしてもとの語が精確に中ロリであつたのやら、ただしは是と大分近い音であつたために引付けられたのやら、今ではまだ断定するだけの資

料が無い。これを決するにはその一つ前の日本語を見いださなければならぬ。そうしてこの語はすでに悠久の年代を経て、「炉」という名の輸入以前にも、かなりの変遷を遂^とげていたらしいのである。

史書にはこの経過を跡づける資料が至って乏しい。それ故に我々は書外の資料、無形の記録を尋討するのほかはないのである。地方に現在行われている言葉いは、むろん後代になって制作された流布したものがまじっている。しかし一つの単語の領域を広めるためには、幾つかの条件を具える必要があつて、物と一緒に移動して行かぬかぎり、個々の小さな中心で起こったものが、遠くの土地までを征服することはむづかしい。したがって互いに隔絶

した多数の一致は、かつて共々に一つの社会を構成していた時から、保存していたものという推測も下され、そうでないまでも少なくとも長い年月を経ているというだけは、一応は想像し得られるのである。

この点から考えてみて、ヰロリを意味する現在の日本語の、最も広く普及しているものはジロである。私の気づいただけでも、九州で宮崎県の南部、熊本県の球磨・葦北二郡、それからずつと飛んで信州の下高井郡、越後の魚沼地方、秋田県の仙北郡および岩手県上閉伊郡の一部に、イをジロと謂う方言があるほかに、島では鹿児島県の宝島と種子島、東京府下では八丈島、日本海では佐渡島外側の海府地方と、羽後の飛島と同じ語が

行われている。是は明らかに近世の運搬ではないのである。

この中で陸中の分だけはズロと報告している。これは聴きようでありまた写しようであろうと思う。これに反して他の二カ処しよでヂロと載せているのは（肥後ひご、信濃しなの）、ヂとジとの差異を聴き分けたのではなくて、おそらくジロは地炉だという学問が干渉したものである。有名な『後二年絵詞ごさんねんえことば』の「地火炉ついで」の話などもあって、「地炉」に近い語は早くから知られているが、右の全国的なるジロをもつて、軽率に地面にしつらえた炉のことと、解してしまうことは事実の無視になる。現在各地のジロはおおむね「すのこ」の上に切つてあるのが一つの理由である。第二には以前は床を張らぬ小民の家が多く、そこでは炉はことごとく地上

のものであつた。特に庭にわかまど竈かまどのみに限つて、この名を附与する必要はなかつたのである。

三

地火炉という名は現実にはまだ耳にしたことがない。是も漢字の組合せが無理だから、事によると中古の宛て字かも知れない。ジロは少なくとも炉が漢語から、成り立つたものとは言い切れぬのである。東京の近くでは信州さく佐久の川かわ上かみ地方から、諏訪・伊い那なにかけて南信一円、甲州のほぼ全部、駿河するがの富士川以東と伊豆いずの片端に、ギロリとヒジロという語が今も行われている。諏訪で

は是をまたヒタキジロとも謂うのを見ると、ヒジロはすなわち火を焚く場処たばしよ、ちようど英語の Fireplace と同格の語と考えられる。シロの古い用法は苗代なわしろに遺つてのこいる。中世の文書に見えまた地名に多い田代たしろという語なども、やはり田を作る予定地のことらしい。菌類きんるいの毎年多く採れる場処も、中部の田舎いなかではもっぱらシロと謂っている。越後では炉の片側の燃料置場を、タキジロまたはキジロという語がある。是が炉辺ろべたの下座しもざを意味する木尻きじりと混合して、薪まきを置く所をキジリという例はまた多いのである。ジロは初頭の子音が濁っている故に、古来そのままの形でないことは察せられるが、さりとして是だけ広汎な分布がある以上は、それをことごとくヒジロの省略と断定することも、今はまだ少しく躊躇ちゆうち

躑よせられる。或いは是が家の内でただ一つの、且つ重要な場
 処すなわちシロであつた故に、最初から簡単にシロと呼んでいた
 かも知れぬのである。とにかくにシロとヒジロとは無関係の語で
 ないということだけはまず確かである。

四

この二つの語の関係とよく似たものが、今一つは東北地方の、
 ホドとヒホドとの間にも見いだされる。ホドを現在キロリの意味
 に使っているのは、奥州では南部の沼宮内ぬまぐない、陸前の気仙郡けいせん、羽
 後の飽海郡あくみなどの数力所だけであつて、その他は陸中の上関伊かみへい・

江刺えさしの二郡、羽前の米沢よねざわ、南秋田の半島、および信州の下水しもみ内郡ちにおいて、いずれも炉ろの中央の火を焚たく部分だけをホドと謂いつてゐる。或いはそのまん中の熱い灰、すなわち信州でクヨウクリ、秋田ではカラスアク、雅語でオキともいう焚たき落おしの部分が、ホドというものだと思おもつてゐる者も福岡県などに有あるが、是は昔の調食法に最も普通であつたホド焼き・ホド蒸しの語からそういう風ふうに逆推さかしたただけで、この熱あつ灰はいには別にホドアクの名ながあり、ホドは本来はその場所の名であつた。ところが奥羽でも他の多くの地方では、中ちゆうロリ全体の名としてはホドだけでは通用せず、さらにその上に火を加えて、ヒホドという語が行いわれている。是は畢ひつき竟きやうホドの原意が一般にもう朧おぼろになつてしまつて、火ひ

どころ
 処だということを知らなかつたためかと思う。

ヒジロ・ヒホドの複合語において、火をホとは謂わずにヒと発音させようとした年代は、そう古いものでないに違いない。ところがヒホドの方は発音が殊に容易でなかつたと見えて、各地さまざまの音訛おんかがもう起こっている。元の形に近いものから列記すると、同じ陸中でも上閉伊郡にはヒボトが有るのに、和賀郡わかには外南部や津軽つがる・秋田の一部とともに、これをヒブトと謂う者がある。その津軽でも弘前ひろさきの城下はシホドまたはエリギというが、在郷の人々はシボトともシプトとも発音し、さらに南部領から氣仙方面にかけてはシプトがある。盛岡は鹿角地方かづのとともに炉をヒビトというとと報ぜられているが、是もその近傍にはシビトが控えてお

り、さらに南へきて『遠野方言誌』にはスビト、東山地方ではス
 ブト、仙台も盛岡も古い採集録にはかえつてスビトと出ている。
 こうなると炉や火桶ひおけをスビツと謂つた古語に近くなつてくるが、
 単なる一端の事例だけをもつて対比することはできない。現にヒ
 ボトもこのスビトも、同じ一つの郡内の併存であつて、双方互い
 に別の語だとは思つておらぬのである。

五

同じ東北地方の、しかも相隣あいとなりした村々の中に、数は少ない
 が炉をジロと謂いう例もあることは前に述べた。そこで問題になる

のはシロとホドと、いずれが古くいずれが後のものだろうかとい
うことであるが、それは私にはまだはつきりと言うことができな
い。普通の場合では東北と西南と、国の両端にあつて一致する単
語のほうが、早くから流布を始めたと見るべきであるけれども、
ホド・ヒホドの所在も国の一隅の、殊に古風を多く遺した地域で
ある上に、文献その他の傍証はホドに古く、ジロという語は新し
いというよりもむしろ稀まれである。一つの参考は越後蒲原かんばらなどの
昔話に、家の火の神すなわち荒神こうじんとか竈かま神のかみとかいうものを、
ホド神と謂い、また北信や岩手県下に、ホドを深く掘ると貧乏神
が出るとか、一つ眼という怪物が出るといふ口碑があることで、
ジロに関しては今はまだそういった話を聴かない。伊豆の三宅みやけ

島^まなども家の炉はジロと謂つたらしいが、火山の火坑だけは今もこれをホドと呼んでいる。ただし八丈島へ行くと、噴火口はカナドである。キロリをカナゴと謂う例は丹波^{たんば}の天田^{あまた}・何^{いかるが}鹿^か辺^べに一つあり、クヌギすなわち薪材をカナギという例は三河にも越前にもあつて、カナドもまた一つの炉を意味する名詞だつたらしい。人間の火焚き場には別の語を用いつつ、神の造りたまふ炉だけをホド・カナドと謂つたのは、後者が一段と古くからの存在であることを証明するものではあるまいか。是も追々の資料の発見によつて、判明すべきことを予期している。

ホドという語の分布は、伊勢の南端において竈をヒノボトという以外に、まだ中部・関西に及んでいる例を知らぬが、私は今日

弘く行われている竈のクドも、同じ一つの語から分化したものと
思っている。クドは京阪を含んだ近畿地方の、かなり前からの標
準語であるのみならず、西は九州の東岸から四国・中国の弘い区
域、北はまた奥羽の各地にも行われ、その中間の関東と北陸、佐
渡と熊野と淡路などに、ホドと最も近いヒドコという語があつて、
すべて今風の塗りベツツヒを意味している。是もジロ・ヰロリ等
の被覆せぬ火焚き場と区別するために、新たに是らの語を固定せ
しめただけで、特に変つた意味を最初からこの語が持っていたの
でもなければ、また今見る土竈の新設とともに、発明せられた言
葉でもなかつたらうと思う。『新編常陸国誌』を見ると、かの地
方ではホドもクドも同じものだと謂っている。東京郊外から下

総さの西部にかけては竈をカマダン、上州おうら邑楽郡ではカマンデエ、
 その東隣の下野しもつけ河内郡・下総さしま猿島郡ではカマツクドとさえ謂つ
 ている。すなわち弦つるのない今日の鍰つばがま釜を、載のせるようにできて
 いないクドも別に有つたのである。ヘツヒの古名の築つき竈かまどに転用
 せられたのも、新たに出来た語とは謂えぬが、クドも西日本では
 おそらくは新語でなかつた。ただホドという語が前からある奥羽
 地方へ、クドの形になつて入つてきたのは、土で竈きずを築く風習と
 一しよであつたために、爰こゝばかりでは是を別の語として受け入れ
 たので、日本全体からいうと是もまた由ゆい緒しよ久しい一つの古語で
 あらうと思う。

六

前置きが図らずも長くなつたが、私の説を要約するところということになる。口という漢語が我邦に入つて来る前に、炉を意味する日本語はもう幾つかできていて、地方的に割拠していた。カナド・ホド・シロなどがそれであつて、シロはのち一様にジロ・ヒジロと変り、ホドはヒホドとなつて東北に遺り、またクド・ヒドコと改まつて塗り竈の名に宛てられた。そうして旧来の平面の炉には、いつの間にか^{すわ}井口リという異風な一語が、代りに入つてきて黙つて坐つて^{すわ}いる。漢語の口という音をどう捻じくつても井口に^ねには成らぬとすれば、別にもう一つ是の前座であつた語を、見

つける必要もあり興味もあると言うのである。

いわゆる囲炉裏いろりに該当する府県の方言は、五つまではすでに挙げてみたが、ほかにまだ一つの別系統の語が、能登のとから越中えっちゅうにかけてかなりよく残っている。エンナカもしくはインナカというのがその最も普通な型であるが、土地によつてはヘンナカ・ヘナカ、時にはまたヘンカとも謂い、婦負郡ねいの或る村ではエレンナカというそうだが、是が少しばかりは辛ロリと近い。勿論もちろんどれがもとでどれが第二次の転訛てんかとも決し得ないが、エンナカは家中とも居きよ処しよとも解せられ、ヘンナカは火からの影響を受けたもの、エレンナカはかえつて辛ロリとの妥協とも見られる。いずれにしても是らの名称は、土地人相互の間にはまだ同語として意識

せられているのである。

この婦負郡のエレンナカに近く、西礪波郡にしとなみにはエレンバタ、エレバタ、またはエレブツ・エレボツなどの語があつて、是らとともに炉端ろばたのことを意味する。前者と比較すると、エレがホドまたはジロに当ることだけは察せられるのである。そこで今ある各地方の訛音なるものを見渡すのに、キロリと明瞭に謂うものはむしろ少なく、東北は弘前市のエリギを始めとし、秋田市のエルギまたはエルゲ、その隣の山本郡のエヌギ、鹿角郡かづののユルギがあり、福島県では石城郡いわきのイルギ、最上もがみや会津あいづや相州そうしゅう浦賀等のユルギのほか、飛んで隠岐おき五箇浦ごかのうらのエリリがある。だいたい発音のややむつかしい語であるためか、「ある」をユルとは決して

言わぬ土地でも、ユロリ・ユルリと謂う例は最も多く、東西二京の人までがうつかりするとユルリなどと謂っている。そういう中でも注意せらるべき一事は、九州などにこそR子音の脱落があつて、ユルイという語の行われるのは自然だが、他にその習癖のない長門阿武郡・周防熊毛郡、東では三河・伊豆などの一部にも、ユルイまたはユリーという発音の耳にせられることである。是には音声学者の説明し得るもの以外に、何か意義の方からの隠れた原因があるのではないか。確かな解決はまだできないにもかかわらず、私はなおこの方向に探究の歩を進めたいと思つている。

七

ふたたびからめて搦手へ戻るが、次のような点からも問題は考察し得られる。我々が人前へ出て口の利きけない者をひやかして、内弁うちべん慶けいだの炬燵こたつ弁慶だのと評することわざは、地方によって色々の言いかたがある。まず九州の日向ひゅうがでは横座よこざ弁慶、横座は炉ろの正面の主人の座である。陸中とちゅう遠野とのののロブチ弁慶、是も判わかっている。信州しんしゅう諏訪すわでは辛ベンケイ、出雲いずもではイノチベンケイと謂うが、『方言考』の後藤氏は「家の内」だろうと謂っている。秋田県の鹿角ではエノナカベンケ、是も石川・富山のエンナカと同様に、炉側のことではないかと思う。人が家にいるのは夜分か雨雪の日であり、家で明るい暖かい所は、炉端ろばたであったことを考えてみな

ければならぬ。佐渡さどは矢田氏の『方言集』には、ユリナタベンケイという語があつて、そのユリナタはまた炉端のことである。飛ひ騮だではヒナタともいうからナタはノハタの約、すなわち火のはた・ユリのはたであろうが、私はなおこのユリナタなどの方が前で、ユルリはかえつて是から後に生まれた語と思つてゐるのである。

家の中の生活には、ホドは勿論もちろん大切であるが、是を取とりめぐ繞らす炉ぶちもまた重要であつた。爰こゝで長幼の序が定まり、家長主婦の權威が確立するのみならず、火神の祭りも占問うらひいも、みなこの炉縁ろぶちの木の上で行われたのである。だから信州などでは是をオクラブチと称し、内弁慶を評してオクラブチを敲たたくとも謂つてゐる。オクラは御座であり、ホドの神の祭壇を意味する。マツコブチと

東北などでいうのは、以前は二ふた又またになつた木を必ず爰こゝに置いたからであろうと思う。その他フセンブチだのヒズキだのと、色々と変つた名があるが、その意味はまだ私には説明ができない。ジロブチ・ジロンブチという語は島々にもあり、またジロという語のすでに忘れられた秩父ちちぶ地方などにもある。炉の四側の家の者が坐臥ざが飲食する場所に、必ず総名のあるべきは当然で、それが佐渡のごときジロという語を知る土地でも、なお別にユリナタであつたのである。佐渡のユリナタは山形県の最上もがみ地方ではユリバタ、信州の小谷おたりではキルブチ、能登のとと加賀ではエンナタであつた。私の想像では、是らの炉端を意味する語の、起こりはいずれもキル（居る）という動詞にあつた。ちようど家の内の炉のある区劃を

ナカ_レ中またはジャウ_レ中と謂い、出でて客と対する^{ところ}処をデ_レ中と謂つたように、火に面した座席にも_レ中から出た名があつたのである。それがいかなる形であつたかは断定し得ぬが、或いは_レ中_レ中などではなかつたらうか。_レ中は坐^{すわ}ることであり、_レ中は座席のことである。_レ中は最も早くユ_レいと変化し得たが、或いはまた_レ中_レ中、ユ_レリ_レ中などであつてもよい。とにかくにそれがまず行われて且つ意味が忘れられた後に、_レ中の火そのものをユ_レりとか_レ中_レ中と言うようになったので、従うて_レ中_レ中は甚だしい宛^あて字ではあるけれど、なおその裏の字にも若干の根拠はあつたと言ひ得るのである。

(附記) 是は昨年五月の近畿方言学会の講演に、若干の資料を補足して解説を精確にしたものである。私の目的は一つの単語の知識を添えることではない。現在の辞典家の方法が危険だということを警告したのである。

火吹竹のことなど

一

早春に野をあるくと、いつでも思い出す『比佐古』の両吟、

雲雀啼く里は厩糞かき散らし

火を吹いて居る禅門の祖父

本堂はまだ荒壁の柱組み

珍碩
正秀
碩

羅綾らりようの袂たもとしぼりたまひぬ

秀

この頭を剃そつた老農の姿は、殊におかしくも又なつかしいが、作者の胸に描えいている古家の炬ばたの光景は、おそらくは火吹竹ひふきだけとは関係の無いものであつたらう。外はうらうらと緑に光つた空の下に、子どもも女たちも出て働はたらいている日、祖父だけが一人残せつて罐子かんすの火を焚たきつけようとしている。その丸坊主の脊せをくぐめた様子が、この上も無い俳諧はいかいに感じられたものと思われる。

私などの小さい頃の田舎いなかには、火吹竹の無い家などは一軒も無かつたように記憶するが、それが追々に無くてすむことになつたと同じく、以前もそれを使わぬ農家が幾らもあつて、この物の存在あしかがはすでに足利期末にも知られていたにかかわらず、微々たる

発明であるだけに、存外に流行が遅々としていたのである。この頃必要があつて地方の言葉を集めて見るのに、火吹竹という名で知られている区域は必ずしもそう弘ひろくなかつた。まず九州は南部の各県でヒオコシ竹というのがこの物の普通の名であつた。オコス・オコルは燠（オキ）という名詞から出たらしく、少なくとも火を燃すことには関係が無い。炭に火種を添えて火を熾さかんにすることは、炭の常用よりも後に始まつた作業で、すなわちその時期に入つてから、始めてこの地方ではその効用を名にしているのである。佐賀・長崎の方面には、またフスリ竹という名もある。フスルは燻くすぶるといふ動詞の方言のようだから、この地方では焚付けのために、すでにこの竹を使つていたことはわかるが、名から想

像するとまだ十分にその価値を發揮していなかつたかとも見える。

それから東に進んで中国地方、近畿は一帶に火吹竹の領分だつたはずであるが、大和やまとの南の方などには別になおイキツギ竹という異名も行われている。いかにも火を吹くという事は骨の折れる仕事であつた。女は髪をよごし煙を忍んで、折角せつかく吹付けていてもちよつと休むとむだになる。ところがこういう器械を使えば空気の補充が容易なことから、つまりこの名称は経験から生まれたものである。しかも燃料の節約が必要になつて、いわゆる困い炉ろ裏りをや罷め土の竈かまどを専用するようになれば、どんなに息の強い爺じいの禪門でも、この竹無しには火を吹くことができない。そうして、中央の平坦部の農村が、煮炊きを竈でするようになったのも久しい

ことであつた。

二

遠州の浜松附近には、火吹竹をフキツボという方言が今でも行われてゐる。是これから推測するのは吹竹の一つ以前、何かまた別種の器具が行われていたのではあるまいかということである。竹の筒つつでも壺つぼと謂いえないこともないが、そう名づけるのにもつと適切なな、或いは瓢ひさいこのようなものを曾かつては利用してはいたのではなかつたか。たつた一本の竹を節をかけて切り、底に小さな穴をあけるだけの考案ではあるが、竹の得られぬ土地も全国には随分多く、錐きり

は殊に家々に具わった道具でない。その上にこんな小さな穴をあけただけで、火を吹く呼吸が調節せられるということも、そう安々とは心づく法則ではないのである。後から考えればこそ何でもない話のようだが、最初は是でも発明であり、または幸福なる発見だったのである。群馬県の一部には、また火吹竹をタウブキと謂っている処ところもある。タウは大抵は著しい改良、以前あつたものに若干の変更を加えて、一層の便宜を得た場合の讃辞のようになつてゐるから、或いは是もまた唐吹壺とうぶきつぼの下略であつたかも知れない。日本の新物尊崇は大抵は商人に刺戟しげきせられている。そうして火吹竹なども手製が少なく、つまりぬ物だがやはり荒物屋から、買ってくる家が多かつたのである。

火吹竹の歴史は、私だけは穿鑿する価値があると思つてゐる。主たる理由はこの物がすでに用が無く、急激に消えて跡を留めざらんとしている点にあつて、人がそのために根源の存在理由を忘れ、最初から無益の物好みのために、こんな何でも無い流行を追うていたように、速断する虞おそれがあるからである。火吹竹を不用にした強力なる新文化は、前後三つまでは私に算かぞえ上げることができ。そのおしまいの止めを刺したものが、燐寸マッチであつたことは誰でもよく知つてゐる。マッチはたった一本で放火さえできるのだから、是がそこいらにあれば無論吹竹はいらない。しかもこの物が普通の生活に入つてきたのは半世紀、せいぜい明治の十年代からで、それ以前は開港場に往来する者が、持つて還かえつて自慢に

する魔法に近いものであった。燐寸は人間の骨で作るそうなど謂つて、神仏の淨きよい火は特に燧ひうちいし石いしで鑽きり出し、商人の方ではまた決して穢けがれてはおらぬということをし、箱こごとに明記していたのも近い頃までの事であつた。土地によつては今でもランツケギまたはアメラガなどと称して、明らかに舶来の文化であることを認められている。

しかもその附木つけぎというものがまた一つの新發明であつて、やはり火吹竹の社会上の価値を、否認しようとする力であつたのだが、普通の火の歴史ではわざとかも知らぬが、もうそれより前さかのぼへは溯さかのぼつて行こうとしていない。こんな物が夙はやくからもしあつたら、実は火吹竹などは無くてもすんだのである。ツケギという言葉も全

国には普及していない。日本の西半分、殊に日本海に面した側では、今ある附木をも併せてツケダケと呼んでいる。ツケダケのタケは焚くという語との関係も考えられるが、なお私たちは竹細工の屑くずのことだろうと解している。それを乾かして貯えて置いて、直接おきに燠おきの火にその一握ひとつかみを押当てて吹いたのである。或いは枯草や木の葉もそのかわりに使った。関東・東北では燐寸の御時世になっても、なお火を作ることをフツタケルと謂っている。吹くという行為は是ほどにも必要であつた。もしも木片の頭に硫黄いおうを塗り付けた附木があつたら、屈かがんで頭の髪を灰だらけにする苦しみはなかつたのである。

三

今ある附木は上方かみがたでは一般にイロンと謂いっている。或いはタチヨーなどと呼んでゐる土地もある。タチヨーはすなわち立て硫黄であつて、尖さきだけに火を引きやすい硫黄を塗つたために、暫しばらくはこの木を立てて置くことができたからの名と思う。津つがる軽・秋田その他では是これをマサツケギ、またはタウチケゲとも謂いつてゐる。唐附木とうつけぎというからには前からの附木もあつたのであるが、それにはこのような桎まさぎを使うには及ばなかつた。桎は屋根に葺ふき箱はこお桶けに曲まげ、または桎まさぎ 仏ぼとけと謂いつて塔婆とうばなどにも使つたもので、いくら粗末に割つてもこれを焚付けにするのは惜しいようだが、

これさえあれば豆ほどの埋^{うず}火^{みび}を起こしても、自由にたちまちに大きな火を焚くことができる。支^シ那^ナから学んだか国内で思いついたかは知らぬが、とにかくに是は氣^きの利いた考案であつた。硫黄も日本には有り余るほどあるのだが、こんな簡単な二つの物の組合せによつて、容易に商品となつて隅々までも輸送せられている。附木を贈り物の返礼に入れる風習、または細^こく裂^まかずに一枚の附木を使ったために、身^{しん}上^{しょう}が持てぬと謂つて帰された嫁の話なども、つまりはこの物が火吹竹と同じに、錢^{ぜに}を払わなければならぬ発明であるが故に、我々の親たちがやや過度の尊信を是に払つていたことを語るものであらう。

ホクチも商品の最も低価なものに算^{かぞ}えられていたが、是は山村

だけにはまだ自給する家が少しはあつた。その材料は土地ごとに
 甚だ区々まちまちで、蒲がまや芒すすぎの穂の枯れたものも使えば、或いは朽木くちぎの
 腐りかけた部分を取つてきて、少し火に焦こがして貯えて置く者も
 あつたが、色はクマボクチなどと謂つて黒いのが珍重せられてい
 た。勿論もちろんこの方が火つきが好よかつたためで、是は炭の粉を交ぜ
 ればすぐにできることだが、こんな何でもない工夫でもやはり商
 人に始まり、それで追々と商品化してきたようである。いつから
 是が日本に始まつたかといふことは記録に見えぬが、燧ひうちいし石いしの
 使用に伴なうものだから、やはりまた一箇の新發明であつた。燧ひうち
 で火を鑽きるといふことは大昔からで、なんぼ何でも是くらいは原
 始文化であろうと、思っている人も有るか知らぬが、それも推量

はちがつている。民族を一団として言えばどこかの中心に、夙はやくからその器具と技術とは備わっていたのだが、是を家々の自由に供与するまでには、やはり永い年月と手順とを要したのである。燧石は稜かどがあるからカド石という土地が多い。そのカド石は山で拾い、または川原にあるものを割つても用いられるとしても、一方の鉄だけは鍛冶かじが来て打つてくれるのを待たなければならぬ。ことに小形の火切鎌ひきりがまなどを、燧ひうちぶくろ袋に入れてどこへでも持つてあるくには、是がまた一個の商品となつて常に売られることを必要とし、そういう時代はなかなか田舎いなかへは来なかつたのである。ホクチが便利なものとなつたのは、またそれからのことであつた。是も硫黄の附木が発明せられてからは、ほんの少しばかり有れば

よかつたのだが、以前は多量のホクチを媒なかだちにして火を鑽つて是を焚付けへ吹付けたものらしく、その痕跡は近世の火打箱の構造にも残っている。火打箱は長方形で中を二つにしきり、小さい方に鉄と燧石とを置き、一方にはホクチを一ぱい入れてあつた。それへ燧の火を切り落して、もとは毎回全部を燃していたかと思われる。それがいわゆるイヲンを用い始めてからは、ほんの少しですむようになった。すなわち次の発明はいつでも以前のものを安っぽくして行くのである。

四

このホクチや燧ひうちいし石以前というものが、殊になつかしく我々には回顧せられる。消すと容易には作れない火であった故に、爰ここに隣からの火貫ひもらいという交際が結ばれ、また家々では炉ろの火を留めるといふことが、肝腎かんじんな主婦若嫁の職務となり、さらに翌朝はその火を掻かき起おこして、フツタケルということが技術ともなつていたのである。火吹竹の発明は是に対する援助であつたが、或いは土地によつては十分にその恩沢に浴せぬうちに、また次のホクチや附木・燧寸マツチの時代に来てしまった家もあるかと思う。しかしこの火を吹くという古式は、ちようど燧寸の排斥と同じように、そう簡単には棄てられてもしまわなかつた。たとえば年越や節供りようの前夜には、特に清い火をこしらえて翌朝の神供じんぐを調える料りようにい

けて置き、または正月中は同じ火を続けるために、節櫓せちぼだなど
 いう太い薪まきを使うところもある。それへ上手じょうずに灰を掛けて、朝は真
 赤な燠おきになつていようようにして置く事が、今でも家刀いえとじ自の技倆ぎりよう
 であり、また威望の根拠でもあるごとく見られていた。背戸せどから
 隣の家へそつと火を借りに行くなどということは、勿論もちろんもう必
 要の無いことであるが、それでも昔大歳おおとしの夜おそく、火種たやを絶
 してしまつた新嫁が、途法にくれて門かどに出て立つていると、遙はるか
 向うの方から炬たいまつ火が一つやつてくる。この棺桶かんおけを預かつてく
 れるならば、火を貸そうと謂つたというような昔話がまだ残つて
 いる。ようやく火を貰つてその棺桶なんどを納戸かくに匿して置いたのを、
 正月になつてからそつと開けて見ると、中には黄金こがね・白金しろがねが一

ぱいという類の、人が夢見得る限りの美しい空想が是に続いたのである。火を吹く生活の現実の悩みに触れた人でないと、こういう二つの大きな感動を繋ぎ合わせた、古い文芸の意図は捉えにくいかと思う。

瓦斯や電気の炉をかかえこんだ人たちと、この種の昔を話し合うことは容易でないが、私たちには是が歴史の学問と呼ばれてもいい部分であるように思われる。現に我々の親・おおじの通つて来た路が是であり、今でも一部の同胞が天然に阻まれて、なお脱却しかねている境涯も是だからである。もつと詳しく説くならば灯の火にも、細かな段階があり且つ急激な変遷がある。水を得る方法なども土地ごとにちがって、是は殊に昔の人たちの悩み苦し

んでいた状態に、今なお留まつて進めない者が多いのである。現在がすでに昔ではないことと、新たな大御代おおみよの文化というものに、多くの人々は恵まれ、また僅わずかな人々が洩もれていることを、是ほどわかりやすく女や子どもにも、解説し得る実例が具わっているのに、それを棄て置いてむつかしい呪文じゆもんのようなことを、高く唱となえている連中の心持が、何としても私たちには不思議である。

女と煙草

女が煙草タバコを吸うということは、そう古く始まった風習でないに
きまつているが、奇妙に日本人の生活とはなじんでいる。このあ
いだも旧友の一人に逢あつて、その細君が小娘の頃、ひらひらの簪かんざし
などを挿して、長煙管ながキセルをくわえていたことを思い出しておかし
かった。この婦人の里は村の旧家で、広々とした囲炉裏いろりの間にめ
つたに人も来ず、それにおかあさんが心配の多い人で、始終煙草

で憂いを忘れようとしていたらしいから、そのお相手をしていて覚えたのかと思われる。今一つの記憶は、これももう老婆になっている親類の家内が、嫁に来たときには私の家を中なかやど宿にした。

どんなお嫁さんかと思つて挨拶に出て見ると、それはそれは美しい細い銀煙管で、白い小さな歯を見せて煙草をのんでいた。こういう光景はもうおそらくは永久に見ることができぬだろうと思う。

数年前に私の家のオシラ様を遊ばせに、奥州の八はちのへ戸から来て

くれた石橋おさだというイタコは、何がすきかと聴いたら煙草だと即座に答えた。この女は十五の年にはもう煙草を吸っていた。

だんだんと眼が悪くなつてきたとき、何とか院の法印さんが祈きとう禱をしてやるから、煙草を断ちますという願掛けをせよと教えてく

れたけれども、私は見えなくなつてもようござんすからと謂つて止めなかつた。そうしてついに巫みこになつたのだから、この女などは少しかわつてゐる。

しかし私はこの話を聴いて、ふと気がついたことが一つあつた。
りゆうきゆう 琉球の旧王室では、以前地方の祝女のろかしらの頭たちが拝謁に出たと

きに、必ず煙草の葉をもつて賜たま物とせられたことが記録に散

見している。宮古みやこや八重山やえやまの大阿母おおあもなどは、危険の最も多い荒海

を渡つて、一生に一度の参観さんきんを恙つつがなくなしとげることが、神々

の殊なる恩寵おんちようと解し、また常民に望まれぬ光榮としていた。

そういう人間の大事件を記念するものが、たちまち煙となつて消えてしまふ一品であつたということは、何かまだ我々の捉え得な

い隠れた力が、この蔭かげにあつたからであろう。それがこのおさだ子この話によつて、少しずつたぐり寄せられるように、私には感じられたのである。

陸前とよまの登米とよまで生まれた人の話に、この人の父は毎朝煙草をのむ前に、そのきざみを三つまみずつ、火入れの新しい火に置いて唱えごとをした。「南無阿保原なむあぼはらの地蔵尊、口こうちゆう中いっさい一切やまいの病を除かせたまえ」と言つて、その煙草を御供え申したのだそうである。阿保原の地蔵は刈田郡かいたにあるというが、私はまだ詣まいつたことも無くまた書物などでも見たことがない。こういう信仰行事は他にもあることであらうか。もう少し例を集めてみたいものと心がけている。信州北安曇郡きたあづみの郷土誌を見ると、この郡北城村きたじようの切き

久保りくほという処ところには、昔おかるといふ若い女が、鬼女になつて入つたといふおかる穴といふ岩屋がある。『小谷口碑集おたりこうひしゅう』にもそのおかるの話は出てゐるが、それは面を被かぶつて姑しゅうを嚇おどしたら、その面がとれなくなつたといふやうな話で、どうも最初のものとはいへないやうだが、この穴の口にも村の人たちが、煙草を持つて行つて供える風ふうがあつた。おかるは煙草がすきであつたからといひ、穴の口に置くといふの間にか無くなるとも謂つてゐるが、どういふ場合にこれを供えたのか知られてゐない。秋田県の北部、雪ゆきさ沢村わの枝郷えだむらの黒沢といふ部落では、鎮守ちんじゆの雷神らいじん様がお嫌きらいだからと謂つて、一村の者すべて煙草をのまず、甚だしくこれを忌いみ避さけたといふことだが、現在はどうなつてゐるかを知らぬ。

にしつがる 西津軽 深浦ふかうらの近くの 広戸ひろとという 部落でも、以前は男女の分ち
 なくすべて煙草をのまなかつた。是これは理由を伝えてはおらぬが、
 多分また信仰からであろうと思う。この二つの事実は菅江氏すがえの
 『筆のまに〜』に見えている。誠に何でもない小さな事のように
 だが、始めてこういうことを考え出し、または容易たやすく同意をした
 人々の、心持はまだ神秘である。能登のとの長尾村には、昔弘法こうぼうだい大
 師しから授かつたという煙草の種があつて名産になつていた。薩さ
 摩つまの冠かんむり岳だけには蘇我煙草そがタバコと称して、蘇我馬子そがのうまこと関係づけられて
 いた天然の煙草というものもあつた。そういう意外な信仰もある
 のである。

ずっと以前瑞西スイスにいた頃に、回教は亜細亞アジア向きの宗教らしいと

いう話をした人がある。耶蘇教ヤソキョウは信じてもやがて醒めるが、回教に入つた者は出てこないということを謂つた。煙草もそのようだと私は答えたことを覚えてゐる。公認せられたる歴史では、煙草だけは我々は西洋人の後輩だが、心酔の仕方においてはかえつて師をしのいでゐる。少なくとも西洋の者のせぬことをし言わぬことを言つてゐる。考えてみなければならぬ点だと思ふ。是も今は昔、或る一人の親族の老女に教えられたのは、煙管キセルで吸つてゐると時々何とも言えぬくらい、甘くておいしいことがある。それをこの人たちはああ千づく目だなど思つたり言つたりしたそうである。阿片アヘンは支那シナにおいては戦争より大きな事をしてゐるが、始めて白人が是を廈門アモイの駐屯軍チュウトンくんへ持つてきたときには、単に

煙草のまぜ物として売つたのだそうである。のむという語と吸うという語と、またくゆらすという語との差がここにあるのである。初期にはどうであつたか知らぬが、少なくとも今日の西洋人はただ口中を燻くゆらすばかりで、鼻の穴からもめつたに煙を出さない。これに反して我々はよほどわるい煙草を吸っているが、それでも息の底まで吸い入れぬと承知をせぬ人が多いのである。それ故に是が神経系統に与える影響は、向うの本には依よれないものがあるかと思つている。吸付け煙草の風習は、たしかに古来のモラヒ、すなわち共食の心理と関係がある。女性の親しい友だちが是をしているのを元はよく見たが、単に煙草を貸すとか火を附けてやるとかいうためだけでなく、自分もゆつくりと吸つてからそのあとを

相手に渡すのである。近頃は巻煙草になってどう変ったか知らないが、この風ふうが特に遊里に盛んであったことは、近世の市井しせい文学によく見えている。吸付け煙草というのはむしろ新しい言葉で、それ以前は是をもツケザシと呼んでいた。ツケザシは誰でも知っているように、本来は酒の一つの作法であった。すなわち酒しゅはい盃の滴しずくを切つてしまわずに、思う人の手に渡すことで、最初は多分同じ器から分ち飲むことであつたろうと思う。是が男女の情を通わす方式になつたのも自然であつて、そのためにこそしばしば刃に傷んじょうにも及ぶような、若い人々の盃論が起こつたのである。煙草の供給が是と同じ名を用いていたとすれば、種類はちがうがやはり是からくる恍惚こうごつの感覚を、二人で分かとうとする目的があ

つたので、神に神酒みきを捧げてそのおろしを戴いたこうとする心持と、煙草のお初穂を地蔵様に供えようとする趣旨とには、偶然ならぬ共通があつたのではあるまいか。遠い離島の神を祭る女たちが、かつて王廷から頂戴した数十枚の煙草の葉を、どうして消費したかには、云い知れぬ興味があるが、それを今から尋ねることは容易でない。しかし日本人のきれぎれの生活ぶりから、注意して古い体験の痕あとを集めて見ることまではできるかと思う。言葉にはそれを言い現わすものが伝わらないでも、強い感覚ならば何かの形で、顕あらわれずにはいないはずである。そうして問題はなお一步を進めて、香こうと信仰との年久しい習慣にも結びつけられそうに私は思う。

酒の飲みようの変遷

一

酒を飲む風習は日本固有、すなわちいつの頃とも知れぬほどの昔から、続いているものに相違ないが、その風習の内容に至っては、昔と今との間に大きな変遷がある。これだけは是非とも日本人として、はつきりと知っていなければならぬ。この古今の移り

替りを一通り承知した上でないと、各人はまだ自由に、酒を飲んでよろしいか悪いかを、判断することができないのである。

酒の飲み方がどういう風に変ったかは、書物を読んでみても一向に書いてはない。しかも知ろうと思えばその方法は別にあるので、殊に最近の歴史だけならば、多くの人たちは自分でもまだ覚えていゝる。大体に一人一人の飲む分量が、半世紀前と比べてはよほど減ったかと思われる。下戸げこの増加したこともたしかであるが、それよりも大酒飲みという人が少なくなり、平均消費は減退の傾向を示している。いわゆる斗酒としゆなお辞せずという類の酒豪の逸話は、次第に昔話の領域に入つて行こうとしている。もとは正月の街頭風景であつた生酔いの礼者、

なまよひの礼者を見れば街道を横すぢかひに春は来にけり
などと詠よまれたものが、絶無でもあるまいが今日はよほど珍しい
見ものになった。酒乱は一種の病氣と認められ、その療法として
はたちまち禁酒を申し渡される。以前は御祝いの日の附き物であ
った例の小間物屋開店などの慘さんたん澹たる光景も、知らずにしま
う女子供が多くなつてきた。是これなどは明らかに一種急性の中毒症状
なのだが、或いは主人側の款かんたい待が是ほどまでに徹底して効を奏
したという証拠のごとくにも解釈せられ、もとはこの介抱だけは
眉を顰ひそめる人もなく、普通に酒宴の後始末として女たちが引き受
けていたのである。

単に酒の価が以前は安かつたから、多く飲んだという経済的な

理由だけでなく、一般に酒の毒は昔の方が急劇であつたのかも知れぬ。中世の記録を見ると、公けの御宴会でも^{えんずい}淵酔とか^{ちんずい}沈酔とか謂つて、多くは正体がなくなり、またこのような失敗を演ずる者が、いくらもあつたように記してある。高くもなつたけれども酒の質が、今は前代とは比べものにならぬほどよくなつたのである。その上に味もよくなり、色もいよいよ美しくなつて、幸か不幸か嗜好品^{しこうひん}としての資格を、だんだんと具備するようになってきたのである。

酒を飲む機会の昔と比べて、非常に多くなってきたのも、一つはその結果と言つてよいのである。いつでも飲みたいという人が沢山に出てこなければ、造り酒屋は商売として成り立つはずもなく、また又またろく六などと呼ばれる取売店とりうりみせが、はんじよう繁昌するようにはならなかつたわけでもある。もつと尤も近年のびんづめ鑿詰小売法が考案せられてから、急に僻村へきそんでも酒が手に入りやすくなり、従つて酒を飲む癖を普及させたことは争われないが、是とても時を構わずに飲むという慣習が、すでに公認せられていたからできたことで、少なくとも第二次の新たな原因というに過ぎない。酒屋は言わばこの人間の弱点に乗じて、起こりまた栄えた業務であつたのである。

しかも昔の純然たる自給経済の時代には、飲もうにもその酒を得る道が、無かつたということがまた事実である。酒を飲むべき機会は限定せられ、且つ夙はやくから予期せられていた。大体に神に酒を供える日と、同じであつたと謂いつて誤りが無い。そうして日を算かぞえてちようどその日に飲めるように、めいめいの家で支度を
するのだから、消費が自由でなかつたのは勿もちろん論、そう佳よい酒の飲めるはずもなかつた。それが人さえ出せば町まち方かたから、いつでも菰こもかぶりが取寄せられるようになった、始めて今日のような酒宴が、随時に開かれることにもなったのである。酒の普及がこの
四斗樽しとだるというものの発明によつて、たちまち容易になつたことは争あわれない。しかもその桶屋おけやの業、すなわち竹をたがにして大き

な桶や樽を結ぶ技術は、近世に入るまでは都会でも知られていなかった。

酒はそれ以前には酒甕さかがめの中で造っていた。『更級日記さらしなにつぎ』の

文にも見えているように、その甕は土中に作り据えてあつて、酒を運ぶにはさらに小さな瓶かめを用いていた。村で酒を造るには村桶があり、また贈答用の角樽つのだるもできていたようだが、いずれも檜ひのきの板を曲げて綴とじた曲げ物だから、そう大きな入れ物にならなかつたかと思われる。四国・九州の多くの土地では、今でも祝宴の翌日または翌々日、手伝い人や家の者を集めて、慰勞の飲食を供することを、「瓶底飲かめぞこのみ」とも「瓶こかし」とも謂っている。北国一帯ではまた是を残のこりざけ酒とも呼んでいた。すなわちこの祝

宴のために用意せられた酒は、この際に底まで飲み尽して瓶を転がすといふので、この日が過ぎるとあとはまた永く酒無し日が続いたものと思われる。ただしそういう中でも正月の酒、神々に御供え申しましたは年頭の賀客と汲みかわす酒だけは、その入用が前もって知れているのだから、或いは秋の収穫後の祭礼の酒を、別に一瓶だけ余分に造つて、残して置いたかと思われて、暮の支度のいろいろとある中にも、正月酒を仕込んでいたらしい形跡は無い。いつ頃からそのような便法が始まったかは知らぬが、とにかく酒の貯蔵といふことは、是が動機となつてぽつぽつと始まつてきたようである。

以前の正月の祝賀の歌には、しばしば「古酒の香^か」を悦^{よろこ}ぶ文句

があつた。是を正月の楽しみの一つに、算かぞえていたことだけは確
 かである。貯蔵が酒造りの技術の改良のもとになつたことも想像
 に難かたくない。少なくともその貯蔵の酒には品質の高下こうげがあつて、
 奈良とか河内かわちの天野あまのとか、佳よい酒ができる、その評判が高くな
 り、人がその名を聴いて飲んでみたがるようになった。是めいが銘し
 酒ゆという語の起原である。酒は本来は女の造るものときまつて
 いたのに、こういう銘酒の産地が、多くは婦人と縁のない寺てらかた方
 であつたということは、ちよつと珍しい現象である。足利あしかが後期
 の京都人の日記など見ると、別に「ゐなか」という酒が地方から、
 ぼつぽつと献上せられ且つ賞玩いなかせられている。田舎いなかと謂つても勿も
 論ちろん富豪の家であろうが、こうして自慢の手造りを、京まで持参

しようとするのだから、もうこの頃には貯蔵の風が弘く行き渡り、或る家には飲まずに辛抱している酒というものが有ったのである。しかしそういう酒の自由になる人は、おそらくは有力者だけに限られていたことであろう。事実また尋常の日本人は、秋の穀物の特に豊かなる季節に、祭礼とか秋忘れの寄合いを目あてに、大いに飲むつもりでめいめいの酒を造ったので、貯えて置けるようならよいのだが、大抵は集まって皆飲んでしまったらしい。

秋になるより里の酒桶さけおけ

という『曠野集』の附句もある。或いはまた、

ふつくくなるを覗く甘酒のぞく あまざけ

という『続猿蓑』の句などもあつて、またこの頃までは甘酒の

醜^{はつこう}酔^酔して酒になる日を、楽しみにして待っている人も多かった。それが一年にまたは一生涯に、数えるほどしかない好^よい日であったことは言うまでもない。だからいよいよその日が来たとなると、いずれもはめをはずして酔い倒れてしまったのである。

三

それからまた一つの制限は、昔は酒は必ず集まって飲むものときまっていた。手^{てじやく}酌^酌で一人ちびりちびりなどということは、あの時代の者には考えられぬことであつたのみならず、今でも久しぶりの人の顔を見ると酒を思い、または初対面のお近づきという

と飲ませずにはおられぬのは、ともに無意識なる昔風の継続であった。こういう共同の飲食がすなわち酒盛りで、モルはモラフという語の自動形、一つの器の物を他人とともにすることであったかと思われる。亭主役のちゃんとする場合は勿論、各人出し合いの飲立て講であつても、思う存分に飲んで酔わないと、この酒盛りの目的を達したことにはならなかつた。すなわちよその民族において血を啜^{すす}つて兄弟の誼^{よしみ}を結ぶというなどと同じ系統の、至つて重要な社交の方式であり、したがつてまたいろいろのむつかしい作法を必要としていたのである。

婚礼とか旅立ち旅帰りの祝宴とかに、今でもまだ嚴重にその古い作法を守っている土地はいくらかもある。吾々の毎日の飲み方と

最もちがう点は、簡単にいうならば酒盃のうんと大きかったことである。その大盃が三つ組五つ組になっていたのは、つまりはその一々の同じ盃さかずきで、一座の人が順々に飲みまわすためで、三つ組の一巡が三献さんけん、それを三回くり返すのが三三九度で、もとは決して夫婦の盃には限っていなかった。大きな一座になると盃のまわってくるのを待っているのが容易なことではない。最初は順流れまたは御通しとも称して、正座から左右へ互いちがいに下つて行き、後には登り盃とも上げ酌なども謂つて、末座の人を始めにして、上へ向かつてまわるようにして変化を求めたが、いずれにしてもその大盃のくるまでの間、上戸じょうごは咽のどを鳴らし唾つばを呑んで、待遠しがっていたことは同じである。この一定数の巡盃が終

ると、是でまず本式の酒盛りは完成したのであるが、弱い人ならそれで参つてしまふとともに、こんなことでは足りない人も中には居る。それらの酒豪連をも十分に酔わせるために、後にはいろいろの習慣が始まつた。お肴さかなと称して歌をうたい舞を舞わせ、または意外な引出物を贈ることを言明して、その昂奮によつてもう一杯飲み乾させるなどということもあつた。亭主ていしゆ方は勿論強しいのをもつて款待かんだいの表示としておつて、勧め方が下手へただと客が不満を抱く。だから接伴役にはできるだけ大酒飲みが選抜せられ、彼らの技能が高く評価せられる。酒が強くて話の面白い男が客の前へ出て、「おあえ」と称してそこにも爰こゝにも、小規模な飲み合さかずきいが始まる。或いは客どうしで「せり盃さかずき」などと称して、あなた

が飲むなら私も飲むという申し合わせの競技をしたり、または

「かみなり盃」と謂つてどこに落ちるかわからぬという盃を持ち

まわつて、その実予て知つて^{かね}いる飲み手に持つて行つたり、また

或いは「思いざし」などと謂つて、やや遠慮をしている人に飲ま

せようとしたりした。酒宴の席の賑かなの^{にぎや}を脇で聴いていると、

大抵はこんなつまらぬ押問答ばかりであつた。しかしそうして見

たところでお迷惑する人が、飲みたい方にもまた飲みたくな

方の人にもできるので、これを今一段と自由にするために、いつ

の頃よりか「めいめい盃」というものが発明せられた。是は一つ

ずつ離れたやや小さな^{ぬりさかずき}塗盃で、始めから客人の御膳^{おぜん}ごとに附

いている。これを用いるようになってから、組の大盃のまわつて

くるのを待たずに、向こうもこちらも一度に飲むことがやつとできたのである。今日の小さな白い瀬戸物のせとものチョコなるものは、つまりこの「めいめい盃」のさらに進化したもので、勿論二百年前の酒飲みたちの、夢にも想像しなかった便利な器だが、一方そのために酒の飲み方が、非常に昔とちがった、だらしないものになった。酒を飲む者の目的または動機が、おそらくこの陶器の酒盃の出現を境として、一変してしまつたろうと思われる。徳利とっくりは或いは独立して、酒を温める用途にもう少し早くから行われていたかも知れぬが、少なくとも盃はいせん洗などというものはその前には有り得なかつた。是で盃をすす濯ぐことをアラタメルと謂つたのも、もとは別の盃にするという意味で、「金色夜叉こんじきやしや」の赤檜満枝あかがしみつえ

という婦人などが、「改めてごさいませんよ」と謂つて、盃を貫かんいちにさしたのを見ても判わかるように、本来は同じ盃の中のもの、分ち飲む方が原則だったから改めなかった。それを今日は見事に飲み乾すのをアラタメルのだと思う者さえある。是ほどにもまず以前の仕来りを忘れてしまつているのである。

四

支那シナの文人などには、独酌の趣を咏えいじた作品が古くからあつたようだが、此方こちらでは今でも普通の人は酒に相手をほしがる。一人で飲むにも酌をする者を前に坐すわらせ、また時々はそれにも一杯飲

ませようとする。そうして手酌てじやくでこそと飲んでゐる者を、
気の毒とも悪い癖とも思う人は多いのである。この原因は今なら
ばまだ尋ねてみる事ができる。現在は紳士でも屋台店やたいみせの暖簾のれん
をかぶつたことを、吹聴する者が少しずつできたが、つい近頃ま
では一杯酒をぐいと引掛けるなどは、人柄を重んずる者には到底
できぬことであつた。酒屋でも「居酒屋いざけいた致し候そうろう」という店はきま
つていて、そこへ立寄る者は、何年にも酒盛りの席などには列つらな
ることのできぬ人たち、たとえば掛り人とか奉公人とかいう晴れ
ては飲めない者が、買つては帰らずにそこにいて飲んでしまふか
ら居酒であつた。是これをデハイともテツパツともまたカクウチとも
謂いつて、すべて照れ隠しの隠語のようなおかしい名で呼んでゐる。

しかもこういうのも酒を売る家が数多くなつてから後のことで、以前はそんな機会も得られなかつたのである。

ところがこの一杯酒のことを、今でも徳島県その他ではオゲンゾウという方言が残っていて、是によつてほぼこの慣習の由来がわかる。ゲンゾウは漢字で書くと「見参」、すなわち「見えまいらす」であつて、始めての、または改まつた人に対面することを意味する。関東では賀むこが始めて嫁の家を訪とい、または双方の身内が親類として近づきになる酒宴だけをゲンゾまたは一ゲンというが、一ゲンはすなわち第一回の見参ということ、婚礼の日に限るべき理由はない。現に関西では盆正月の藪やぶ入いりがゲンゾ、古い奉公人の旧主訪問がまたゲンゾである。是に敬語を冠かぶせてオゲン

ゾウというのも、目上の人への対面のことではかない。『狂言記』の中にも、「明日はゲンゾでござらう」というのが奉公人の地位のきまることを意味している。すなわち今日の御目見え以上に、いよいよ主従の契約をする式が見参であつた。こういう場合には酒が与えられる。それも主人と酌くみかわすのではなくて、一方が酌しやくをしてやってその家来だけに一杯飲ませるので、狂言では普通は扇を使い、何だか烏帽子櫃えぼしびつの蓋ふたのようなものを、顔に当てるのが飲む所作しよさとなつている。すなわちあの時代にも一人で飲むのは下人げにんで、主人との献酬けんしゅうはなかつたのである。それが後々は飲ませるかわりに酒手さかての銭ぜにをやることにもなつたが、やはり古風な家では出入でいりの者などに、一杯飲んで行くがいと謂いつて、台所の

端に腰を掛けて、親爺おやじがお辞儀をしいしい一人で飲んでいる光景が今でも時折は見られる。大きな農家に手造りの酒があつた時代には、是これが男たちを働かせる主婦の有力な武器になつていた。東北ではヒヤケとも謂う小さな片手かたて桶おけが、このためにできていた。是で酒さか瓶がめから直接に濁どぶろく醪なり稗ひえざけ酒なりを掬くんで、寒かつたろうに一ぱい引掛けて行くがよいと、特別に骨を折つた者をいたわつていたのである。勿もちろん論対等の客人にはこのような失礼なことはできない。すなわち相手なしに独りで一杯を傾けるといふことは、ただ主人持ちばかりの、特権といえばまあ特権であつた。

今日*の*い*わ*ゆるばんしやく晚酌の起原も、是と同じであつたことは疑いがない。この酒を岐阜県などではオチフレ、また九州の東半分

でヤツガイともエイキとも謂っている。意味はまだはつきりせぬが、鹿児島・熊本等の諸県でダイヤモンドまたはダリヤミと謂っているのは、明らかに疲労を癒すいやということ、すなわち労働する者が慰労に飲まされる酒の意であつた。東京ではまた是をオシキセとも謂っているが、シキセは元来奉公人に給する衣服のことである。堂々たる一家の旦那だんなが、その御仕着せに有付くというのはおかしい話だが、起こりはまったく是もまた主婦のなさけで、働いたその日の恩賞という一種の戯語としか考えられない。主婦の方でもそう毎度相手と飲む酒盛りが家にあつても困るので、名義の穩当不穩当などは問わず、一人で飲んでくれることを喜んだのであろう。こういう有難くもない名を付けられて苦笑しながらも、

なお晩飯には一本つけて貰^{もら}つて、頭を叩^{たた}いて飲んでいたというのも、結局は酒があまりにうまく、かつて人々と集まって飲んだ味が忘れられなくて、何の祝賀でも記念でもなく、また嬉しくも悲しくもない日にも、飲みたくなるような習癖を生じたからで、一つにはまた買おうと思えば夜中にも、すぐに入用の量が得られるような、便利な世の中になったためでもある。神代の昔から、酒と名のつくものが日本に有ったからと言って、昔の人たちもこの通りに、女房の承認のもとにちよつとばかりの酒を、每晚飲んでいたと思うと大まちがいである。

五

証拠を挙げることはやや困難になったが、中世以前の酒は今よりもずっとまづかつたものと私たちは思っている。それを飲む目的は味よりも主として酔うため、むつかしい語で言うと、酒のもたらす異常心理を経験したいためで、神々にもこれをささげ、その氏子も一同でこれを飲んだのは、つまりはこの陶然たる心境をうじこ共同にしたい望みからであつた。今でも新しい人たちの交際に、飲んで一度は酔い狂つたうえでない、心を許して談かたり合うことができぬような感じが、まだ相応に強く残っているのもその痕跡で、つまり我々はこの古風な感覚の片割れをもつたままで、今日の新文化へ入ってきているのである。酒の濫用ということがもし

有りとするれば、現在の過渡期が特にその弊害の起こりやすい時だと言い得る。すなわち我々には古い名と約束に囚とらわれつつ、他方には新しい交通経済の実情に押しまわされて、その中間の最も自分に都合のよい部分を流れているのである。両者新旧の関係は改めて静かに反省してみなければならぬと思う。

今度の大事変が起こってから、不思議に日本人の研究心と、発明力とは大飛躍をした。是までかつて考えなかった有形無形の問題が注意せられ、着々と新たな方策が立てられたことは、時過ぎて回顧すればいよいよ鮮明に、国民の智能の卓越していることを証拠立てることと思う。今まで同胞がうっかりと看過していたことを、問題にして見るのには今ほどの好時期はない。独り歴史の

学問だけが、いつまでも古い知識と元の方法とに、止まっ
ていてよろしいという理由は有り得ない。我々は酒を飲む習慣の利弊に
関しても、是非とも今と昔との事情の変化を知って、現在の状態
が果して国の福祉と合致するか否かを、明らかに認識し得るよう
にしなければならぬ。それを各人が自由に判断するだけの歴史知
識が、現在はまだ具そなわっておらぬとすれば、少なくとも求めたら
得られる程度に、歴史の学問を推し進めなければならぬ。いつも
民間の論議に揺ようとう蕩せられつつ、何らの自信も無く、可否を明弁
することすらもできないのは、権能ある指導者の恥辱だと思ふ。

凡人文芸

一

昭和八年の五月、私は始めておきのしま隠岐島に渡つてみた。さいごう西郷の町にとくりゆう逗留していた際に、宿の近くの大社教の分院に何か祝い事があつて、島名物のむらざもう村相撲が、大層な景気で村々から乗り込んできた。それがあいにく生憎のしげ模様で、何度か中断してまだ一向

に取進んでいない時であつた。あまり賑にぎやかそうなので傘かさを借りて、夕方ぶらりと様子を見に出てみると、土俵場どひようばは雨に沾ぬれて人影もなく、ただその周囲の掛茶屋の中から、多くの灯ひが揺ゆめき酒盛りの声が聞えている。村角力むらづもうの後援者たちが、退屈なものだから飲んでいるのである。男たちは騒々しいばかりで一向まに纏まとまつたことも言わぬが、その中にまじつて女がいい声で歌っている。年の頃はまず三十四五、手拭てぬぐいをかぶり片かた襷ただきすきを掛けて、裾すそ短みじかに常の衣服を着ている。多分は茶屋の女房などが酒を運び、こうして機嫌を取つているのだらうと思つたが、よく見ると少しいては一つの座を切り上げ、葦あし簾すだれを隔てた隣の店へ移つて行く。そうしてそこにも同じ年配の女性が、まだ幾人か去来し、

且つ手を打つて歌っているのであつた。芸者と名のつく者はこの土地にも相応におり、また格別他の場処ばしよとちがわらない生活をしている。それと一括して呼ぶことはおそらく許されぬのであろうが、とにかくにこういう一種の歌い女の、今でもこの島にいることだけは私にわかつた。

最初は或いは村からの同行者かとも思つたが、挨拶を聴いてみると、爰こゝへきて出逢であつた人々とも共に遊んでいる。こんな処ところへ出てくれば多くの知り人が有り、また歌の上手なことが予かねて知られているというのは、一体どういう境涯の女なのであろうか。職業ではないまでも何か報酬が有りそうなものだが、それを尋ねてみても笑つていて誰も教えてくれなかつた。島にはああいう気の軽

い女がいくらもいるのです。酒でも飲んで面白く騒ごうというだけ、ああして遣やつてくるのですと言った人もあるが、私にはまだ腑ふに落ちなかつた。幽かすかな記憶が私には蘇よみがえつてくる。関東の田舎なかでも四十何年か前には、縁日の掛け茶屋の片隅かたすみに、夕方などは同じ光景を見たような気がする。酒は女の相手のしかも最も快活なる者がいなければ、昔でもやはり酒盛りとまでは展開し得なかつたものらしい。そうして今日のような職業婦人の、税を納めて公認せられたことは新しいのである。それ以前も同じ需要のあっただけは想像に難くない。ただ何人が別にその任に当っていたかを、我々の社会史知識では答え得ぬだけである。

九州の或る島などの方言集には、サカモリと謂いうのは男女相会

して酒を飲むことであり、男ばかりで飲む酒は酒盛りとは謂わぬと記してある。私もこれが古意であろうと思う。例に引くのは憚はばかりがあるが、朝ちようけ家の晴はれの御式にも女性がこれに参加し、単に盃はいしやく酌しやくの間に給仕するのみならず、「ワタクシも酔ひまゐらす」ということが、その人々の日記には見えている。酒は刀自とじの管理に属し、これを醸かもす者もまた姥うばであつたことを考えると、彼らの手で分配するのが正式であつたことはうなずかれる。ただ近世の婦徳が大いに進歩して、多くの貞淑なる人々がこれを憎み避くるに及び、始めて如何なる者をしてその職分を代行せしめたかが、問題となつただけである。

酒は末まつぼう法時代の濫用妄用が起こる以前、飲むべき者に必ず飲
 ましめるのが一つの式であり、勸酒の歌はすなわち作業歌の一種
 であつた。従うて是これに参与する女の役目は、思つたよりもむつか
 しいものであつたのである。彼らを兵馬の間に伴ない得ざるため
 に、眉目びもく清秀なる少年をしてこれにかわらしめた世の中になつて
 も、肴さかなをするというのは扇あふぎを膝ひざにして歌うことであり、または起た
 つて一さし舞うことであつた。この風ふうは今でも正式の饗きやう宴えんに
 は伝わっている。決して埃ほこりだらけの刺身さしみや蒲鉾かまぼこを、むしやむし
 や食うばかりが肴ではなかつたのである。座客が日ごろ親しみの

無い他郷の人であり、もしくは作法を弁えぬ武骨者ばかり多くなる、ただの女性はいよいよその任務に堪えず、次第に専門の修練を経てきた者にこれを委ねる傾きが、都市には著しくなってきたのである。

この酒礼は田舎ではなおしばらくは嚴重に守られていたようである。常に酒甕さかがめに酒の貯えが無く、これを用いる機会がきわめて限られていたという以外に、席に列する者が互いに心を置かぬ人たちであつて、歌を声高く歌つても、蓮葉はすっぱとも何とも思われ懸念が無かつたからである。酒宴を我々の国語でウタゲと謂つた心持は、女性の最も熱心なる参与が無ければ、実は理解することのできぬものであつた。古風な村里に成長した人ならば、もつ

と若い人でも私と同じ印象を持っていることと思う。常は物数の少ない遠慮がちな家刀自いえとし、もしくはやや気むつかしく物固い婆はばき様などが、一代に何度という晴はれの席へ出ては、自分もアエをしまて盃さかずきを勧め、所望によつては小歌などの、その場の情景にひとと合つたものを、朗らかに歌い出すことがあつた。それが単なる興味という以上に、一種異常の感動を与えたことは、詳しく説明をするまでもない。全体に歌は農民の間において、以前は今よりもはるかに重んぜられていた。それが稀まれまれ々々にはこういう事実も伝えられて、いよいよ真面目まじめなる女たちの、日ごろのたしなみの内に算かぞえられていたのである。きようは様子によつては歌うことになろうも知れぬと、前からの覚悟が有つたにしても、または酔い

のはずみの即興であろうとも、とにかくに耳で聴き覚えるよりほ
かの練習は無く、大抵の女たちは胸の奥底に、歌わぬ歌を絶え
ず抱えて持っていた。民謡の根ざしは案外に深い処ところにあつたので
ある。それが芽をくみ花と開く機会が、後年はあまりにも間遠で
あつたために、枯れて跡形も無くなつたことを、何人なんびとも気づか
ずに終つたのである。今から振り返つてみると、歌がこのごろのよ
うに職業者の手に移つてきた路筋みちすじもほぼたどることができ
る。始めには頻々たる流行唄はやりうたの移植があつた。是には年とつた者は
附いて行くことができず、真似まねをしようとしても只ただおかし**い**ばか
りであつたので、いつとなく純然たる聴手の側に立ち、後のちには若
い者の歌うのを苦々しく思う者も多くなつてきたのである。私の

生家の近くに、貧しい嫁姑よめしゅうとの二段の寡婦かふが住んでいた。孫の成長をたった一つの心楽しみに、日雇ひやといなどをして漸ようようと暮していたが、その婆ばあさんがやがて老耄ろうもうをして、いつでも手を打って一つ歌を歌っているのを、面白がって私たちは聴きに往いった。

酒は酒屋によい茶は茶屋に

女郎は大阪の新町しんまちに

是などもたしかにまた、遠い昔の新曲であつたらう。それをこの婆さんは聴いて覚えていたのである。酒が自由になると酒宴はどこでも開かれる。そうして無検束にその酒を販ひがんとする女性とが、わざと別種の歌を唱となえて、古風な酒盛りから男たちを離反せしめたのである。酒屋が新たに興おこつて、家の女房が酒の管理権

を失つたことが、何よりも大きな凡人文芸の衰微のもとであつた。

三

海辺の村々でいうと、船が遠くの湊みなとに往来するようになって、やはり女性の歌がだんだんと省みられなくなり、男ばかりがだみ声を振り揚あげて、早く酒席を狼藉ろうぜきたらしめることになつたとも見られる。今でも淋しい日本海の浜などに、毀こわれて残っている古い仕来りには、沖で夜昼の荒稼あらかせぎをした舟が、戻つて来ると家へも行かずに、すぐに村中の娘を喚よび集めて、酒盛りをするといふ話を折々聞くが、是も本来は町の人々が想像するほどに、乱雑

な慣例ではなかつたように思う。是とよく似た行事は農村にも元は多かつた。普通には秋の収穫が終つて後、日を定めて男女をともに遊ばせる。そうしてその席には酒がありまた歌があつた。是を放恣自由な交際の公認せられたる機会であつたかのごとく、一部の好事家は推断しようとしているが、そんな形ではこの風は永く続くことができない。愛情には嫉みを伴ないまた独占を必要としたことは、誰でも知っている通りである。したがつて是が正常の婚姻の導きになつたことは勿論であろうが、風儀は必ずしもこれに因つて乱れはしなかつた。非難しなければならぬ悪癖がもし有つたとすれば、それは他の一方の新たな経験、すなわち酒盛りの様式が少しずつ改まって、是に参与した別種の女たちの、軽

薄なる恋歌が学び伝えられ、村の少女が黙々として是を聴いて
た結果であろうと思う。最近に諏訪すわの山浦やまうら地方で、土地の老人
老女の覚えていた歌を数百首、小池安右衛門やすえもん君が採集したことが
ある。面白いことにはその歌の半数以上が、嶺みねを隔てた長久保ながくぼの
新町しんまちあたりで、妓女ぎじよの歌っていた都々逸ととえいの文句であつた。村の
娘どもが真似まねてそのようなものを歌うようだったら、当然にその
心意気も變つてきたであろう。黙つてそれを聴いていたにしても、
やっぱり風儀は悪くならずになかつたろう。いずれにしたとこ
ろで彼らみずからの情と才藻さいそうとは、見いだされまた選択せられ
る折を失つてしまったのである。いわゆる仇あだし契ちぎりの結ばれやす
かつたのも止むを得ない。ただ幸いにしてそういう状態は、日本

では遅く始まりまた早く過ぎ去った。そうしてこの次にはいかなる目標によつて、互いの心を試みるのがよいかを、今はまだ決し兼ねて^かいるのである。民間文芸の年久しく埋もれていた用法を、改めて考察する必要は他の方面でも認められるが、なかでも婚姻は民族を^{こそ}挙つて、均しく^{ひと}思い悩まねばならぬ問題であるが故に、特に丁寧^{これ}に是と彼との交渉の跡を尋ね究めなければならぬのである。是を^{ひまじん}閑人の所行のごとく^み看られることは、私は構わないが世の中のために望ましくない。

四

歌が男女の仲らいを和やわらげるものであつたことは、『古今集』の序においてもすでに断定せられている。それが色紙しきしや短冊たんざくの世の中になつて、新たに始まつた現象でないことは、判わかりきつたことのように私は思うのだが、今まではとかく文字の教育を受けた人ばかりに、そういう特権が有るように考えられがちであり、すなわち口で歌っていた男女の仲は、和らげられずともよいかのごとく、思っていた者も少々ならず有つた。ところが現実はこちらうどその反対で、上流の縁組には消息は夙つとに儀礼化し、また形式化してしまつたに反して、俗衆はまさしく歌によつて動かされていたのである。町や港の容易なる道徳を持つ女等に、酒と歌との管理が移つてからも、この二つのものと婚姻との関係は密接であ

つた。仮の一夜の伴侶を求むるにも、男は必ずこの順序を履もうとしたことは、彼らにも不似合いな律儀りちぎさであつた。こういう奇妙な慣習は突如として起こり得るものでない。かつては酒盛りが人の生涯の幸不幸を定めるために、甚だ大切な機会であつたことを、かえつてこの方面から推測せしめようとして残り伝わつていたものとも見れば見られる。近代の遊蕩ゆうとう文学の中には、酒に取持たれ歌に心を動かされて、測らぬ因縁の結ばれた物語は充ち満ちている。よほどの閑人でもないかぎり、今ごろそんなことを穿せ鑿んさくする者も無いのが当然だが、是が今一つ以前の社会相、すなわち人がめつたに生まれ在所の外に旅をせず、茶屋も色町いろまちもまだ備わらなかつた世の中において、すでに用いられていた配偶選

定の、至って真面目まじめなる方式であつたことを知れば、他の記録が無い以上、是をでも間接の資料としなければならぬのである。

古宇利島の物語

沖縄ではその昔八郎ためとも為朝ためともが上陸したという運天うんてんの港の外海に、古宇利こうりと呼ばれる一つの島がある。至つて水の乏しい島ばかりの裸島であるが、島の名に依よつて記憶せられる遠い神代の昔語りがあるそうだ。島人の元祖は兄妹二人のはらからであつたが、ここ爰ここを人間の島にするために、霊鳥に教えられて夫婦の縁を結んだ。それ故に今でもこの島を古宇利と謂いうのだとある。「こひ」をコ

ウリとラ行に曲げるのは、沖繩の動詞の語法であつて、文語で書くならば恋の島ということになるのである。

是これと同じ物語はすでに中世の書物にも、土佐とさの妹背島いもせじまの由来として著録せられている。さらに南西の島々にも尋ねればその例なしとせず、中にも台湾の山地に割拠する蕃民ばんみんに至つては、ほとんど部落ごとごとにこの口碑を保存している。素朴単純なる推理法において、人類の起原をインセストに托するは自然であつた上に、彼らの間にはまたノアの箱船と同じように、世界が大水になつて神の思おぼしめ召かしに叶かうた者のみが、生き残つたという信仰さえあつたのである。佐渡さどでは能登のどと土佐と二つの国から漂着した男女が、行き逢おうてここに島人の始祖となつたという伝説もあるそうだが、

それはおそらく空想の翼が、生え揃うてから後の飛躍であつた。

はちじよう

八丈の島で種姥たねうばといい、または「櫓かこみによこ」とも謂

つて、大津波の折に櫓を抱いて、たつたひとり命を全うまっとうしたと伝

えられる女性などは、その時身ごもつていて後に男の子を生んだ故に、幸いにして人間の種を絶さなかつたとさえ謂われている。

ひろ

この物語の汎くまた久しく行われていた事実に関しては、後年必ずその幽玄の理を説く人があろうと思うが、それは自分などの今試みようとするところではない。小さな一つの話題として提供してみたのは、コヒというただ一箇の日本語の、意外なる内容の進化である。我々の言葉は大となく小となく、一つとしてその起原を形あるもの、目で見手で触れ得るものに発しないものは無

いように思われるが、この語はそもいずれの時、いかなる機縁によつてこのように行くえも知らず、限りも測り難いような茫洋ぼうようと大いなるものになつてしまつたか。できることならばもう一度、静かにこの問題が考えてみたいのである。

「恋ふる」がその語原を「乞ふこ」という動詞と同じくしていることは、多分もう誰かが説いていることと思う。単語はいずれの場合にも時と社会との事情によつて分化するものであつた。一方の「乞ひ」が終始我々の挙動の種別としてしか用いられず、はかばかしい語形の変化をも示さなかつたに反して、この男女の仲らひに限られた「こふる」という一語のみは、用途が区々まちまちであり記憶と想像との必要が多かつたために、夙はやく名詞を生じ、またやや

おくれて形容詞化した。しかも有る限りの人間が、止めどもなくこの一語を使役していたのである。部落が恋愛のただ一つの活動場であり、妹いもと背せは朝宵あさよいに袖そでを連ね、面おもを看みかわして過し得る人生であつたならば、恋と名を附して考えなければならぬ場合もすでに少なく、まして恋しきという形容詞などは、新たに作り出す機会とても無かつたろう。ところが是これと全く反対であつたのが我々の歴史である。男の仕事は野山にあり海にあり、または遠々しい旅の空にあつた。そうでなくとも若い人たちは、前の家いえ刀とじ自じが家を支配する限り、昼は別れて山鳥の生活をするように、日本の婚姻制はできていた。恋が何ものよりも豊富なる文芸をもつて、詠歎せられた原因の主要なる一つは爰こゝに存する。

最初はおそらくは是も至つて卑近なる、目に見える人間の行為であつたろうと思う。例はすぐ隣にあるのだが、その方はもう忘れられかけている。中世の相撲すもうの用語として、「手をこふ」と謂いつたのは挑いどむことであつた。『古今著聞集ここんちよもんじゆう』の第十五章には幾つか見えているが、その一二を挙げるならば時弘ときひろという男、「頻しきりに相撲宗平に手をこひて、若もし負くるものならば時弘が首を切られん。宗平負けば、又宗平が首を切らんなど申しけるを」とある。或いはまた弘光という力士が、伊成という若い力士を軽侮して、「左の手を出してこひけるを云々」ともある。この「弘光が出す所の左の手を、伊成が右の手してひしと取りてけり」ともあるから、今ならば、組付くとか取掛るとかいうべき所作を、

もとはテコフと謂つていたのである。その用法はまた普通の乞こ請こうとも別であるが、是にはテコヒという名詞は有つたにしても、その念願の情を表する形容詞までは、相撲道には入用が無かつた。そうして変化が乏しい故に、やがて廢語とはなつたのである。

恋という単語の内容がこれに反して、次第に外へそれまた何となく上品になつて来たことは、是こそ和歌の徳と名づくべきものであつた。しかし民衆がなお固有の意義に就こうとするのを、指導することまでは流石さすがにできない。それだからまるまるこの一語を罷やめてしまわぬかぎり、清濁二流れの言葉の意味が、絶えずこの理解を混乱させることは避けられぬのである。近世の文学でも井原西鶴さいかくなどは、元來あの人が唯物史觀なのだから、なんでも

裏面の事情へ持つて行こうとするのだと、解せられているかも知れぬが、実際はそれが昔ながらの俗物のコヒであつた。だから芭ば蕉しょうのつつましやかな俳諧を見ても、

松かさおくる武隈たけくまの土産つと

芭蕉

草まくらをかしき恋もしならひて

不ふ玉ぎよく

ちまたの神に申すかね言こと

曾良そら

こういつたような浮世ごとも想像せられている。或いはまは有名なる『炭すみだわら俵いぢれん』の一聯、

うは置きのほし菜なぎや刻むもうはの空

野坡やば

馬に出ぬ日は内うちで恋する

芭蕉

かせ買ひの七つ下さがりをおとづれて

利牛りぎゆう

これなどは明らかに賤しずが伏屋ふせやの最も凡庸なる者の生活であつて、和歌にはすでに見離され、俳諧はなおその客観の情趣を、取り上げてあわれと詠ながめていたのであつた。それを宜ぎよく麦の『続ぞく絵歌仙』などには、門流の者の解説でありながら、もう意味もわからずに人形芝居のような絵にしている。言葉はこのようにも僅かな歲月の間に、学問の影響を受けてその意味を変化し、次第に昔の人の感覚を疎遠にするものであつた。

『古今』や『六ろくじよう帖』の恋の歌を今読んでみると、十に一つは求婚の歌があり、またその半数ほどが別わかれて後のちの会えしやく釈やくの歌であるが、その他の大部分はことごとく是これ、すでに契約した者の詠歎である。男女がたちまちに一つの軒のきの下にいるようになった今日

では、そんな下らぬことができるかというような文芸ではあるが、古人は夜のみ通うて若き日をすごしていたために、時々はかような名歌ができただけで、言わばこれらの文学は、日本の婚姻制度の産物に過ぎないのである。中世縁組が遠い土地の間に行われ、それにまた里^{さと}方^{かた}の事情も変つて、次第に嫁移りの期日が早くなると、みそか男でもなくてはこんな消息の必要は無くなり、恋歌はけしからぬ不行儀のものになつたのだが、なお一方には是を題詠として、単に文辞の綾^{あや}ばかりで空々しいことをいう風^{ふう}が、いつまでも流行していたのはおかしいことだと思ふ。吉田兼好^{けんこう}を色法師と謂うのは冤罪^{えんざい}だそうだが、とにかく平生^{へいぜい}の練習があれ^{とんあ}ばこそ代表作も頼まれるので、現に同じ時代の頓阿^{とんあ}の集などを見る

と、逢恋別恋の題詠が幾らでもある。契けいちゆう沖うちは律僧だからそういう歌を嫌ったというが、慈延じえんでも澄ちようげつ月げつでもそのために非ひによ如法ほうの僧とはならなかった。そればかりか深窓に閉じ込められた御姫様までが、師匠を頼んでそういう歌をよみ習い、私たちも少年のころには何のことだか解らずに、一生懸命にそういう歌の稽古けいこをしていた。是が概括してどうも『古今集』などよりも下手へたであつたのは、必ずしも腕が劣つていただけではないようである。恋を知らぬということは元はまだ婚姻をしておらぬ者という意味であつた。そうしてその恋を知る者は、時世が改まつてもう歌をよむ必要を感じなくなつているのである。

遊行女婦のこと

一

『うたつしゅう卯辰集』に存録せられた加賀の山中温泉の「さんぎんかせん三吟歌仙」のうち、次の一続きはわけても有名であるが、私はまだこれ是を註解したものを見たことがない。

あられ霰ふる左の山はすげ菅の寺

ほくし北枝

遊女四五人田舎わたらひ

曾良そら

落書らくがきに恋しき君が名もありて

翁おう

髪はそらねど魚うおくはぬ也なり

北枝

ここで最初に問題になるのは、俗称「菅の寺」という寺はどこにあつたかということ、もしやこれが談林風だんりんふうに作者の空くうにしらえた名であつたとすると、この附合つけあいの写実味もずっと減るのであるが、私だけはそうでないように思つて搜さがしている。或いは近江おうみであつたかと幽かすかに記憶するのだが、それが誤りとしても、有りさえすれば次の問題は生まれる。この寺は谷あいのやや高みに、杉の森などがあつて屋の端が見え、それから下りてくる小路こみちと三二みつふじ辻つじになつたあたりを、在所の者とは見えぬ女性が四五人で

通っている。もしくは茶を売る道^{みちばた}傍^{ばた}の小家^{こや}に、腰を掛けて休んでいたのでもよい。そういう旅の女をも、あの頃は一目見て遊女と呼び得たのか。ただしはまた今日我々が昔の遊女として考えている女性が、翁^{おう}の時代にはなお「田舎^{いなか}わたらひ」という生活をしていたのか。いずれにしてもこれが現実の経験であつたかぎり、珍しい我々の問題になるのである。

曾^{そら}良^らは師翁^{しおう}に随伴して加賀国にくる数日前、越後^{えちご}の市^{いち}振^{ぶり}とい^いう海^{うみ}端^{はた}の駅にとまって、測らずも二人の新潟の遊女と同宿した。そうして彼らの境涯を憐みつつも、なおこの一夜の邂逅^{かいこう}に興^{きょう}を催^{もよほ}した翁^{おう}の句、

ひとつ^{ひとつ}家^やに遊女も寝たり萩^{はぎ}と月

というのを感^{かん}吟^{ぎん}して、いそいでわが手帳にも書き留めたということである。遊女が時あつて旅をするものだということだけならば、彼にとつては最近の實驗であつた。それを覚えていたばかりでも、こういう附句が胸に浮かぶもののように、考える人が有るかも知れない。しかしこの新潟の女たちの旅は、伊勢に参るというのが心ざしで、^{くにざかい}国境の^{ばんしよ}番所までは、年老いたる男に送られて来ている。江戸・大阪の^{じようり}浄瑠璃に出てくる抱え遊女は、^か駆落ちの際でもなければ外へは出ぬものになつていたが、地方は近^{かごろ}頃までかなりの自由があつたらしい。現に^{えちぜん}越前^{みくに}三国の某^{ぼう}という遊女俳人が、江戸に出て来て^{むかしなしみ}昔馴染の家を、遊びまわつたという話などは、是からまた百年も後の^{のち}ことである。多くの遊女は

旅をして遠くからやって来ている。ただ我々が珍しいと思うのは、彼らの四五人が群をなして、いわゆる田舎わたらいをしていたという点である。是は単純なる旅行ではなかつたのである。

田舎わたらいという語は、たしか『源氏』の夕顔の巻にも見えている。京の小民はもうあの頃から、秋の収穫の豊かな頃を窺^{うかが}つて、農村を稼^{かせ}ぎまわつて儲^{もう}けて還^{かえ}る色々の道を知っていた。それが現在までなお続いているのである。我々の地方文化はその刺戟^{しげき}を受けて、坐^いながらにして変り改まり、またみずから展開する力を養い得たことは、この頃になつてだんだんと、是を証明する実例が指示せられることになつた。国の全貌を昔のままではなく、好^よくも悪くも新しいものにして外部の力、空に吹き散る花粉や胞子

のごときものの中に、かつてはこのきわめて溫柔なる女性の一群も参加して、しかもつい近頃までその機能を發揮していたのではないかという問題が、ふとした遊歴文人の一句から、我々に提供せられたのである。

二

是を考えてみる前に、まず芭蕉翁がこの曾良の句に対して、いかに応接しているかを注意する必要があると思う。自分が解釈しているところでは、落書は遊女などのすべきものでないから、是を残したのは前に来てとまった男のわざである。そうしてまたみ

ずから名を署するは落書でなく、よその男の名を書くということも普通でないから、この「恋しき君」は遊女のことである。キミとも じょうろう 上 藤とも彼らと呼んだのは、常の日に化粧し色ある衣を着ることが、民間では甚だ目に立ったからであろう。とにかく次の北枝の附句つけくでは、是を上流の未亡人などの、夫おつとにおくれて無常を観ずる者を取っているから、前句まえくの表現はかえつて一応は女の名と解せられたものと見られる。従うてこの附つけ味あじは、二ホヒとかウツリとかいうものに該当するのであろう。曾良は現前に遊女の田舎わたらいをしてあるくのを胸に描いたのであるが、すでに打うち越こしにはその背景を叙した後だから、今度はそういう事が頻々あるという、概括的事実としてこれを味わってみたものかと思う。

歌を分作する気持の二句連歌には無いことだが、是などは両者の間に時の経過がある。すなわち遊女が折々来て休むような家の壁に、いつのまにか評判の女の名が書いてあつて、そのわきには命をやりたいなどという言葉が、添えてあつたかも知れぬのである。そうして落書の筆者の知れぬところに興味があつた。この方こそ或いは市いちぶり振ひとの一つ家やなどでの経験であつたかも知れない。不思議はないと小宮君は言われたが、私は毎度この芭蕉翁の物を識しつているのには驚く。

とにかく遊女が港でも町でもない土地へ、稼ぎに行くということは芭蕉翁もよく知っていて、曾良の思いつきに打つてつけたよ
うな、しかし新しい俳諧の境地を屈折させて、誠に良き師匠らし

く、次の附句を迎え導いたのである。それは懇切の至りではあつたが、同時にまたこの頃そういった遊女の生活が、かなり普通の社会相でなかつたら、できないことであつたように私は考える。北国では遊女が折々出てあるくということとは、偶然ながらまた一つの証跡を留めている。それは『比佐古』の第三の歌仙に、

それ世は泪雨なみだと時雨しぐれと

里東りとう

雪舟そりに乗る越こしの遊女の寒さうに

野徑やけい

壺歩いちぶにつなぐ丁ちようひやく百の銭ぜに

乙州おとくに

とある中の句で、櫓そりに乗せてもらつて寒そうにあるいていては、まさか名聞にも伊勢参宮を致しますとは言えまいし、そのうえに附句の一步だの丁百の銭だのというのが、何となくその遊女の高た

尾・薄雲ではなかつたことを想わしめる。遊女は元來がウカレ
 メということであつた。それが歌舞管絃の伎に携わつていて、
 それをアソビと謂い、アソビもまた偶然に同じ「遊」の漢字を宛
 てて弁じたので、どちらが元やら後には不明になつたが、少なく
 とも遊行が一処不住の漂泊生涯を意味していたことは、遊
 行上人などの例を比べてみてもよく判る。遊行女婦だから
 いつでも田舎わたらいをしているのに、些しでも不審は無かつた
 のである。それを何とやらん約束がちがうように、思わせ始めた
 のは近代の遊里文学の力であろう。實際またその頃から、女の旅
 をする者がめつきりと減つた。歌比丘尼は市中の売女となつて、
 やがてまた跡を斂めてしまつた。そのために田舎はふたたび淋し

くなり、悪い風儀と名づけられるものがそのかわりに起こつた。我々の真面目まじめに攻究しようとしている婚姻の制度なども、大きな影響を是から受けているのである。

三

『奥の細道』の文を読んでみると、わが翁を感傷せしめた一つ家の遊女きかわたけらも、「定めなき契ちぎり、拙つたなき日々の業ごういん因」、今いう浮う川竹の流れの身と、異なるところがないようであるが、彼らのような支度では、本式の田舎いなかわたらいはできそうにも思われぬ。曾良そらの描き出した四五人の一群は、またまったく別の途みちを歩んで

いたのである。そこで改めて文字通りの遊女、すなわち旅行をもつて生を営む婦女に、どういう種類の者があつたかを考えてみると、えちご越後は昔も今も女たちの旅に出る国であつた。かすり緋の仕事着に足ごしらえかいがい甲斐々々しく、すげ菅のつまおりがき褌折笠と小荷物を引き背負うて、薬を売つてあるく娘どもは、あまりに眼の前のことだから批判もできないが、彼らの職業にも歴史は有るらしい。それ以前にも三し味線やみせんを肩に載せ、足駄あしだばきにねエさんかぶ被りなどという異様な行こ装うそうで、春の野路のみちを渡り鳥のごとく、わめきつれてくる盲女の群があつて、これ是も尋ねるとみな越後から来たと謂いつていた。実際は行く先々で補給せられ、縁が有れば一地に定住もしたと見えて、今ではその末流とも見られる者が、鑑札を受けて立派に東京で飯

を食っている。自分らが目撃しているのは、無論頽^{たい}廢^{はい}を極めた最後の姿であつて、以前は統制ある一つの組織を具えていた。私の知るかぎりでは諏訪^{すわ}にも松本にも、また静岡にもそれぞれの記録があるが、上越^{かみえちご}後では高田を中心としたものが有力であつた。布川信次君がその生き残つた老女を尋ねて、彼らの記憶する作法や規約を聴き出している。年功と閱歴によつて、順に頭^{かしら}役^{やく}に押し上がつて行くことは、真言宗^{しんごんしゅう}などの藤次制^{ろうじせい}も同じであつた。それでいて監督がかなり厳しかったのだから、つまりは古来の慣例が固く守られたのである。村の農家の彼らに給与する物と数量、是^{もたら}を貰いにあるく時も人も定まっていた。その配当の率なども、不文ながら動かぬものであつたが、全部新しい明治の政

府からは公認せられなくなつて、後のちには仕来りを守る者が無くなり、生活の根拠くつがえは覆つたのである。九州の盲僧などと比べてみて、仏寺の勢力の及ばなかつたのが興味ある一つの特徴であつた。だから瞽女ごぜたちは儀式にも経は読まず、ただ段物だんものの長い叙事詩を語つた。つまり我々のいう遊芸が、彼らの公けの職分でもあつたのである。その修業は相応に苦しいものであつたという。良家の娘たちの不幸にして明めいを失つた者は、親が嫁入のような支度を調べて、御前ごぜの家へ送り込んだ。それが年ねんろう藤とうを積んでよい地位に経のぼつて行くことは、尼寺などと異なるところがなかつた。彼らの品行の今いう遊女とまるでちがつていたのは勿論もちろんである。それからこういう人たちは手引のために、眼の見える娘を育てて

使ったが、それは奉公人と同じで、年頃としごろになれば縁に付け、是にも絶対にみだに叱ならな行儀は無かつたと謂いっている。

しかしこういう正式の瞽女の巡つてあるく村里は、僅わずかな距離のうちうちに昔から限られていたようである。いわゆる田舎わたらいはその区域から外に出て行く者のことで、是には必ずしも本元ほんもとのような、厳しい監督が及んではいなかつた。たとえば信州では稀まれに道德の堅固でないものがあると、それはみな旅の瞽女ごぜ、越後のゴゼといふことにきまつていた。関東の田舎でも格式を守る旧家では、毎年定きまつた盲女しか迎えなかつたと見えて、上総かずさにはレイノゴゼといふ地名の残つてゐる村もあるが、自分らが物を知つてからは、顔には見覚えがあつても、素性すじょうのたしかでない者

しか往来していなかった。不幸な家の少女の眼の見える者が、瞽女に貰われてあるいているという話もよく聞いた。今では老人しか覚えてはおるまいが、瞽女が入つてくると村には小さな動揺が起こる。よくない村というのはこの女どもが来ると、いつまでも滞在しているような村のことであつた。どうして定まるものか、毎年とまる家がまずきまつていた。それが越後の地元附近では、土地でも軽しめられない旧家であるに反して、こちらでは検束の無い若夫婦の家や、時としては酒や煮物を売る家などであつた。そこへ夜分になると歌でも覚えようという者が集まつてくるのである。ただの昼間ばかりの門かどつけとはちがつて、彼らは是によつて幾分か多くの収入を得、少なくとも寝食の入費を省き得たよう

である。売笑という語をもし文字通りに取るならば、粗野なる田舎の笑いには彼らから買うものが最も多かつたろう。そうしていわゆる流転るてんの生活も、彼らが最も適切に是を体现していたといえる。

四

ただし曾良そらの附句つけくに描かれた遊女が、私は盲であつたろうと思つているわけではない。まだあの頃にはこの一種の御前ごぜ以外にも、色々の上じょうろう 藤とうが村をあるいていたらしいのである。瞽女は制度の保護などもあつて、一番あとまで転向せずいられたというだ

けである。地方の人たちのきれぎれの記憶の中から、他にどうい
 う名の遊女があるいていたかを、今の内に聴いておきたいと私は
 念じている。秋田地方の風習には、あまごい雨乞に婦女が裸参りをする
 例が二三ある。それと関係があるらしいのは女相撲で、おんなずもう是が興
 行してくる年は必ず雨が多いと言われていた。こういう人たちの
 郷里も必ず何処どこかに有るのである。石川県などの在方ざいかたでは、昔
 の瓦版かわらばんとよく似た一枚刷の読売よみうりものを、歌いながらくるの
 は必ず女の群であり、是を人によつて女万歳おんなまんざいとも謂いつていた。
 近まわりの部落の、身元の知られている者ではなかつたようであ
 る。中には旅役者などの年中巡業してはいるが、出処しゅつしよは判わかつ
 ているという者も多いだろうし、また中年から来きたり加わつたのも

むろん有るだろうが、少なくとも彼らの動く力には系図があるの
である。熊野くまのを振り出しに伊勢や熱田あつたのあたりへ移つて来て、や
がて第二の勢力にその地位を譲つて、消えてなくなつてしまつた
比丘尼衆びくにしゆうを始めとし、かつてこの国土に弥漫びまんした遊行女婦ゆうこうじよふの名
は数多い。それが子持たずに死んでも、はた良い子を儲もつけても、
女あとの後は伝わらぬのが普通であつた。一旦名前が消えればその結
末を問うこともできぬが、しかも彼らでなければ運べなかつた歌
や物語が、永い記念となつて全国の隅々すみずみに遺のこつてゐる。我々の
民間文芸を成長させ、割拠を事とした土地経営者の、自然と社会
とに対する情操を統一してくれた功績は、大部分をこのかよわい
漂泊者に認めなければならぬのである。今までの見かたはあまり

に一方に偏へんしていると思う。

遊女の成因とも名づくべきものについても、問題はまた未来の解決に委ゆだねられている。女は普通には家に結びつけられ、家はまた土に動かぬ礎いしずえを打ち込んでいる。古志こしの努ぬ奈な河か媛わひめの御歌にもあるように、男とちがって只ただ一いっしよ 処しよの婚姻にしか、携たずさわれぬものごとく考えられていた。それが千里の山川をゆ行き往いて、数かぎりもない運命に身を托たくするようになったということは、もし原因がありとすればそれは必ず異常のものでなければならぬ。だから多くの歴史家に考えられることは、第一に種すじよう性の差ということであつたのである。江口えぐち・川尻かわじりの船の家に老い、さては野上のがみ・坂本さかもとの路次ろじに笠おおがさを立てて、朗かなる歌の声を東西の旅人に送つ

ていた者は、最初からそういう生活様式を持って、日本へ入つて来た人々の末すえでもあるように、自分なども想像していたのである。しかし近代の記録せられた事實は、全然この推測を裏書しない。むしろ反対の資料をもつて充みちている。少なくとも中世以後に、新たに加わつた原因は多いのである。親が貧困で娘を奉公に出すというような草くさ冊ぞう子し風ふうなものとは別としても、普通の家に生まれた女の子が、次第にこの仲間になつて行く路みち筋すじは、かなり大きく開かれていたように思われる。地方に勢力のあつた御社や仏寺を後うしろ楯だてとして、その信仰の宣伝によつて生計を立てた者などは、起こりが古いからまだ家柄のように見られぬこともないが、この中にも新たな志願者の幾らも加わつたのが現実である。全体

に門付け物貫かどつ ものもらいの輩やからを、すべて人間の落魄らくはくした姿のように考
えることは、やや一方に偏した観方みかたなのかも知れない。農漁山村
の定着した生業と対立して、別に彼らの間だけの動機なり目途な
りが、有つたらしくも思われる節があるからである。福島県の海
に面した村里には、名ある旧家でシンメ様を祀まつっている者が尠すくな
くない。シンメ様というのは仙台附近でトウデ様、南部領でオシ
ラ様というのもほぼ同じで、通例木を彫つてこしらえた人形の神
である。この神を持ち伝えた家では、現在はみな困っているそう
である。それはしばしばその家の女の夢枕に立って、旅に出よう
と促やして已まぬからで、その御告げに従わぬと病気になる。それ
を遁のがれようとすれば少なくとも年に一度、そつとこの神を背に負

うて、顔を知られぬ土地を巡歴して来なければならぬ。是が何よりも迷惑なことに、今日ではなっているのである。説明は多分精神病理の側からでも付くのであろうが、とにかくに以前尋常の家庭から離脱して、この種の漂泊生活に入つて行つた女性には、何か拒む^{こぼ}ことのできない背後の暗示が、働いていた場合が多いようである。能の物狂いの色々の曲にも見えるように、是が他郷のいまだ信ぜざる者の間に、新たに自分の立場を見いださうということになると、自然に物を語りまた歌舞せざるを得なかつたものと思われる。いわゆる神氣^{かみけ}の副^そうた女人は、昔も今も常に饒^{じょうぜつ}舌で、またしばしば身の恥は省みずに、自分しか知らなかつたような神秘なる眞実を説こうとしている。それを神々が多数の俗衆に

聴かせんがために、とくに或る一個の清く美しい者を選んで狂わしめられるのだとも、昔の人たちには考えられたのである。故にこの一つの宗教的動機ともいうべくものが、将来もうすこし明らかに判^{わか}つてくるならば、歌と物語とが単なる初期の業体であつたというに止^{とどま}らず、さらに遊女をしてかくのごとく、弘^{ひろ}く国内を漂泊せしむるに至つた、元の力であると言い得ることになるかも知れぬ。少なくとも今一つの人に賤^{いや}しまるる職分のごときは、是に比べるとずっと小さな偶然だつたと、認め得る時が来ようかと思ふ。

五

話を簡単に切り上げるために、私は最後の一例を引用する。沖縄では遊女をズリと謂い、尾類などという字を宛あてているが、語の起こりはまだ確かには知られていない。那な覇はの市街の片端を三カ所まで区画して、彼らを集め住ましめたのは近世のことで、それも政策の強制するところであつたらしい。そうすると以前は各地に散在していたはずであるが、その生活ぶりは記録にはまだ見当らない。僅わずかに民間説話や歌謡の端々はしはしに、ズリが田舎いなかをあるいていた痕跡を認むるのみである。ところが北隣の大島諸島はこれに反して、いわゆる遊ゆう廓かくはどこにも無くて、遊女のみはどの島にもいた。ズリをこの方面ではゾレまたはドレと呼んでいる。

その語自身にも巡歴という語感があつたらしいが、別にまたマハリゾレという名もあつたように聞いた。関東の御前たちごぜと異なつてゐるのは、眼が見えることだけというくらいによく似ている。村には到る処いたところに宿をする家が定まつていた。そこへ青年らが夜になると寄り集まつて、長短色々の歌をうたわせて聴いた。その中でとくに酒の価を支弁した一人が、一夜の亭主となるという話もあつて、無論彼女の道徳は安易なものであつたが、その職分はいえは多数公衆の間に、歌を運搬することよりほかは無かつたのである。實際数かぎりもない古来の名歌が、彼らによつて保存せられ活用せられたのみでなく、同時に彼らはまた新作者でもあつた。『奄美大島民謡大観』あまみおおしまを読んでみると、島の宴飲には最も

即興の歌が珍重せられ、殊に男女の間には歌うた競きいの戯ざれがあつて、返歌の慧けい敏びんなるものが永く異性の愛好を繋つないだことを述べている。島では三線を弾ずるはもつぱら男子のわざで、女はいずれもみな歌の節と言葉に、その才能を傾けようとしていた。男の歌人が多くは一郷の名士であつたに對して、女性の歌によつて名を知られた者は、大半はゾレであつたように思われる。

ゾレという名称は時によつて、やや広い意味に用いられている。心が定まらずして幾度か男を替えるという評を受けることを、ゾレ名が立つとも謂いっている。歌を歌つたからとてゾレ名の立つわけはないという意味の歌もあつたのを見ると、そういう才女は自然にめずる人が多くて、久しくその操みさおを守つていられない傾きが

あつたのであろう。島の小さな社会では、職業というほどに明らかな差別は無かつたので、只ただそのいわゆるゾレ名の高さに伴うて、人が幾分か近づきやすくなつただけかと思う。以前『御伽草子』の「和泉式部」を讀んで、「昔和泉式部といふ名高き遊女ありけり」とあるのに、私などは喫驚びつくりしたものであつたが、この書のできた時分の我邦わがくにの遊女も、やはり大島のゾレくらいのものであつたらう。大島では笠利かさりの鶴松つるまつという女が、さして古い頃の人でないにもかかわらず、島の一個の和泉式部として讚歎せられ、その吟咏ぎんえいは今も記憶せられている。歌の文句の中に嬌きよう名めいを留めている者は、明治に入つてからでもまだ幾らもある。節子ふしこのとみというゾレがおそらくは最後のもので、現に八十余歳

の長命で、かりゆうど 人の妻になつて生きている。そうして今でもさまざまの古い物語を暗記しているそうである。こういう女たちの末路にも深い興味はあるが、いかにしてそういう生活が始まったかに至つては、さらに一段の不思議さえあるのである。島には遊女の家筋というものも無いらしいのに、それが次々に出現して絶えなかつたのは、別に今まで考えられなかつた成因が、爰にもこゝ潜ひそんでいるのである。

六

ゾレを大島の人々がまたサカシとも呼んでいたことは、私には

意味深く感じられる。サカシは勿論才氣があつて、時に応じた歌謡のおうしゆう 応酬を能くする者の名であつたろうが、なおそれ以外に美しい声と清き目眉と、酒を被つてかぶ 諧謔するような気風とを具備しなければ、その地位にいることはできなかつたらしい。この条件の半分は生まれつきである。それを幸福とも言い切れぬのは、以前は是がために正規の家庭生活に入つて行く機会を、逸する場合が多かつたからである。昔の伝説時代にはこういうのが神のモロフシ、すなわち一生を御社おやしろ に捧げて、歌いつ舞いつする者となつたり、もしくは水の精をむこ 簪に儲けたと謂つて、末にはするすると長い裳裾もすそ を曳ひいて、池沼ちしやう の底に入つてしまつたり、さては谷川の岸に菜な を洗いつつ、路行みち く貴人えん に艶ことばなる詞を送り、

見いだされてその家に仕え、故郷の親兄弟を悦ばせたりしたのかも知れぬが、世降よくだつてはそれもことごとく、あやなる物語の夢幻しに過ぎなかつた。人を一時の恍惚こうこつに誘いざなう力は有つても、自分の常の日の心細さを、紛まぎらすには足りなかつたのである。こういう女たちが好んで男女の酒盛りの席に列したがる。南の島々のように多くはいなかつたが、寒い東北の辺鄙へんびの村里にも、折々は生まれ合わせた者があつた。たとえば青森県の『浅瀬石川郷土誌』あせいしがわにも、在所に評判の美人の歌をよくうたうものがあつて、城下の青年が酒を携え、夜分潜ひそかに遊びにくる風が、維新の頃までもあつたことを記し、ここでも鶴つるという女がその中では殊に著名であつたと謂いっている。船の通いの間遠まどおにして年々続き、風待ち日ひより和

待ちの長かつた日本海側の湊場みなとばなどで、こういう女性の利用せられたことはいうまでもない。おかしいことには大島のサカシとはかえさまに、此方では殺風景なゴケという名をもつて、こういう女たちを呼んでいた。ゴケは「後家」などという文字を夙はやくから書いて、次第に夫を亡うしうた不幸な女のみに限るようになったが、奥羽は一般にその語の用法がはるかに広い。一人で永くいる者がみなゴケであり、茶汲み莫塵ござし敷きに老いたる男と添すう者もゴケであつた。つまりは契ちぎりを籠こめた只一人ただひとりの若者すがに縋すがつて、純なる夫婦のかたらいを持續する力の無い、あわれなる者という意味にほかならぬのである。そういう人たちの無くて済む社会はたしかに望ましいのだが、いかにせん外からも内からも、こういう一時の

伴侶を要求したのみならず、彼らもまた是によつて盛りの日の淋しさを凌しのいだのである。固もとより老後の計りごとは立たつてゐるはずがない。それ故に身のよすがを求めるために人の心を試み、またはあすの日の定め難さを悲しみ憂うるような歌ばかりが、次第に彼らの間から生まれて来たのである。彼らの漂泊にはむしろ明白すぎるほどの動機があつた。若く花やかな年頃には、人に騒がれて親の家にでも止とどまり得た。数が少なければいわゆる村ゾレとなつて、一生を送ることもできたが、すがれて浮草のさそう水もなくなると、かえつて群むれをなして遠く天涯の旅をも試みなければならなかつたのである。是これが曾良そらなどの眼を留とめた、遊女の田舎わたらいであつたろうと思われる。

是まで遊女の歴史を書いている人々が、文書の中にもちやんと史料が見えているにもかかわらず、とかく彼らの個人的な境遇のみに目をつけて、群の生活ということを省みなかったのは、おかしな今風の物の見方であつた。遊女はやや老いて人もすさめなくなる、いよいよ歌謡と酒との昂奮こうふんを借りて、男女たがいの心の隈々くまぐまを探りあい、求め難い安住の機会を把えようと努める。心なき者が淡々あわあわしく外から眺めても、是にはたしかに見馴れない人生の情景がある。ましてや一たび酔うて今は醒めてさいるという類の旅人であつたならば、深い詠歎えいたんなしには看みて過ぐる事ができなかつたろう。是も私たちの読むたびに心を動かされる連句に、「熱田三歌仙あつたさんかせん」の次のような一聯いちれんがある。

芸者をとむる名月の関

桐葉とうよう

おもしろの遊女の秋の夜すがらや

翁

ともし火風びをしのぶ紅粉べにさら皿

叩端こうたん

是などもまた確かに群むれて旅行く女たちの生活であつて、静かにその歌の声に聴き入った人々の背後には、秋の夜明けの白しら々とした東しのめ雲が、もううそ寒く近よつて来ている感じがする。こういう人生の片隅かたすみの寂しさをも、見落さなかつたのがわが翁おうの俳諧であつた。恋は畢ひつきよう竟するにその巷ちまたの辻つじに彷徨ほうこうする者だけに、談かたらしめておいてもよいような、小さなまた簡単な問題ではなかつたのである。

寡婦と農業

一

村の生活には、いまだ説明せられない幾つかの問題が残っている。是は^{これ}観察者の見落としと言わんよりも、むしろ漢語でばかり物を考えようとした弊^{へい}であろうと思う。例えば稲作作業の一季の結末を、もとは日本語で何と謂^いったか。こういう知れ切ったような

問題を出してみても、今ではちよつと手短かに答えることがむづかしいのである。耕す人々の生涯においては、是は何よりも重要な一つの区切りであつた。曆書が大陸から渡つてこなかつた以前には、年の境は稔さかいりをもつて目標としたろうとも言われている。近代においても必ず感謝の祭があり、また家々の饗きやう宴えんがあつた。定きまつた名称なしに、空過することのできぬ日であつた。カリアゲというのが最も普通に行われた古い日本語であつたらしい。苺かりあ上げ祝いといわいもしくは苺かりあ上げ盆という語も行われており（『富山市近在方言集』）、現にこの日をもつて一応小さな祝をする風習も各地にある。すなわちかつては水田の生産が、苺かりあ取りをもつて終りを告げた時代のあつたことを意味する言葉である。大宝令

の時代の分配は稲束をもつてした。租稲はもとより正税出挙しやうぜい すいこの出納すいとうまでが、ことごとく何束何把をもつて計算せられたのは、穎えいすなわち稲の穂の運搬と貯蔵とが、普通であつた証拠である。今でも瓜哇ジャワなどの米作はこの通りで、写真で見ると全然鋏はさみと籠かごとの作業である。大変な人の手を要し、且つほとんど藁わらの利用ということを断念した生産であつた。

現在日本の農業においては、苅上げはもちろん米生産作業の完成ではない。自作農にも小作人こさくにんにも、生産の労働は玄米俵げんまいたわら入れ、すなわち白場うすばの仕事の終りまで続くので、だからまた白じまい、庭仕舞にわじまいの祝というものが始まつたのである。ただしこのアラ摺ずり方法の発明は新しいことで、近き百年以内までは、貯

蔵は多くの地方ではもみをぬかを去る仕事は食事の準備に過ぎなかつた。摺すり臼うすというものが入つてくる前には、玄米を得るのはきかうす木臼と手杵てぎねとの労働であつた。上代の春米部つきよねべの任務は今日の春米屋つきごめやのそれとは異なり、主として粃を玄米にすることを目的とした。米精白の趣味流行とも名づくべきものは、つまり簡便なもみすりる粃摺機械が、立たて臼・手杵と手を分かつてから後の事であつた。それ以前の久しい期間は、粃の俵入れこそは農業の終りであつて、アラ搗づきはすなわち家々の消費作業と認められていたのである。東部日本の多くの都会にあるアラマチ（糶町）という地名は、もと玄米調製が城下市街の事務であつたことを示している。

稲を穂のまままで運びまた貯蔵するの不利は、夙はやくから認められ

ざるを得なかつた。それ故に俵というものは発明せられたのである。『延喜式』えんぎしきには「公私運米五斗たわらとなす為俵」という規定があるが、それより古い記録も探したら見つかるかも知れぬ。ちょうどその時代の名士に俵藤太秀郷たわらのとうたひでさとがある。近江の田原に住んで住地を家の名としたので、竜宮の王から蜈蚣退治の報酬として、一つの俵を贈られたから俵藤太という、物の本に語り伝えたのはウソであり、それが取れども尽くることなき宝の米俵であつたのに、或る時底をはたいて白い小蛇こへびが飛び出し、それ以来空あきだわ俵となつたといふなどはなお大ウソであるが、この話よりも古くできた信貴山しぎさんの縁起えんぎに、大和やまとの或る長者の米庫こめくらの米俵が、空を飛んで信貴の山へ行く絵が出ているから、朝廷ばかりでなく各

地方の百姓の間にも、俵の用いられていたことだけは明白である。何にもせよ京都人が田舎いなかに所領を控え、その田の産米を取寄せせるようになったのは、稲束では到底安全に運ぶことは望めない。国司制度の下では、国々の租稲は最小限度の供御用米くごようまいのほかは、なるべく各地方で使い切つて、不利なる運送を避ける方法が立ててあつた。余剰は貯蔵させるが、遠国は力めてその大部分を交易に宛あてしめ、軽物にして京へ上のぼせるようにする。是があ時代の地方財政法であつた。一種の農業倉庫であつたが、動機はもっぱら行政の便宜にあり、貸稲の制度もむしろ年々積つみ替かえの必要から起こつていたらしく、その計算はまたあまりにも大まかであつたために、余得は追々に土地の豪族を長養することになつた。そうして

彼らの勢力が境を越え、軍陣の往来が盛んになると、俵物の必要はさらに加わつてきて、もはや伏見ふしみ稲荷いなりの御神像のごとく、稲を担かついで遠く行く者は、見かけることができぬようになったのである。

二

このもみだわらか粃俵化の以前の状態が、今でもわずかながらうかが窺われるのは、沖縄県北部農村のイネマチン（稲真積）である。この辺からあまみおおしま奄美大島にかけて、最も特色を認められている高倉たかくらの構造なども、その外形から見て明らかに是これから進化したものとと言えるが、

稻真積の方は收穫の季節ごとに、臨時に設計せらるる貯蔵法であつた。場処ばしょは大抵は耕地の附近に、石を土台にして円まるい形に、稻の穂先ほさきを内側にして積み上げて置く、きわめて簡易且つ悠ゆうちよう長ちやうなる様式のものであるが、その分布は弘ひろく日本の南北の果はてまで及んでいたようである。今日の内地の二ホまたは稻村なるものは、名は稻村であるが実は藁わらばかりを積んでいる。余程の交通不便な山奥でもない、もうこんな事をして家の外に、稻を積んでおくことは不安になったが、以前は是もまた稻二ホであつたかと思われる。東日本でこれを二ホまたはニヨーと謂いうに對して、西の方にはホヅミという語があり、転じてはコヅミ・スズミ・ススキなどと呼んでいる土地がある。十月雨の少ない中国や九州では、今

でも収穫の作業を田で片づける風があり、遠くから見通して自然に番のできる処ところでは、稀まれには粃かを蓆むしろ 罎がこ いにして、田の真中に置いてあるのが、汽車の中からでも眼につくことがある。是は農業経済の問題ではないが、秋の穀祭のめでたく終るまでは、生産物を家に持ち込むことができぬというような信仰が、或いはまだその痕跡を留とどめていのではないかとも考えられる。

とにかくに摺すり 臼うす や唐箕とうみ が採用せられて、玄米げんまい の俵いねこ が商品となるまでの間は、稲作作業の終局と考えられたのは、稲扱いねこきという仕事が済んだことであつた。この期間はいわゆる俵藤太在世の頃に起こり、近くはほとんど維新の間際まで、約千年の久しきに亘わたつていた。幕府領などは大分前から、米年貢こめねんぐ に改まつていた

が、小さな大名領では江戸期終りまで、靱俵の年貢を取っていた地方も少なくはなかった。こういう状態のもとにおいて、水田農事の結末をコキンテという地方が多かったのは、不思議ではないのであった。この語の行われている区域は、日本海側では越前えちぜん・加賀かが・能登のとなどで、ミテルを終了するの意味に用いている地方ならば、稲こきの完成をコキミテと謂うのは当り前の話だが、それが今ではもう分らなくなろうとしている。最近読んでみた『石川県珠洲郡誌すず』に依ればよ、同郡木郎村もくろうでは収穫終りの休日をコキンテ、宝立村ほうりゆうではコキンチョ、直村ただではコキンチョウと謂つて、いずれもこの日を祝い牡丹餅ぼたもちなどをこしらえて、神に供えまた自分たちも食べる。すなわち稲扱きがみればそれで田の仕

事は一切りが付くので、その日の幸福を記念せざるを得なかつたのである。

今日は多分古風な人だけが、この言葉を使うことになっているだろうと思うが、是は随分永い歴史があり、また人生にとつて最も痛切なる内容を有つ日本語の一つであつた。農夫の立場から見れば、嫁取・智入・御産・元服・節季・正月などという語と同じ程度に、胸の轟きなしには用いることのできぬ語であつた。信州筑摩・安曇の各村などでは、この一年一度の大切な祝の日を、普通にはコバシヤゲと謂っている。そうしてやはり何故にそう謂うかを忘れた人が多いと見えて、転じては何の事務でも、完成したという意味にこの語を使っている。コバシヤゲは隣の富山県で

はコエバシアゲ、新潟県に行くところバシアゲと謂う村もあつた
 が（『温故之栞』廿一）、要するに稲扱道具を片づけるという
 ことであつた。アゲルというのは「しまう」こと、コバシは正確
 に謂えばコキバシすなわち扱箸こきばしであつた。信州は北の境さかいしもみの下
 水内郡のち、美濃みのの山やま郡がた、三河みかわの宝飯郡ほいなどでも、以前の稲扱
 道具をコバシと呼んでいたことが、それぞれの郡の方言誌に見え
 ている。佐渡さどの島は色々のこと古い言葉の遺つてゐる土地であるが、
 彼処あそこにもまだコキバシまたはコイバシという名だけはあつた。コ
 クという動作が重要でなくなつてから、この動詞も追々に不用に
 歸し、単にコキオロスとかシゴキとかいう複合形の語だけに、そ
 の残影を留むるまでになつたが、それでも方言の間には少しずつ

用いられている。農業の方でも大豆^{だいず}とか胡麻^{ごま}の実^みとかを落す時に、稀^{まれ}にはこの動作を必要としている土地もあるらしい。屁^へをコクとか嘘^{うそ}をコクとかいう下品な詞^{ことば}が暗示^{あんし}しているように、つまりは狭いところを無理に通して、附いているものを落そうという行為であつた。過去何千年かの日本の稲扱^{いね}きは、まさしくこの目的をもつて簡単な二本の竹^{たけぎ}切れを合わせ立て、その間から稲穂^{いね}を引きしごいて、糶^{いね}を落していたのである。江戸期も末になるまでの三世相とか女大学とかの家庭用書の口絵には、幾らでもそういう農業の図が出ていて、実は自分などの少年の頃にはしばしばこれを見て実際の作業ぶりと、あまりに違っているのを不思議に思った次第であつた。

三

この扱こぎばし箸の使用はいかにも能率の掬がらぬ方法であつたので、
久しい以前から徐々に改良が企てられていた。例えば佐渡でもコ
キバシという名だけはあつて、実際はすでに百年以上も前から、
竹または鉄の小さな管くだを左の手の二本の指にはめて、それで挟はさん
で稲の穂を扱こく道具になつていた。僅かならも是も改良であつた
証拠には、始めからこういう装置であつたら、箸という名が付け
られる道理はないのである。しかもかくのごとき微小なる発明で
も、やはり山路海辺を伝わつて、弘ひろくその恩恵を流布させていた

かと思われる。殊に鉄の管などは、農業の手作りには行かぬもので、商品として何処かに製造所があり、また宣伝の中心があつたはずだから、一層普及が容易であつたのである。薩摩の知覧で稲扱きをカナクダ、土佐の中村辺でこれをカナバシと謂つたというのも、或いはこういう種類の改良品ではなかつたらうか。何にしてもそう古くからの名称ではなさそうである。

関東・東北でカラハシと謂つていた稲扱具は、鉄製のものではなかつた。実物は私もまだ見ておらぬが、竹を割つて尖らせたものを何本か櫛の歯のように一列に並べ、稲束を平たくしてその櫛の歯の間を通すので、是では「扱く」ではなくして「梳く」のであるが、私などの生まれた中国方面では、古い慣例のままに是

と同様の構造のものをイネコキと呼んでいた。一方カラハシという名称の行われていた区域も弘いようである。群馬県の佐野、栃木県の那須なす、福島県の伊達だてなどの実例を私は知っている。カラハシは勿論もちろんカラコキバシの省略で、あたかもツルウメモドキをツルモドキ、白木蓮びやくもくれんを白蓮びやくれんと謂うのと同様の变化である。カラとはすなわち新種改良品のこと、農具には唐臼からうす・唐鋤からすきのごとく、カラとかタウとかいう語を冠したものが多し。実際また支那人シナから、間接に学んだものかも知れぬ。鎖国時代でも農書だけは自由に輸入せられていた。そうして支那農民の技術には、今日でもまだ敬服すべき巧妙さが認められるのである。日本今日の農法の中にも、自国かぎりの発明工夫は絶無とは言われぬが、

他の大部分は外から採用せられたものである。直接教えてくれたのは同胞隣人であつても、中にはこのように数千里、数千年の旅をして来たものもあるのである。

ただしこのいわゆる文化伝播でんぱには条件があつた。一つには学得る智能であり、二つには学ばねばならぬ経済上の必要である。

縁が無ければ在つても知らずにいることもあるのは、つまりはこの条件の具足せぬためで、今日しばしば問題となるところの、模倣と採択との岐れ目わかめもまた爰ここにあつた。尤も中には必要があつても、採用し得られない他の事由のある場合もあれば、また無意味に真似をしているうちに、自然にその恩恵を味わい得るに至ることもあるが、少なくとも昔話によくいう鴉からすに鵲うの真似をさせよう

とする類の新技术の輸入が、永くその効果を挙げ得なかつたことは明らかである。

この意味からいうと、いわゆるからこきばし唐扱箸の発明ないし普及という事實は、非常に興味の高い経済史の問題を提供する。千年の久しきに亘わたつて我々の使い馴なれていた二本箸の稲扱器を、一朝にして改良した所以ゆえんのものは何であつたか。外部の原因は或いはただ偶然の遭遇に過ぎなかつたとしても、内にあつて働いた動機ははたして何に基づいたかという問題である。地方により村によつて事情も区々まちまちであつたらうが、大体から言つて二つの点がまず考えられる。その一つは労力の改良、すなわち少しでも価値の多い労働をしたい。同じ働くにも楽しみが多く苦痛が少なく、且つそ

の効果を多くしようという希望である。是は大昔から今の世の中までを一貫した潮流であり、また社会を今日の文化にまで推し進めた動力であつて、それが個人主義・資本主義の発生成長に、大いなる便宜を付与したと謂つても、強ちに憎み賤しむことのできぬほど、大切なる人類の成長素であつた。実は是あるがために社会の未来は、今でもまだ樂觀することができると謂つてよい。我々の思索が解放せられ、我々の経験が或る程度まで集積すると、まず今までの盲目なる辛勞が、大部分は省略し得るものであつたことに、心づくことは誠に自然である。骨惜しみは現在でもなお悪徳の中に算えられるが、しかし無駄働きということも、また夙はやくから忌み嫌いわきられていたのである。

第二の点は私が仮に小農化の傾向と名づけんとするもので、是ばかりは或いは日本だけの特殊事情であつたかも知れぬ。すなわち農村における共同作業の制限であつて、なるべく多く自分自分の家の者だけで、生産を完了しようという念慮が、個々の農人の中に現われて来たことである。勿論そうすることが同時に第一の目的にも合致したのではあるが、他の一方にはまた良民すなわち独立農の家の数が増加して、追々と以前通りの協同農法を持続することが困難になつたので、努^{つと}めてその煩^{はんるい}累を避け、各自家限りの農業を行おうとして、勢い右申すがごとき能率の高いいわゆる労力省略機械の必要を感じて来たのである。尤^もこの結果がいよいよ個々の小農場の孤立的傾向を促すことになつたのもまた事

実で、もしこういう新方法が採用せられなかつたら、日本の多くの農村は今少しく昔ながらの生産協同を続けなければならなかつたであろうが、さてそうすることが必ずしも幸福であつたらうとも断言はできない。要するに耕地は増し得ずして、分家分家ところ農家の数が多くなつて来ては、到底古風な大農法を、以前のままに行うことは不可能であつたのである。

四

別の言葉をもつて言うならば、近世農村の労働組織は、たといカラゴキ・カラウス等の輸入がなくとも、なお必然的に変化すべ

き時運に面していたのであつた。ただその中でも特に稲扱用器の改良が、大きな影響を与えたというのみである。同じ新規の器具方法でも、単にいわゆる労力の改良に役立つのみで、組織の方面にはあまり働きかけなかつたものも多い。比較対照のために爰にカラサヲの例を挙げてみると、是も明らかに支那から入つて来たものであるが、この方はかえつて新たに一種の共同作業を促している。日本の籾落し方法は、つい最近まで実は各地区々であつた。一方鉄製の扱箸がすでに知られている処があるのに、他の一方には二本の竹箸よりもさらに原始的なる脱穀作業があつた。日本の農村生活の変遷を窺うべき好史料に、吾山という俳人の編輯した『物類称呼』五巻がある。安永四年の序文を掲げ

てあるが、その中にはすでに遠江とおとうみのカナコバシ、西国さいごく地方のセンバゴキ（千把扱き）の名が見えている。しかるにそれよりも二十何年の後、西暦一七七七年に来朝した和蘭オランダ甲比丹カピタンツンベルグは、その江戸往来の旅行において次のような見聞をしている。是も九州の沿道筋の事と思われるが、彼の言に依ればよ、稲扱きは極度に簡単な方法をもつて行われていた。稲の束を樽たるとか壁とかに打ちつけると、それで実みはことごとく落ちてしまふとある。是は稲種いねだねの「実翻みこぼれ性せい」とも名づくべきものと関係があり、いずれの地の農業もかつて一度はそういう方法を行ったとも考えにくい。タウボシ一名「大唐米だいとうまい」などという稲は、多産強健なれども原種に近いためか、とくに実の翻こぼれやすい性質をもつていて、

鎌入れにも不便があり、穂のままに貯蔵をした時代ならば、大いなる欠点といふべきものであつたが、こうした簡単なる籾落し法を行うとすれば、むしろそういう実翻れの容易な籾を撰んで、栽培したような土地もあつたかも知れぬ。とにかくに穀物の穂の部分を広い筵の上などに集めて、棒で打ち叩いて脱穀させる方法は、かつては籾にも行われていた土地が有るらしいのである。それから他の一方に新しい籾扱機械ができて、一日に沢山の籾を落すやうになると、つい扱き方がぞんざいに流れ、藁の穂にまだ若干の籾がくつついて残ることになり、それを集めて棹で打つて、今一度残りの籾を落す作業が必要になつてくるのである。関東平野では是をボツチャラウチまたはボウジブチなどと謂つて、以前の籾

みおさめ

納のころには厳格に言えば、是が稲作最終の作業であつた。

ボツチャラのボツチは「堆」を意味し、すなわち積み重ねた藁と
いうことだと説明してくれた人もあるが、或いはこれをボータと
も謂う地方があるのを見ると、本来は穂打藁ほうちわらまたは穂打ちの転て
訛んかであつたかも知れぬ。この穂打ち藁打ちがいかに苦しい労働で
あつたかは、庭の上を五六遍べん棒で打つてみればすぐに想像がつく。
持つ手に反動がくるばかりでなく、いつも中腰になつて働き続け
なければならぬから苦しい。このついでに一言するが、田植・草
取を始めとして、この類の中腰の作業が日本には甚だ多く、そう
していずれもせわしい仕事である。農民に老いて腰の曲る者が多
かつた原因の一つであらうと思つている。こういう労働の苦痛を

軽めるためには、改良の歓迎せられたのは当然の話である。カラサヲの方言は上方ではクルリ棒、茨城県などではフルチガヘシ・フルチボーまたはフリボーとも謂っている。福島ではフリウチまたはフリウチバイ、佐渡ではフリバイと謂うそうである。バイもボウも棹も同じことで、フルチは振打ちの詰まった響ひびきであることは疑いがない。すなわち前には回転せぬ棒をもって打っていたのが、これに由よつて始めて腰を曲げずに、藁やその他の穀こくを打つことができたのである。尤もこの改良の中間に今一つ、棒の片仮名のへの字のごとく屈曲したものを使って、その背中をもつて打っている者もあつた。つい近ごろも信州の上伊那郡かみいなでそれを見かけた。真直まっすぐな棒を使うよりはずっと楽で、是だけでも大きな改良

であつた。発明は事後に回顧すれば何でもなようなものが多いが、その変り目に當つて当事者の味わい得る愉悅は大きなものがある。いわんや振打返しのクルリ棒に至つては、仕事に調子がついて歌に乗りやすく、多人数で共に働くときは若干の興奮をさええ感じ得られる。始めて是を用いた時の満足は、或いは唐から拔こき箒ばし以上であつたろうと思う。ただし作業の功程の上には、そう大きな進歩でもなかつた。これは農事改良の主として苦痛を軽減し、またむしろ共同の作業を便利にした例であつて、同じくカラの字の附く新意匠であつても、いわゆるカラハシの方とは著しい相異であつた。

五

カラハシの効果は是と反対に、非常なる労力の節約であつた。すなわち孤立農業の存立のために、とくに大いなる便宜を供するものであつた。諸君の中には近頃一読せられた人もあろうと思うが、清水文弥翁の『郷土史話』には、野州那須の農村における実験が記してある。曰くカラハシは竹を割つて作つたもので、一人一日の能率は稲三十六把、粃約七斗二十一貫目を扱けばよいことになつていた。ところが名古屋産の千把コキを使うと、たちまち能率はその二倍になつたとある。すなわち是は鉄製のものであつたらう。現在に至つてはこの二機ともに廃れ、改良稲扱機の

能率は一日に四十びよう俵、すなわち竹のカラハシの約二十七八倍になったと言っているが、勿もちろん論その後さらに有効なるものもできてはいるはずで、つまりは百年前には一人の力で、一月以上も費ついやすべかりし仕事を、今では丸まる一日もかからずに片づけるようになってしまったのである。

右の竹製のカラハシにかわつた鉄製の千把コキなるものも、早くから有るには有つたが、それが普及したのは至つて新しいことであつた。中国の最も交通のよく開けた農村ですらも、今から四十年ばかり前、すなわち自分が少年の頃までは、まだ普通には竹の稲扱を使つていた。そこへ伯耆ほうぎのカナゴキ屋という行商が、毎年初秋の頃に遣やつて来て、分割支払法をもつて鉄製の稲扱を売つ

ていた。カナゴキはすなわちカネイナコキの略称であつて、那須
その他でセンバと謂いつたものと同じである。そうかと思うと越後えちご
などは、もう今から百三十四年も前に、すでにこのセンバを使つ
ていた村もあつた。『温故之栞』おんこのしおり（巻十）にはこの国の水田生
産のことを記して、以前は割竹五六本を木の台に立て列つらね、稲を
七八茎けいずつ挟はさんで扱こいた故に、丈夫一日の辛苦をもつて僅かに百
五十把の粃もみを扱くくのみであつた。寛政の初年に阿波あわからセンバと
いう機械を直江津なおえつに持もちきたる。一日に千把の稲を扱くく故にこの名
があつた。本名を何というか知らぬと謂いつてゐる。東北地方では
福島県南部の、県道交叉点こうさてんに臨のぞんだ一旅亭で、その越後から同
じ機械を、売りに来ている行商人の一群に出会つて、詳しい問答

をしてみたのは、つい今から十五六年前のことであつた（『郷土研究』四卷八号）。すなわち運賃雑用のあまりに多くかかる販売法であつたために、まだこの頃までこの地方へは普及し得なかつたのである。鹿児島県の種子島たねがしまなどでも、その少し以前に旅行をした草野教授の話では、まだ割竹の稲扱をもつて数茎ずつの粃を落し、その粃を白うすに入れて脱稈だつふから精白までを一続きにしていた。そこへ内地からただ一台の鉄の稲扱器を取寄せてみた人があつたが、方々から珍しがつて借りにくるので、僅かの中に破損してしまつたと謂つている（同誌二卷十号）。

いわゆるカナゴキの優越なる能力は、確かに当時の農村人を驚歎せしめるに足るものがあつたが、しかもセンバコキなる名称は、

それよりもずっと早くから、実は世の中に知られていて、是は多くの地方では福島・栃木などというカラハシ、すなわち竹製の稲扱器のことを意味していたのであった。実際この櫛くしの齒はの竹の稲扱が出て来て、在来の簡単な二本の扱こきばし箸しにかわつた時の方が、^{のち}後にそれ自身が鉄製のものにかわられた時よりも、はるかに農民に与えた印象は強烈であつたのである。後者は単に功程こうぢやうが急増したというだけであるに反して、前者はこれに由よつて外には作業の形式を一変し、内には私経済の組織に最も顕著なる影響を与えざれば止まなかつたからである。この突如たる事情の変化を、やや誇張したる語辞をもつて言い現わそうとしたのがセンバであつた。必ずしも一日に千把の稲を扱き得るということを、実証した後

附与した名ではなかった。センバという名称は西は大分県海部郡あまべ、肥前ひぜんの千々岩ちぢわ、また熊本県八代郡やつしろなどにも見いだされるが、主として東北の端々はしばしにおいて行われている。宮城県北部の登米とよま郡その他、岩手県の気仙郡けせんなどともに、センバコキと謂えば一般に櫛の齒式稲扱器、すなわち南隣の阿武隈流域あぶくまなどで、前からカラハシと呼んでいたものを指したらしい。それが北へ行つて南部領になると、これを略してセンコキ、津軽つがるの農村ではもつと略して、ヘンコキと謂う人も多かつた。上州・信州において同じ物を、センダコキという方言があつたことは、前にも引用した『物類称呼』に見えている。すなわち鉄製の稲扱ならずとも、旧来の一本のコキバシに比べると、是は確かに千把または千駄せんだと誇張す

るほどの大革命であつたのである。

信州の松本などでは、現在は稲扱器をマンバと呼ぶ語がある。

是は鉄製品出現の際に、「センバ以上」という意味において、宣伝用に発明せられた名ではなかつたかと思う。それを聞き損つた

と見えて、愛知県葉栗郡はぐりでマンガ、福井県の一部には是をマンガ

ワという語さえある。信州も高たかとお遠附近ではマンガといい、そう

してこれと差別するために、改良鋤くわの一種はマンノガ、馬鋤はマ

グワと謂っている。全体に新しい農家用品には、こういう風な耳

を刺戟しげきする名称が多いのは、農民の単純さ正直さが利用せられた

のである。元来万まんのう能だの万まんにき力だのという農具は、みなこのマ

ンバと同様の宣伝名で、すなわちそれがすでに商品として彼らに

供給せられたことを語るものである。センバという語などもちやんとそれ以前に、我々が囲炉裏いろりの炭火をすくう道具、奥羽ではオキカキ、九州では火スクヒなどというものに占領せられていた。今はその意味が不明であるが、是も多分その能率を形容した広告語であろうと思う。ところが後に稲扱器にその御株を取らるるに及んで、大いに謙遜けんそんして十能じゅうのうなどという名に納まろうとしていた。名称はその初期の目的さえ達してしまえば、後はただ性せいをもつて我々がこれを保持するに過ぎなかつたのである。

六

だからこのような地方語の穿鑿せんさくは、通例は物好きの一茶話さわに過ぎぬのである。稲扱器がセンバと謂おうが、またカラハシと呼ばれようが、もしそれが前期経済組織の一つの目標でなかつたならば、こうして自分のように各地の異同を究めるに苦勞する必要もないのである。それと同時にこれ是より以外よの材料に由つて、この変遷して痕あとをも留めとどぎらんとする農村生活の時代相を、認識せしむるの途みちが無いとすれば、いかに小さな事柄であつても粗末にしてはいけない。単に学者の書に出ていない、書物を著あらす者が省みなかつたというばかりで、無意識ながらも是は我々の祖先が、後代に残しておいてくれた大切なる経済史の史料である。事物の名称は意味なしには決して発生しない。小児ですらもその生活の

最も深い感銘に基づいて語を造っている。遊戯の余裕に乏しい農民が、生活に適切ならざる符号を案出するはずがない。ただ我々のその趣意を解し得る者が、多くなかったというのみである。例えば紀州の南部牟婁郡の一部で、稲扱きをタカセと謂っている者があるが、是などは竹センバの下略かどうか、私にもまだ意味がはつきりせぬ。こんな例はまだまだ幾らも出てくることと思つて注意をしている。

同じ三重県でも『度わたらい会郡方言集』、すなわち神宮周囲の村落の語では、今でも稲扱器のことをヤマメと謂うそうである。ヤマメは寡婦やもめのことである。何故にそのような名前が稲扱器に附与せられたか。現在ではもうその趣旨を忘れてしまった人々が、無意

義に使用していることと思われるが、もとは是もヤマメタフシ、もしくはヤマメナカセと謂つていたのが、長過ぎるために後に尻を切つたのであろう。吾山の『物類称呼』を見ても、稲扱きを畿内ではゴケタフシ、越後ではゴケナカセと謂うとある。その説明は『和漢三才図会』に出ているのが最も要領を得ている。『和漢三才図会』は『物類称呼』よりも、また四十年も前に世に公にされた本だが、著者の住む摂津辺には、もうすでにこの「後家倒し」が使用せられていたのである。その文章を書下し体に直してみると、曰く、「按ずるに古は麦・稲の穂を扱くに、二つの小管を縄を通して繋ぎ、之を握り持ち挟みて穂を扱きしなり、秋収の時に至れば、近隣の賤婦孀婆是が為に雇はれ、以て飽くことを得た

り。然るに近年稲扱きを製す。其形は狭き牀机しょうぎの如く、竹の大小お釘おくぎ数十を植ゑ、少しくマングハ（馬齒把）に似たり。穂を引掛けて引くに、其力は扱竹こきだけに十倍す。故に孀婆業を失ふ。因つて後家倒しごけたおと名づく。又近頃は鉄を以て齒なと為し、鉄稲扱きと名づくるあり（以上）。勿論この名称は事実を語るといふよりも、寧ろ印象を鮮明ならしめるために、わざと奇警の語を採用し、したがって人が能く記憶したというに過ぎない。後家は必ずしもこの竹製稲扱器の発明のみに因つて、倒されまた泣かされたのではなかつたのであるが、ちようどこの発明の採用せられた時代または地方において、次第に日本の農業はその作業組織から、寡婦かふや小児を排除するの傾向を示しつつあつたのである。

主人が壮年にして死歿しまたはいなくなる百姓の家庭は、昔とも決して^{すく}尠なくはなかつた。そういう家で家業を持続することは、農は他のいずれの業よりも殊に困難なる事情があつた。現に今日ではそれが大抵は農廢業の一つの原因となり、また多くは離散零落^{れいらく}を伴のうている。作り高と村の戸数とを減少せしめざるを主義とした前代の農政では、とくにこの場合に向かつて色々の方法を立てていたことが、『地方凡例録』^{はんれいろく}などを見てもよく窺^{うかが}われる。娘があれば年が違つても^{むこ}聶を取る。後家には出来る限り入^{にゆうふ}夫をする。こういうことは必ず家族關係を複雑にし、年若いたる者を不幸にする種であつたが、それすらも避けることが許されなかつた。或いは十歳前後の男の^こ児ばかりで、母が末を案じて

二度の夫を迎えまいとする場合などには、普通は一時家をたたみ、親子分わかれ分かれに奉公などをして相続人の成長を待つのであるが、その間の土地管理が困難で、

作り高は村内の者に都合よく分け持たせ、

後々のちのち再び有付ありつ

かせ候そうろうよう様、

返し遣つかはすべく候云々

という類の訓令は、各領ともに幾らでも発せられているが、もし租税が重ければ村内に引受手が得にくく、新田場しんでんばなどのように負担が軽ければ、喜んで預かってくれるかわりに返したがらず、また取戻しにくくなっていたのである。この際にあつてその不幸な後家たちを泣かしめざらんとするには、何かまた別様の条件が

伴のうていなければならなかつたことは、今日からでもおおよそ推測することができるのである。

七

近世大小の諸藩においては、競^{きそ}うて孝義伝という種類の書物を公刊して、表彰せられたる節婦孝子の篤^{とっこう}行を伝えようとしているが、これを読んでみてもただちに感じられるのは、後家暮^{ごけぐら}しの立てにくかつたこと、殊に水田地方の農業において、それが至難であつたということである。いくら男^{おとこ}勝^{まさ}りの寡婦だと言つても、到底女の手に合わせて力わが米作には多かつた。その中でも

牛馬を飼つて代起しや整地をする処では、女性が稲を栽培するということは、ほとんど断念すべき荒仕事であつた。そこで一門に確かな者があり、または村の長老が慈悲深い者ならば、ようやくのことで僅かの畠などを作らせてもらい、その他は日傭とか手伝とかの収入をもつて生計を補充し、よく貞操を守つて子ども一人役になるまで、持田を失わずに取りつづくことを得たのであるが、それには何よりも村の普通の農場に、こうした女の中途半端な労力を外部に求める必要があるか否かが先決問題であつた。田植は御承知の通り今でもほぼ昔のままに、早乙女を一家の外からも頼んでくる。近世色々の農事改良は行われたが、まだまだ田の植付けの作業に、自家の労力だけで間に合わせ得る方法は

発見せられていない。殊に桑くわばたけ 畠たけの支度その他、新たなる春夏

の交の仕事は増加して、この期は極度に労力の不足する時である。小学校にさえ農繁時休暇というものを認めている。苗打なえうちこやろう小野郎

などと名づけて十一二歳の少年までが、それぞれの一役を課せられた。苗打ちはカンナイドの役と、気仙けせん郡などでは謂いっている。

カンナイドは中部以西ではケンナイドと謂いつて、すなわちかか
人のことであつた。後家ごけそうつふ傭婦の淋しき人々にも、勿もちろん論この時に

は仕事があつたが、それは一年の永い日数に比べると、幾らでも
なかつたのである。紀州などの俚諺りげんに、「麦は百日の播まきしゆん
に三日の苡かりしゆん、稲は百日の苡かりしゆんに三日の植うえつきどき付時」
ということがある。殊に品種の地方的統一を實行することになる

と、一段と忙しいのはこの田植の日ばかりで、そんな仕事はたちまち済んでしまう。お互いにそれのみを宛てにして村内に住んでいることはできないのであつた。他の一方に秋の収穫の際のごとく、農民の心が最も鷹揚おうようになつて、落穂おちぼでも何でも拾つて行けつたというような際に、後家が遣つて来てその作業に参加し得なくなぬ。勿論養蚕ようさんとか地機じばたとか糸繰りいとくとか、若干農村に縁のある内職も探し得たであろうが、何にしても労働が土と関係が薄くなるようでは、村に居住しても次第に異分子をもつて目せられる結果は免れ得なかつたのである。

村の店屋てんや・駄菓子店だがし、小あきない等は、或いは寡婦等を自立せ

しめる一便法のごとく、考えられていたかとも思われるが、その影響は存外に大きなものがあつた。是が博奕ばくちとか売春とかいう目に立つ弊へいふう風であるならば、むしろ自他ともに警戒したであろうが、それほど重きを置かれなくて、いつのまにか暗々裡あんあんりに入り込んでいた生活変化は、第一段には飲食物の趣味である。栄養の問題などとは些すこしの関係もなしに、煮売にうりと称していつでも出来合あひの食物が得られることになる、冠婚葬祭の人間の大事を、意義あらしめたところの特殊飲食、殊に毎年の節供せつくという式しきじつ日の価値が、漸次ぜんじに稀薄きはくとならざるを得なかつた。節供は節日せちにちの供物ということ、すなわち神霊と一家総員とが食物をともにすることであつた。九州の各地で古語のままに、ノーレー（ナホラヒ、

直会)と謂っているのもそれであった。曆の中の最も大切な日を定めて、神々とともに特定の食物を撰せつしゆ取することを意味する語であつた。餅もち・ダンゴ・強こわめし飯・何とか汁じるの類に、それぞれの名があり時が定まつてその数も決して少なからず、一年を通ずればその種類が四五十もあつた。しかるに飴あめ・菓子・餅類の店売りなるものは、単なる浪費・無駄食むだぐいという以上に、右の節日の共同飲食の快樂と嚴肅味げんしゆくみとを半減し、コキンテ・コバシヤゲの祝いわい日びが来ても、それを只ただごろごろと遊んでいるだけにしてしまつた土地も多いのである。

是と同じ事情はまた飲酒の上にも現われている。居酒いざけの風習は起原必ずしも新しからず、少なくとも稲いね扱こき発明以前であつたと

は言える。旅の女が酒を造つて、それを見ず知らずの人にも売つてあるいたことが、諸国銘酒めいしゆの根本となつた例も多いのである。しかし是はもと神社仏閣などの周囲か、そうでなければ街道かいどう往還かんの傍はたに限られ、村で飲むべき日または場処ばしょ以外に、いつでも酒が茶のように飲めることになつたのは、村々の店屋てんやが元であつた。後家の生活方法の一つとして公認せられた職務が、偶然にも飲食法則の解放を促したのである。弘ひろく群書を渉しやうりよう獵りやうして見るまでもなく、我々の酒がもと入用に先だつて醸かもされたこと、全然太平洋島民のクヴァも同じであつたことは、今なおこれを記憶する人があるくらいである。その酒は勿論今売くる下り酒さげのごとく旨うまいものでなかつたことは、丁度ちやうど家々の餅と砂糖餅との差も同

じであつた。いわゆる一ひとよさけ夜酒を酒甕さかがめに醸して置いて、その熟するを待つ心が、同時にまた祭や節日に対する微妙なる準備心理であつた。ところが平常消費が許されまた盛んになつて、後のちついに酒造が地方資本の集積所とさえ進化し、手作りはすなわち軽蔑せられるに至つたのである。地主が多くは酒屋となり、御ごたいけ大家が居酒いざけを飲みに来るはした人足を歓迎するなどは、実に珍しい国柄と謂つてもよかつた。村に資本の利用法が少なかつたのも原因だが、今一つはこういう古い家には、多分眼に見えぬ優良なる酵母があつて、比較的うまい酒を造ることができたからであろう。

酒食の変遷はこのいわゆる「後家倒し」^{ごけたお}の影響の、たった一つの例を提示しただけで、まだそれ以外にも色々の史的結果は推測せられるのである。最後にもう一つだけ、特に農業経済と関係の浅からぬものを説いてみるならば、それは早乙女出稼^{さおとめでかせぎ}という新現象である。農場が分立して機械をもつて外部労働の補給に代えようとすると、一年の内ですの足らぬのは田植の時だけになるから、纏めて^{まと}これを他部落から招こうとするようになるのも自然である。そこで早稲^{わせ}どころや田の少ない地方から、群をなして女が雇われに来るのである。伊勢の^{いちし}一志郡などという島の女、信州川中島附近の越後^{えちご}の田植女、秋田県由利郡などの^{しやうない}荘内の早乙女

などは、今では年々の檀家だんかのごときものができて、いつも定きまつた家の田に来て植えているが、新たにそういう契約を開始した土地も、だんだんに有るようである。従うて賃銀の支払方法も今いまふ風ふうで、きつと元締もとじめのような者がもうできていることと思うが、前からある者は田植の投資期にはただ食わせてもらうだけで帰って行き、秋の収穫季に今一度遣やつて来て、約束の給米を受けるほかに、また落穂を拾わせてもらつたという話である。すなわちおそらくは村内の寡婦が、稲作作業の全体に参加していた頃からの遺風かと思う。漁業の方でも地曳網じびきあみなどの獲物に対しては、カランダラと称して至つて鷹揚おうようなる分配法が認められている。豊収の際には農民の心持もまた別であつた。ミレエの名画を見ると想

い起こすごとく、西洋でも落穂拾いは寡婦の役徳と認められていた。是が後家になつても容易には農作と絶縁しなかつた古い理由であろうと思う。「俳諧小文庫」に見えている芭蕉翁の三吟（元禄六年）にも次のような俳諧の連句がある。

帷子かたびらは日々ひびにすさまじもず鴉もずの聲

史邦ふみくに

粃もみ一升を稲のこき賃ちん

はせを

蓼たての穂ほに醬ひしおの黴かびをかき分けて

岱水たいすい

この一聯れんのつけあいの意味は、百舌もずの啼なく頃までまだ帷子かたびらを着ているような人が、稲いねを扱こく仕事の手伝てんに来て一升の粃もみに有りつき、おまけに鮭すしか何かの御馳走ごちそうになつて行く光景を想像したもので、私は多分第一句の主人公は女性であろうと思つている。俳聖

芭蕉の行脚あんぎゃをしていた頃までは、田舎いなかの秋にはまだこういう情趣が普通に見られたのである。

ところがこういう煩雑はんざつなる扱こき料を支給する必要もなく、さつさと家内の者限りで一日の中にも千把せんば二千把、機械を運転して糶落しが済むようになる、すなわち小農場は小さいながらに、独立の企業主体となることを得るのであるが、そのために他の一面には、改めて非常に厄介やっかいなる農業労働供給方法の問題を、引き起こすことになるのである。貸地地主の一番大なる弱味は、将来土地の返還取戻があつても、どうしてこれを自営するかの見込が、絶対に立ちにくいことである。それは主としてこの労力の一時性の需要を、完全に補充する途みちが無いからであつた。しかも

これを免れる^{まぬか}べく、一家内現存の労力のみをもつて、田植時の事に応じ得るを限度として、各自の農場の大きさをきめるとすれば、小農はおそらく今よりも成長しまた強固となるべき希望は無く、依然として一年の他の半分三分の二は、今のような慢性失業状態の下に煩悶^{はんもん}せねばならぬであろう。すなわち日本の農業には、とくにこういう本質上の制限がある故に、小作が仮に好条件をもつて自作農となつても、なお繁栄する農場を独立せしめることができぬのである。

自分は将来の学者の研究が、当然に何とかこの難問を解決することを信じている。がとにかくに現在の有様では、人はまだ何故に日本の農業が、こんなに遣^やりにくくなつて来たかの、原因をす

らも知っておらぬ者が多かりそうなのである。それというのが一切の農業経済の知識を、あたかも後家女房の煮売り店の食物のごとく、すでに調理して食べられるばかりになっていくもののように、また買いに行けばいつでも買えるように、誤解していた結果である。若い学徒が世の中へ出たの第一次の活躍は、観察でありまた思索でなければならぬ。自分の頭をもつて判断を組立てるところでなければならぬ。今日の世の中くらい、学問の受売りの困難になっている時代は、古今その例が無いのである。

筆者申す。この一文は数カ月以前、某学校での講演の手控えである故に、説明がだいぶ啓蒙的になっている。是を順序を立て

て書き直そうとすると時間が足りない。先輩諸君がかくのごとき知ったかぶりに対して、反感を抱かれざらんことを切望する。

山伏と島流し

一

俳諧の連歌に難解の部分の多い理由は、ちよつと気づいただけでも三つはたしかに有る。その一つは永年許されて来た変則語法と省略とがだんだんとえらくなつたこと、次には俳諧が突とつこつ兀意外を常法とした結果、あまり附き過ぎるのを軽蔑する氣風を生じ

たこと、談林派は勿論その功罪の七八割を負わねばならぬが、この趣味の誇張は末永く継承せられ、尤もらしくしてしかも取留めもないニホヒとかヒビキとかいう説法が繁昌するに至った。何も弁明したところで通じなければ結局は仕方があるまいと私たちには思えるのだが、それにはまた第三の理由として、連衆の支持というものがあつた。歌仙百韻の席に列なるほどの者は、かねて経歴と心境との互いに似通うたものが有つたうえに、改めて感興の統一によつて、鋭敏に仲間の心持を理解し得た。それをもた指導して行こうとする中堅の力もあつたのである。事によつたら本人自身すらも、年経て回想して奇異の念に打たれたかも知らぬ。ましてや後代の読者のごときは、当時彼らの眼中に無かつたこと

は明らかである。この点は本式の連歌も同じことで、あれほど豊富に精確な記録が保存せられているにもかかわらず、今読んでみただけではそれに携たずさわつた人たちの、あの執心と耽たんでき溺とは想像し得られない。しかもこの方は辞句に何らの不審も無いのだが、かえつて高閣つかに束ねられて省みる者も無く、一方俳諧の附つけ合あいのこんなにもで解わかりにくいものを、なお我々が追おい継すがつても覗のぞこうとするのは、決してただ時代が近いからという親しみだけではなかつた。今の時世の研究や穿せん鑿さくは、むしろ遼りょう遠えんの昔へこそ傾いて行こうとしているのである。

至つきつて月なみ並なみな言葉使いではあるが、俳諧には時代の生活が現われている。翰林かんりん詞苑しえんの文章は言うに及ばず、軍書から人情本

までの何万種という小説は有つても、なおその中には書き伝えておかなかつた平凡人の心の隈々くまぐまが、僅かわずにこの偶然の記録にばかり、保存せられていて我々をゆかしがらせるのである。俚俗りぞくと文芸とを繋ぎつな合わせようとする試みは、なるほど最初からの俳道の本志であつたには相違ない。しかしその人を動かそうとした力の入れ処どころが、いつのまにか裏表にかわつていたのである。蕉しやうお翁うの心構えは奇警きけいにも奔はしならず、さりとしてまた常じやうとう套たいにも墮おせずして、必ず各自の実験の間から、直接に詩境を求めさせていたところに新鮮味があつた。是これが世の中の変り目の強い刺戟しげきであつたのやら、はたまた観察者の一般的の余裕であつたのやら、これを究めんとしても私にはまだその能が無いが、とにかくに或る一

人の優れたる師家が指導すれば、たちまちきゆうぜん翕然として時代の風をなすまでに、貞じょうきよう・享げんろく・元禄の俳感覚は活いき活いきとしていた。それが後衰えて、中興を説き、復活を唱となうる声が高く挙がるとともに、かえつて擬古を助長して脚下の社会との縁を薄くしたことは、古来何度となく繰り返された国々の文学史であつた。

我々がとくに蕉門の俳諧に対して抱いている愛着は、ひつきよう畢竟ひつきようはこの新興の意気または自由の魅力であつた。勿もちろん論前にも萌芽ぼうがはあり、後にも遺風は伝わっておろうが、俳諧が芭蕉の世の東国を語るごとく、精彩を帯びたる生活描写はかつて無かつたのである。江戸でも近代の市井学者しせいの中には、俳諧を無意識の世相史料として、利用した人が幾人もあつたが、どういうわけかこの俳

風の変化ということに、注意を払うことが疎かであつたように思われる。私などの見たところでは、貞徳ていとくの門流は京都を本山とし、古式の風雅を尊重して止まなかつた故に、いわゆる賤山しずやまがつの生活の風景までは映写していないが、それでもまだ事物の名目形態、少なくともその古い存在だけは立証せしめる。ところが嗣ついでいで起こつた宗因そういんの一派に至つては、あまりにも空想が奔放ほんぽうであつた。故事と世事とを最も豊富に採用しつつも、自分たちは是によつて抑留せられようとせず、専らもっぱらその学問見聞の向こう側に突進して、勝手な夢の世界を描き出していたのである。芭蕉の弟子の中でも、才子其角きかくはほとんどその一生の間、他の人々も初期にはみなこの句風にかぶれている。うっかりと是をもあ

の時代の世相史料に取入れたならば、どんな間違つた史観おちいに陥るや
やら知れなかつたのである。

だからこの正風しょうふうの境目さかいめのはつきりと区切られるまでの間、

あまり深々と立入つて見ようとする人の無かつたことは幸いでも
あつた。たとえば『冬の日』の中で人のよく知つているいわゆる

神じん釈しゃくの附句つけく、

三日みかの花お鸚う鵒む尾お長ながの鳥とり軍いくさ

しら髪かみいさむ越こしの独うど活が苜り

荷か兮けい

重じゅう五ご

もしくはその第四の巻の、

流行はやり来なて撫で子しこかざる正月しょうげつに

つづみ手たむ向むくる弁慶べんけいの宮みや

野や水すい

杜とく国くに

寅とらの日の旦あしたを鍛冶かじの急起とくきて

翁

などは、今でも何処どこかにそういう事実があるのだなどという者があ
るが、私にはまったくの作り事としか思われぬ。春から夏の初
へかけて忌いまわしい凶事が続くと、早々その年をおしまいにするた
めに、流はやりし行ようが正月がつと名づけて六月の朔ついたち日に、もう一度餅を搗つ
き正月の形をする風習は、いかにも江戸の初期には方々の田舎いなかに
あつて、それを制止した法令なども残っている。しかしそういう
日に撫なで子でしこを飾りにすることも空想なれば、次の句の弁慶の宮と
ても実在ではない。もしもそんな宮があつたら鼓つづみを打つて手向たむけ
るだろうくらいなところで、この一いち聯れんの句はできたのであつた。
それをじみちの方へ引戻そうとして、寅とらの日の一句は附けられた。

ものと思うが、なお興味はそぞろいて次の「南京ナンキンの地つち」という句になつたのである。爺じいの独活うどかり菊きくなども原因は是とよく似ている。一方に弥生やよいの節供せつくの鶏とりあわ合せのかわりに、鸚鵡おうむを出されたというような思い切つた趣向ができる、是に立向うためにはどうしてもまた一段と頓とんきよう狂きやうな空想が、浮んで来ずにはおられなかつたので、それを静かに観みて引締める者がなかつたのが、すなわち談だ林りん一流の花火のような結末であつたらうと私は思う。

二

絵などの発達の経路も或る点までは是とほぼ併行している。当

初稚おきなくしてまた上品な貞門ていもんの俳諧を突破して、梅翁ばいおう一派の
 豪胆なる悪あく諛ぎやくが進出した際には、誰しも鳥羽僧正とばそうじようの画卷を
 くりひろげるような痛快さをもつて、悦よろこび迎えざる者は無かつた
 のであろうが、しかも百鬼夜行の路みちは行き究きわまる処ところがあつた。そ
 うそう際限も無く空想は展開するはずがない。やがては天津絵おおつえの
 ごとく人間の姿態を写し出そうとする者に、その練熟した自在の
 手法を譲つて、消えてしまつたのもまた自然である。ただし俳諧
 の方には北斎かざん・畢山びざん・曉ぎよう斎さい・清親きよちかを経て、現在の漫画隆盛
 に到達したような閱歴は無く、人はただ発句ほつくの出丸でまるに籠城ろうじようし
 て、みずから変化の豊かなる世相描写を制限することになつたが、
 そのかわりには事業は最初から、大津の町に売つていたようなち

つぽけなもので無かった。僅かな線と彩色とで代表し得るがごとき、手軽な人生のみを目標とはしていなかつたのである。

附句つづくを案ずる人たちは、通例はまず絵様えようを胸に画くべしと教え

られていた。歌仙は三十五通りの男女なんによ僧俗の、絵額の排列を聯れ

想んそうせしめ、今でも我々は便宜上、この毎二句の続けがらを絵様

(タブロオ)と呼ぶことにしている。しかし俳諧のタブロオは固

定した平らな画板ではなかつた。第一に時の或る長さがあり、起

伏動揺があり、きらめきがあり、また物を待つ間まの沈黙とも名づ

くべきものがあつた。こういう複雑をきわめた幻の組み合わせを、

たとえ前の句の余韻を借りながらも、たった十四文字か十七文

字の日本語の力によつて、鮮やかに一座の人々の胸に印象し得た

とすれば、その範圍は狭くともすでに大きな事業であつた。古風な田舎の仕事唄しごとうたなどの中には、稀まれにはそれと同様な情景創造もあつたか知らぬが、少なくとも世の文学と称するものの中には、是ほど手際よくまた物静かに、効果を挙げていたものは絶無である。他国に比儔ひちゅうがない故に文学の定義に合わぬなどと言つてはいけない。むしろ文学の考え方をこそこれに準じて改造すべきであつたのだ。

それも談林の大言壮語時代ならば、まだ是を一種の遊戯、いわゆる火まわし尻取文句の改良したものともし評し得るか知らぬが、

正しょうふう風 初期の俳人たちのごときは、各自の生活経験の最も大切なものを是に持ち寄つて、それを彼らの愛するメロデーに順序立

てて、心から悲喜し 哄笑^{こうしやう}しようとしていたのである。純一なる彼らのエクスタイズは、二百余年の雲霧を隔ててもなおこれを窺^{うかが}い知ることが出来る。こういう謎^{なぞ}のごとくまた楽屋^{がくや}落ちに近い表現法の中から、辛苦して私たちがその本主の心持を把^{とら}えようと努めるのも、要するにただこの人たちだけの、語ろうとしていた真実があり、これを通じてでなければ消え去った或る昔を、復活させて見る途^{みち}が無いからであった。何よりも有難いと思うことは、多くの古い知識は只^{ただ}からびた。その当時の活^いきた姿のまままで伝わっていることである。一旦声息の相通ずるに至れば、同じ国土に生まれてまだ幾代とも隔てない我々に、理解と感動との得られなはずは無かつたのである。それが風俗慣習の僅か片つらの変化

の故に、かくまで物遠く眺められていたのは不自然であつた。歴史を一つの温か味のある学問とするためにも、我々はもう一度、古今の俳諧を見直さなければならなかつたのである。

三

連句の不可解になつて来た今一つの理由には、時代が改まつて人の注意が脇にそれたということもあつた。それを裏から言つと、この今こんじん人から敬して遠ざけられているものの中に、かつてはさしも痛切であつた人生の断片が、もう忘却せられて封じ籠められているのであつた。それがいかなる種類の経験であつたらうかを、

知るだけならばそう難いかたことでもない。数多い俳諧の卷々を見渡して、終始咏えいたん歎の目的となつていた問題は限られている。それが我々の陰に陽に、今なお思い悩んでいる社交感覚、殊に血縁の恩愛義理、または男女の仲らいというがごとき、古今を一貫した不変の法則でも有るように考えられているものであつて、しかも瞬またたく間ばかりの時の経過によつて、早くもこうした暗中摸索を事としなければならぬに至つたということは、それ自身がまず興味多き一つの発見であつた。

家の生滅異動と婚姻制との交渉などは、俳諧を主要の史料として利用せぬかぎり、ほとんどその近世の変化を明らかにし得ないとまで私らは考えている。古来幾多の物語はただ定きまつた型を追

い、もしくは優秀特異の事例のみを記述して、平凡日常の恋愛を無視していた。遊女の記録のごときも、この何物よりも重要な社会事実の推移を、一つの側面から反映する点において意義はあったのだが、それも多くはまた都府の一角の、最も機械的なる生活をしか取扱わなくなつて、末は完全に無用の文学となつてしまつた。ところが俳諧の恋の座の上には、ちようどこの種の文学で馬鹿にされていた最も有りふれたる民間の小さな情痴じょうちが、しばしば聯想によつて引き出されて坐すわつており、それがまた絵巻物にでも見るような上じょうろう 藹あのローマンスと交錯して、特に一卷の色彩を変化あらしめていたのである。その作者の多数が、もうこんな問題を行き抜けた法ほつたい体たいや隠居であるがために、囚とらわれぬ静

かな洞察をしているということも我々には興味がある。滅多めったに客観の冷やかな記述が得られない恋愛の歴史であるだけに、私は後代の社会学徒によつて、この方面の資料のことごとく珍重せられる日の来べきことを予言し得る。

次に俳諧の連歌において、頻しきりに用いられていたのが軍陣殺伐の生活、これに伴なう勇猛と武家氣質ぶけかたぎなどであつて、是は感動の波瀾を高めるために、恋と表裏をなすべき大きな要素と認められていたようであるが、どういふものか此方こちらには読書からの知識が多く、実験に基づかない概念ばかりが、玩もてあそばれているような傾向が著しかった。それに沢山の武辺ぶへん話ばなしも世には伝わっていて、もう俳諧の集などから学ぶべきものはいくらも無い。これに反して

第三のいわゆる神じん 釈しゃくの方面においては、かたのごとき達筆雄弁の人たちが、さしも数多く輩出しているにかかわらず、なお彼らの書き洩もらし言い残した小さな光景が、幾らともなく俳人によつて観察せられてゐる。十何世紀を積み重ねた我々の信仰生活は、明治の代に移つて俄然がぜんとして一変してしまつた。神社仏閣の名と形は保存せられても、これを困い繞りょうする人の境涯は昔でない。以前盛んに世間から取持たれて、今は存在さえ認められぬ職業も色々あり、それを忘れてしまつてなお古風の持続を説さとこうとする学者さえすでに現われた。図書文籍のその誤りを覚さとらしめるものは、事があまりに平凡であつただけに、あらかじめ今日のために用意しておかれなかつた。独り俚俗りぞくの友であつた俳諧の記録だけが、

偶然にこれを我々には語っているのであった。

四

例は幾らもあるうが私はここに山伏やまぶしのことを考えてみる。明治の新たなる政策で修験しゆげんの立派は否認せられ、彼らの一半は法を慕うて忍耐して僧となり、他の一部分は御社みやしろの威徳を忘れかね、還俗げんぞくして平ひらの神職に編入せられた。関東・奥羽の田舎には、堂を抱えたままで農民になり切った者も少なくはなかつたのである。是がただ職業の消滅によつて、事もなく社会の他の組織に、融合しました同化してしまふには年ねんしよ処しよを要したはずである。山伏は血

縁をもつて相続した故に、彼らの伝統の記憶は濃厚であり、その数もまたなかなか多かつた。現にその氣風はよきにつけ悪きにつけ、今も片隅には遺つて^{のこ}いる。過去を顧みて^{かえり}現在を解説しようとする者が、この失われたる事実を詳かに^{つまびら}すべきは当然である。しかも私などは僅かにケムペルの『江戸参府紀行』によつて、東国の下級修験等の常の日の生活を知り、さらに^{さかのぼ}溯つては能の狂言の何山伏の数篇を見て、辛うじてこの徒の^と社会上の地位を察するのみである。ところがこの俳諧の連句においては、表六句を^{おもて}除いては何度でも彼らの生活に触れてみようとしている。そうして是がまた常の浮世の、面白い一つのあや模様でもあつたのである。

一二の句がらによつて臆断を下すことはできぬが、比較を重ね

て行こうと思えば、幸いにして豊富な資料はある。只今私の心づいた僅かな附句つけくの中からでも、なお江戸中期の山伏の境涯、少なくとも世の俗人たちがそれをどう見ていたかだけは、おおよそは判わかるように思われる。

ねずみ
鼠ねずみに月を吐はき出いだす雲

せきぎく
夕菊せきぎく

あきやま
秋山あきやまに荒山伏あらかまぶしのいのる声

翁

こ
樵こる人も無くこけし神の木

ゆうご
友五ゆうご

これ
是などは鼠ねずみは 頼豪阿闍梨らいごうあじやりなどの聯想れんそうもあつて、一つの物語風の作意であつたかと思われるが、神木が自然に倒れたという風に、思い及んだのはこのころの常識であつたらう。それから『深川集』の有名な一つづき、

我^{わが}跡^{あと}からも鉦^{しょうこ}鼓^こ打^{うち}来^来る

嵐^{らん}蘭^{らん}

山^{やま}伏^{ふし}を切^きつて掛^かけたる関^{せき}の前^{まえ}

翁^{おきな}

鎧^{よろい}もたねば成^ならぬ世^よの中^{なか}

酒^{しや}堂^{どう}

なども、明らかに一幅の歴史画ではあつたが、当時この類の言い伝えはなお鮮かに印象せられていて、殊に念仏修行の光景を^{せいそ}凄^{せい}愴^{そう}ならしめたのである。戦国の頃には山伏はよく密偵に利用せられ、またしばしば武士に反抗して生命を奪われることを意としなかつた。それをまた仲間のうちに語り伝えて、彼らの執念の深さを人に感ぜしめ、暗々^{あんあん}裡^りに渡世^{あんどせい}の地^ちを為^なしたらしい形跡もあるのである。

飽^あきはてし旅もこの頃恋しくて

左^さ柳^{りゅう}

齒ぬけとなれば貝も吹かれず

翁

月寒く頭巾あぶりてかぶるなり

ぶんちよう
文鳥

この中の句なども老いたる山伏の境涯であつた。旅が本業といつてもよいくらい、いつも出あるいている修験者は多かつたのである。

角力に負けていふことも無し

えんすい
猿雖

山かげは山伏村の一かまへ

翁

崩れかゝりし軒の蜂の巢

たくたい
卓袋

他の地方にも有つたか知らぬが、近江の地誌には山伏ばかりの部落の、幾つかあつたことを記している。こんなのは旅行によつて生活を営んでいたのだが、一部は街道に出て寄進を勧めていた。

そういう村の角力すもうに飛入りしては、負けてもうっかり文句などは付けれない。それほど彼らはまた気の強い人たちであつた。

いつやらも鶯聞ぬ此このおくに

落梧らくこ

山伏住すみて人しかるなり

野水やすい

くわらくとくさび抜けたる 米こめぐるま車

梧

是あとなども後の句は越こしの大徳だいたくの故事を踏ふんだものらしいが、ま
ん中はやはり荒々しい山伏村の写実であつた。そうかと思うと

『続猿蓑ぞくざるみの』の夏の夜の章には、

藪やぶから村へぬけるうら道

支考しこう

喰くいかねぬ智むも舅こしゆうとも口きいて

翁

何ぞの時は山伏になる

曲きよくすい翠

と言ったような例もあつた。是は旅に出て活計を立てるかわりに、農の片手間に衆僧となつて出るのであつたが、それでも親子とも口やかましくて、ただの百姓には憚はばかられていた様子が見える。

その今少しはつきりとしているのは『ひさご』の初の一巻に、

入込いりこみに諏訪すわの涌湯いでゆの夕ま暮

曲水きよくすい

中にもせいの高き山伏

翁

いふ事をたゞ一方へ落しけり

珍碩ちんせき

是などは次が至つて花やかな恋の句に続くために、その方に氣をとられて人は注意しなかつたが、旅の山伏の気味の悪い言いがかりの癖くせを、かなり活いき活いきと写し出している。

夕雨ゆうだちの篠懸すずかけほ乾やどしに舎りけり

斧卜ふぼく

子を褒めつゝも難少しいふ

北枝

に至つては、穿うがちに近いまでに山伏の山伏らしさを描いてある。禅僧も知らぬような鋭い機鋒きぼうを蔵し、それをやたらに常人の上に濫用して、威圧をもつて世を渡ろうとしたのが後世の旅山伏であつたらしい。そうして職業は政治家・弁護士などと變つても、まだ同じ方法を用いて生きようとする者が、今の日本にも若干は出くわされる。是を苦々しいことだと思ふ人ならば、溯さかのぼつてこの山伏の歴史をもう少し細かに考へる必要があつたのである。

五

俳諧は日本にたった一つ、今も我々の保養のために残っている有閑文学である。それをそのような俗な研究に利用するのはけしからぬという人があるか知らぬが、私においてはそれがほとんどただ一つの未来に続くべき俳諧の功業のように思える。独り山伏の問題のみと言わず、他にもまだ幾つかの前代社会の特質が、今はこの感銘に充みちたる記録に由よつてのみ、辛かろうじて尋ねて行かれらるといふ世の中になっているのである。たとえば常人が往おう々おう口にしていた風流と野暮との差別なども、是が無かつたらもう知りようが無いのであるが、それはあまりに皮肉だから強しいて説とかない。いわゆる神じん釈しゃくの句の中でも、人が尊重していた遁とん世せいの味、たとえば「道どう心しんの起りは花の蕾つぼむ時」といったような、髪

を剃^そる前後の複雑した感覺、或いは「露^{つゆ}霜^{しも}の小村に鉦^{かね}を叩^{たた}き入る」という念仏旅行者の物悲しさ、さては万日千日の群衆心理、里の祭の日にばかり蘇^{よみがえ}った童心など、説いてみ考えてみたいことは色々ある。しかしそれは何れも皆似たり寄つたりの方法で、つまりはこの節の川柳研究家の程度にまで、せめて我々が連句を鑑賞するならば判^{わか}つてくることである。

ただ最後に一つだけ、断^{ことわ}つておかずにいられぬことは、この同時代の同情豊かなる生活描写が、すべて各俳人の個々の実験に拠^よつて立つこと、たとえば現代の文学者の私有制のごときものでなかつたことである。或る一人が物を知り世を觀じて得たものを、常に自分ばかりの功名にしか利用しなかつたなら、たとえ短い一

期間にもせよ、しょうふう正風の俳諧は是までは栄えなかつたろう。地方に割かつきよ扱れんじゆした連衆の群は小さかつたけれども、彼らの間だけではその一人の感じたことが、いつのまにか他の朋輩の修養にもなつていた。是が俳諧の驚くべき感化であり、同時にまた模倣の根絶し難かつた微妙なる理法でもあつたと思う。芭蕉は優れたる指導者であると同時に、明敏無比なる世相の觀察家でもあつたが、なお自分でない者の経験の中から、間接にあの時代の人生を多く学んでいる。それが今日はもう衰えた夜話しというものの力か、またはしんみりとした旅人の聴き上手によるかは知らず、恋でも信仰でも明らかによその身の上であつたものを、とう当の自身の経歴であつたと同様に体験している。是が後年の連句の書臬を帯び、

または概念を追いまわすか、そうでなければ我から小さな見聞に

きよくせき
跼 踏

するものとの、争うべからざる一つの相違であつた。私

は近年島の流人るにんの生活というものを考えてみているが、俳諧の方

ではただ芭蕉翁のみが、二百何十年も以前に早くもこの問題の隠

れたる隅々すみずみを知っていた。我翁わがおうが島に渡り、または赦免しやめんに

逢うて戻つて来た人と、親しい交遊をしていたことはまだ聞かぬ

が、すくなくとも連句にしばしば咏歎えいたんせられている島の生活だ

けは写生であり、しかも私の見たところでは、三宅みやけか八丈はちじょうか

とにかくに伊豆いずの島々のうちであつた。空くうで想像したものとは思

われぬのである。島流しの境遇は今でいうエキゾチックであり、

且つその多くは江戸人のなれの果はてで、下に人情かよの通かよいがあつた。

俳諧の題材として有用であつたことは、旅や隠者や遊里の生活にも勝るまさものがあつたろうと思うが、それにしたところでその情景を予て心に貯えて、毎度程よき場合にこれを出して使つたといふことは、たとえようもなく床しい修養であつた。元禄の俳諧に含まれている民俗史料の価値は、こうした点からでもこれを高く評価してよいと思う。それで沢山の例句は引くこともできぬが、爰こゝには私たちの一読して、どうしていつのまにこんな事を知つておられたかと、びっくりした二つ三つを載せてこの篇を終ることにする。

魚積む舟の岸に寄る月

重辰

露の身の島の乞食と黒みはて

翁

次第にさぶき明暮の風

知足ちそく

是は『千鳥掛集』の一聯であつた。流人は伊豆の島では

自活が本則であつた故に、いつも浜ばかりあるいてひどいものを拾つて食つていた。入舟などのあるたびに、恥も忘れて近よつてくるのが常の習いであつたらしい。この句はその俊寛しゅんかんのようになあわれな姿が目めに浮かぶのである。次には『初茄子』の最初の一卷に、

朝づとめ妻さい帯たい寺でらの鐘かねの声

曾良そら

今日も命いのちと島しまの乞食こつじき

翁おきな

悴かじけたる花はなし散ちるなと茱萸ぐみ折をりて

不玉ふぎよく

八丈の宗福寺などは昔から女房持で、且つ郷土ごうしのように裕福で

あつた。そういう御寺の鐘の音を聴きながら、自分はその日の食
 い物にも屈託している光景である。そうしてこの島の流人には僧そ
うりよ
 侶がいつも多かつた。

更ふくる夜の壁つき破る鹿の角

曾良

島のお伽とぎの泣き伏せる月

翁

いろ／＼の祈いのりを花に籠こもり居て

等とうきゆう躬

『奥の細道拾遺』の句である。伊豆の島には対馬つしま・五島ごとうなどのよ
 うに、鹿は住んでいなかつたから是だけは無理な附け方であるか
 も知れぬ。しかし鹿の角に破られるような小屋の中でも、なお多
 くの流人は島の御伽おとぎを見つけて共に住んでいた。八丈ではその女
 を水汲みと呼ぶ習わしであつた。それが男の懐旧談を聴いてもら

い泣きをしたという、しおらしい情愛を詠じたものと思われる。
是がもし何^{なんびと}人の実話でもなくて、単に作者の作意に過ぎなかつたとすれば、その想像力はむしろ驚くべきであつた。というわけは多くの島の流人は、いつもそういう同情の深い水汲みを見つけて、それをたった一つの慰藉^{いしや}として活^いきていたのが事実だからである。

生活の俳諧

一

国の文芸に対する我々の態度が、今まではあまりにも単純で、したがって一生の間、まるまる是これと関係なしに暮してしまう人がちつと多過ぎた。出来ることならばこれを改めるか、少なくとも文芸の見方の、新しい種類を附加える必要がある。こういう趣意

のもとに、私は日本の文学業績の中で、おそらく世界に類例が無
いと思う俳諧はいかいなるものの社会的地位、是と我々通常人との交渉
が、特にどういふ側面において意義が深いかを考えてみたい。

最初に一応御断り申しておきたいことは、私は熱心において

なんびと

は何人にも譲らざる俳諧の研究者、殊に芭蕉翁の、今の言葉で

いうファンであるが、自分では是まで俳句なんか遣やつてみよう

したことがない。多分出来ないからだろうと思うが、事実また作

つてみようともしなかつたので、一言でいうならば発句ほくくはきらい

である。むしろ発句の極度なる流行が、かえつて俳諧の真の味を

埋没させているのではないかを、疑い且つ憂うれいつつある一人なの

である。この疑いには若干の根拠がある。芭蕉示寂しじやくして数十年

の後に、有名なる『七部集』というものが結集せられ、末まつば法の徒うとの有難い經典となつたが、この『七部集』には異本が多く、テキストのまだ確定しておらぬは勿論もちろん、何かというと誤写誤刻の推定のもとに、勝手放題なる各自の解釈を支持せんとする者の多いことは、まるで一千何百年の前にできて、久しく伝本の世に隠れていた『万葉集』と、撰ぶところのない有様である。高たかが二百四五十年ばかり昔の作品に、註解を要するということが既に珍しいのに、その註解がまた二つ以上を比べて見ると、互いに黒と白とほども違っている。いずれかたつた一つを除けば、その他は出たら目であつた証拠であり、事によるとどれもこれも間違いかも知れない。是がいずれも一かどひとの宗匠そうしやうといわるる人の

説なのだから、つまり彼らは『七部集』をすらも理解せず主として発句だけを作っていたので、驚いた話である。

二

俳句という言葉は、明治以来の新語かと思われる。日本では第一高等学校を一高という類の略語が通用しているから、「俳諧れんがの発句ほっく」を略して俳句というのも気が利きいている。しかしそのためわがに我芭蕉翁の生涯を捧げた俳諧が、一段と不可解なものになろうとしていることだけは争われない。この意味においては、新時代の文章道の功労者として、私たちの最も感謝まさおしている正岡

子規氏かしきなども、俳諧道の中ちゆうこう興開山ではなくて、或いは俳句という一派の新文芸の第一世ということになるかも知れぬ。子規はその著述の中において、附つけあい合すなわち芭蕉翁の唱導した俳諧の連歌は、文学でないと明言しているのである。こうしていわゆる俳句を独立の地におけば安全であり、また今日のごとき俳句の新境地を拓ひらくためには必要だったかも知れぬが、是は我々にとつては忍ぶべからざる抹殺であつた。どうしてこの俳諧の最も歴史的なる部分が文学であり得ないのか。もしくは少なくとも何故に文学でないか、ある優れた一人の文人によつて断言せられ得たのか。是これは将来日本の文化史を専攻しようとする少数の学生にとつては、大きなまた意義の深いテーマであろうと思うが、はたして

一般の諸君にまで、興味を提供するかどうかは疑問である故に、正面から細かく是を論ずることは、今日はまず差控えて置く方がよいであろう。

ただ社会の最も顕著なる現象として、ここで私が諸君とともに取扱つてみたいのは、第一には外国から持つて来た文学の定義では、或いは包容しきれないような特殊の文芸が、どうして日本にばかり出現することになったのか。是は全然俳諧の道に遊ばぬ日本人にも、なお考えずにはおられない一つの不審である。第二には正風しょうふうふえき不易とまでたたえられた蕉門しょうもんの俳諧が、発句ばかりをこの世に残して、その他は久しからずして振棄てられ、同じ流れを汲むという人々にすら、なお説明のできぬものになった理

由や如何^{いかに}。この点もまた決して世の「古池や連^{れん}」だけの問題ではないのである。それよりもさらに一段と現世的意義ある疑問は、この一見不可解なる前代遺物が、その存在という明々白々なる事実によつて、何か是から世に出て行くこうとしている日本の若き学徒に語らんとしているかである。手短に申すならば、俳諧はその芸術的価値以外に、いかなる文化史的価値を我々に供与するか。わからぬ人が仮に皆無と言つても、それは軽^{けいけい}々に信じない方がよいのである。多くの大切なる科学は近世になつて起こつた。それが新たに唱えられるまでは、人は眼前に在るものをも無いのと同じにしか考えることができなかつたのである。そうしてその無識の惰性は、かなり強力なまた怖^{おそ}るべきものだったのである。

三

右の三つの宿題に向かつては、残念ながら私はただ片端しか答えを得ていない。未来の多くの研究者の協力を募る^つべく、今はただその解説の一つの方向を指そうとするのみである。俳諧または誹諧という言葉は、日本の古文学の中にも見えている。そうして^{もちろん}勿論^{シナ}支那からの輸入であるが、この語この文字をあてはめた内容は、輸入以前からあつたものと考えられる。二つの国の言葉の対訳が当っていたかどうかは、こういう無形名詞ではいつも問題になるが、この場合だけはそう大きな喰い違いはなかつたようで

ある。人の笑いというものの範囲は広いけれども、俳諧が目的としていたものはその全部ではなかった。笑いの一番に下品なものは放恣ほうし、いわゆるしもがかりの秘密や欲情の満足に伴なうものあり、その最も有害なものは嘲笑ちようば罵であろうが、この二つのもは支那の方でも、俳諧のうちに含まれていなかったことは、『史記』に見えている東方朔とうほうさくの滑稽こっけいが、宮廷で行われていたというのでも察せられる。日本の俳諧も上流の文学の中にもてはやされてきた。直接相手を傷つける笑いでなかったことは明らかである。一つの特徴は真面目まじめなものに対する対立、わざとではあるが、真似まねそこないのおかしみであった。自分の力が足らずして、すぐれた人のする通りをしようとしてできぬことを示すもので、私な

どは是を自嘲の笑いと名づけている。これを能くする者には実は才智の衆に秀ひいでた男が多かつたのである。すなわち人を笑わせる職分のために、最も上手に韜晦とうかいする者の技芸であつた。トボケルと今ならば謂いうところで、古くはシレル・シレモノと謂い、それから移つてジラコクまたはジラなどもなり、戯ざれという語も是とよほど近かつた。笑いの最も夙はやく芸術化したものといふことができる。

是が我わが邦くににおいて人の言語と行為の、とくに嚴肅なものに附随していたことは、多分は国がらの然しからしむるところで、人類共通の一般習性ではなかつたらうと私は思う。狂言というものの起り、すなわち正式なる儀礼の後にすぐ引続いて、それを間ちが

え真似そこない、もしくはまるまる縁の無い愚かな所作しよさをして見せて、観衆を大いに笑わせるという演技法は奇抜なものだが、私などから見ると、是は対照によって前の正しいものの印象を深め、且つ誤るといふことの不利損失を覚さとらしめるのが本来の目的で、つまりは笑われることを怖おそれる人情を利用した設計のようである。上代のワザヲギすなわち俳優というものの役がそれであつたことは、海幸彦うみさちひこ・山幸彦やまさちひこの物語にもすでに見えている。昔話すなわち民間説話においては、我々の名づけて隣の爺じい型がたというものが、古くからこれを代表していた。善よい爺じいさんが測はからず大福運を得たすぐ後あとに、きつともう一度悪い爺じいさんが羨うらやんで真似そこなつて、ひどい失敗をする段が伴ともなっている。だから人は正直にな

ければならぬとか、やたらに真似をするものでないというような教訓が、丁寧に附けてあるのも稀まれではない。これを悦よろこび笑う人の心持もすでに変わり、今ではそんな笑話だけしか残っておらぬ土地も多くなつたが、子どもの聴く昔話だけは、なおこの二つで一組になつているのである。神楽かぐらの獅子舞ししまいなどにも、東北ではヲカシおそろといひ、関西では狂言きょうげん太夫だゆうというものが附いていて、あの怖い面を被かぶつたものに向かつて茶かそうとする。最近流行の何とか漫才というものにすら、きつと頓珍漢とんちんかんな受返事をする相手の役があつて、形だけは古いものを保存しているのである。是が文学の上に伝わつた誹諧と、成立ちが一つであつたように私たちは考へているので、かの『古今集』の勅ちよくせん撰せんに入つた有名なる数

十章の俳諧歌のごときも、やはりまた和歌に随伴した一種の才さいぞ蔵うにほかならずと見てよいようである。

あひ見まくほしは数々有りながら人につきなみまどひこそ
すれ

耳無しの山のくちなし得てしがな思ひの色の下染したぞめにせむ
などというのは、今なら至つて微弱なるダジャレに過ぎないが、
形が歌の通りでこんな意外な口合くちあいを含んでいたのだから、あの
時代の宮廷人は腹をかかえて笑つたに相違ないのである。

四

記録の上にはこの上代の誹諧は、僅わずかしか残っていないが、歌が盛んに流行してまたやや行詰まったという状態に達すると、すなわち新味のある誹諧が飛出して来た。水無瀬みなせの離宮の風流の御遊びがいと盛んであつた際には、古来の歌道の柿かきの本もとに対立して、新たに栗くりの本もとというたわれ歌の一団が生まれた。その一方を有心うしんの座ざというに對して、是をまた無心の座とも申したそうである。しかも両者の名目こそは新しいが、この一種の逸脱はずつと前からあつたらしいので、現に連歌というものが、元はそれ自身一つの誹諧であつたかと思われ、すくなくとも今日伝わっているのは、笑うようなものばかりである。才分の豊かな男女の文人はいずれも少しずつこれに携たずさわつていた。例えば和泉式部いずみしきぶのごときは伝説

かも知れないが、いつでも人の意表に出るような応酬をしていたように言われている。或る男が賀茂かもに参詣さんけいするとて、紙のはばきを巻いて家の前を通る。是に向かつて即吟そくぎんに、

千はやふるかみをも足に巻くものか

と言いかけると男も抜からず、

是をぞしもの社やしろとはいふ

と答えたとあるのは、早いというだけ取りえで、誠にたわいもない口合おんようじいであつた。また朝日の阿闍梨あじやりという僧が、安倍あべの某ぼうという陰陽師おんようじの家に忍び込んでいて、発覚して遁にげ出そうとするところを見つけて、

あやしくも西に朝日の見ゆる哉かな

と亭主がいうと坊主、

天文博士いかに見るらむ

是などはこしらえ話で、どうやら下の句の方が前にできていたようにも見える。或いはまた下の句の十四字をまず提出して、上かみ十七字の答を挑いどむ例もあつた。是も一人の法師が、路傍で屋根を葺ふいているのを見て或る者が、

ひじりの屋をばめかくしに葺け

と言いかけると、

あめが下したに漏もれてきこゆることもあり

と附けたという話もある。ヒジリは修業僧で、女房を持たぬ者の名であつたのに、この頃は隠すは上しょうにん人にんせぬは仏というまでに、

有りふれた秘密になっていた。それでこの贈答が聴く人の腹の皮をよらせたのである。諸君もよく知っておられる武人の風流、

ころも
衣のたてはほころびにけり

という八幡はちまん太郎と貞任さだとうとの連歌のごときも、考えてみればた

だ単なる言葉のしやれで、とうてい弓に箭やつがえて馳はせまわる勇

士の頭の中に、浮かんでくるような文句ではない。すなわちただ

この時代にあつてこういう語り草がもてはやされたことを、窺うかがい

知らしめる史料であるに過ぎぬ。

しかもこの連歌が追々に後あとを引き、百句五十句と鏈くさりのように繋つな

いで行くという、また一段と悠長なものになって来たので、それ

を単簡なる一首兩作の連歌と区別するために、後の方をば続つぎ歌うた

とも謂いっている。このいわゆる続き歌に方式が定められ、人がこれを守つて際限もなく、同じようなことばかりを繰返すようになると、早くもその単調を破るために、別にまた俳諧の連歌の必要を生じて来るのであつた。だから初期の俳諧師は、必ず連歌師の門から出ている。伊勢いせの荒木田守武あらかだもりたけのように、徹頭徹尾戯ざれの句ばかりを続けた人も無いではないが、本来は長つたらしい連歌の間へ、時々頓とんきよう狂きやうな俗な句や言葉を挟むのが興味であつたことは、『犬菟玖波集いぬつくばしゆう』などからも推測せられる。それが連歌は連歌、俳諧は俳諧と、両者全く別なもの見たいになつたのは、言わば前者の零落であり形式化であつた。もともと俳諧の連歌は、ただ俳諧をまじえた連歌でよかつたのである。それを心得ちがい

して荒木田守武式に、どこまでも駄洒落だじゃれと警句との連発でなければならぬと、思っている人ばかり多かつた際に、わが芭蕉翁だけが立ち止まって、もう一度静かに考えられたのである。それが今我々を感動せしめる正風しょうふうの俳諧であつたように、私たちは思っている。

五

つまりは百韻三十六吟ぎんの連続の中に、一句も俳諧の無い句があつてはならぬという松永貞徳まつながていとくなどの意見を、認めるか否かが岐れ目わかめであつた。もしもそれが動かすべからざる法則であつたら、

現今のいわゆる俳句などは、生まれ出づる余地は無かつたのである。尤ももつとそういう人々の俳諧の定義は勝手放題ひろに弘いもので、心の俳諧以外に形の俳諧だの言葉の俳諧だのを認め、単に用語が今風の俗言でありさえすればもうそれで宜よろしいようにしていたが、そうして見たところがやはり窮屈な話で、それだけで普あまねく人生の森羅万象、あらゆる境涯・感情を表現するに足らぬのは当り前の話である。だから貞ていもん門の俳諧などはあれだけ多く残っているが、おかしいながらにやはり退屈で、今は省かえりみる人も少ないのである。芭蕉はこれに対して、決して急激なる革新論者ではなかつた。半なかばは前代の解釈に追随しつつも、随処に自家の判断を実践に移して、大きな効果を挙げている。たとえば俳諧の主題としては、俗

事俗情に重きをおくことが、初期以来の暗黙の約束であるが、是
がかなり忠実に守られていた御蔭おかげに、単なる民衆生活の描写とし
ても、彼の文芸はなお我々を感謝せしめるのである。それから
は後々のちのちの評伝家のまだ言わぬことであるが、個々の叙述のレア
リズム、是も芭蕉一派の独創ではなくて、言わば先行する俳諧師
等の、永年積み貯たくわえた技術のこつともいうべきもので、それを出
来るかぎり承うけ継つぎまた包容しようとした故に、實際短い句でも
みな活いき活ききと面白いのだが、その弟子たちはただ一部分ずつを
分けて相続しているのである。

然しからばどの点が芭蕉の出しゅっ色しよくであつたかと申せば、一言でい
うと俳諧をその本然の用途、笑いに対する我々の要望に応ずるよ

うにしたことであろうと思う。或いはこれを総括して俳諧と呼んだことの、用語の当否は問題になるかも知れぬが、少なくとも笑いは芭蕉の俳諧の全部ではなかつたと同時に、これを俳諧の欠くべからざる要素と、認めていた点は古い伝統とも合致している。すなわち正風しやうふうと名のる権利があるのである。別の言葉で言い現わすならば、笑いを取扱わない蕉門しやうもんの俳諧は一つも無かつたとともに、発句ほっくからまず人を笑わせようとするような連俳れんばいというものも一つだつて無いのである。是はいかなる突拍子とつびようしも無い話し家でも、高座こうざに上つた早々そうそうからおかしいことをいう者が無いと同じで、むしろ最初はさりげなく、やがて高調してくる滑稽こけいを、予想せしめただけでよいのであつた。だから発句ばかり

を引離して見れば、いずれも生真面目きまじめで格別笑いたくもないのが
当り前で、すなわち俳諧という語の意味を、よほどこじつけて抃
張しないかぎり、今日のいわゆる俳句は、それだけでは俳諧でな
いということになるのである。しかも芭蕉翁の俳諧の味わいは、
こういう考え深い調理法によつて、また一段と微妙のものになつ
ているのである。私などの見たところでは、元禄の俳諧の大きな
働きは、独り旧来の俳諧の活用であつただけでなく、同時にまた
連歌を若返らせたことであつた。一方にただ上品で艶つやも香気も無
く萎しなびていたものと他の一方には活気はあるけれども只騒々しい
ほうかんしき 帮間式の芸術とを、二つほどよく配合してそこに詩情を托せん
とした、新しい試みにあつたかと思う。それがあの当時の人心を

風靡ふうびしたのも、要するに以前の笑いの文学には全然見られなかつたしんみりとした常人の感情、殊に笑いとは対立する憂いとかな哀しみとかが、自在いたところに到る処に盛られるようになったからで、その互いの移動牽けんれん聯、もしくは遠く近くの反映を、サビとかホソミとかその他色々の新しい用語で説こうとはしていたけれども、宗そ匠うしやうは意外に早く世を去り、旧式の教育を受けた俳諧師はなお国内みに充ち溢あふれていて、いずれも自分自分の器量けりりやうだけにしか、これを解説し敷衍ふえんすることができなかつたのである。是が一つの未完成交響樂、余韻はなお伝わって嗣ついで起こる者無く、あたかも花やかな花火の後の闇あとのように、淋しいものとなつてしまった原因えんのようである。

六

この議論をあまり詳しくすると、退屈せられる人があつても困るから、方面を転じて少しく实例をもつて説明する。『七部集』は私が殊に愛読しているので、この中からは例が引きやすい。この本と以前の各派の俳諧とを比べて見て、最もはつきりした相異は分量すなわちつけあい附合の長さであつた。『七部集』には百韻すなわち百句の連歌がたった一つあるのみで、他の六十何篇はみな歌仙、すなわち三十六句をつら連ねたもののみである。この以外にも、『はつかいし初懐紙』その他一二の例外はあるが、大体にまず『冬の日』

の出た頃を堺さかいとして、それからもつぱらこの形に由よらうとして
 いる。ところが談林だんりん以前の連俳に至つては、こんな形もあると
 いうだけで、原則としては百韻が常の形であつた。中には十百とつぴや
 韻くゐんと称して百句十篇を一度に興行し、西鶴さいかくなどは独吟千句どくぎん
 をさえ試みているのである。この流行の変化は、俳諧の歴史とし
 てはかなり重要なことで、もとは進展の興味をもつぱらとし、句
 ごとの推敲すゐこうがおろそかだったのである。勿論もちろんその結果は構造
 の上にも現われていて、以前はいわゆる一波万波で、ちようど子
 どもがふぎけ始めると、止めどもなく昂奮こうふんして行くのとよく似
 ていた。これに反して『七部集』の歌仙などは、句ごとの聯絡れんらく
 にポウズ（停止）があり、また苦吟くぎんがある。それを一概に小味と

いう名で片付けられぬわけは、後代の復興期などと言われる天明の俳諧と比べてみても、なお元禄だけの特徴ははつきりしているからで、つまり芭蕉翁の企図していたものは、前のものとも後のとも違っていた。完全に成功しなかったかも知らぬが、とにかくに全体としての調和を志していたように思われる。同じ滑稽こっけいでも幾つかの階段を認めて、その最も高調したものは、かえってそのあと先を静かな淋しいもので包もうとしている。変化を主とすることは古今同じでも、毎つねに均整に注意し偏倚へんいを避けていた。起伏高低が大きいだけでなく、波動の中心を出来るだけ広い区域に数多く設けようとした。それ故にまたその波紋の綾あやが又また無く美しかったのである。

二つほど实例を挙げて説明すると、一つは最も有名な『冬の日』の第一篇の中ほどで、師翁しおうの「暁寒あかつきく火あかつきを焚たきて」という句を承うけて、次のような一続きがある。

あるじは貧ひんにたえし虚家からいえ

杜国とこく

田中なる小万こまんが柳おつる頃

荷兮かけい

霧きりに舟曳ひく人はちんばか

野水やすい

たそがれを横なに眺ながむる月細し

杜国とこく

隣となりさかしき町おに下いり居る

重五じゅうご

田中の小万は世にもてはやされた美女であつた。その門の岸の柳の散る夕を、物哀れに詠歎したあとへ、突如として舟曳く男の鄙ひなびたる腰つきを、描写してしかも自然によく繋つながっている。そ

れを再び物静かな、しかも夕顔の巻でも聯れんそう想するような、別種の情景へ引戻して来たので、ちんばの滑稽が飛躍しているだけに、その後を一段と落付きのある上品な句で囿かこおうとした、連衆れんじゆの诗情はよく調和している。そうしてこの無言の約束は爰こゝだけでなく、いつでも奇抜な笑いの句の出るたびに、必ずといつてもよいほどよく守られているのである。それから今一つ、是これは終の方の『続猿蓑ぞくざるみの』の中にあつて、宗そうしやう匠しやうは一句しか参加しておらぬので、人のあまりに注意していない附つけあい合であるが、変化の面白さのよく現われているのは、「勇いさみ立つ鷹たか引すうる嵐かな」という発句ほつくをもつて始まつている一聯いちれんである。これもその中程のところ、

売物の渋紙包みしぶがみづつおろし置き

けふの暑さはそよりともせぬ

砂をはふいばらの中のぎすの声

別れを人が云いひ出せばなく

こたつの火いけて勝手をしづまらせ

一石いっしやくふみしからうすの米

里り圃ほ

馬ばけん

沾せんば圃

里

沾

というのがあつた。暑さは昔から歌などには取扱われず、この一句は全部が常の人の言葉で、文芸の座では是だけでも俳諧になるのだが、やや弱いのでさらに次の句に田舎いなかの事物を繋つなぎたしてある。ギスは上代のきりぎりすでなく、我々の今というバツタである。真昼の日盛りにこの虫だけが鳴いている情景は、私などにはなつか

しいもので、親の昼寝の間にそつと水浴びに行った、子どももの日のことなどが思い出される。ギスの声は蟬せみなどと違って久しく途切れるので、別れを人がという次の句ともよく続くが、この軽い微笑の句を、たちまち恋の句に転回させようとするのだから、そこに若干の無理がある。そのかわりまた次の炬燵こたつの句とはよく合つて、まるで一篇の草冊子くさぞうしか何かを読むようである。全体に卑近な着想で、俳諧を下品にしたという評もあるが、とにかく一座心を合わせて、全体を一つの調和した美しいものに、こしらえ上げようとする努力はよく認められる。

七

中世の連歌道においても、附句つげくの制限はかえつて俳諧よりも多く、去嫌さりきらいとかが打越うちこしとかのやかましい沙汰さたがあつて、それはいずれも個々の句の変化、場面の展開を念としたものばかりであつたが、その分立には限りがあり感情の波動は小さかつた。殊に作者の立場用意が相似とこころていた上に、道中が少し長かつたために、どうかするとまた同じ処ところへ戻り、総体を通観たすると板のような感じを免れなかつた。俳諧はつまりその単調に堪たえ切れずして起つたのであるが、芭蕉翁の到達しても、実はまだ完全にこれを打破したとは言えない。我々はむしろ非常に愉快なる革新傾向の、中途にして停頓ていどんしている姿を見るのである。この一つ一つの附句

によつて作られる変化、歌仙でいうなら三十五面の新情趣・新聞
 係を、私たちはタブロオと呼んでいるが、これを絵様えようと謂いつても
 また場面と呼んでも、実は幾分か目の感覚に傾きすぎる非難があ
 る。この中には前に挙げた「黄昏たそがれを横にながむる月細し」のご
 とく、完全なる無声の詩もあるが、一方にはまた「棘いばらの中のギス」
 およびその次の句のような、耳に訴えようとした情景もある。支シ
 ナ
 那の聯句れんくはもとよりのこと、俳諧でも談林派の時代までは、是これを
 ただ言葉の続きがらのように、考える癖くせが止まなかつた。したが
 つて今ある子どもの尻取しりとりもんく文句や、火まわしなどの戯れたわむと近いも
 のがあつたのだが、蕉しやうもん門の俳諧では勉強してこれを避け、で
 きるだけ心持ちまた感じ、またはまぼろしの連鎖に依ろうとして

いる。ほんの一二の珍しい例外、たとえば、

いともかしこき五位ごいの針立はりたて

松の葉ぐうじに宮司の門は傾きて

とか、

食かきふ柿またも又またくふ柿も皆しぶ渋し

秋のけしきのはたけ見る客

というような口合くちあいに近いものを除いては、他の大部分はすべて想像くさりの鎖もしくは感動のメロディとも名づくべきものにさしかえた。是は個人の生活実験においては最も自然なもの、すなわち我々の毎日の空想の、ひとりでに走つてあるく道とも同じだが、しかも文学の大きな一要件、人と自分との共同の経験、共同の記憶の最

も期し難い部分であった。それを芭蕉翁は昔から伝わっている俳諧というものの改良利用によつて、一つの珍しい形の文芸に化したのである。是には日本人だけしか通つてこなかつた特殊なる文芸生活の数世紀が、基礎になつてゐることは争われないが、一方にはまた我々の社会組織の特殊性、すなわち小さく分かれて緊密に結合してゐた団体の力が、これを著しく可能ならしめたのである。この微小なる結合体を、古い日本語では連衆れんじゆといひ、またはツレともトギともドシとも謂つてゐた。独り風流の交りだけに止とどまらず、田舎いなかにもあれば児童むれの群にもある。この人々の間には通常ならぬ相互の理解があり、それからまた最も容易なる共同感銘の、言語の必要を超越するものが有り得た。是がこういつた短

い句形をもつて、時には驚くような人情の深みにまで、入つてゆくことのできた理由であると同時に、時代環境を異にする門外漢には、よほど気をつけても判らぬわか点が、少なくない所以ゆえんかと私は思っている。

もう一つ考えてみるべき点は、この俳諧というものの入用な時勢、境涯年齢のあることである。諸君も多分年を取るにつれて、この説に同感せられることが多くなつてくるだろう。歴史にいわゆる世捨人または隠者というものには、存外に人世に冷淡な者は少なかった。気分態度からいうと今日の浪人、ないしは不平家という者とやや似ている。正面から時代と闘うことは勿論もちろん、大きな声では批評もできず、諷刺ふうしも僅かわずに匿名とくめいの落首らくしゅをもつて我

慢する人々、大抵は途中で挫折して、酒や放埒ほうちやうに身をはふらかす人々が、以前はこんなおかしな片隅に入つて、文芸によつて静かに性情を養つて、一生を送つていたのである。こんな微温的なる人生の観察者の、少しも出ないですむような時代を、実現させることは我々の努力の目標であるが、そういう世の中はまだ当分来そうもない故に、今とてもやや形をかえて、この種局外者の清談文学はなお要求せられている。それがもう元禄の俳諧のように、温雅にして同情に充みちたるものでなくなつたことは、この日本のために一つの大きな不幸であるように私は考へている。

私の講演の主たる目的は、日本固有のこの一つの特徴ある文芸から、どれだけまで他の手段では得られない前代知識が、得られるであろうかを説くにあるのだが、その前にちよつと触れておかねばならぬのは、俳諧の弱点、すなわちそれほどよいものならなげ永続しなかつたかという問題である。是にも前に挙げた連衆れんじゆというものの特徴、すなわち作者側の能力ばかりが複雑に発達して、読者側の要求がいかに微弱であつたことが、大きな原因の一つに算かぞえられる。是は独り俳諧だけでなく、一般の問題としても現在もなお存在している現象で、つまりは文芸の成長してゆく道の、日本は今まさに中途にあるのである。あの面倒めんどうくさ

い西洋かぶれの小説ですらも、なお最も熱心なる読者は作者側にいる。少しく余分よぶんに感歎する者は、すぐさま自分でも書いてみようとする。詩歌俳句は勿論のことで、いつの世にも読者の数よりは作者の数の方が多い。漢詩などはこの漢文の衰えた時代に無理な話だと思うが、えらい人になるとみな作りたがる。すなわち誰にも読まれることを期せざる文芸というものがまだあるのである。前代の俳諧のごときは殊に読者を限定して、いわば銘めいめい々の腹の中へんじゆうのわかる者だけで鑑賞し合い、今日存する篇へん 什じゆうはその樂しみの粕かすのようなものである。時代が改まって程なく不可解になるのも自然であった。面白味わかの判らぬだけならまだ曲従することもできる。わかったような顔もしていられるが、どう考えても全然

意味がとれない句、または人によつて解説の裏へらになつたものさへある。よい例は最近の俳諧研究書の中で、幸田露伴こうだろはんさんの本などは大切なものであるが、どちらが正しいかは問題外として、私などが今まで解しているのと正反対にとつておられるのが幾つもある。たとえば『冬の日』の、

鶴つるみ看る窓の月かすかなり

風吹ぬ秋の日かめ瓶に酒無き日

この「風吹ぬ」を私などは「風吹かぬ」と解し、先生は「風吹きぬ」だと見ておられた。また『猿蓑』の、

押合うて寝ては又立つ 仮かりまくら枕

たゝらの雲のまだ赤き空

是は普通は旅の鑄物師いもじの、朝早く立つ処ところと謂いっているが、幸田さんは雲まで赤くなるような夕夕吹きは無ないから、信州とか筑ち前ぜんとかの地名だと言いわれる。東北大学の先生たちの共同研究も本になつて出ているが、是などは初はちまちまちの解釈で、意見のちがつたままが報告せられている。古いところでは宜麦ぎばくの『続ぞ絵歌仙くえかせん』などという絵解えときを見ると、あまりにも私らの胸むねに描えいていたものと、ちがつているのがまず滑稽こっけいである。一つだけ例を引くならば『炭すみだわら俵いぢれん』の一いち聯れん、

算用さんようにうき世よを立つる京住居きやうぢまい

又沙汰さたなしに娘むすめよろこぶ

芭蕉ばきやう
野坡やば

この「うき世を立つる」というのは遊蕩ゆうとう生活せいかつのことで、京で

はそれをすら飯の種にしていると、太鼓持たいこもちか何かのことを言つた句であるが、それをこの絵本には眼鏡めがねの老人が御産おさんの枕屏まくらびょう風の外で、秤はかりで銀を量はかつているところが描いてある。どうしてまたこのようにも人々の解するところが異なるのであろうか。私などの想像では、一つには文法上の無理が多いこと、また一つには時代の推移に伴うて、言葉も風俗も変つたからであらうが、主たる原因としては作者の境涯と教養、その他あらゆる生活の経験が、後世の読者とは共通でなかつたことを挙げなければならぬ。連歌全盛時代の宗祇そうぎ・兼載けんさいの頃から、受け継いでいた俳諧師の学問というものは、近世の俳人ともまただいぶちがつている。彼らの読書の種類は『源氏』とか『古今集』とかいう一部の王朝文

学へんに偏し、それにぜんもん禅門のほうご法語類の知識が加わっていた。旅行
 は近世人もよくしているけれども、この人たちの旅行法はよほど
あんぎやそう行脚僧に近く、日限も旅程も至つてゆうちよう悠長で、且つかなりの
 困苦に堪たえ、素朴な生活に親しんでいたらしいのである。そうい
 う類似の経験をもつ者だけが、相交わつて互いに心理を理解し共
 鳴したうえに、時として詩の興味はこうよう昂揚し、感覚が尖鋭化して
 いたのである。彼らが見合わせてうなずいたりひざ膝を拊うつたり
 したことでも、我々には何の事やらがてん合点の行かぬことが、多かつ
 たとしても不思議はないのである。かつて一度は同じ連衆に参加
 した者の間にすら、のちのち後々は異説を生じ、えつじん越人としこう支考、きよりく許六
 といぜん惟然などは互いにののし罵りまた争つていたのである。後世の追隨者

には誤解も師説であつて、ふたたび新境地を拓くだけの人が出なかつたために、程なくまた様式の中に没頭してしまい、蕪村も一茶も発句では大家のようであるが、天明・文化の俳諧は、ふたたびすでに甚だ単調になつてゐる。前代文芸に対する我々の態度は改められなければならぬ。判らぬ部分のあることは覚悟するがよいのであるが、それもだんだんに小さくしてゆく見込はある。とにかくに作者彼らの境涯に入つて見ようとすること、是が時代を知る一つの要訣である。

九

学問としての文芸理解は、決して近頃になつて始めて唱えられたものではない。或る種の新たな文芸の、特に一つの時代一つの国に起こらねばならなかつた事情、それが民衆の過去生活のいかなる部分を表現しているかということ、尋ね究めようとした人は江戸の町学者の中にも幾人かあつた。事業があまりにも断片的であるために、随筆などといつて軽んぜられているが、京きやう伝たや種彦たねひこのいくつかの著述は先駆であつて、同じ態度を一段と精透に、進めて行つたのが喜多村節信きたむらのぶよ、すなわち『嬉遊笑覧』『画証録』『筠庭雜考』などの著者である。当然風雅の間に齒せられなかつた市井人しせいじんの以前の生活を、古い文芸の偶然なる記録の中から、探し尋ねてみようとした熱情は多とすべ

きであるが、なおその題目の都府に偏し、弘く農漁の生活に及ばなかつたのは欠点であつた。その上にあれほど多くの文献を渉しやうりりようりしたにもかかわらず、あまり時代が近いために、同じ方法を芭蕉翁の俳諧には及ぼさなかつたのである。豊富なる資料は我々のために取残されている。この翁一門の俳諧に感謝しなければならぬことは、第一には古文学の模倣を事としなかつたこと、ロマンチックの古臭い型を棄て、同時に談林風だんりんふうなる空想の奔放ほんぼうを抑制したことである。そうしてなお凡人大衆の生活を俳諧とする、古くからの言い伝えに忠実であつたことである。それから最後には描写の技術の大いなる琢磨たくま、殊に巧妙という以上の写実の親切である。彼の節度に服した連衆れんじゆの敏感を利用したとは言いが

らも、とにかくに時代の姿を是^{これ}ほどにも精確に、後世に伝え得た者も少ない。西^{さい}鶴^{かく}や其^き磧^{せき}や近^{ちか}松^{まつ}の世話物などは、ともに世相の写し絵として、くりかえし引用せられているが、言葉の多い割には題材の範囲が狭い。是と比べると俳諧が見て伝えたものは、あらゆる階級の小事件の、劇にも小説にもならぬものを包容している。そうしてこういう生活もあるということ、同情者の前に展開しようとする、作者^{かたぎ}氣質には双方やや似通うた点があるのである。

我々は強^しいて無理なる解釈を下そうとせず、最初にはまず今日難解^{もく}を目せられる部分が、どういふところにあるかを考えてみなければならぬ。だいたい突^{とつ}飛^びな空想はその場の人にはおかし

くても、時が立つとすぐに不明になつてしまふ。この風は談林とともに衰えたが、其角きかくのごときはいつまでもそれを得意とし、また『冬の日』『春の日』の二集には、若干その氣習が遺のこつてゐる。

はやり来て撫子なでしこ飾る正月に

鼓手つづみむ向くる弁慶べんけいの宮

杜国とこく
野水やすい

などというのはその例であつた。弁慶を祭つた宮などは何処どこを捜さがしてもあろうはずがないが、あまりに奇抜なために人がまごつくのである。撫子を正月に飾るというのも驚くが、是は流行正はやりしようが月つと称して何か悪い年に、一般にもう一度年を取り直し、それから後を翌年にする俗習がしばしばくり返され、その日が多くは六月朔ついたち日であつたことを知れば、六月だから瞿麦なでしこでも飾るだ

ろうという空想の、やや自然であつたこともうなずかれる。

一陽いちようを襲かさね正月はやり来て

清風せいふう

なんぢ桜さくらよかへり咲かずや

芭蕉

という附句つけくなどもほぼ似たる趣向であつた。それからよく出てくるのは万日とか千日とかいう群衆念仏の興行、これもそういう仏事の頻繁にあつた時代を、考えてみれば附け味はよくわかる。芭蕉には島流しの流人るにんの生活を、句にしたもの多いこともちよつと有名であるが、是なども貞享じょうきやう・元禄げんろくの交こが、殊みやげに三宅みやけ・八は丈ちしようを刑罰に利用した時代であり、したがって江戸にその消息しきの頻りに伝わつたことを、想像してみればよくわかる。

一〇

我々にはまだおおよそは判わかつていても、若い諸君には追々に不明になつて行く生活も多いことと思う。他にその説明をする方法が無いとすれば、早く気づいてあべこべに是を史料とすることができるのである。二三の実例を『七部集』以外のものから引いてみるならば、

こんにやくの色の黒きも珍めづらしく

沾蓬せんほう

祭まつりの末すえは殿とのの数かず槍やり

曾良そら

見るほどの子供こどもにことしいもの痕あと

芭蕉

田舎いなかの祭まつりだから、蒟こん蒟やくの色いろが珍めづしく黒くろいと附つけたところが

俳諧である。その祭を見に出てくる子どもが、どれもこれも瘡ほうその痕がある。今年は大分流行はやったなどというのであるが、是なども種痘しゅとうが普及してしまつと、もうこの句によらなければ思ひ浮べられぬ光景であり、またその祭の行列の一番後には、殿様から附けられた多くの槍持やりもち、今なら儀仗兵ぎじやうへいに当るものが行くと
 いうので、それを見物に出て来たあばたの少年少女の姿が、一層活躍するのである。

小地頭こじとうの前に並み居なる萩芒はぎすき

扇車せんしゃ

終りの知れぬ下手へたの舞まい舞まい

以之いし

舞まいまいは越前えちぜん幸こう若わかなどと同系統の、民間の古風な伎芸ぎげいで、

一派の家筋の者がこれを生計としていたのが、能や歌舞伎に押さ

れて亡びてしまった。最初から長たらしい退屈なものだったようであるが、ちようど芭蕉などの時代には、それがまた一段と下手になつていたらしいのである。萩芒というのは祝の日か何かで、そういう染模様を着た女たちが、幾人も見物している風情ふせいを匂にしたのかと思う。

ゆひに屋根ふ茸く村ぞ秋なる

曾良

賤しずの女めが上総かずさ念仏ねぶつに茶くを汲みて

芭蕉

このユヒには「雇」という漢字が宛ててある。農村の人たちが互いに仕事を助け合う慣例がユヒで、今でも全国に共通した方言であるが、東京の近くだけはもうこの語をあまり使つておらぬ。上総念仏の団体があるいていたのは、そう遠くの国まででなかつ

たであろうから、是で関東にもあの頃はまだユヒがあつたことが
知れるのである。

夕まぐれ煙管おとして立帰り

去来

泥打ちかはす早乙女のざれ

芭蕉

田植の日は娘たちまでが昂奮して、よく路を行く人に泥苗
などを投げる悪戯をした。それを御祝儀とも苗祝とも名づけ
て、常例にしていた土地も遠国にはあるが、蕉門の人たちの
熟知した京江戸中間の田舎には、近世はもうあまり聞かなかつた
のである。是もこの一句によつて元禄にはあつたことがわかつて
くる。

花散りて粃は二葉にもえあがり

以之

春ともいはぬ火屋ひやの白幕しろまく

やうくと峠とうげに掛かる雲くも霞かすみ

桃鯉とうり

淡水たんすい

火屋というのは火葬場に設けた仮小屋のことで、それを太陽の光に照されぬように、幕を張る習俗が以前にはあつた。落花と苗な代わしろとの艶麗えんれいなる暮春の風景に対して、是はまた意外なる寂しい反映である。寛政頃の日光道中の紀行に、今市いまいち附近でそれを見たという記事もあるが、この連衆はすでにみな、その物悲しい情趣をちやんと体験していたのである。

露つゆ霜しも窪くぼくたまる馬の血

嵐雪らんせつ

坊主とも老おいとも言はず追立歩おいたてぶ

芭蕉

土の餅もちつく神事しんじおそろし

同

追おいた立て夫ぶというのは、誰彼なしに途みちをあるいている者をつかまえて、夫役ぶやくに使ったことをいうかと思われる。それから直ちに土の餅を聯れん想そうしたのは、今でも型ばかりは残っている尾張おわりの国ここの府宮みやの儼なおい追祭が、この連中には殊によく知られていたからであつた。或る一人に土の餅を負わせ、鬼おにに見たてて倒れるところまで追おいあるくのがその祭の古例で、誰もその役に当たることを欲しないので、通りがかりの人を捉えて勤めさせたとも伝えられているのである。それから終りにもう一つ、是は『七部集』の中の著名な句であるが、

あと無かりける金きん二万りよう両

いとほしき子を他人とも名づけたり

やけどなほして見しつらき哉かな

という其角きかくと越えつじん人の両りようぎん吟ぎんは、親がまじないのためにわが子

に他人という名を付ける風習を咏えいじたもので、この俗信は今でも

まだ地方には痕あとを留め、現に名士の中にも他人とか他人次郎など

という名の人があつた。外吉・外男などというのも同じ動機から

かと思われる。我々が今日元禄の俳諧を読んで、難解としている

部分の多くは、むしろいろいろの興味多き前代生活の、普通の記

録には凡俗として省みなかつたものを保存しているので、しかも

至わずつて僅かなる注意と比較とによつて、単に事実を明らかにし得

るだけでなく、同情ある同時代人のこれに対して抱いていた感覚

を、窺うかがうことができるのである。古文芸は後代の国民のために、

無意識ながらも是だけの活いきた史料を提供しているのである。文化の討究こころざしに志ある者が、迎えてこれを利用しようとしなかつたのは誤っている。

一一

勿もちろん論さ些さ々さたる断片の珍奇を拾い上げて、やれビイドロの薬酒があつたの、豚の寝姿をよんだ句があるのと、随筆風の博識をふりまわすべき時代ではない。諸君は汎あまねくこの特殊なる文芸の総体から、滲透している民衆生活を味わつてみることを心掛けなければならぬが、現在その一部分に事情があつて、まだ真意の把捉し

難しい辞句があるかぎりには、一応の準備としては個々の細部の、成立ちにも注意する必要がある。自分などの俳諧の味わい方は、何か面白そうでもまだはつきりと趣旨の呑込めぬ句は、折々思い出して口ずさんでいるのである。そうしてはいるうちにはふいと思ひ当ることがある。それがまた一方には文化史のいろいろの方面を考察する際に、役に立ったことも何度かあるので、今までに公表している論文の中には、俳諧から気がついてわけもなく明らかになつたものも二つや三つではない。それを並べてみると長くなるが、たとえば木綿もめんが農村に入つて、麻の衣類にかわつていった時代の様子、村に住する寡婦かぶの生計が、農具の改良によつて激変を受けたこと、いわゆる後家泣かせごけという稲扱器いねごきぎの普及、それから久

しい以前より問題にしている旅の女性、みことか歌比丘尼うたびくにとかい
うものの地方に与えた影響や、げんじや 驗者・やまぶし 山伏という一派の宗教
家の、じようじん 常人の上に振うていた精神的威力など、それぞれ今日
の世相を如かくのごとく 是ならしめている原因を明らかにするのに、しば
しば芭蕉翁の文芸を利用することを得たので、しかもそれと同系
同種もくと目せられている初期の俳諧はもとより、後期の熱心なる追
随者等の作品からは、ほとんど何らの参考になるものは得ていな
いのである。是を私などはこのしようふう 正風の祖師の真骨頂が、今も
なお正しく認められておらぬ結果かと考え、はたしてその仮定が
当たっているか否かを、もつと深く推究しようとしているのである。
そこでいよいよ最後にもう一つだけ、試みに問題を設けて諸君

とともに考えてみたいのは、少し奇抜に失するかも知らぬが、昔の人たちはどういう場合に泣いたか、それが俳諧にはどの程度まで表現せられているか。是を単なる見本として拔出して実験に供する。現代はもう百年前と比べても、人の泣く分量は少なくなっているのみならず、泣く種もしくは場合もぐつと減じている。是は我々がきつくなつたためではなく、小児の例を見てもわかるように、微細に内の感情を表白する言葉が、発達しました普及したためかと思われる。今の人は何かというと涙ぐましいだの、目頭めがしらが熱くなるだのという句を濫用するが、その実へんな顔をする程度で、声を揚あげる男などはもう無くなつた。女にはそれでもまだ伝統的のものが残っていて、それが哀れにもまた美しくも認めら

れているが、いわゆる男泣きはもう名称だけになろうとしている。つまりそういう単純な烈情というものが、事前に処理せられて常人の中にもめつたに現われなくなったのである。俳諧花やかなりし頃には、芝居でなくとも男が泣いていたようである。たとえば、

西衆にししゅうの若党わかどうつるゝ草枕

洒堂しやどう

むかし咄ばなしに野郎泣かする

許六きよりく

きぬ／＼は宵よいの踊はくの箔はくを着て

芭蕉

東追手ひがしおうての月ぞ澄みきる

嵐蘭らんらん

この許六と師翁しおうとの附合つけあいは、美少年が盛りの春をすでに過ぎ、懐旧に堪たえぬ風情ふぜいを叙したものとかわかると思われるが、細かな感じは私には説明ができない。次に、

板のほこりに円座えんざかさぬる

洒堂

すだれ戸に袖そでぐち口赤き日の移り

里東りとう

君はみなく撫子なでしこの時

芭蕉

泣き出して土器かわらけふるふ身の弱り

兀峰こつぼう

是をやや詳しく説明すると、この一聯で気になるのは、第二・

第四の句の結びの語形が似ていること、それから全体の場面のや

や平板なことであるが、それでも前段は大きな古御殿ふるごてんに、美し

い姫君の幾いくかた方かたか住んでおられる風情で、中古の絵巻物を見るよ

うであり、芭蕉の附句つけくの方は是をもう戦国の軍記ものまで引下げ

ている。姫君・若様の成人なされた姿を見るにつけて、白髪しらがの老

臣が昔のことを思い出して泣くのである。だから兀峰の句はやや

付き過ぎた嫌いもあるが、無骨な古武士の、殊に物いうことが下手たになつて、戴いたかわらけの酒も飲み得ないで、悲喜感激する光景はよく描かれている。是を映画にでもしたら、さぞまた長つたらしい文句になつたことであろう。俳諧のお蔭に我々はゆくりなく、この古風なエモーションに共鳴することができるのである。『七部集』にはこれ以外に今一つ、変つた泣き方が出ている。是は『比佐古』の中にあるのだが、

生いきだい鯛あがる浦の春かな

この村の広きに医者いの無かりけり

そろばん置けば物知りといふ

珍ちんせき碩

荷か兮

越えつじん人

かはらざる世を退屈もせずに過ぎ

兮

また泣き出す酒のさめぎは

人

ながめやる秋の夕ぞだゞ広き

兮

蕎麦まつしろに山の洞中

人

この泣き上戸は他処から来た寄留人かと思われるが、どう

して泣き出したかは村の衆にもわからぬごとく、諸君ら現代人にも不審であり、また或いは本人にも説明ができなかつたかも知れぬ。しかし少なくともこんな男が泣いたという事実だけはあつたのである。同じ集にはその次にまた一つ、

月花に庄屋をよつて高ぶらせ

珍碩

煮しめの塩のからき早蕨

怒誰

来る春につけても都忘れず

里東

半氣ちがひの坊主泣き出す

珍碩

呑^のみに行く居酒^{いざけ}の荒^{ひと}の一さわぎ

乙州^{おとくに}

この珍碩というのは前の酒堂^{しやどう}とたしか同じ人で、奇妙に泣くという附句の席にばかり連^{つら}なっている。勿論^{もちろん}この人の趣味でもなく、特別の理解でもなかったであろうが、この時代までは折々彼の見たようなすね者、もしくは風狂人などと呼ばれた中年者が、風雅の人の間に伍^ごして、投げやりの生活を認められていたのである。彼らの酔泣きは精神病理の現象だったかも知れぬ。しかし少なくともその複雑な心境を、適切なる言語で言い現わす方法は、当時の日本にはまだ備わらなかつたのである。酒はその結果として馬鹿々々しく歓迎せられ、古来のおみきの用法の外に逸脱した

のみならず、ついには健全なる言語機能を有し、また何ら表現の手段を見いだすに苦しむような不平も煩悶はんもんももたぬ者までが、人を見真似に無用にこのナルコチツクに向かつて行つたのである。当代のごとく俳諧の乏しく、もしくは畸形きけいに発育してしまつた世の中に、生まれ合わせて来た我々は、殊に是を改善整頓して、人間の最も埋没まいぼつしやすい生活、いわゆる片隅かたすみの喜怒哀楽、ありふれたる民衆の幸福と不幸とのために、大きな記念碑を建てようとした先賢の事業を、尊敬せずにはおられないのである。

国の文芸の味わい方は、是がたった一つだと申すのでは決してない。単にこういう一つの鑑賞の態度もあると私は言うのである。将来制作をもつて身を立てようとする少数の人たちを除き、その

他の多数の有識者には私はこれを勧めてみたいのである。

女性史学

一

女を教育しようとする父兄なり先輩なりの考え方には、是^{これ}まで二通りの種類があつた。その一つは、男と同じ学問を授^{さず}けようとするもの、今一つは私などのように、どうかしてやや分業^{みち}の途^{みち}に出^いでしめようとするものである。いわゆる職業教育としては、女

子の学問の種類を限定することは女のためには不利であろうも知れぬ。男なんかに負けるものかといきごんでいる独立婦人に、働くことのできぬ場合を多くし、余計な制約を加えることになるからである。しかし家庭の一員としての女性ならば、無暗むやみに女でもできるといふ仕事を見つけてやって、男と競争させることは家のためには損である。今日のごとき就職難時代すなわち人が多く仕事が少ない世の中では、男女協力して失業者を作る結果になるからである。雇やとう者の側から申すと、来て働いてくれるならば、電気の技手でも煙突掃除でも、安くて辛しんぼう抱する女の方を頼もうとするかも知れぬ。幸か不幸か今はまだ女の働きの鈍いから、賃銀は高くとも男を使うが、もしも能力が同等であつたら、失職者は

或いは男の方の専門にならぬとも限らない。實際また夫婦が共稼せぎをするばかりに、知らず知らず双方の最低賃銀を下げて、せずともよい我慢をしている家が多い。この点にかけては、一人で一人が働けば夫婦親子の者の衣食住を支えて行けるといふ、是までの立て前の方が実はよいので、問題はただ家において主人の養いを受ける者が、ごろごろと昼寝をしていたり、鉄かなぼう棒を曳ひいて近所をまわつてあるいて、日を送つていたりしてよいか悪いかの点に帰着するのである。

職業と修養とは、今日では実は二つのもので、殊に学問などは職業にならぬ方が、進みもすれば世の中の幸福にも貢献する。一方に現在都会に住む若い労働者などは、できることなら職業の余

暇に、もつと修養になる学問をしたいと念じていて、しかも疲れ切つてそれが十分にできず、むしろ不自由な田舎に住んでいる青年の、いわゆる晴耕雨読の境涯を羨うらやんでいる者が多いのである。彼らが日々の衣食のために働かねばならぬ時間を、努つとめて短くしようとしている国家の目的も、主としては爰こゝにあるのである。したがつて婦人に職業が少なくまた軽いということも、それがその余力を今一段と尊いものに、向けさせる結果にならぬかぎりは、社会的に実は無意味である。今日のごとく女子の教育が盛んになつておりながら、なおいわゆる有閑夫人の多くできることは、たとえ少しも悪いことはせずとも、すでに社会の一つの病やまいであつた。まずは現在の教育方法がよくないという推論にもなり、またはそ

れくらいならばまだ職業をもたせる方がよいという意見も出てくるわけである。

二

女子の職業を軽んじ、または是に携わる者を気の毒がることは勿論もちろんまちがっている。ただ私などのおかしいと思つてゐることは、誰しも自分の娘や妹のために、できるかぎり安楽な、世に出て働く必要のないような境遇を、見つけて遣やりたいたいと念じておられるながら、その教育はどうかというと、いわゆる万々一の場合、すなわち夫が病身であつたり、酒呑みで失業したり、子どもをかか

えて未亡人となったり、家が破産に瀕^{ひん}して昔なら身売奉公^{みうりほうこう}でもしなければならぬ場合に、備えるような教育ばかりを与えたり、また受けたがることである。「芸が身を助けるほどの不しあわせ」という近世の川柳もあるが、是はまだ意外な効果といってよい。始めからそのつもりで、まるまる役に立たずに済^すめばそれに越したことはないという教育に、全力を挙げているということは、再考する必要があると思う。新聞や雑誌に書立てるので、社会は不幸悲惨をもつて盈^みちているかのごとく印象せられるが、百分率からいうと九十八九の家庭では、女は平穩無事に小さな世事に屈^{くつた}托^くし、そうしてただ少しづつ学校で教えられたことを忘れて、生きているのが現状のようである。是から先の世の中をよくする

も悪くするも、今はただこれらの人々の心掛け、そういう多数の人の毎日の暮しかた如何いかんによるのであつて、出てあるいて非難を受けるような変なことをする者が、時たま現われて問題になるよりも、この多数が閑ひまで閑で何をしてよいのかに迷っているという方が、より一般的なる婦人界の恥辱だと思ふ。もしかの場合の覚悟も大切なことではあろうが、それは常の日の常の役目が、相当に用意せられてから後のちの話でなければならぬ。

女の学問、女らしい学問というと、今まではとかく食物のカロリー計算だの、子どもの衛生だのにかぎるごとく考えられがちであつた。それも生活に欠くべからざるものだが、是は技術である。学問というものは、私などの解しているところでは、その利得が

自分の一身に止まらず、社会を今までよりも賢くすることになればならぬ。すなわち弘く^{ひろ}人間の智慧の水準を高めることを目的とすべきものである。現在はちようど世の中の一つの変わり目で、古い仕来り^{しきた}と新しい思索とが抵触して、かつては直面しなかつたいろいろな生活問題の、解決を今明日に迫られているものが多い。それを全然男たちに任せ、ないしは彼らの迷いまた誤まるのを、じつと坐視するだけが女の役かどうか。或る問題は職務に疲れきっている人々の手から引取り、または少なくとも良い考え、新しい見方を暗示することが、女には全然できないものと運命づけられているかどうか。賢明なる先覚者の再思三慮すべき点はここにあるのである。婦人参政権の問題は、御承知のごとく今は少し下

火になつてゐるが、やがてまた起こるにきまつてゐる。今日の婦人は、またその教育方法は、はたして国の政治に参画して、女でなくてはできぬような社会奉仕を、なし得るだけに支度せられてゐるかどうか。是が私には非常に気になるのである。

是は男の普通選挙も同じことで、女にも国事人事を憂えしめようという説は、理論として誰もこれを拒むこば者は無い。ただ時期が尚早なほやいとか手続きがまずいとか言つて、反対してゐる者があるだけである。その実現はまつたく時の政治がこれを決する。あすが日にもさあ遣やつてみようということになるかも知れぬ。はたしてこれを試みて何らかの効果があるかどうか。またはそのための用意が整うてゐるかどうかということになると、それはおのずから

また別の問題になるのである。男の前例も同じように、普選は断行してみたが、格別これというだけの変わりも無かつたというよう
な、一国として恥がましい結果に陥らぬことおちいを、お互いに今から警戒しておかなければならぬ。現在の政治はあまりにも元もとのままのやり口で、しかも実際の問題はあまりにも激増してきた。古風な政治家の手に合わぬという大事件が新たに生まれ、また省みられなかつた事柄が省みられ出した。そうして国民の一般知識は、まだまだその問題を解く資料には不足だというまでは、明白になつたのである。いかなる方法を尽してなりとも、我々の学問をも一押し前へ進めて行かなければならぬ理由は確かにあるのであ
る。男子はもとよりこれに必死となっているが、女性の側でも只ただ

これを傍観して、蔭であれあれと言っている時代ではあるまいと思ふ。

三

歴史が是らの難問題を、すべて解決してくれるものとは断言することはできない。しかし判^{わか}らぬこと説明が付かぬという事実には、必ず隠れたる原因があり、その原因は必ずみな今よりは前にある。すなわち歴史のいまだ書かれざる巻々である。女がそれを見つけ出し得るとも無論きまらないが、実は今まで彼女らが、あまりにこの方面に無関心だったお蔭に、特にその手近だけに、多

くの大切な暗示がまだ残っておりそうなのである。だから新たにその持前の細微な注意力をもつて、捜さがそうとすれば大いに見つか
るかも知れぬのである。しかしただ勉強して本を読み、本に教え
てもらおうとしても失望する。書物は大抵が男の手に成り、彼ら
に合点がてんの行くことまでしか書いていないからである。そういう私
とても男だから、この男の言うことも只ただ御参考にしかなるまいが、
おおよそ人間の作り上げた世の中ほど、込み入っている組織は他
には無い。事實は明白だなどと言つてすましていることでも、近
よつて細かに見ると、思いがけぬ原因が蔭の方から糸を引いてい
る場合が毎つねに多い。少なくとも我々の今もつ人間知識では、ほん
の片端しか問題の綾あやは解けていないものが多いのである。勿もちろん論

今すぐに成績が挙がるとまでは樂觀し得ないけれども、ともかくも日本の少しでも余力のある婦人たちは、その平日の心掛によつて、もつと多くの知識を得、もつと多くの世の中の問題、殊に日本の現代の疑問を、解釈し得られることを目標として、この実地の史学を進めてゆくことが、社会に役立つ一つの途であると思ふ。

例に引くのも胸の痛くなる話だが、この四五年來急に目に立つて増して来た親子心中、母がこの世をはかなんで見棄ててゆく場合に、まだ東西も知らぬ幼児を連れてゆく風習、是などは正面からその悲惨事を防止しようという前に、是非ともまず何故に日本にばかり、特にかような死に方が多いのだろうかを、たとえ不能なまでも一応は尋ねてみななければならぬ。そうでない限りはた

だ歎息するだけで、いつになったら止むという見込が立たぬからである。是には一種の感染ということも無いとは言われぬが、別にそれ以外に家の連帯感、すなわち小さなわが家を除いては孤児を愛する処ところもなく、どうせ親の不運は兎も分こかたなければならぬという考え方がもとなつてゐるか。もしくは小さな者の生命と靈魂が、家に所属するように思つていた以前の独立性否認がなお続いてゐるか。ただしはまた人生の幸福と死後というものに対する特殊なる信仰が、無意識に今も残つてゐるものか。とにかくいろいろの古風な考え方が、新たな誤れる感情と交錯して、かかる残酷なる決意を導いたことが無いとは言われぬ。しかもそれらの心理現象の底に横たわる消極的な思い切り、または女の勇氣と

いふべきものが、従順無抵抗を本位とした江戸期以来の道德の制約を受けて、たった一つの「生命」より以外に、その自由処分に委ねられたものが残らなかつたということが、もしやこういう情ない進路を指示したのではないか。仮にこの推測が当たっているとすれば、その証拠は歴史の上に見つからなければならぬ。単なる或る一つの想像説として棄ておかずに、そのつもりで捜して行けば、うそか本当かは今に必ず明らかになると思う。古い家々の躰けかたには、女子の勇氣と胆力たんにりよくとを、ただ死の方面にしか発露せしめないような、わけのわからぬ方針が久しく立っていて、死ぬほどの不幸が家に起こらぬかぎり、烈女の名は世に現われる機会がなく、したがって手本とする前代の婦人の、大多数は剣けんに

伏ふしているのである。そんな昔の教科書を、よく考えもせず
に受け継いだ結果が、思慮の浅い者を何かと此方こつちへばかり向
かわせるのではないか。もしそうだとすると、是は女の勇気の最も
惜しむべき濫用であつた。今はまだそれを断定することができぬ
なら、是には是非とも男子も参加して、もつと深くその根本を探
り、いよいよそうと極きまつたら、倫理教育の本もとを立て直さなけれ
ばならぬ。

四

是これはかなり大きなまたむつかしい問題で、最初から動かぬ答を

期することは無理かも知れぬが、少なくとも永年の慣習というものの中には意外な拘束があることを気づいた人だけが、だんだんにこれを正しく考えることができると思う。そのためには若干の練修を積むように、もつと小さな日常卑近の問題から観察を始めるのも一つの方法であつて、そういう問題ならば私はまだ幾つでも提出し得るのである。一つの例を挙げると日本人の体質、是が現在はまだ多くの民族と比べて見劣りがするように我も人も感じている。その事實ははたして昔からのものであり、すなわち日本人の一つの特徴であるのか。ただしはまた近世に入つてこうなつたのか。是が一つの問題である。古い記録には偉人の身長が折々書いてあり、小男ということもよく記されているが、普通

というのはどのくらいであったか、確かには知れない。中世の武人の用いたというすばらしい大きな兜かぶとだの、引きずるような長いよろい鎧を見ると、どうやら今よりもずっと体格のすぐれた人が、彼らの中には多かつたらしく思われる。とにかく腕力とりよりよく臂力とだけには十分な記録があり、また記録外の証跡も残っている。村の青年たちが休日の慰みに、担かついで力を試した力ちから石いし、北陸地方でバンブチとも番持ち石ともいうものには、驚くほど大きなのがあって、今ではさし上げ得る者も次第に少なくなっている。是らは近い頃の事だから尋ねたら多分すぐに判わかる。すなわち以前の方が力の強い者が多かったのである。老人たちが二ふた言目ことめにはよく言う昔の人の元氣と勇氣、それは多くの場合にはこの腕力の自信で

あつた。もう一つ以前には力は信仰であつた。神に禱いのつて授けられると信じ、また親から子孫に伝わるのも神意と考え、力の筋は女に伝わってよその家に行つてしまふとも言つていた。それから眼力と謂いつて遠目の利くこと、じつと物を見つめて相手をへこませる力、こういう点にも元は傑出した人が多かつたが、細かな書物の字を読むようになって、その力はたちまち衰えて、都会の青年は半分は眼鏡めがねを掛けている。早足と食溜くいだめなども昔の人の長ちよう処しよであつた。一度にうんと食べて二日も三日も食わずに働けるのは体力で、単なる瘦やせがまん我慢ではできない芸当である。今でも少しはまだ残つていと思うが、前夜自分の勝手に寝なかつた者が、次の日は平気で働いて疲れた様子も見せぬこと、それから病氣や

怪我けがをして、少しも弱らずに直ぐすに治つてしまふ自癒力じゆりよくとも
いふべきもの、是らはいずれも近世に入つてひどく退歩した。そ
れと今日の日常生活の変化とは、おそらく密接な関係があるであ
ろうが、生理学の方からこれを考えている人は有るやら無いやら、
第一にまず私などの思っているほど、大きな退歩があり変化があ
つたことを、気づかぬ人も多いのである。

衣食住の変遷は、ごく近い頃の分は誰でも知っているであろう
が、それがもう一つ前の時代から、永くかかつて少しずつ地方的
に變つて来たことは、おそらく何なんびと人もまだ考えずにいる。この
事は『三省録さんせいりよく』という類たぐいの書物にも少しは載せてあるが、それ
よりもわが国現在の事実を比較して見れば、一層よく判明するの

である。平民の生活ぶりは政治の歴史のように、一度にはつきりとは改まってしまわない。土地により環境によつて一部は早く進み、他の各部は順次に遅れて進んで行く。それで今日のごとく新文化の普及した時代になつても、その方々の異なる生活状態を寄せ比べて見ると、変遷の各段階が現われてくるのである。たとえばわが家では親がいるうちだけで止めた行事を、隣村の親類では今でもまだ続けている。もう少し奥の田舎いなかに行けば、うちの年寄の話だけに聴いているような食べ物なり着物なりが、現に今も用いられているという場合も多く、さらにその比較をなお一段と弘ひろく進めてみると、日本人の生活ぶりの次々に改まつてきた道筋が、かなりはつきりと跡づけられて、変化は決して明治大正の代に入

つて、突如として始まったものでないことがわかるのである。

それを一つ一つ述べ立てることは、時間潰^{つぶ}しであり、まためいめい自分で知られる方がよいのだが、大体に日本人の食物などは、近世に入ってから追々と柔くなり、甘くなり、且つ温かくて汁^じ気の多いものになってきている。この四つの変革が、胃腸の働きやまた歯の健康の上に、何らの影響を及ぼさずにいたとは思われない。その中でも歯医者は近世になって始めて現われ、金歯がきらきらと光り出したのは、ほんの二十年三十年来の現象であるが、それ以前ははたして盛りの男女まで、みんな歯抜けではくばくしていたかというところでない。年が寄ると歯が落ちて早く衰弱したのは事実でも、壮年の者の歯は甚だ丈夫で、物を咬^かみ割り喰い

折つたという類の話は、今の人が驚くほど多く伝わっている。是
がもし調理法の変遷に基づいて、いつとなく齒の弱い者を多くし
たのだとしたら、何はさしおいてもその原因を改めなければなら
ぬのだが、それを確かめようにも第一に食物の近世史を調べる人
が無い。こういう問題は実は男たちには不向きなので、かかつて
調べるならそう困難な事業でもないのに、是まではほとんど打棄
ててあつた。婦人方がたが携わつてくれられぬかぎり、まだ当分はこ
の方面は明らかになるまいと思う。我々の生活技術は進んだとは
申しても、その変化は必ずしも常に改善ばかりでない。隠れた弊
害の副そうことを知らず、またはまるまる結果を考えずに、真似や
流行によつて誤つたことを始めた場合もあるのである。それを今

頃とやかく言ってみても仕方がないようなもの、少なくともこれに由よつて、社会も各個人と同じように時々は心得ちがいをしたり後悔したりすることがあるのだということに心づけば、将来はもう少し注意深くなるわけである。歴史の最も大切な教訓は実に茲こゝにあるのであった。それは政治や戦争のように、男たちの事務だけに限らぬのみか、食物は毎日の生活であるだけに、むしろ人生の幸不幸に影響を及ぼすことが大きいのである。単に今後の参考になるだけでも、学問の効果は無限だと思う。

五

同じことはまた第二段に、衣服の変遷についても考えてみるこ
とができる。人が近世甚だしく風を引きやすくなつたことは、金
齒以上の大事件であつた。カゼは以前には流行病の一つ、または
眼に見えぬ悪霊の所為せいとも想像せられていたことは、風邪という
語からでもよくわかる。つまり今のように普通の病やまいではなかつた
ので、この変遷と衣服とは関係があるらしいのである。我々の衣
服はどう變つてきたかという、是もやはり柔かくなり、また糸
が細く目がこまかくなつている。「木綿以前の事」という一文に、
かつて私はこの点を少しく考えてみたことがある。麻糸にも精粗
の差はあるが、もともと手先の業わざだから常じょうじん人の着物は糸が太
く布が強くて突張つていた。まるまるとした人のからだの表面と

の間に、小さな三角形の空間が幾らでもできていた。日本は歐洲とは反対に珍しい夏湿の国で、住民はまたおそろしい汗かきである。汗は放散して冷を取るために出るかと思われ、扇はまたその水蒸気を、着物の下から追出すために用いられるのである。麻や^{たえ}栲を着ていた時代には、その扇は使わずともすぐに蒸発したのが、^{もめん}木綿になつてそれをほとんど不可能にしたのである。だから夏分は肌がいつも^ぬ沾れている。

しからばどうしてまた物ずきに、そんな木綿などを着ることにしたかという、その方が第一に外観がよいからである。キゴコロという言葉は是に伴のうて普及した。木綿は平安朝のごく始めに、^{コンロン}崑崙人が種を携えて漂着したと古記にはあるが、実際それが

普及したらしい形跡は無い。舶来品だけが久しい間珍ちんちよう重せられ、国内で盛んに作り出したのは二百年ぐらい前からのことで、それも明治になってようやく一般化したものである。その特徴は何色にでもよく染まること、麻には不可能なる鮮かな染模様でもしま縞でも、次々の工作によって自由に製品の改良ができる。遠目は絹に近くまた肌ざわりも柔かである上に、何よりも女に嬉しかったのは、衣裳の輪りんかく廓の美しくなったことである。心がすぐに外あに顕われる身振り身のこなしが、麻だと隠れるが木綿ならばよく表現せられる。泣くにも笑うにも女は美しくなった。芭蕉翁の時代はちようどその木綿の流行の初期で、「はんなりと細工に染まる紅うこん」だの、または「染めてうきもめんあわせ木綿あ衿せの鼠色」だのと

いう句が、しばしば『七部集』の俳諧の中に見えている。

もう一つ、是これはやや皮肉な見方だが、麻の衣服は少しく長く持ちすぎる。伊豆の新にいじま島から友人が写してきた写真では、七十二三の老女が嫁入の時にこしらえたという藍無地の帷かたびら子を着ている。木綿はこれと反対に早く悪くなつてくれるから、安くさえなれば（実際また安くなつた）次々に取替えて、変化の趣味を楽しむことができる。ここに縞しまおり織おりやいわゆる中ちゆうがた形の、発達した原因があるので、年齢に合わせて派手だとかじみだとかいう問題は、頻ひんぴん々と取替えるからいよいよ細かくなつてきて、ついには自分の手ではできない工場の品物に、求めるほかは無くなつたのである。家に地機じばたの置いてあつた頃でも、夏は少なくとも買か木もめ

綿んを着る人が多くなっていた。それでも男たちはまだ洗濯物に糊のりをこわくして、少しでも麻に近い感触と、蒸発区域とを保とうとしたが、女はまずそれを喜ばなくなってしまった。そうして機械ができて糸は極度に細くなったのみならず、男も後のちのち々こくらは小倉織おりのような地の詰つめまったものを襟えりにして、ぴたりと身に着けて汗だらけになり、またすぐに裸になりたがる。この木綿糸の水を含む特質、是と肌膚はだの抵抗力とは、どうも関係がありそうなのである。

六

ヨーロッパ人の経験した一つの悲しむべき失敗は、太平洋の島々

においてはすでに承認せられている。あのフィリッピンの婦人の

着物で見るような寒冷紗かんれいしやというものが行われてから、かなり土

人の体力を弱めている。この方面の伝道師には英国人が多いが、

英人でなくともこういう地位の人は物固い。彼らの本国では夏が

乾燥しているから、私らでも三十五六度という暑い日に、あわせふ裕

服くを着てあるき扇などは忘れていた。裸の人などは見る機会の

無い国が多い。女はなおさらで夫にすら見せないという人が幾ら

もあった。したがってその裸体を非常に嫌い、牧師の夫人たちが

率そっせん先して、この寒冷紗をはやらせたのである。それは土人もむ

しろ悦よろこぶところで、現在はもうよほど多くの島に、この風ふうが一般

化しているのだが、一つ困ったことには彼らはそれを着たり脱いだりすることに馴れない。たとえば夕立が降つてずぶ濡れになつても、なお裸の時代と同様にごろりと寝転んで乾かそうとする。千九百十八九年の西班牙風邪の流行に、急性肺炎に罹つて死ぬ者が多く、時としては一部落が根こそぎ滅びたというなどの、原因は是かららしいということとは白人の調査委員も認めている。日本でもかつて陸軍の手で、脚気と白米食との関係を調査し、それが今日のビタミン研究の刺戟を為したようだが、右の木綿の方は細系統織の流行が新しいから、是と呼吸器病との関係までは、まだ深く注意する人が無いのである。あなた方の夏の衣服がすつてんてんになって、私などのような心配家はほっと息をしている

のだが、実はまだ靴くつの問題が残っている。是らを必ず健康の優劣と結びつけることは、勿もちろん論速断の嫌いがある。しかし少なくとも我々の注意は、ここまで及ばなければならぬ。二者の変遷すなわち衣食種類と国民健康とは、少なくとも併行して変つてきているので、とにかく過去歴代の生活改善なるものが、正しいか正しくないかは批判せられ、検討せられて然しかるべきものだということは言える。是まで人のしたことにも結果から考えて、為ためになつたこととならなかつたことがあつた。それをよく知つてからでないと、新しい改善に責任を負うことはできぬはずである。私のよくなおおよそ家政学と縁の無い人間が考えてみても、氣のつくよくなことは是ほどある。ましてやもし細心なる注意と同情とをも

つ人たちが探したら、古来天運とあきらめまた人生の常と歎いていた不幸にも、もう将来は服従して行かずにすむものが、幾ら現われてくるか知れぬのである。勿論そんなら是からは乾物ひものばかりをかじり、夏は裸で学校にも出ることになろうなどと、そんな無茶なことを申すのではない。本もとに復かえれと言つても文化は複合している。或る部分だけを切離して、木綿以前にもなれないことはよく判わかっている。ただ私の言うのは是からの社会対策には、あらかじめ知ってかからねばならぬ歴史が多く、それが今日はまだ荒野のままに、置かれているということだけである。

七

政治上のいつでも大きな問題は、結局は貧乏物語に帰着する。

貧の原因は複雑を極^{きわ}めていて、その根本の法則というものを、突詰めたところに持つて行こうとする人もすでに多い。それは仮に疑いの無いことだとしても、なおそのたった一つの原因を除き去ることによつて、貧を絶滅することができるとは思えないわけは、これを取巻いて今はまだ茫^{ぼう}漠^{ぼく}たる未知の歴史があるからである。日本の人口は明治の初めから、僅^{わず}か七十年足らずで倍以上になつた。それ以前にもそれほど増加が著しくくないというのみで、よほど大きな天災や戦争があつても、やはり少しづつは人が殖^ふえていく。この総数が減らないために、国民が全体で平^{たい}らに繁栄してき

たように、ちよつとは考えられるけれども、それはどうも事実でなかつたようである。すなわち繁昌する家だけはいうんと大きくなつて一門を殖^ふやし、一方衰えかかつた家はまた急に滅びて行く。家の栄枯盛衰は烈^{はげ}しく、今日いるものは金持も貧乏人も、ともにその一方の生き残りの者の子孫であつて、別に絶えてしまつた家筋というものが、非常に多かつたことが想像せられる。そうしてその原因はと言つと、今ではこれを聴き出す手段のないものが多いが、近い頃の、たとえば老人たちの記憶の及ぶかぎりのものは、心がけて調べて行くと判るのである。ゆくゆくはもつと総括的な方法が見つかるかも知れぬが、一応はまず是に基^づいて、その一つ以前を想像してみるのほかはない。是がまた今日はまるで手つ

かずに残っているのである。私も遣やつてみようと思いつつ、まだ片端に手を着けただけで、もう続けることもむつかしくなった。

その僅かな実験によつて言うと、家の生活力ともいうべきものは、個人の体格や健康とは反対に、昔の方が今よりもずっと弱かつたらしい。一度傷つくか躓つまずくかすると、たとえば主人が死ぬ、病人になる、または家出でもすると、その疵きずがなかなか恢かい復ふくせず、やがて絶家の原因にもなることは、今日に比べてずっと著しかったように思われる。前年相そうしゆう州しゅうの或る山村の過去帳を調べた時に心づいたことだが、同じ一家の死亡者は三年五年と中なかを置いてよく続いている。多分は栄養力が単原だったために、それが働き手の減少とともに、次第に乏しくなつて行くらしいのである。

明治二十九年の東北海岸の海嘯つなみの跡などもよい例であつた。鰥寡かんか孤独こどくは常の年には仲間によつて支持せられるが、何か異常の大事変があると、まず是らの抵抗力の弱い者から掃蕩そうとうせられるのである。貧しい家には配偶を得がたい者が、平和の時にもなかなか多かつた。一生出て行かぬ独身の労働者、タネヲチなどと謂いつた者がそれである。子孫は現実にはあるかも知れぬが、死んでも祭つてくれずまた記憶してもくれぬ。すなわち家としては是で絶えるのである。この職蜂制しよくほうせいの如き生産組織に対立して、新たに起こつたのが、分家制ぶんけせいであつた。古くからの小前分家こまえぶんけに対して、是だけを特に新宅しんたくという処ところもある。すなわち本家とほぼ同格の家を、新たにもう一つ作ることで、この村内新宅ふかうの風は近世にな

つて始めて起こった。つまり是だけが村繁栄の余力なのであった。それ以外には入^{いりむこ}贅^こおよび入^{にゆうふ}夫^ふの制、是は女しかおらぬ家を見つけて、そこへ余^{あま}ったヲンヂたちを配るのである。村役人の大切な一つの役目として、こういう男の手の欠乏を捜しまわり、絶えてしまう家を少なくし、村の戸数の減退を防ぐことが命令せられたのである。しかし大体からいうと、身分ちがいと家風の相違などで、こういう外部からの補強は常には望み難く、次第に女あるじや後家^{ごけぐら}暮しの、水田の経営に向かぬ家が多くなってきた。一方に資力を蓄積した家だけは、田地があれば堂々たる分家を出し、町が近ければ店を作つて与え、才能のある子には医者僧侶の修業をさせ、または武家志願をさせ、或いは敷^{しきぎん}銀^{ぎん}というものを持た

せて、都市の商家へ株取^{かぶとり}入^{むこいり}をさせた。そういう条件のすべては具わらぬ者だけが、他村に奉公して有付くか、または年上の後家の所などに、入夫をして辛抱したので、結局は現在の増加している戸口は、大部分近世の優勝者の末ということになり、甚だ悲しむべき事実ではあるが、過去の敗残者の子孫は、もうほとんど生き残つてはいないらしいのである。

是はもとより日本に限った現象でない。またおそらくは人類社会だけを、支配した法則ではないかも知れぬ。貧窮が新たに我々の問題になり始めたのは、言わばこの家の虚弱ということが、個体の健康と同じく注意せられ始めた兆候である。お互いが自分の生存ばかりを、考えておればそれでよいように、思わなくなつた

結果である。我々がこの問題の根本に立入って、家の生活力を支持する外部の条件にも、検討を加えようとするのは進歩であつて、是は統計の総数増減を見ていただけでは気がつかぬことである。我々の繁栄は全般的でなければならぬ。誰かが片隅で飢え凍^{こご}えてくれなければ、自分らは安穩に生きられぬというような情ない経験^{けん}を、過ぎ去つた昔の悪夢とする時代を運んでこななければ、一つの不正を征伐してしまふや否や、必ずまた第二の不正が発明せられるであろう。現在提出せられているいろいろの方策は、中には試験であり失敗の危険のあるものも多く、万全と思われるものは概して微温的であるが、こうして行くうちには追々に有効な方法が見つかつてくると思う。只^{ただ}それには今はまだ明らかになつてお

らぬいろいろの原因を、少しでも多く確認する必要がある。歴史の実際的の用途は、爰こゝにこそ非常に重要なものがあり、また婦人の細かな毎日の注意を、最後に人類一体の恩恵に化して行くこと、すなわち社会家政学の唯一の可能性も茲こゝにあるのである。文化批評という言葉は、響きが好いたために誰にでも共鳴せられるが、今日まで行われているものは主として演えん繹えき的のものであった。私はそれとともに他の一方から、一つ一つの問題について、今までの生活ぶりの拙劣さ、長い眼で見ても賢くなかった点を、反省する機会を作らねばならぬと考える。衣食その他の毎日の消費生活が、決して末端の小さ過ぎる問題でなかったことを知るにつけても、みなさんの学問の遅々として進まぬことを、私は齒痒はがゆく感ぜずに

はおられぬのである。

八

女性と歴史の問題は、おおよそ三つの方面から考えて行かれる。第一に女性がこの研究に携わって行くことの意義と効果。是はすでに前にも説いたが、是を試みる以上は人の書いた本を読み、男の講演する説を聴くだけでなく、今までの学徒にまだ気づかれなかつた点を発見することを目標としなければならぬ。すなわち研究の独立である。第二にはそれは望ましいことだが、はたして女性にできるかどうかということが問題になる。是は必ずしも素質

が適しないという類たぐいの、失礼な人を見くびった理由からでなく、女にそんな余力があるだろうかどうか、こういうことが考えの中に入ってくる。「女には別にすべき事がございます」。こういう言葉はあなたがたの先輩もよく口にせられる。勿論有るには相違ないが、それは一体何と何とであろうか。是を答えようとするにはさらに第三の最も興味深き観察点、すなわり前代社会における婦人の地位如何いかん、これを今からでも認識することが必要だと思う。こういう問題などは、とうてい外部の人たちの成績を待っていて、いわゆる「読ませていただきます」で済まされるわけがない。現にそのために今まで散々に誤らされた後なのである。もう一度自分で考え且つ判断なさるほかはない。

私などの見たところでは、一つの大切な点が従来は見落されてきた。それは一言でいうと女の立場が、実は昔から二通りあったということに気づかぬことである。考えてみれば誰にでもすぐ気づくことだが、ふとした原因からそれが埋もれていた。若い頃はしとやかで優しく、また非常にはにかみ屋であつた女たちが、年を取るときまってやかましく、またきつい人になることがそれである。「嫁が姑しゅうとになるの早さよ」などという川柳もあつて、後者を代表するものは概念上の「姑」であつた。姑は江戸期の文学の主要人物で、文学は通例若い女たちが読むので、多くの姑は悪形をもつて目もくせられている。支那シナの文芸には、また是がもう一段と強く表現せられている。畏内いないという語は笑話の主材であり、英

語のカーテンレクチュアと偶ぐうごう合した帳ちやうちゆうせつぼう中説法という妙辞もある。彼女らの手には鞭むちがあつた。まかりちがえば亭主までが打たれる。その怖おそろしい古女房、是がみな昔は羅綺らきにも勝たえざりし美少女の、なれのはてであつたのである。しかし中華民國には限らず、いずれの国の伝統においても、主婦には或る権力が認められていた。家長が野に出でて獵りようし、海を越えて戦いまた交易した時世を考えると、是は女の耕作よりもなお一層自然であり、またその力が昔さかのぼに溯るほど強かつたことも想像せられるが、しかも今とても或る程度までには必要を認められているのである。西洋では是をマトロン、マトロンリーと呼んでいる。日本の古語では刀と自じであつた。刀自には稀まれに内侍所ないしどころの刀自のように結婚をせぬ者

もあつて、語の本義はただ独立した女性を意味し、すなわち男の刀禰とねに対する語であつたかと思われるが、普通の用い方は家刀自いえとじすなわち今いう主婦に限られていた。現在もこの語の活いきて行われているのは沖縄県の島々で、ここでは妻つま 覓もとめをトウジムトウミ、またはトウジカミュンという語もある。他の地方にはただ文語として存するのみで、実用にはかわりのいろいろの語が生まれている。その中でもやや古風なのはゴゼンまたはゴゼ、九州南部などは一般に嫁取をゴゼンケ、御前迎えと呼んでいる。ゴゼンはまたオマへとも謂いつて、或いは此方こちらが一つ古いかも知れない。やはり嫁迎えのことを熊本県その他で、オミヤトリまたはオメヤモツなどとも謂いつている。漢字に書けば是も御前であつて、もとは

対称敬語であつたことは是でわかる。他の府県殊に東日本の方には、オカタというのがまた主婦のことで、是も決して新しい名稱ではない。中古の記録には武家の母や妻女、たとえば足利尊氏あしかがたかうのおつかさんなどを大方殿おおかたどのと謂いっている。多分はオカタに大を冠かぶせたもので、田舎武士が郷里から携えてきた語だとしても、京都語の北かたの方や東たいの対などたいと別のものではなく、起こりは御前の「前」も同然の「御方」おかたで、敬称であつたことは疑いがない。すなわち夫がそう呼んだのが始めてと思われるが、子どもは次第に父の語を真似て、カカサマ、カアチャン一系のいろいろの呼び方が始まつた。人が他人の妻をオカカだのオツカアだのと謂うのは、ひつきょう畢 竟 この舌足らずの音をまた真似したので、カカは決してハ

ハの転訛てんかではないのである。

九

このオカカないしは刀自とじの地位は、慣習的にちゃんときまつていた。任務と権能と是に相応する尊敬とが附ついていた。あらゆる若い娘たちの先途せんどすなわち到達点、もつと大袈裟おおげさな語でいえば女の修養の目的が是にあつたところは、あらゆる若者が家長の地位を獲うるのを目標に、努力したのも同じである。というわけは昔は一家族が今よりもはるかに大きく、女も男も一生働いても、すべてが主人となり主婦となり得るとも定きまつていなかつたからである。

そうしてその刀自の役目というものは、事によると今日の良妻賢母よりも重かつたかも知れぬ。私はそれをごく普通の日本人の家について、考えてみようとするのであるが、その前に言つて置きたいことは、それと嫁、すなわちオカタ候補者のさかいめ堀目が追々とぼんやりして来たことである。是はまったく一般の経済事情に伴なう婚姻制の変化、具体的に言うならば、今日行われている嫁入風習の普及に基づくようである。今日の嫁入というのは、婚姻が成立つや否や、先方の家にちゃんと現在のオカタが君臨しているにもかかわらず、すぐに嫁女を送りつけてしまう形式である。その結果としては、妻ではあるが刀自でない者、オカタとは謂わずにアネサマまたはアネエなどと呼ばなければならぬ家族の一員を、

生じたことになるのである。むしろ平凡をきわめたる近代の家庭悲劇は、ことごとく是から起こった。権力の争奪は新しい道德律を設けて、これを予防しなければならなかったのみでなく、一般に女性の氣質の上にも、昔は無かった或るものを附加えることになつた。

一〇

この面倒を避けようとした努力もいろいろある。その一つは隠居。長男が婚姻するとともに、親夫婦は家を若い者に渡して、次男以下をつれて別居する風は、伊豆の島々にもまた九州の海岸に

もあり、是これが同列分家ぶんけの一つの原因にもなつたらしい処ところも方々にある。それとは反対に、本家ほんけの近くに小さな家を構えて、当分新夫婦をそこに置く風習、是は最近の都市生活にもやや行われてい
るが、長崎市周囲の漁村などにもあるというから、新しい発明で
はない。信州諏訪湖すわこの附近の例は、目下中川・塩田の二君が調査
しておられるが、是も手順はまったく同じで、只ただ最後の末子ぼっしが家
に留まり、そのまま住宅を相続した点がちがうのである。すつか
り調べてしまわぬうちは断言はできないが、末子相続の慣習があ
つたために、兄夫婦が外に出たのではなく、親子二夫婦の共住せ
ぬ理由から、自然に末の子が本家に残ることになつたのかと、私
は想像しているのである。とにかくに親が第二世の婚姻とともに、

ただちに出て行くということもできぬ場合が多く、したがって婚舎すなわち一時的別居の方法も存せざるを得なかつたので、未墾^{みこ}地^{んち}が多くて自由に家を移していた時代ならば、それが完全なる分家になつてしまつた諏訪のような異例も、新たに起こることが可能だろふと思うのである。

この婚舎の名称は三韓^{さんかん}の古い記録にもあるが、日本に行われていたものは前の長崎茂木浦^{もぎうら}などの例のごとく、聶^{むこ}の家に従属せしめたものはあまり多くない。それ以外の様式には、村共同の婚舎といふべきものがあつた。若い二人は家に入つて主婦主人の地位を相続するまでの間、夜分^{よこ}は茲^{こゝ}に来て宿したのである。それよりも今一段古い形かと思ふものには、婚舎が嫁の家に附属してい

るのがある。是も現在まだ備^{びつちゆう}中西部の島々、伊予^{いよ}の上七島^{かみしちとう}を始め、多くの土地に行われている。すなわち嫁が聶^{むこ}の家に入つて完全なる主婦になるまで、半分は聶^{むこ}が嫁の家の家族になつていゝるものである。半分というと妙に聞えるが、昼^{ひるなか}中は自分の家の田畑や網代^{あじろ}で働き、休息の時間のみを嫁の家に送るのである。むろん二人の關係は双方の親が公認し、嫁^{よめ}方^{かた}には聶^{むこ}の食器、聶^{むこ}の夜具などを用意するといふのもある。

是が中世以前の京都上流の間にも行われた婚姻方式であつたことは、『源氏物語』その他の文学に明らかに現われているだけでなく、歴世の公家^{くげ}の日記にもよく見えている。婚姻と同時に嫁女が夫の家に引取られることを、珍しい風儀だ近頃始まつたことだ

と、記した日記は鎌倉時代にも見いだされる。すなわち輿こしむか迎むかえ
といふことは、いづれ早そうばん晩ばんしなければならぬことであるが、そ
れは男の家に新たな主婦が入用になった時のことで、その前は子
どもが生まれても妻はなお実家にいたのである。伊豆の島などは
ほんの近い頃までそれが普通の習わしで、婚姻の式は夫の家に来
て挙げて、式が終ると嫁様は里の方へ行つてしまふ。そうして
毎日朝だけ来て水を汲み、薪まきを採とつて一いつか荷かずつ持つてくる。この
状態が時としては三年も続くことがあつたと聴いている。すなわ
ち朝々の水と薪しきた以外は、里さと方かたの用をしていたのである。島には
大体に古い仕来りしきたが残るものと見えて、対馬つしまでも種たね子がしま島しまでも、
この最初の足入れの日には、嫁はふだん着のままつしまで来るといふ話

が多い。そうして舅しゅうとしゅうとめ 姑しゅうとめ の葬式の日、始めて一世一代の晴着をすると、ここでも謂いまた伊豆大島でも謂っていた。すなわちこの日が主婦の就任式であつたのである。荷物なども最初の足入れにはちつとも持つてこず、みな親の家に置いてあつて、五年七年の間にぽつぽつと持つてくるという土地も、島々ばかりではなかつた。そのかわりには堅い昔風の家では、嫁が土蔵に入ることを許さなかつたといふところが、近江おうみの高島郡にもある。つまり妻が夫の家に入るといふことと、婚姻の成立とは昔は全然別のものであつたが、後々のちのちその嫁引移りの際に大祝宴を開かぬ婚姻は、さも不合法のもののように考えられることになつたのであつて、仮にもし必ずさういふものだったら、昔は本式の婚姻は無

かつたと言わなければならぬわけである。

一一

婚姻のごとき古くからの人の大礼ですら、いつとなしに是^{これ}だけ変化したのである。その原因は二つは少なくとも算^{かぞ}えることができる。一つは我々の謂う遠方婚姻、村の外との縁組の始まったこととで、是には交通の改善が条件であつた。是は武家上流の間にも、^{のち}後追々にごく普通の家までが、部落内だけで婚姻をするには及ばなくなつた。そうなつてくると、第一に夫がしばしば妻の家にくることはできない。嫁も行つたらまた帰つてくるこ

とがむつかしい。それで箒ほうきで掃き出したり、門かどぐち口で送り火を焚たいたり、まるで葬式のようなことをして娘を送り出し、泣いて出て行くようなことにもなったのであるが、それよりももつと大きなもう一つの原因は、その娘の労働を里方で宛あてにしなくなつたことである。女がよく働く土地では、親は惜しんでなかなか身柄までは聳やの家へ遣やらうとしない。今でも海岸の村などに古い形の婚姻方式が残るのはそのため、未来の主婦権などには換かえられない、大切な里方の労働力であつたからである。それを聳や方に必要があつて、是非とも早くつれて行こうという際には、後あと二年なり三年なりの間、娘が働いて家に入れるくらいの財物を、結ゆい納のうとともに送ってくる処ところも北九州の島にはある。隣国支那シナでいう聘へ

金が、今までの養育費を償う意味であるらしきに反して、此方こちらは是から入用なものを貰つて行くかわりである。いずれもこれ^{いぎん}を人身売買と一つに見ることはひどいが、とにかくに家が失うものを補填ほてんする意味はあつた。だから家に置いても格別させる用は無く、ただ将来の地位を安全にすることが主になると、さあさあ早くお連れ下さいと、里方からかえつて輿入れこしいを急ぐようになる。若い女性としてはあまり名誉な話ではなかつた。つまり家においても食べるだけで、格別役に立たぬことを意味したからである。貰う方としても、ちゃんと現主婦が達者で働いている所へ、言わばその王座を揺ぶる者ゆさがくるのだから、めでたいと言いい条じょう、一方には不安でないこともない。それに家によつては家風の差が大きい

かった。是も以前は無かったことだが、職業が分化するにつれて、たとえば小売商人のごとく、新しい任務は主として男子に歸し、目に見えて女の権能の殺そがれている家と、主人の立場などから何でもかでも、女房に仕事を任せている家とができる。日ひゆうが向の海岸などの昼中漁の盛んな村では、亭主は世事にうとく、女房が実印まで預っていて役場へも出てくる。武家も多くはこの方に属し、家の事務は女にさせたかと思うが、それも主人の氣風や先代の例によつて、家々で大きな相違があつた。しかも娘は概して自分の家で見習つたものだけを知つていて、他はどうであるかに気がつかぬのである。こういうのが具体的に謂いう家風なるもので、その家風のひどくちがつた家から嫁にくるものの不幸は一通りでなか

った。よく家風に合わぬから返すなどと言われたのは、大抵は里の母の非常によく切つてまわすことを見習つた娘で、つい独断で事を決しましたは余計な問題にも口を出そうとする。それを控え目な家の姑がひどく気にするのであつた。けれども大体においては将来ある嫁の方が、讓歩しましたしんぼう辛抱した。それで長命の家筋などになると、女は人生の盛りの半分を、文字通りの雌しひく伏で暮し、ヒステリイにもなればまた妙な社会觀を抱くことにもなるのである。この不幸を最も少なくする修養、いわゆるアネサマからオカタに移つて行く女の一生に、打つてつけの教育案というものはそう容易に立つものではない。始めのうちはあちらを向けといえ半日でも向いているほどおとなしく、後にはきりりとして内外に

よく氣のつく、一家の切り盛りになつた婦人になるように、娘を準備させることは決して簡単でない。その上になお配偶選定までに必要な資格としては、また別途の心構えと、表現法とを必要としていたのである。こんな手の込んだ教育は意識してはなかなか施せない。だから多くは行き当りばつたりの修行で、その中でも嫁時代の苦しい経験が、ともすれば娘をただその期間の生活に適するようにしつけさせた。率直にいうと、貞淑と無能とが、どこかに似通うたところを生ずるようにもなつたのである。

社会が女をなるべく働かせまいとする計画は、現代までもなお続いている。その動機はむしろ愛情であるが、婦人小児と一括して保護をする法令は多い。男ならたやすくできる仕事にでも、彼女らが苦勞するのを見るに忍びなかつたのである。実際最近のスポーツ流行になるまでは、女は可憐かれんなどと謂つて、いたいけな弱々しいのが町では好まれていた。カハイイという語は僅わずかな変化をもつて、憐憫れんぴんの意にも用いられ、またそのまま「小さい」という意味にもなる。地方の方言ではメグイとメンコイとムゴイ、またはムゾイとムジョケナイとムゾヤとが、ともに一つ言葉からの分化で、恋と哀あわれみとの両方を包括している。現代の気力旺盛なる若い女性が、かくのごとき取扱われ方に反抗すべきはもとよ

りのことであるが、僅かに百年の前に溯つても、地方の婦人殊に刀とじ自とじたちは、決してそのようなおなさは予期していなかつた。土地によつては今でも明らかに、女が男より弱い者だということを、承認していない処ところもある。土佐などの農家では近頃の婚姻でも、容貌よりも体格の大がらな女を歓迎するということを引きいた。そういう例は他の田舎いなかにも多く、只ただ女に向く仕事と向かぬ仕事のあることを認めているが、是これは男にもあることで異とするに足りない。ただし新しい労働は大抵男向きにできているので、それに女が携わると目に立つが、それでも時々は女が参加した。たとえば東京では二十年前まで、目黒・渋谷しゅがやの娘たちも仕事着になると、平気で肥料車こえぐるまの後押しをして市内に入つて来た。それが今日は

野良仕事もだんだんしなくなり、たまたまみなさんが郊外を散歩して、散歩が気恥きははずかしいように考えられるような、女の働きぶりを見られることがあつても、それはもう単なる残留に過ぎない。元は是よりもはるかに一般的の状態であつたのが、近世の傾向は何か一つの生産の始まるごとに、きまつて女の手から取上げては男の手に移しているのである。この点はみなさんの歴史研究の初歩に注意して見られる練習の課題に適していると思う。

山と海との作業は、大昔も男を主としていたが、しかしその中にも女の役割があつた。たとえば菌きのこと採り青物採りなどはそれであつたが、青物は採らなくなり菌も栽培にかわると、いわゆるナバ師はみな男になつた。『万葉集』には「玉藻たまも苜かるあま少女おとめども」

という歌がある。乾して肥料として田や畠に入れたのである。それがごく簡単な装置でも、ふたまた又の棒を小舟の中で使うようになると、はやまた男に任せて女は手を引いた。海女あまのかつきは由緒よある労働だけれども、潜水夫という方が追々と多くなつた。

農業の方でいうと、馬耕牛耕の始まる以前から、代掻しろかき用に大きなマグハが用いられたすと、これをあやつるのはみな男である。

販女ひさまめと謂いつて市いちに出てくる女が元はあつた。女は日返りに往来し

て家に寝る故に、行商が一日程以上の区域に行くことになる、

牛方うしかた・馬方の隊商は男ばかりになる。それからなお一段と遠方

の売買には、高野聖こうやひじりという旅僧が参与した時代もあつた。高野

聖は一名を呉服聖ごふくひじりとも謂い、江戸の呉服町などはこの呉服聖が

開いたと、『けいちようけんもんしゅう慶長見聞集』という書には出ている。とにかくに町は男がこしらえ、女はそこへ出てくるともう是という用が無くなっていたので、何か不幸な女でないと内職はしなかつた。

一三三

独り外部と交渉ある生産事業のみと言わず、家の中の直接消費に供する生産についても、女の役目は減る一方であつた。たとえばつきめ春女はもともみ粃から米にする作業にまで関与しておつた。三本のてぎね手杵で調子を取りうた唄を歌つて、儀式の日の米をしら精げ、それをさらにこづ小搗いて粉にはたくのも、彼女らの手わざであつた。穀粉の方

は後のちに石臼いしうすを挽ひくようになって、なお女性の労働であつたけれども、米搗こめつきは杵こが大きな横杵よここになると、水車以前からすでに男に任せきりになつて、その臼唄うただけが「つく」という動作の關係から、小娘の手毬唄てまりうたなんかになつてまだ残つている。食物の家でととのえるものは、飯以外にも数かぎりなく多く、是にこそ刀自くでんの口伝くでんと工夫とが光を放つていたのであつた。ゴールド史密斯の「荒村行こうそんこう」の詩にも見えているように、旧家には独得のおいしい漬物つけもの類るいが、評判となつて伝わつていた。それを平凡きわまる食料品店の商品にしたのが、つまりは近代の文化である。それよりもさらに著しい変化は衣類で、手機てばたも糸引き車も今は博物館に行つて見るばかりになつた。欧羅巴ヨーロッパの方も是と同じで、女

たちはそれを写真にとつたり画で見たりして、樽うわさをしている有様であるが、しかもそれがごとごとく最近の産業革命の所産でもないのは、日本などでは木綿もめんが入つて来た際に、すでに一つの激変があつたのである。木綿は我邦わがくにでは暖かい土地にしか作れない。関東地方が多分その北限であつた。すなわち東北隅の三分の一だけは、綿を輸送しまたは古綿を買い入れていた。中央部の木綿を栽培する地方では、綿わた桃ももを摘むつのからが女の仕事で、小さな綿繰り器を家々に持つていたが、それでも綿打ちだけはもう男の職人があつた。彼らは綿を打つ大きな弓を携えて、村から村へ渡りあるいていた。その専門家に打つてもらつた繰くり綿わたを、よく働く家では女たちが、篠しの巻まきまという管くだに巻いてヨリコを作つた。ヨリ

コはまた綿^{わた}飴^{あめ}ともいう土地があり、上^{かみ}方^{がた}ではジンキとも呼んでいた。綿^{わた}を栽^うえぬ土地ではこのヨリコを買い入れて、めいめいの糸^{いと}を紡^{つむ}いだのである。それから糸にしてからも、紺^{こん}は手染めができないので、あの頃ぼつぼつできていた職業の紺屋^{こんや}に逃^{あつら}えて染めさせ、機^{はた}を立てる段になって始めて女の手わざに移つたのである。東北では取替木綿と称して、織上^おがり^りを商店へ持参して糸と替え、またはヨリコと換える慣習が生まれ、女はその僅かな差額を宛てに、人のために働くことをもう始めているが、とにかくにこの頃からすでに木綿の衣服だけは、全部が女性の管轄とも言えなくなつていたのである。

これに反して麻は完全なる手作りであつた。その家庭工業は麻

苧りの日から始まり、また若干のほかにか売るものまで、すべて女の手で生産した。「麻ごろも着ればなつかし紀きの国のいもせの山に麻蒔まくわぎも」という古歌のあるのを見ると、山を焼いて麻の種子たねを播まく日から、もとは女が参与していたのである。その苧糸おいとを紡ぐということは、ジンキの篠巻きよりもはるかに辛気しんきな作業で、一枚の衣物になるのはその糸の全長の総計だけ、指のさきで捻よらなければならなかったのである。是はもとより少しでも羨うらやましいことではないが、女はその生涯の半ば以上、夜も雨の日もこの糸引きと終始していたので、ヲボケまたはヲゴケとも謂いわゆる苧糸の桶おけは、朝夕ともに身の側そばを離さず、したがって是が女の私有財産を意味する一つの名詞にもなっていた。「三みすじそ」とい

う習わしは、今でも東北へ行くと、年とつた女たちが記憶している。是は普通の働きのほかに、別にもう三筋だけ余分に、毎日心を籠こめた白糸を紡うみ貯たくわえて置くので、それが老いたる父母のあの世へ着て行く着物になつたのである。或いは親々はそれがあまりに嬉しいので、ちようどその一いったん反の織り上がる頃には、自然に快く死んでしまう気にもなつたろうかと思つてばかりである。歴代の女たちがわが子のためまたはわが夫のためにも、是は彼に着せる布と、心に念じつつ糸を引いていたことは察するに難かたくない。そうでなければ大昔神に仕えた清い女が、泉のほとりに忌いみ機はた殿どのを建てて、三月みつき二月ふたつきその中に忌いみ籠ごもりして、神の衣を織つていたという伝説は、これを理解することができぬのである。是と同

じょうな心持は、今でもまだ幽かすかに田舎には残っている。嫁入する者が男の帯を織って持って行く風ふうは南の方の島にもある。織るとは言っても組くみひも紐ひものようなものだから、持ってあるいて何処どこでも織りつづけたかと思う。私も二十何年前に、日向ひゅうがの或る山村を旅行してそういうのを見た。ちようど盆の休み日であったが、五軒三軒と人家のある処には娘たちが集まって、手に手に何か白いものを持っている。近づいて見ると幅三寸足らずの、木綿さなだひも真田紐まんだひもを組んでいるのであった。私を案内してくれた老村長は曰いわく「あれは未来の夫に贈る帯を織っているのです。あれをもらうのが私たちも嬉しかったものです」と謂った。この村長さんは今七十幾つになって丈夫でおられる。是などは単に一本の帯を織

るといふだけでなく、その中には中世京都の貴婦人淑女たちが、かつて優雅なる三十一文字みそひともじによつて、表現していたような情熱と感覚とを、織り込もうとしていたものと思われるのである。

十四

働く日の多かつた以前の女たちは、晴着はただ紺こんや花色の無地にしても、その労働服だけは夙はやくから派手なものを好んでいた。五月田植の日の支度などは、近世は白い菅笠すげがさに紅い襷あかたすきをかけ、桔梗染めの手拭てぬぐいなどを被かぶり、着物は紺こん 紺こんの単衣ひとえを着ていたが、その一つ前には布に白糸の刺繡ししゅうなどをしたようである。

肩かたすそ裾と称して、芝居で見る熨斗のしめ目の着物などとは反対に、わぎわぎ肩と裾の部分を縫取りぬいとして丈夫にしたのである。その風ふうが遠い田舎にはまだ伝わっていて、秋田地方ではこれをチヂミサシ、津軽つがるは一般にこれをコギンと謂いっている。コギンは小衣、すなわち労働の時に着る短い衣服のことであつて、土地によつてはまたコギンともコイノとも謂い、中央部はもとより九州地方までも共通した地方語である。ただその中でも津軽のコギンは、あるいはは古錦こきんの音おんなどと謂つた人もあるくらいに、殊に精巧な美しいものが多かったのである。それを作るのも容易のわぎではなかつた。忙しい家の嫁や娘は、一日にせいぜい五分ぶか一寸すん、一枚に十年もかかつたというものを自慢にしていた。是が見られなくなつたの

はほんの近頃のこと、今でも捜せば箆筒たんすの底から出して見せてくれる。是をこしらえた女たちは、たとえば野ら働きの最もせわしい日でも、持つて行つて田の畔くろに包んで置き、男が茶を飲み煙た草ばこを吸う時間にも、一針ひとはりでも是を刺さして置こうとしたのだそうである。それからまた男に着せるシボハツピ、薩摩さつまの下しも甌こ島しまでニンブという裂織さきおりなども、材料はいずれも粗末なものであつたが、色の取合せや織り上りの美しさに、女たちは全身の力と心とを籠こめていたのである。こういうのは或いは一地方かぎりの趣味流行でもあるが、一般に女の仕事着は、荒い淋しい田舎に行くほど、一層深い注意が払われていたので、現在はそれを見ようとする、よほど汽車から離れた土地へ入つて行かなければなら

ぬ。東京近郊の女の人などは、よく働くとは言っても、もうよほど以前から、仕事着などは知っていない。それというのが不断の衣類が悪くなって、それをそのまま働くときにも着るからでもあるが、しかしなお労働が規則正しく且つ激しいものであったら、到底このようなぞろぞろと手足にからまるものを着てはいられない。半日は家に居て昼からちよつと出るというようになって、着替えるのも手数だから、長い着物の尻しりをくるりとまくり、または腕たすきまくりもできないから襷たすきを掛けるので、是を甲斐かい々々がいしいなりをしていているというのは間違いである。襷は古くからの女の服装の一部であるが、本来は晴着に伴なうものであった。目的は今日のネクタイなどと近く、わざと色模様の鮮明なものを、ただ首から

掛けて飾りにしていたのである。よく浄瑠璃じようるりや琵琶びわの曲などに、「襷十字にあやどりて」という文句を聴くが、是は婦人が突嗟とつさの場合に仮に働けるなりを作るためにするので、常は襷はそうして用いるものでない故に、わざわざ十字に綾取りあやどりてと謂つたのである。つまりは上じようろう 臈ろうが急に起たつて働く場合を形容した文句である。ところが町に来て住むと、女はただそういう中途半ぱの形でのみ働き、襷がけというと、大いに活躍することを意味することになったのは変遷である。日本のキモノの労作に不便であることは、外国人がまずこれを評し、ついで日本人も盛んにこれを唱えるようになったが、おおよそ世の中に是くらい当り前のことはない。何となればこの衣裳は、本来労働をしない時の衣裳であつた

からである。ちようど百人一首のお姫様たちが少しも活気のないのと同じことで、あのようなものを着ているところを見て、日本の女が働くことを知らなかったごとく、考えるならばこちらが悪いのである。この三千年間の永い辛苦の歴史を、あらゆる日本の女性がこれを着て越えて来たかのごとく、想像している人がもし一人でもあつたら、それは面を伏せ顔をおもて赭めても、到底追付かないほどの恥はずかしい無知である。そんな人を無くしてしまうように、みなさんは学問をしなければならぬ。

十五

ただしこういった事実を知るためには、本を読んだだけでは何も得るところがないであろう。それには現実に各地に今なお残っている生活ぶりを、自分の眼と耳で観察するか、それがもじできなければ、めいめい手近のものから心づいた事実を、互いに比べ合つて行つても追々には判わかつてくる。とにかくに実地から学ぶことほかはないのである。その問題を一つ一つ、説き立てて行くことは、時間も足らず私の力にも及ばない。ただ茲ここには一言だけ、我々の今まで気づかずにしたことが多いということのみなさまに力説しておけば、それでこの講演の目的は達するので、あとは自分で今後注意深く、観察なされることと私は信じている。ただこの場合にどうしても附加えておきたいのは、我わかくに邦の女性殊に

完成した家刀いえとじ自の任務が、どんな貧しい家庭でも、昔から決して簡単なものではなかったということである。身を動かし汗を流してさえおれば、それでオカタの役目は済むというものでなく、頭を働かせまた判断才能を耀かがやかさなければならぬ任務が、いつの世にもきまつて沢山にあつたということである。育児法も無論その一つであり、留守番もまた大切な役目ではあつたが、なおその以外にも夫が手を出さない部分、女房のみに委ゆだねられていた仕事が生産よりも分配の方面にはいろいろあつた。それが彼女から取上げられて、家庭の不幸は生じたのであるが、それはやはり女の労働の軽減と、比例していたのだから已やむを得ない。世帯という語の女性の所屬になつてゐるわけは、今日ではもうほとんど尋ねる

ことができなくなつたが、古く溯^{さかのほ}るほど、すなわち單純なる自給經濟の世に返つてみるほど、だんだんとはつきりしてくる。世帯が今謂う會計と異なることは、家の生産をそれぞれの用途に持つて行くこと、もつと平たくいうと、家に属する人々に衣食住を供することであつて、いるから生産するという昔の經濟において、是が殊に明らかにわかる理由である。その中でも住だけは、一度生産したらそれぞれの用途がすぐにきまり、旅人でも泊^とめてやる場合でないとその有難味は見えないが、衣服になると永く持つとは言つても、その一部分だけは毎年主婦の手によつて、家内の者にそれぞれ配給する。木綿の世になつては春秋に一度ずつ、オシキセとかソウブツとか謂つて貰うことにきまつていた。食物に至

つてはそれが毎日、各人に入用なだけ、むだにならぬ程度に主婦がこれを分配する。それがすなわち世帯のキリモリであつた。子とか孫とかの最愛の者へだけならば、鳥獸にも共通な自然の発意に任せてもおけるが、前代の一家族はその構成がずつと複雑だつたのである。先代先々代からの種ヲヂもおれば、貰もらい子ごも寄子よりこも奉公人もいる。また時々の手伝もちいやユヒの人もくる。これらの人々に十分に食わせ、且つ餅もちとかホウトウとかその日に相応したものを食わさぬと、主婦は必ず馬鹿にせられ悪くいわれるのみか、指図をしても言う通りには働いてくれない。青年の男子だけは別として、男も少年のうちには主婦に用を言いつけられる。また主人が男衆おとこしゅうに命令をするにも、常に細君からの注文は容いれられる。

女はなおさらのことで、嫁でも娘でも雇い女でも、これを機嫌よく働かせるのはみなこの分配の手加減一つであつた。「居いそろう候う三ばい目にはそつと出し」などという狂句は、江戸近世のものであるが、働いてくれる者に対しては、是が女房の氣前氣性の現われるところで、この権能を最も巧妙に利用する家刀自が、實際は家を明朗にし、また繁榮に導いていた。彼らがその研究に全力を傾け、また自分自分の発明なり流儀なりのあつたことは想像に難くない。

だから来年は相続させるといふ年ばえの嫁女にも、断じてこの権能は代行せしめなかつたのである。奥州などは村が遠くて、家と田畠との間の七八町もあるところは普通である。それを日ざし

を見ていて午飯の刻限近しと見るや、飛んで帰ってきて飯焚きの
 支度をしたのは主婦である。ケシネビツすなわち糧米櫃の中に
 枴ますが入っている。それを手に取ることは他の女にはさせぬように
 した。この枴はしばしば古ふる椀わんなどを代用しているが、一ぱいと
 いうのはおおそ二合五勺しやく、西の方の国では是を「ゴ一つ」とも
 謂う。すなわち一かたけ、一人一度の食料であつて、稗ひえでも粟あわで
 も引割麦ひきわりむぎでも、かねて米と混淆して洗つて炊かしぐばかりにしてあ
 るのを、その日働いている人の数だけ量はかり出すのである。掛け算
 は新しい技術だから尋常の主婦は利用しない。ただ一人一人外で
 働いている人を思い出しつつ、洩もれなくその頭数を枴かぞで算えるの
 である。こんな事ぐらいは嫁なり女中なりに任せたつてよさそう

に見えるが、固い家では決してそれをさせなかつたといっている。

一六

家の囲炉裏いろりの周囲の座も定きまつていた。奥の正面の蓆むしろを横に敷いた席が横座よこざで、ここには主人があぐらをかく。その横座から見て右の側が客座、客の無い日には長男も智むこもここに坐すわつた。それと相對する向う側は力力座、また腰元こしもとともたな元とも謂い、九州では茶煮座ちやにぎとも謂つて、争う者のない家刀自いえとじの座席である。この夫婦の間にある一隅に、普通は鍋敷なべしきがあつてここで惣菜そうざいを煮た。盛るのは当然に主婦の権限で、家を譲つた母さえも手は出

さぬ。娘が多ければ少し引下つてそのまわりに坐り、嫁は勿論もちろんその中に交つてゐる。或る家では姑しゅうとのちよつと席を立つてゐるうちに、嫁が杓しゃくし子こを握つたという咎とがにより離縁をされたという一つ話もある。そんなことが滅多にないのは、決してそういう事をしなかつたからだという。杓子はこれを要するに主婦のスタツフ、大臣・大納言だいなごんなどの笏しやくに該当し、また楽長の指揮棒のごときもので、すなわち家刀自の権力のしるしであつた。だから女房を山の神と謂うのだとの説もある。江戸などで山の神の祭をした頃は、神かみに扮ふんして舞う者は、必ず杓子を手に持つていた。その杓子は山で働く人がこしらえて、山の神に献上する習いがあつた。それ故に里で家々の杓子を握る女性まで、山の神というのだと言つてい

るが、是は実はどちらが元だかわからない。山の神も女神でまた山全体の刀自と認められていたために、後々のちのち杓子を献ずることになったのかも知れないのである。とにかくに嫁に世帯を引継ぐことを、今でも東日本では「杓子をわたす」、または「へらを渡す」とも謂っている。

添そうて七年子のある仲だ嫁に杓子をわたしやんせ

という歌が、佐渡さどの島にはあつて有名である。山本修之助氏の『佐渡の民謡』という書の中には、このほかにもなおいろいろと嫁の心情を歌った名吟めいぎんが出ている。この杓子渡しという語は、形容であろうと最初は思っていたところが、事実その通りの事をしているという話を、近頃になって岩手県の友人から聴いた。い

よいよ母親が年を取つて、家の管理を嫁に引継ごうという日には、新しい鍋なべの蓋ふたの上に新しい杓子を一本載せ、それを両手に持つて嫁に手渡しするのが方式だったという。信州の北アルプス地方でも、まだこの事を記憶している老人があつた。男の方も財布に若干の銭ぜにを入れて、長男に手渡しして相続の式としたというが、是に伴のうて行われた杓子渡しの儀の方が、多分は一段と古いものだろうと思う。というわけは売つて金にする物のほとんど無かつた時代には、財布は何の用も無かつたのであるが、杓子はその前から、またいかなる場合にも、重要であつたからである。

それからさらに一步を進めて、主婦の分配権の特に意義があつたのは、成長した男子のみに供与する酒であつた。この権能がもし男の手にあつたならば、家族はもつと早く分裂したはずである。酒の供せられる日は時代とともに追々と増加した。最初は朝廷でいうなら恒例臨時の行事、殊に正月と祭礼の日、それから定まつたる人生の大事件、すなわち祝い事と称して人の心の常の日と異ならねばならぬときに限られていた。イハフという語の本来の意味は、辞書を見ればすぐにわかる。「忌む」という語とは多分一つで、特殊に昂こうふん奮する日でもあれば、同時に特別に戒慎すべき日でもあつた。酒が無くては男たちにはその心理状態が得ら

れなかつたのである。しかもその酒がいつでも有つたわけではなく、造り酒屋の一般になつたのは、京都附近ですら足利期の中頃、それも奈良とか河内かわちの天野あまのとかの、おかしな話だが御寺から譲つてもらふものになつていた。それが追々にナナカと名づけて、ただの農家に醸かもしてあるものが貯えまた贈答せられることになつて来たのである。寺以外の造り酒の管理は、始めはすべて女性に属していたのである。秋の終りになると秋祭があり、また原料の米が豊かになる。それを甕かめの中に作り込んで、その一部分を正月の用に、また或る量を京への土産みやげなどに残しておくほかは、多くの家々ではその折り限りにみな飲んでしまつたのである。祭や祝宴の翌日を瓶底かめぞこの飲み、または残のこりざけ酒などと称して、女までが集ま

つて飲食したのは、つまりはその酒が、時に入用なだけしか造られなかつた証拠である。

女が酒の醸造を掌つたことは、近昔の文学では狂言の「姥が酒」に実例がある。無頼の甥が鬼の面を被り、伯母の老女を脅して貯えの酒を飲むのである。それからまた加賀の白山の菊酒の由来として、昔或る美女が路傍の家で酒を売っていたので、男たちがみな迷い、村の女が怒つて火を掛けたという伝説もある。上代の例としては『日本靈異記』に、紀州に酒を造る女のあつた話が出てゐる。独りそれのみならず、『延喜式』に見えている宮中の造酒司でも、その酒造り役は女だつたようである。

酒殿はけさはな掃きそ舎人女が裳ひき裾ひき今朝は掃き

てき

というさいばら催馬楽の酒ほがいの歌なども伝わっている。トネリメはすなわちとじ刀自であつたろうと思う。刀自という名前はその造酒司にあつた三つのおおさかがめ大酒甕の名として残っていたのが、後ごさんじよういん三条院の御時おんときとかの火災に割れてしまったことは、たしか『古事談』に出てゐる。現在でも酒屋の酒造り、灘なだで蔵くらびと人とも百ひやくにちおと日男こともいう者を、トウジと呼ぶのは普通で、「杜氏とじ」の字を宛てた理由というのが出たら目である。疑もなくもとは独立した女性の職務であつたのが、刀自という名の意味が不明になつた結果、男子にもこれを謂うようになったのである。すなわち本来は酒はこの刀自の力になるものであり、家々ではまた家刀自の手をわずら煩わ

すにあらざれば、酒の分配にはあずかり得なかつたのである。

一八

是^{これ}には信仰上の隠れたる理由があつたとしか考えられない。すなわち人のイハヒのために欠くべからざる特別の飲み物は、女でなくてはこれを作ることを得ないか、または女のみがこれを醸^{かも}す力を、持つているように考えられていたのである。カモスという日本語は、古くはまたカムとも謂^いっている。沖繩の島では近い頃まで、神を祀^{まつ}るための酒だけは、なお若い綺麗^{きれい}な娘たちによく齒を清めさせ、米を嚼^かんで器の中に吐き出させて、それを蓋^{ふた}して

おいて醜^{はつ}酵^{こう}させたものが用いられており、カミザケという語も残っていた。すなわちこの最も貴重なる酵^{こう}母^ぼは、清き処女の口の中からしか求め出されぬように見ていたのである。是と同じ例はまたタヒチその他の南太平洋の島にもある。ポリネシア人の中には洋酒搬入以前、クヴァというのが唯一の催酔飲料であつたが、是も或る植物の根を女に嚼^かませて、木の器の中へ吐き出させたものを、後に彼女らも参加して共々に廻り飲みしたのであつた。

女が酒の席に参与することは、我邦でもむしろ法則であつて、九州の二三の島では、今なおその場合だけを酒盛りと呼んでいるものがある。我々の婚礼の祝宴に、酒を欠くべからざるものとした遠い原因は、茲^{ここ}にあるかと私は考える。もしそういう大きな歴

史が無かつたら、酒と女との二つのものが今日のごとく、あらゆる弊害を伴ないつつも、なお相提携している理由は説明し得られぬのである。酒の害悪は今や飲む人みずからもこれを認め、何とかしてその悪結果を抑制しようとする計画は、すでに政治上の問題となつていたのである。ところが世の禁酒運動に対する防衛説は、いつでもきまつて神祭りはどうする、婚礼の祝には昔から飲むではないかという二つの点で、是でもって始終歴史にうとい人を、ぎやふんと言わせている。勿論酒の弊害は少しでもこの二つの点からは出ていない。彼らが勝手に忘れている主要なる歴史は、昔は酒屋の無かつたことである。寝酒でも朝酒でも、ほしいときは何時いつでも得られるということが、昔は絶対に無かつたという点

である。時の変化が加われば、何にだつて弊害は生ずる。酒に伴なう固有の信仰はみなすたれて、その昂奮こうふんの面白さだけが記憶せられ、おまけに一方はどこにも有り、且つ大いにうまくなつたとすれば、元来が我を忘れしめるのが目的の酒である。多数の飲んだくれと、是に由よつて不幸こうむを被る者とを、生ずるのは当然の結果であろう。弊害がないものなら考える必要はない。しかもその弊害はみな現代のものなのである。またみなさんの問題なのである。

この点は必ずしも酒ただ一つではない。酒ほど大きな災いはせぬかも知れぬが、女の紅白粉べにおしろいなどもやはり酒と同様に、本来は祭とか式典とか、おおよそ酒の用いられなければならぬような日

に、女を常の女でなくするために施したのが化粧けしやうであつた。阿アフリカフリカの内陸や濠州の蛮地に行くと、今でも是に面を被るのと同じような効果を認めている。我邦の女性も神の言葉を伝え、また神の姿をして舞うためには、塗り立てた顔でなくてはならなかつたのである。後々そういう神舞の役を商売にして方々あるく女ができて、生活のために人に招かれ、祭や式の日でなくとも、所望せられると紅白粉を顔につけて歌いまた舞つた。素朴なる村の住民は、これを目して上じやうろう 藹あと呼んでいた。上藹はただ貴女の別名で、もと尊敬すべき婦人を意味したことは、辻つじぎみ君・立たちぎみ君のキミも同じである。しかるにその上藹が現在はどうれほどまで淪りんら落くしているか。我々の婚礼の日に、白粉をつける婦人だけを待

ち女郎とか、または連れ女郎とか謂うのをさえ、悪い聯想れんそうを厭いとうて多くのいわゆる心ある人は、その名を使うまいとしているのである。女性が酒に対する反感きわみの極、その年久しい分配供与の任務を抛擲し、賤いやしい身分の者の独占ゆだに委ねた結果は、今日はまた一段と酒の消費を無節制にしたので、是はまったく世人が歴史の沿革を、省みなかつた不幸なる収穫である。酒の供与が或る者の職業になれば、買おうとさえ言えば幾らでも売るのが当り前で、殊に貨幣をもつて統一せられた家の世帯は、いつの間にか家刀自の手を離れ、衣食住の配給においては、彼女らはもはや諮しじゆん詢機関にすらもなっていないのである。国民相互の間の分配の正義が、是ほどやかましく論ぜられている今日、家の中の分配というもの

は不公平を極め、主人が入るだけの収益をみな飲んでしまう家さ
えできているのである。よしや今となつてはこの権能を恢復する
ことは望まれなくとも、少なくとも以前儼げん存そんしていた事実だけ
は明らかにして、是をまだ考える力をもつ男たち、たとえばわが
子や年若い弟たちだけにでも、知らせて今一度新たに考えさせる
ことが、刀自たちの任務ではあるまいかと私は思っている。

一九

時間が足らなくなつて、もう一つの肝要な問題を詳しく説くこ
とができないが、この女性の忠言というものは、少なくとも我邦

ではもとは甚だ価値の高いものであった。内に隠れての援助だけではなく、外に對する場合にも、女はかなりよく夫の相談相手になつてゐる。勿論ただ牝ひんけい鶏あしたの晨するのではなしに、或る範圍の承認せられたる任務があつたのである。古代日本人の間においては、女は一段と神に近くまた一段と祖先の靈に親しいものと認められていた。單なる女一生の経験だけからは、発言することのできぬ問題でも、或るものは先例の確かな記憶により、また或るものは神秘なる神の告つげに基づいて、しばしば迷うてゐる男たちを頓悟とんごさせ啓発せしめた事跡は、記録には載らぬのを原則とするが、しかも相応に記録せられている。是も元來は酒と同様に、家の内の労働の所産であつたものが、後のちのち々々専門の職業が外にできたの

に譲つて、幾つかの弊を生じたことは、「巫女考」ふじよこうという長い論文で、前に私も述べてみたことがある。神託靈示はこれを信じない者には、笑うべき空言として軽んぜられるのは已やむを得ぬが、しかも今日の合理的科学から考えても、女性のこの忠言の裏には、誠実なる援助心と無意識の人生経験とがあつたはずで、そのためにもたしばしば家の生活指針に役立つたのである。いかに彼らが超自然の言を吐こうとも、その空想には制約があつた。すなわち時代としてまた社会として、知りまたは経験していることより外へ、夢語りは到底飛び出すことはできなかつたのである。新しいよい思案を生み出そうとするには、今でも準備としてまずその資料の知識を増加しておかなければならぬ。そうしてただインスピ

レーションをもつてこれを純化する以上に、できるならばそれを系統立てて、意識して自由に利用したいと思う。それにも練修を要しましたこつがあることであろうが、私は女性がもし幸いにその古来の地位と本務とに心づき、今はその領分が不当に狭せばまつていることを認識するならば、もうそれだけでも大きな進境であろうと思う。現在はずでに学問の朗らかな東しののめ雲しらが白みはじめた。過去の常人の生活に關しても、多くの新しい事実が発見せられていく。時代の知識は増加しているのである。婦人ばかりが独り退しりぞいて、もう自分たちの不満な境遇を歎いている時ではなくなつた。その前にまず自由に時代の学問に觸れて、その空気の中で活いき活きと飛び翔かけるようになければならぬ。いかなる賢母も賢婦人も、

私などの見たところでは、ただ子を懐おもい我家を思つて、一般人生
に対する愛情がまだよほど足りないように感じられる。あるいは
大いにそうではないのかも知れないが、何分今はまだあまり働か
れぬので、どうもそう見られやすいのである。

青空文庫情報

底本：「木綿以前の事」岩波文庫、岩波書店

1979（昭和54）年2月16日第1刷発行

2009（平成21）年12月9日第21刷改版発行

2010（平成22）年9月6日第22刷発行

底本の親本「定本柳田國男集 第十四卷」筑摩書房

1962（昭和37）年5月

初出：木綿以前の事「女性」

1924（大正13）年10月

何を着ていたか「斯民家庭」

1911 (明治44) 年6月

昔風と当世風「彰風会講演」

1928 (昭和3) 年3月

働く人の着物「旅と伝説」

1936 (昭和11) 年7月

国民服の問題「被服」

1939 (昭和14) 年5月

団子と昔話「ひだびと」

1936 (昭和11) 年3月

餅と臼と搗鉢「社会経済史学」

1934 (昭和9) 年1月

家の光「家の光」

1926（大正15）年2月

囲炉俵談「文学」

1935（昭和10）年3月

火吹竹のことなど「知性」

1939（昭和14）年4月

女と煙草「ひだびと」

1939（昭和14）年2月

酒の飲みようの変遷「改造」

1939（昭和14）年2月

凡人文芸「短歌研究」

1934（昭和9）年2月

古宇利島の物語「短歌民族」

1933（昭和8）年5月

遊行女婦のこと「俳句研究」

1934（昭和9）年4月

寡婦と農業「農業経済研究」

1929（昭和4）年10月

山伏と島流し「俳句講座」

1932（昭和7）年8月

生活の俳諧「第一高等学校講演」

1937（昭和12）年12月

女性史学「実践女学校講演」

1934（昭和9）年7月

女性史学「民間伝承」

1936（昭和11）年3月

※「何を着ていたか」の初出時の表題は「私共の祖先は何んな着物を着て居ましたか」です。

※「団子と昔話」の初出時の表題は「団子浄土」です。

※「家の光」の初出時の表題は「学問の為に」です。

※「酒の飲みようの変遷」の初出時の表題は「民俗と酒」です。

※「凡人文芸」の初出時の表題は「凡人文芸の帰趨」です。

※「寡婦と農業」の初出時の表題は「農業と婦女児童」です。

※「山伏と島流し」の初出時の表題は「神釈と俳句」です。

※「生活の俳諧」の初出時の表題は「文芸と民衆生活」です。

※「女性史学」の講演時、初出時の表題は「女性と歴史」です。

入力：Nana ohbe

校正：川山隆

2013年5月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木綿以前の事

柳田国男

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>